茨城県教育財団文化財調査報告第65集

一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

二の宮貝塚
大日山古墳群
思川遺跡
(上)

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第65集

一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内埋蔵文化財調査報告書

二の宮貝塚
大日山古墳群
思川遺跡
(上)

平成3年3月

財団法人 茨城県教育財団

写真１　（上）遺跡遠景〔二の宮貝塚外２遺跡〕ー 調査前
　　（下）遺跡遠景〔二の宮貝塚外２遺跡〕ー 調査後

写真２　（上）二の宮貝塚第４号住居跡出土遺物
（下）思川遺跡第４号住居跡出土遺物

写真３　思川遺跡出土遺物（緑釉陶器・灰釉陶器・須恵器）

序

茨城県は，産業・経済の発展に伴う流通機構の整備と，県土の普遍的な開発を図るために，県内の道路網の整備を進めております。

一般県道新川江戸崎線の道路改良工事も，その一環として計画されたものであり，江戸崎・桜川の両町村はもとより，稲敷地方の発展に大きく寄与するものと考えられます。

財団法人茨城県教育財団は，茨城県と埋蔵文化財発掘調査についての委託契約を結び，昭和63年6月から翌平成元年3月にかけて，一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内に所在する，埋蔵文化財の発掘調査を実施してまいりました。

このたび，発掘調査によって得られた貴重な成果をもとに，二の宮貝塚外2遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりましたが，本書が学術的な資料としてはもとより，郷土の歴史の理解を深め，広く教育・文化の向上の一助として活用されますことを希望いたします。

なお，発掘調査及び整理を進めるにあたり，委託者である茨城県はもとより，茨城県教育委員会，江戸崎町教育委員会，桜川村教育委員会をはじめとする関係各機関，並びに関係各位から寄せられた御指導・御協力に対しまして，衷心より深く感謝の意を表します。

平成3年3月

財団法人　茨城県教育財団

理事長　礒　田　　勇

例　　言

1　本書は，昭和63年度に茨城県の委託により，財団法人茨城県教育財団が発掘調査を実施した，茨城県稲敷郡江戸崎町に所在する二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡の発掘調査報告書である。なお，３遺跡の所在地は次のとおりである。

二の宮貝塚　稲敷郡江戸崎町佐倉2,608-2番地外

大日山古墳群　稲敷郡江戸崎町古渡1,908番地外

思川遺跡　稲敷郡江戸崎町佐倉2,662番地外

2　二の宮貝塚外２遺跡の調査及び整理に関する当教育財団の組織は，次のとおりである。

平成２年度初めの組織替えにより，従来の調査課(企画管理班，調査第一・二・三班，整理班)は埋蔵文化財部となり，その下に企画管理課，調査課，整理課を置き，調査課には，調査第一・二・三の三つの班を置くこととなった。

理事長		礒田　勇	昭和63年６月～
副理事長		小林　元	昭和63年４月～
常務理事		滑川貞雄	昭和61年４月～平成元年３月
		小林　洋	平成元年４月～
事務局長		坂場庸克	昭和62年４月～平成元年３月
		一木邦彦	平成元年４月～
埋蔵文化財部長		石井　毅	平成２年４月～
企画管理課	課長	北沢勝行	平成２年４月～
	課長代理	水飼敏夫	平成２年４月～(昭和62年４月～平成２年３月企画管理班長)
	主任調査員	山本静男	(昭和61年４月～平成元年３月企画管理班)
	主任調査員	小河邦男	(平成元年４月～平成２年３月企画管理班)
	主任調査員	小山映一	平成２年４月～
	係長	園部昌俊	昭和63年４月～
	主任	山崎初雄	(昭和60年４月～平成元年３月企画管理班)
	主事	大部　章	(昭和61年４月～平成２年３月企画管理班)
	主事	吉井正明	平成元年４月～
	主事	大貫吉成	平成２年４月～
調査課	課長	青木義夫	昭和59年４月～平成元年３月
	課長(部長兼務)	石井　毅	平成元年４月～
	調査第二班長	倉本冨美男	昭和63年度
	主任調査員	鈴木美治	昭和63年度調査
	嘱託調査員	黒沢春彦	昭和63年度調査
整理課	課長	沼田文夫	平成２年４月～
	主任調査員	鈴木美治	平成２年度整理・執筆・編集

3　本書は，発掘調査担当者の協力を得て，鈴木美治が執筆・編集を担当した。

4　本書の作成に当たり，古墳時代及び奈良・平安時代の土器については茨城県立歴史館川井正一氏，鏡及び陶磁器については東京国立博物館井上洋一氏，石器の石質鑑定については茨城県立下妻第一高等学校長蜂須紀夫氏の御指導を得た。

5　思川遺跡の遺構の実測については，シン航空株式会社に委託して写真測量を実施した。

6　本書に使用した記号については，第４章第１・２節の遺構・遺物の記載方法の項を参照されたい。

7　発掘調査及び整理等に際し，御指導・御協力を賜った関係機関並びに関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

目　　次

－上　巻－

序

例言

第１章　調査経緯……1

第１節　調査に至る経過……1

第２節　調査経過……2

第２章　位置と環境……6

第１節　地理的環境……8

第２節　歴史的環境……9

第３章　調査方法……17

第１節　地区設定……17

第２節　基本層序の検討……19

第３節　遺構確認……21

第４節　遺構調査……21

第４章　遺構・遺物の記載方法……23

第１節　遺構の記載方法……23

第２節　遺物の記載方法……25

第５章　二の宮貝塚……27

第１節　遺跡の概要……27

第２節　遺構と遺物……28

1　竪穴住居跡……28

2　掘立柱建物跡……65

3　土　坑……72

(1)　墓壙及び墓壙の可能性のある土坑……72

(2)　地下式壙……84

(3)　フラスコ状土坑……86

(4)　その他の土坑……92

4　溝……116

5　井　戸……132

第３節　その他……142

1　地点貝塚……142
2　土塁状遺構……147
3　遺構外出土遺物……149
第4節　小　結……152
第6章　大日山古墳群……203
第1節　遺跡の概要……203
第2節　遺構と遺物……203
1　竪穴住居跡……203
2　土　坑……255
3　溝……256
4　塚……261
第3節　その他……269
1　遺構外出土遺物……269
第4節　小　結……275

－下　巻－

第7章　思川遺跡……301
第1節　遺跡の概要……301
第2節　遺構と遺物……302
1　竪穴住居跡……302
2　土　坑……435
3　溝……444
第3節　その他……452
1　遺構外出土遺物……452
第4節　小　結……456
第8章　考　察……457
1　思川遺跡における集落の変遷について……457
2　墨書土器について……472
結　語……479

挿　図　目　次

第１図　遺跡位置図……7
第２図　周辺遺跡分布図……14
第３図　調査区呼称方法概念図……17
第４図　遺跡関連図……18
第５図　地質断面図……20
第６図　地質柱状図……20

二の宮貝塚

第７図　第1号住居跡実測図……28
第８図　第1号住居跡出土遺物実測
・拓影図……30
第９図　第2号住居跡実測図……31
第10図　第2号住居跡竈実測図……32
第11図　第2号住居跡出土遺物実測図……34
第12図　第3号住居跡実測図……35
第13図　第3号住居跡出土遺物実測図……37
第14図　第4号住居跡実測図……41
第15図　第4号住居跡出土遺物
実測図(1)……42
第16図　第4号住居跡出土遺物
実測図(2)……43
第17図　第4号住居跡出土遺物
実測図(3)……44
第18図　第4号住居跡出土遺物実測
・拓影図(4)……45
第19図　第4号住居跡出土遺物
実測図(5)……46
第20図　第4号住居跡出土遺物
実測図(6)……47
第21図　第5・6号住居跡実測図……48
第22図　第6号住居跡出土遺物実測図……50
第23図　第7号住居跡竈実測図……51
第24図　第7号住居跡実測図……52
第25図　第7号住居跡遺物出土位置図……53
第26図　第7号住居跡出土遺物
実測図(1)……57
第27図　第7号住居跡出土遺物
実測図(2)……58
第28図　第7号住居跡出土遺物
実測図(3)……59
第29図　第7号住居跡出土遺物
実測図(4)……60
第30図　第8号住居跡実測図……61
第31図　第8号住居跡出土遺物実測
・拓影図……62
第32図　第9号住居跡実測図……64
第33図　第9号住居跡出土遺物実測
・拓影図……65
第34図　第1号掘立柱建物跡実測図……66
第35図　第2号掘立柱建物跡実測図……67
第36図　第3号掘立柱建物跡実測図……68
第37図　第4号掘立柱建物跡実測図……70
第38図　第1・2・4号掘立柱建物跡
出土遺物実測・拓影図……71
第39図　墓壙及び墓壙の可能性のある
土坑実測図(1)……75
第40図　第19・63・70号土坑出土遺物
実測・拓影図……77
第41図　墓壙及び墓壙の可能性のある
土坑実測図(2)……78
第42図　第80・86号土坑出土遺物実測図……79

第43図　墓壙及び墓壙の可能性のある土坑
・第4号溝実測図(3)……81～82
第44図　第21・22・79・81号土坑出土
遺物実測・拓影図……83
第45図　土坑実測図(第1号地下式壙)
－1……85
第46図　土坑実測図(第2号地下式壙)
－2……86
第47図　土坑実測図(フラスコ状土坑)
－3……87
第48図　第120号土坑出土遺物実測
・拓影図……93
第49図　第147・150・151号土坑出土
遺物実測・拓影図……94
第50図　第162号土坑出土遺物実測
・拓影図……95
第51図　土坑実測図(その他の土坑)
－4……98
第52図　土坑実測図(その他の土坑)
－5……99
第53図　土坑実測図(その他の土坑)
－6……100
第54図　土坑実測図(その他の土坑)
－7……101
第55図　土坑実測図(その他の土坑)
－8……102
第56図　第5号土坑出土遺物実測図……108
第57図　第8号土坑出土遺物実測
・拓影図(1)……109
第58図　第8号土坑出土遺物実測
・拓影図(2)……110
第59図　第8号土坑出土遺物実測
・拓影図(3)……111
第60図　第8号土坑出土遺物実測
・拓影図(4)……112
第61図　第8号土坑出土遺物実測図(5)……113
第62図　第4・9・45号土坑出土遺物
実測図……114
第63図　第78・91・94・126～128・132
・133号土坑出土遺物実測
・拓影図……115
第64図　第135・136・140・145・148
・152号土坑出土遺物実測
・拓影図……116
第65図　第1～3号溝・第1号貝塚
実測図……119～120
第66図　第6号溝実測図……121
第67図　第7号溝実測図……122
第68図　第8・9号溝実測図……123～124
第69図　第10号溝実測図……126
第70図　第11号溝実測図……127
第71図　第1・4・7号溝出土遺物実測
・拓影図……129
第72図　第8・9・11号溝出土遺物実測
・拓影図……130
第73図　第1号井戸・第5号溝・第91号土坑
実測図……133
第74図　第2～6号井戸実測図……135
第75図　第1号井戸出土遺物実測
・拓影図(1)……139
第76図　第1号井戸出土遺物実測図(2)……140
第77図　第1・2・6号井戸出土遺物
実測・拓影図(3)……141
第78図　第1号貝塚出土遺物実測

・拓影図(1)……143
第79図　第1号貝塚出土遺物実測図(2)……144
第80図　第1号貝塚出土古銭拓影図(3)……145
第81図　第1号土塁状遺構実測図……147
第82図　第1号土塁状遺構出土遺物実測
・拓影図……149
第83図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1)…150
第84図　遺構外出土遺物実測図(2)……151

大日山古墳群

第1図　第1号住居跡実測図……205
第2図　第1号住居跡竈実測図……206
第3図　第1号住居跡出土遺物実測図(1)…208
第4図　第1号住居跡出土遺物実測図(2)…209
第5図　第2号住居跡実測図……210
第6図　第2号住居跡出土遺物実測
・拓影図(1)……211
第7図　第2号住居跡出土遺物実測
・拓影図(2)……212
第8図　第3号住居跡実測図……213
第9図　第3号住居跡出土遺物実測
・拓影図……214
第10図　第4号住居跡出土遺物実測図……215
第11図　第5号住居跡実測図……217
第12図　第5号住居跡出土遺物実測
・拓影図……218
第13図　第6号住居跡実測図……219
第14図　第6号住居跡出土遺物実測
・拓影図(1)……220
第15図　第6号住居跡出土遺物実測
・拓影図(2)……221
第16図　第7号住居跡実測図……222
第17図　第7号住居跡出土遺物実測
・拓影図……223
第18図　第8号住居跡竈実測図……223
第19図　第8号住居跡実測図……224
第20図　第8号住居跡出土遺物実測図……225
第21図　第9号住居跡実測図……227
第22図　第9・11号住居跡出土遺物
実測図……227
第23図　第10・11号住居跡実測図……229
第24図　第12号住居跡実測図……231
第25図　第12号住居跡遺物出土位置図……232
第26図　第12号住居跡出土遺物実測
・拓影図(1)……235
第27図　第12号住居跡出土遺物実測
・拓影図(2)……236
第28図　第13号住居跡実測図……238
第29図　第13号住居跡出土遺物実測
・拓影図……239
第30図　第14号住居跡実測図……240
第31図　第14号住居跡出土遺物実測
・拓影図……241
第32図　第15号住居跡実測図……242
第33図　第15号住居跡出土遺物実測
・拓影図(1)……244
第34図　第15号住居跡出土遺物実測
・拓影図(2)……245
第35図　第16号住居跡実測図……245
第36図　第17号住居跡実測図……246
第37図　第17号住居跡遺物出土位置図……247
第38図　第18号住居跡竈実測図……250
第39図　第17号住居跡出土遺物実測図(1)…251
第40図　第17号住居跡出土遺物実測

・拓影図(2)……252
第41図　第17号住居跡出土遺物実測図(3)…253
第42図　第17号住居跡出土遺物実測
・拓影図(4)……254
第43図　土坑実測図……256
第44図　第1・4号溝実測図……257～258
第45図　第3・5号溝実測図……260
第46図　第1号塚実測図……263～264
第47図　第1号塚出土板碑拓影図……265
第48図　第1号塚出土古銭拓影図……266
第49図　第2・3号塚実測図……267～268
第50図　遺構外出土遺物実測・拓影図(1)…272
第51図　遺構外出土遺物実測・拓影図(2)…273
第52図　遺構外出土遺物実測図(3)……274

表　目　次

表1　江戸崎町遺跡地名表……15～16
表2　土坑一覧表(墓壙及び墓壙の可能性のある土坑)……79
表3　土坑一覧表(その他の土坑)……96

写　真　図　版　目　次

二の宮貝塚

ＰＬ１　二の宮貝塚全景(調査後)
ＰＬ２　調査前全景[南西から](1)，調査前全景[北東から](2)，遺跡周辺風景
ＰＬ３　鍬入れ式(1)，鍬入れ式(2)，試掘風景
ＰＬ４　遺構確認状況[南西部](1)，遺構確認状況[北東部](2)，第1号住居跡確認状況
ＰＬ５　第1号住居跡，第2号住居跡遺物出土状況，第2号住居跡
ＰＬ６　第3号住居跡，第4号住居跡遺物出土状況(1)，第4号住居跡遺物出土状況(2)
ＰＬ７　第4号住居跡遺物出土状況(3)，第4号住居跡遺物出土状況(4)，第4号住居跡遺物出土状況(5)
ＰＬ８　第4号住居跡竈，第4号住居跡，第5号住居跡
ＰＬ９　第6号住居跡遺物出土状況(貯蔵穴)，第7号住居跡遺物出土状況，第7号住居跡
ＰＬ10　第7号住居跡竈，第8号住居跡，第7号住居跡遺物出土状況，第1号掘立柱建物跡
ＰＬ11　第1号掘立柱建物跡遺物出土状況，第2号掘立柱建物跡，第3号掘立柱建物跡
ＰＬ12　調査区西端部の状況，第4号掘立柱建物跡(1)，第4号掘立柱建物跡(2)
ＰＬ13　墓壙群全景，墓壙群(1)
ＰＬ14　墓壙群(2)，墓壙群(3)，墓壙群(4)

ＰＬ15　墓壙群(5)，墓壙(SK32)土層セクション，墓壙(SK86)土層セクション
ＰＬ16　第1号地下式壙掘削風景，第1号地下式壙土層セクション実測風景，第1号地下式壙土層セクション
ＰＬ17　第1号地下式壙(1)，第1号地下式壙(2)，第1号地下式壙(3)
ＰＬ18　第1号地下式壙(4)，第1号土坑，第4号土坑
ＰＬ19　第5号土坑土層セクション，第5号土坑遺物出土状況，第7号土坑
ＰＬ20　第8号土坑遺物出土状況(1)，第8号土坑遺物出土状況(2)，第9号土坑遺物出土状況
ＰＬ21　第10～12号土坑，第13号土坑土層セクション，第25号土坑
ＰＬ22　第99号土坑，第130・131号土坑，第145号土坑
ＰＬ23　第152号土坑，第120号土坑遺物出土状況(1)，第120号土坑遺物出土状況(2)
ＰＬ24　第129号土坑遺物出土状況(1)，第129号土坑遺物出土状況(2)，第147号土坑遺物出土状況
ＰＬ25　第150号土坑遺物出土状況，第151号土坑遺物出土状況，第151号土坑土層セクション
ＰＬ26　第1号土墨状遺構調査風景，第1号土墨状遺構土層セクション，第1号井戸土層セクション
ＰＬ27　第1号井戸，第1号井戸遺物出土状況
ＰＬ28　第2号井戸遺物出土状況，第4号井戸遺物出土状況，第5号井戸遺物出土状況
ＰＬ29　第6号井戸，第1号土墨状遺構周辺の遺構検出状況(1)，第1号土墨状遺構周辺の遺構検出状況(2)
ＰＬ30　第92号土坑，第3号溝，第9・10号溝，第2号住居跡
ＰＬ31　第9・10号溝(1)，第9・10号溝(2)
ＰＬ32　第1・2・4号住居跡出土遺物
ＰＬ33　第4・6・7号住居跡出土遺物
ＰＬ34　第7・8号住居跡，掘立柱建物跡，第8号土坑出土遺物
ＰＬ35　第8号住居跡，掘立柱建物跡，第4・8号土坑出土遺物
ＰＬ36　第8・9・19・21・22・81号土坑出土遺物
ＰＬ37　第120・127・128・135・136・140号土坑出土遺物
ＰＬ38　第140・147・150・151号土坑出土遺物
ＰＬ39　第151号土坑，第7・8・11号溝，第1号井戸出土遺物(一括)
ＰＬ40　第1号井戸出土遺物
ＰＬ41　第2・4・6・7号住居跡，第1・2号井戸，第1号貝塚，遺構外出土遺物
ＰＬ42　第3・4・7・8号住居跡，第21・63・70・94・120・152・162号土坑，第1・7・8・9号溝，遺構外，第1号井戸，第1号塚出土遺物
ＰＬ43　第81・91・94・132・148・151号土坑，第8号溝，第1号井戸，第1号貝塚，遺構外出土遺物
ＰＬ44　第5・8号土坑，第1号井戸，第1

号溝，第１号貝塚，遺構外出土遺物
ＰＬ45　第7号住居跡，第9・45・120号土坑，第1号井戸，第1号貝塚，第1号土墨状遺構，遺構外出土遺物

大日山古墳群

ＰＬ１　大日山古墳群全景(調査後)
ＰＬ２　第1号塚全景，試掘調査風景(1)，試掘調査風景(2)
ＰＬ３　試掘調査状況，遺構確認状況(1)，遺構確認状況(2)
ＰＬ４　第1号塚板碑・石塔類(1)，第1号塚板碑・石塔類(2)
ＰＬ５　第1号住居跡遺物出土状況，第1・2号住居跡，第2号住居跡
ＰＬ６　第3号住居跡，第5号住居跡，第6号住居跡遺物出土状況(1)
ＰＬ７　第6号住居跡遺物出土状況(2)，第6号住居跡，第7号住居跡
ＰＬ８　第8号住居跡，第12号住居跡遺物出土状況，第12号住居跡
ＰＬ９　第13号住居跡，第13号住居跡遺物出土状況，第14号住居跡
ＰＬ10　第15号住居跡，第15号住居跡遺物出土状況(1)，第15号住居跡遺物出土状況(2)
ＰＬ11　第17号住居跡，第17号住居跡遺物出土状況(1)，第17号住居跡遺物出土状況(2)
ＰＬ12　第17号住居跡遺物出土状況(3)，第1号溝，第12・14号住居跡，遺跡全景(調査後)
ＰＬ13　第1・2・4・5号住居跡出土遺物
ＰＬ14　第5・6・8・9・12号住居跡出土遺物
ＰＬ15　第12・13・14・15号住居跡出土遺物
ＰＬ16　第17号住居跡出土遺物
ＰＬ17　第17号住居跡，遺構外出土遺物
ＰＬ18　第1・4・6・8・12・15号住居跡，遺構外出土遺物
ＰＬ19　第1・2・4・8・12・14・15・17号住居跡，第1号塚，遺構外出土遺物

附　図　目　次

附図１　二の宮貝塚地形測量図
附図２　二の宮貝塚遺構全体図
附図３　大日山古墳群地形測量図
附図４　大日山古墳群遺構全体図
附図５　思川遺跡地形測量図
附図６　思川遺跡遺構全体図

第１章　調査経緯

第１節　調査に至る経過

一般県道新川江戸崎線は，国道125号との分岐点である東村須田字押堀地内を起点として桜川村を横断し，主要地方道成田江戸崎線との分岐点である江戸崎町大字江戸崎字法蓮坊地内に至る，総延長16.752kmの稲敷地方の主要な道路である。昭和47年，地域住民の生活福祉の向上と営農の推進を図ることを目的として，東村から牛久市に至る総延長約25kmの区間を対象とする稲敷広域営農団地農道整備事業が計画された。しかし，現在，道路沿いには多くの人家が立ち並んでおりこの区間における道路の幅員の拡張を行うことが実質的に困難な状況にあるため，茨城県ではこの整備事業の一環として，新たに桜川村浮島(字神落)地区[(1)]を起点に，江戸崎町佐倉(字佐倉原)地区を終点とする幅員12m，総延長12.435kmの一般県道新川江戸崎線道路改良工事を計画した。

茨城県は，工事に先立ち，昭和62年7月15日，江戸崎町・桜川村両教育委員会に対し，工事予定地内における埋蔵文化財包蔵地の有無及びその取り扱いについて照会した。これに対し，9月1日，江戸崎町教育委員会は，工事予定地内に二の宮貝塚・大日山古墳群の周知の遺跡が所在する旨，桜川村教育委員会はやはり周知の遺跡である柏木古墳群が所在する旨回答し，併せてその取り扱いについて茨城県教育委員会と協議し回答した。翌9月2日には，茨城県教育委員会が現地踏査を行い，上記３遺跡の所在を確認した。昭和62年10月1日，これを受けて，茨城県は，茨城県教育委員会と工事予定地内に所在する埋蔵文化財の取り扱いについて協議し，10月28・29の両日，茨城県教育委員会は，調査範囲を確認するため工事予定地内の試掘調査を実施し，新たに1遺跡(思川遺跡)の存在を確認した。茨城県教育委員会は，茨城県と文化財保護の立場から埋蔵文化財の取り扱いについて協議を重ねてきたが，現状保存が困難であることから，記録保存の処置を講ずることとし，11月17日，調査機関として財団法人茨城県教育財団(以下茨城県教育財団)を紹介した。茨城県教育財団は，昭和63年6月1日，茨城県との間に埋蔵文化財発掘調査に関する業務委託契約を締結し，同年6月1日から翌平成元年3月31日にかけて，江戸崎地区に所在する二の宮貝塚(2,846.00㎡)・大日山古墳群(2,856,60㎡)・思川遺跡(3,681.90㎡)，及び桜川地区に所在する柏木古墳群(5,682.95㎡)の4遺跡(総面積14,867.45㎡)について発掘調査を実施することになった。調査の過程で，二の宮貝塚外3遺跡からは，いずれも予想を上回る多数の遺構が確認されたため，昭和63年11月2日，茨城県・茨城県教育委員会・茨城県教育財団の三者間で調査計画の変更について協議が行われ，同年11月15日茨城県と茨城県教育財団との調査計画変更協議を経て，12月2日，埋蔵文化財発掘調査に係る委託契約の変更が行われた。この結果，当初予定された調査面積の一部(桜川地区の柏木古墳群[(2)]；5,682.95㎡)を減じ，道路整備計画上早期着工が予定されている江戸

崎地区に所在する3遺跡について，昭和63年度中に調査を終了させることになった。

註

(1) 桜川地区に所在する尾島貝塚・宮の脇遺跡・後九郎兵衛遺跡の3遺跡については，昭和61年4月1日から同年12月31日にかけて調査が実施された。

(2) 柏木古墳群については，昭和63年度に一部表土除去・遺構確認調査が行われ，本調査は翌平成元年4月1日から9月30日にかけて実施された。また，平成2年度には，同一路線上に確認された桜川村浮島地区に所在する上ノ台・岡ノ内両遺跡の調査が実施された。

第2節　調査経過

江戸崎町に所在する二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡の3遺跡，及び桜川村に所在する柏木古墳群の併せて4遺跡について，昭和63年6月1日から翌平成元年3月末日までの予定で調査を開始した。4遺跡の調査は，調査期間等との関連から併行調査を前提としたが，遺跡周辺の地形や地理的条件(二の宮貝塚・大日山古墳群・思川遺跡の3遺跡が，いずれも舌状台地の縁辺部に所在し，各々の遺跡間が深い谷津によって寸断されていることや，この3遺跡と柏木古墳群とが5km程離れていること，調査用の進入路が無いため，尾根づたいに進入路を造成しなければならない等)等から様々な困難を伴った。

遺構確認調査の過程において，柏木古墳群を含む4遺跡には，いずれも濃密に遺構が存在することが明らかとなったため，一部契約変更が行われ，昭和63年度は，柏木古墳群を除く3遺跡について本調査を実施することになった。調査経過については，柏木古墳群を含め以下に記載した。

6　月　1日に江戸崎事務所を開設し，調査の諸準備を整える。併せて4遺跡を踏査し，調査範囲の確認及び調査計画の検討を行う。9日から発掘作業員を雇用し，事務所周辺の清掃及び鍬入れ式の準備を行う。13日に竜ヶ崎土木事務所，県文化課，江戸崎町・桜川村両教育委員会，及び教育財団本部等関係者の出席の下，調査の円滑な推進と安全を祈願し，二の宮貝塚に於いて4遺跡合同の鍬入れ式を挙行する。翌14日より，二の宮貝塚から逐次4遺跡の発掘調査を開始する。

二の宮貝塚

14日から調査を開始し，調査前全景写真撮影の後，調査区内の立木の伐開・焼却・清掃作業を行う。20日から23日にかけて，地形測量（茨城県建設技術公社）・試掘を行い，29日から，重機による表土除去及び遺構確認調査を行う。

思川遺跡

29日，二の宮貝塚の調査と並行して，調査用進入路の造成，伐開，試掘を行う。

7　月　**二の宮貝塚**

前月に引き続き，4日から7日にかけて重機による表土除去を行う。8日，遺構確認調査を行い，9日から第１～34号土坑，第1・2号溝，第1号土塁状遺構，第1号井戸，第1～2号性格不明遺構(後に井戸と判明)等の調査を行う。調査と並行して，11日に基本杭打ち，12～13日にかけて調査杭打ち(調査区設定)を行う。

思川遺跡

1日から7日にかけて，グリッド(4×4ｍ)による試掘及び遺構確認調査を行う。7日までに，数か所のグリッドから住居跡らしき落ち込みを確認する。18日に地形測量を行い，19日から重機による表土除去を開始する。20日には，弥生時代から古墳時代に比定される数軒の住居跡を確認する。

大日山古墳群

5～6日にかけて調査用進入路造成の為の伐開を行う。また，20日には，3基の塚の測量と併せて遺跡内の地形測量を行う。

8　月　**二の宮貝塚**

第6～42号土坑，第4・5号溝，第1号土塁状遺構，第1号貝塚，第1号堀等の調査を行う。

思川遺跡

1～5日にかけて重機による表土除去，8～22日にかけて遺構確認調査を行う。また，18日には基本杭打ち，22日には遺構確認状況写真撮影，23日には調査杭打ちを行う。

大日山古墳群

18日に基本杭打ち，29日に遺跡内の伐開・除草，遺跡全景写真撮影及び試掘の為のトレンチ設定を行う。31日からトレンチ及びグリッドによる試掘を開始する。

9　月　**二の宮貝塚**

1～14日にかけて第40～69号土坑，第1・2・4・12号溝，第1号性格不明遺溝，第1・2号貝塚等の調査を行う。29日から，引き続き第60～80号土坑の調査を行う。

大日山古墳群

前月に引き続き，1日に試掘を行う。9～16日にかけて重機による表土除去，16～26日にかけて遺構確認調査を行う。確認調査の結果，古墳(または塚)3基，住居跡18軒，焼土分布地点3か所を確認する。19日には，調査と並行して調査用進入路の造成を行う。

柏木古墳群

2～6日にかけて桜川村に所在する柏木古墳群の試掘を行う。試掘を行ったグリッドの大

半から遺構が確認され，遺跡全体に遺構が濃密に存在することが予想された。29日から，遺跡北東部について重機による表土除去を開始する。

10　月　**柏木古墳群**

前月に引き続き，1～4日にかけて重機による表土除去を行い，4日から7日にかけて遺構確認調査を行う。その結果，予想通り遺跡内全域に遺構が濃密に分布していることや，複雑に重複している様子が明らかとなった。4日には，調査と併せて遺構配置図を作成する。

大日山古墳群

3日に調査区設定を行い，遺構配置図を作成する。

二の宮貝塚

11日から遺構調査を再開し，第46～150号土坑，第3～5・7～14号溝，第1号貝塚，第1号土塁状遺構，第4号性格不明遺構等の調査を行う。

11　月　調査の過程において，柏木古墳群を含む4遺跡からは，いずれも予想を上回る数の遺構が濃密に検出されたため，2日に，江戸崎及び桜川地区の発掘調査に係わる三者協議(県土木部道路建設課，県文化課，教育財団)を行う。協議の結果，遺構数と調査期間を鑑み，柏木古墳群については，平成元年度に本調査を実施することとなった。

二の宮貝塚

前月に引き続き第1～4，6～10号住居跡，第31～169号土坑，第4号性格不明遺構(井戸状遺構)，第1・2号地下式壙，第1～3号掘立柱建物跡の調査を行う。調査は月末にほぼ終了し，30日に航空写真撮影のための準備(遺跡内等の清掃)を行う。

大日山古墳群

5～8日，16・19日にかけて第1～6号住居跡の調査を行う。また，22～25日に調査区設定，26日には本調査に備え，テント・倉庫設置予定場所等の伐開を行う。28日にテントを設営し，所有者(江戸崎町古渡　武藤彰男氏)の立ち会いの下で，第1号古墳墳頂部に祀られていた板碑の移動を行い，併せてその拓本をとる。

12　月　**二の宮貝塚**

1日に航空写真撮影，1～7日にかけて補足調査を行い，7日に全ての調査を終了する。

大日山古墳群

2日から下旬にかけて，住居跡，土坑，溝，古墳の調査を行う。調査の過程で，当初古墳と想定していた第1～3号古墳は，いずれも近世の塚であることが明らかとなったため，以後，第1～3号塚と呼称することにした。17日に，新たに第1号塚の下から住居跡(第18号)を確認したため,他の調査と並行し,17～23日にかけて第1号塚の盛土除去(重機)を行う。23日，思川遺跡の調査に備え発掘器材の搬出を行う。27日に航空写真撮影を行い，全ての

調査(住居跡18軒，土坑3基，溝5条，塚3基)を終了した。

1　月　**思川遺跡**

5日に発掘調査の体制を整え，本調査を開始する。第1～21・23・25・31・33～34号住居跡，第1～4号土坑，第1・2・4・5号溝の調査を行う。調査期間と遺構数との関連から調査方法を検討し，24日より写真測量(シン航空株式会社)を導入し，調査を進めることにする。

2　月　**思川遺跡**

前月に引き続き，第5～7・9・11～48号住居跡，第3～9号土坑，第2・4～7号溝の調査を行う。

3　月　**思川遺跡**

2～16日にかけて，第12～18・26・28・29・32・41～44・50～52号住居跡の調査を行い，遺構調査をほぼ終了する。16日に遺跡全景写真・航空写真撮影，18日に江戸崎町中央公民館及び現地において，現地説明会を行う。22日に補足調査及び発掘器材の移動，24日に江戸崎町・桜川村両教育委員会等関係各位の出席を得，二の宮貝塚外2遺跡の報告会を行い，25日をもって予定された全ての調査を終了する。

第２章　位置と環境

第１図　遺跡位置図

第1節　地理的環境

二の宮貝塚は稲敷郡江戸崎町佐倉2,608－2番地外6筆，思川遺跡は同町佐倉2,622番地外1筆，大日山古墳群は同町古渡1,908番地外5筆に各々所在している。

上記の3遺跡が所在する江戸崎町は，県南地域の南東部を占める稲敷郡の中央部(東経140°19′；北緯35°57′)に位置している。町域は東西(最長)9.3km，南北(最長)10.1km，総面積53.57㎢であり，東は桜川村・東村，西は竜ヶ崎市・牛久市，南は新利根村，北は美浦村と境界を接し，北東部は我国第2位の面積を誇る霞ケ浦に臨んでいる。平成3年2月1日現在の総人口は15,087人，世帯数は4,123戸である。現在，江戸崎町の中心集落を形成する「江戸崎」の都市の起源は，室町時代に土岐原氏が築いた江戸崎城の城下に，家臣団を主体とする町屋が営まれたのが最初とされ，江戸時代には，霞ケ浦・利根川水系の水上交通の要衝(船運による物資の集散地)として栄えた。明治時代には，信太・河内郡役所が設置され，行政・文化・経済の中心地であった。町の主要産業は，稲作を中心とする農業であるが，近年，畜産・園芸などの多角的経営が盛んとなり，特に「江戸崎カボチャ」は東京市場で高い評価を得ている。町の中心部には比較的大きな商業地域が形成されており，主要地方道成田江戸崎線・土浦江戸崎線が放射状に延びる交通の要衝でもある。東は千葉県佐原市，西は土浦市荒川沖，南は竜ヶ崎市，北は土浦市へ通じている。昭和50年4月5日には，成田空港建設工事に伴う交通量の増加を解消するために建設されたバイパスが開通した。

町域の北西部及び小野川を隔てた東部には，標高20ｍ(最高31.7ｍ)程の比較的平坦な台地(稲敷台地)が一帯に広がり，畑地や山林となっている。霞ケ浦に注ぐ小野川流域や，台地の間を縫って小野川に合流する清水川・花指川，北部を流れる高橋川の流域及び東部台地南側の新利根川流域には沖積低地が開け，水田地帯を形成している。

二の宮貝塚外2遺跡は，江戸崎市街地の北東2.3～2.8km程に所在しており，江戸崎入干拓及び霞ケ浦に東面し，支谷が樹枝状に入り込んだ標高20～29ｍ程の舌状台地縁辺に位置している。二の宮貝塚は，江戸崎入干拓を臨む標高26ｍ程の比較的平坦な台地に位置しており，この台地の北東側は南東から侵入する谷で，急崖を成している。思川遺跡は，南東方に張り出す標高29ｍ程の舌状台地縁辺部に位置しており，北・東・南側の三方が谷に囲まれ急崖を成している。また，遺跡の中央部付近は，南東側に向って傾斜している。二の宮貝塚及び思川遺跡の北東側には，谷を隔て楯の台古墳群が所在している。大日山古墳群は，霞ケ浦に向かって北東方に細長く張り出す，標高20ｍ程の舌状台地縁辺部に位置しており，西側を除く三方は谷や低地に囲まれ急崖を成している。3遺跡の位置関係は，第1図の通りである。

第２節　歴史的環境

『茨城県遺跡地図』によれば，二の宮貝塚外2遺跡の所在する江戸崎町の洪積台地には，52遺跡の存在が認められる。茨城県は，関東地方において，千葉県に次ぐ貝塚の宝庫であり，県内において現在確認されている貝塚400か所余の内，80％が霞ケ浦・北浦沿岸及び利根川水系に属する河川周辺に集中している。霞ケ浦沿岸に位置する当江戸崎町もその例外ではなく，思川遺跡を含めた53遺跡の内の16遺跡が貝塚である。霞ケ浦沿岸の貝塚については，古くから多くの研究者の関心を集め，明治12年には，アメリカの生物学者モース(Edword.S.Morse)の教えを受けた佐々木忠次郎・飯島魁が霞ケ浦沿岸を探査して陸平貝塚(美浦村)を発見し，日本人の手で初めて貝塚の調査[1]を行っている。日本の考古学研究は，まさにこの時始まったと言える。明治26年には，坪井正五郎・八木奘三郎が霞ケ浦を旅行していて，椎塚貝塚(江戸崎町)・福田貝塚(東村)を発見し，同年4月には八木奘三郎・下村三四吉が椎塚貝塚[2]を発掘している。このように，江戸崎町及びその周辺地域には，学史上著名な遺跡が数多く存在している。

江戸崎町における先土器時代の遺跡は，これまでのところ確認されていない。しかし，佐倉原・村田・君山台などから石刃石器と思われる遺物が数点採集されており[3]，将来，この時代の遺跡が発見される可能性は十分予測される。

縄文時代になると明らかに遺跡数が増加し，現在，この時代の遺跡は，椎塚貝塚〈24〉や村田貝塚〈6〉を初めとして20遺跡が確認されている。椎塚貝塚は，霞ケ浦の西岸にあたる小野川河口付近の古渡入(小野川東岸に当たる)と呼ばれる低湿地に向かって，半島状に突き出した細長い台地上に形成された貝塚で，台地中央の平坦部を中心とする傾斜面に，長径20～30ｍ程の貝塚が5か所点在している。この貝塚はハマグリを主体とし，アカガイ・サルボウ・シオフキなどが見られる純鹹貝塚であり，遺物の優品を出土することから，明治後半からさかんに発掘された関東地方の代表的な貝塚とされ，学史上重要な位置を占めている。発掘は，明治年間に，前述した八木奘三郎等によって行われ，『人類学雑誌』(8～31)にその報告がある。出土した土器は，縄文時代後期加曽利Ｂ式土器を主体とし，後期末から晩期初頭にかけての曾谷式，安行式，亀ケ岡式土器などが出土している。国の重要文化財に指定された注口土器やアワビ形土器など，優れた土器や異形品が多い。また，土偶，土製品，石器や骨角器などの珍品も多く[4]，なかでも骨製のヤスの刺さったタイの頭骨は名高い。村田貝塚[5]は，羽賀沼渓谷とそれに向かって開口する小支谷に囲まれた半島状をなす台地上(村田台)にある，縄文時代前期から中期にかけての貝塚である。この貝塚は，ハマグリ・シオフキ・アカニシなどが見られる純鹹貝塚である。昭和43年，早稲田大学の西村正衛等によって発掘調査が行われ，縄文時代早期から後期にかけての各種土器や石器，骨角器，貝器，土製品等が出土している。江戸崎町周辺における縄文時代の著名な遺跡には，前述した美浦村の

陸平貝塚や興津貝塚・法堂遺跡[6](製塩遺跡)，桜川村の貝ケ窪貝塚[7](「浮島式」の標式遺跡)・前浦遺跡[8](「前浦式」の標式遺跡；製塩遺跡)・広畑貝塚(製塩遺跡)，東村の福田貝塚[9]，新利根村の道成寺貝塚などがある。

弥生時代の遺跡は，これまで楯の台古墳群[10]〈22〉の1例(住居跡2軒)が知られるのみであったが，今回の調査によって，新たに思川遺跡(住居跡3軒)〈(53)〉や，大日山古墳群(住居跡8軒)〈51〉からも同時代の遺構・遺物が検出されるに至り，江戸崎町における弥生時代後期の様相が次第に明らかになりつつある。今後，更に新たな遺跡が確認される可能性は十分に考えられる。桜川村に所在する殿内遺跡[11]は，県内における弥生時代初期の遺跡として名高い。

古墳時代の遺跡は，今回調査した二の宮貝塚外2遺跡を含め32遺跡を数える。そのうち，単独の古墳とされているものが見晴塚古墳〈2〉外20遺跡，古墳群とされているものが佐倉原古墳群〈23〉外7遺跡，その他集落跡と考えられるものが5遺跡となっている。昭和48年頃の土取りによって湮滅したとされる水神峯古墳群[12]からは，内部朱塗りの石棺が出土し，人骨と共に鉄製の太刀や鉄鏃(30本)・金で装飾された鞍などの副葬品が検出されているという。また，昭和59年にその一部が調査された楯の台古墳群からは，帆立貝状古墳，円墳，方墳等の3基の古墳や，方形周溝墓が検出されている[13]。古墳及び古墳群と呼称されている遺跡の中には，大日山古墳群の例のように，中・近世の塚が多分に含まれていることも考えられ，その実態については今後の調査を待たなければならない。今回の調査で，二の宮貝塚外2遺跡からは，古墳時代前期から後期にかけての住居跡が多数検出されており，当地方の古墳時代の集落跡の様相を知るうえで貴重な資料となろう。桜川村に所在する原1号墳[14]は，自然地形(丘陵)を利用して構築された県内の出現期の古墳として名高い。

奈良・平安時代の遺跡としては，下君山廃寺跡〈12〉や，今回調査を実施した二の宮貝塚・思川遺跡を含め8遺跡が確認されている。奈良時代に属する下君山廃寺跡は，町の南西部の小野川を臨む台地上にある。この地一帯は，古くは駅家里と呼ばれ，10haにわたって布目瓦が散布している。台地の中央は木瓜台と呼ばれ，この畑の中の土壇状に小高くなっている場所(古天の宮)に心礎と石造露盤が置かれている。大野一郎氏が収集した軒瓦の中には，常陸国分尼寺軒瓦に酷似し，同笵と見られるものや，下総八日市場の大寺廃寺出土瓦と同笵のものがあり，注目されている[15]。また，『常陸国風土記』信太郡の条には，榎浦之津についての記載が見られる[16]。榎浦之津の駅は，『常陸国風土記』に，「東海の大道」・「常陸の路頭」と記されているように，東海の大路の中で，常陸国への最初の関門である。この駅名については諸説があるが，『新編常陸国誌[17]』の説以来，多くの研究者が支持している江戸崎町羽賀・君山の地が妥当とされている。なお，榎浦之津の駅が『延喜式』の榛谷駅と同一とする考え[18]は，中山信名の『新編常陸国誌』や宮本元球の『郡郷考』，栗田寛の『標註古風土記』にみられ，現在，多くの研究者もまたこの説を踏襲している。

先に述べた木瓜台周辺には，夥しい量の布目瓦が散布し，倭名抄ではこのあたり一帯を広く駅家郷と称していること，また，長者山・長者屋敷などの地名が残っていること等から，君山の木瓜台の地に郡衙が存在していた可能性が高い。平安時代には，江戸崎の地に不動院[19]・円密院[20]・高田神社[21]が創建され，現存している。

中世の江戸崎地方は，信太庄[22]と呼ばれる荘園に含まれていた。信太庄は，平頼盛の母藤原宗子(後の池禅尼)が平安後期の仁平元年(1151)，美福門院に寄進し成立する。その後，八条院・後宇田上皇・東寺へと受け継がれている。鎌倉末期には，郷地頭の多くが北条一門で占められていたが，やがて南北朝の内乱を経る中で山内上杉氏(上杉憲方・憲定)の支配下に置かれ，やがて，その被官である土岐原氏・臼田氏が当地に赴任して来る。土岐原氏[23]は，嘉慶元年(1387)，秀成が地頭の総取締役である惣政所として赴任して以来，憲秀・景秀・景成・治頼・治英・治綱と七代約200年にわたって当地方を支配し，江戸崎城[24]を本拠に，現在の稲敷一帯は勿論，霞ケ浦対岸の行方一帯にまで勢力を有した常南の地頭領主として知られている。 土岐原氏は，9代城主治綱の代に後北条氏と手を結んだため，天正18年(1590)，豊臣秀吉の関東平定(小田原攻め)の余波を受け，江戸崎城主の座を明け渡すことになる。その後，佐竹義宣の弟芦名盛重が当城主となり，慶長7年(1602)，徳川家康によって秋田角館に移封されるまでの約12年間に，城下の整備を行っている。盛重が秋田移封の後，松平信一が城主となったが，まもなく廃城となった。

このように，江戸崎町及びその周辺地域には，霞ケ浦をはじめとする豊かな自然環境を背景に，原始・古代から中・近世にかけての著名な遺跡や史蹟が数多く残されている。

註

(1) この報告は大森貝塚と同じ体裁で，『OKADAIRA SHELL MOUNDS AT HITACHI』と「常州陸平介墟報告」(『学芸志林』6)を発表。

(2) 明治27年「常陸国椎塚貝塚発掘報告」(『東京人類学会雑誌』8-87)を報告し，椎塚貝塚で得た土器は，陸平貝塚のものとは異なるもので，むしろ大森貝塚の土器に類似することを述べている。

(1)(2) 茨城県「先土器・縄文時代」『茨城県史料＝考古資料編』1979

(3) 江戸崎町「光跡・江戸崎町の歴史」『えどさき』1984

(4) 当貝塚からは土偶の出土も多く，山形土偶は著名である。犬らしい動物形土製品も珍品である。骨角器としては刺突具(ヤス)が多く，内湾性漁撈活動の特色を示している。外鉤(あぐ)式の釣針，有鉤銛頭，垂飾なども出土している。茨城県立歴史館『霞ケ浦の貝塚文化』1987

(5) 県遺跡地名表1,617番の白畑野畑貝塚がこれに該当する。
西村正衛「茨城県稲敷郡江戸崎町村田貝塚」『石器時代における利根川下流域の研究』1984

(6) 縄文時代晩期前半の製塩跡。霞ケ浦に突き出した半島状丘陵の先端近くに所在。美浦村大山字法堂。

(7) 明治年間に，佐藤伝蔵・若林勝邦によって調査され，その結果は，明治27年「常陸国浮島村貝塚探究報告」と題して『東京人類学会雑誌』(10-105)に発表された。その後，当貝塚及び周辺の関連遺跡から出土する特異な前期後半の土器に対し，江坂輝弥が「浮島式」と命名した。桜川村浮島狭間久保。

(8) この遺跡は古くから調査が行われ，昭和31年に山内清男が発掘調査を実施。この結果，晩期中葉における当地方の土器型式として「前浦式」土器が抽出され，今日，関東地方における縄文晩期の一型式として全国に知られている。また，縄文後晩期の製塩土器が多出している。桜川村浮島前浦。

(9) 明治26年，東京大学理学部人類学教室の坪井正五郎・八木奘三郎によって発見され，翌27年3月，同教室の佐藤伝蔵によってはじめて発掘調査が行われる。典型的な内湾性貝塚であり，特にびょうたん形注口土器や双口土器等，明治時代の発掘品に優品が多い。

(10) 江戸崎町教育委員会「楯の台古墳群」1986。江戸崎町大字佐倉字楯の台2,727番地に所在。昭和59年5月2日から8月2日にかけて発掘調査が行われ，古墳3基，方形周溝墓1基，弥生時代後期の住居跡2軒，古墳時代中・後期の住居跡5軒が検出されている。

(11) 桜川村浮島字前浦，殿内に所在する。野田奈川に面した標高23m付近にあり，水田との比高は5mを測る。初期弥生式土器を埋置する土坑が，晩期縄文式土器を包含する層を掘り込んでおり，晩期縄文式土器から初期弥生式土器への継続を見せる。弥生時代初期の再葬墓10基が検出されている。

(12) 江戸崎町大字佐倉字山中の，集落北側の台地先端部に所在していた。『茨城県遺跡地図』には掲載されていない。「楯の台古墳群」調査報告書による。

(13) (10)と同じ。

(14) 4世紀代の前方後方墳。玉造町勅使塚古墳，岩瀬町狐塚古墳，八郷町丸山古墳，鹿島町お伊勢山古墳，水戸市安戸星古墳，筑波町山木古墳，常陸太田市梵天山北古墳とともに，県内最古クラスの古墳。

(15) 高井悌三郎「律令制の成立と常総地方」『茨城県史＝原始古代編』1985及び(3)による。

(16) 「榎浦之津，便置驛家，東海大道，常陸路頭，所以傳駅使等，初將臨國，先洗口手，東面拜香島之大神，然後得入也」

(17) 中山信名「復刊新編常陸国誌」第三巻 信太郡「驛家里」(P69～70)1979

(18) (17)に同じ。

(19) 嘉祥元年(848)，慈覚大師の開山と伝えられる。徳川家康の黒衣の宰相，南光坊天海が住

職をしていた。

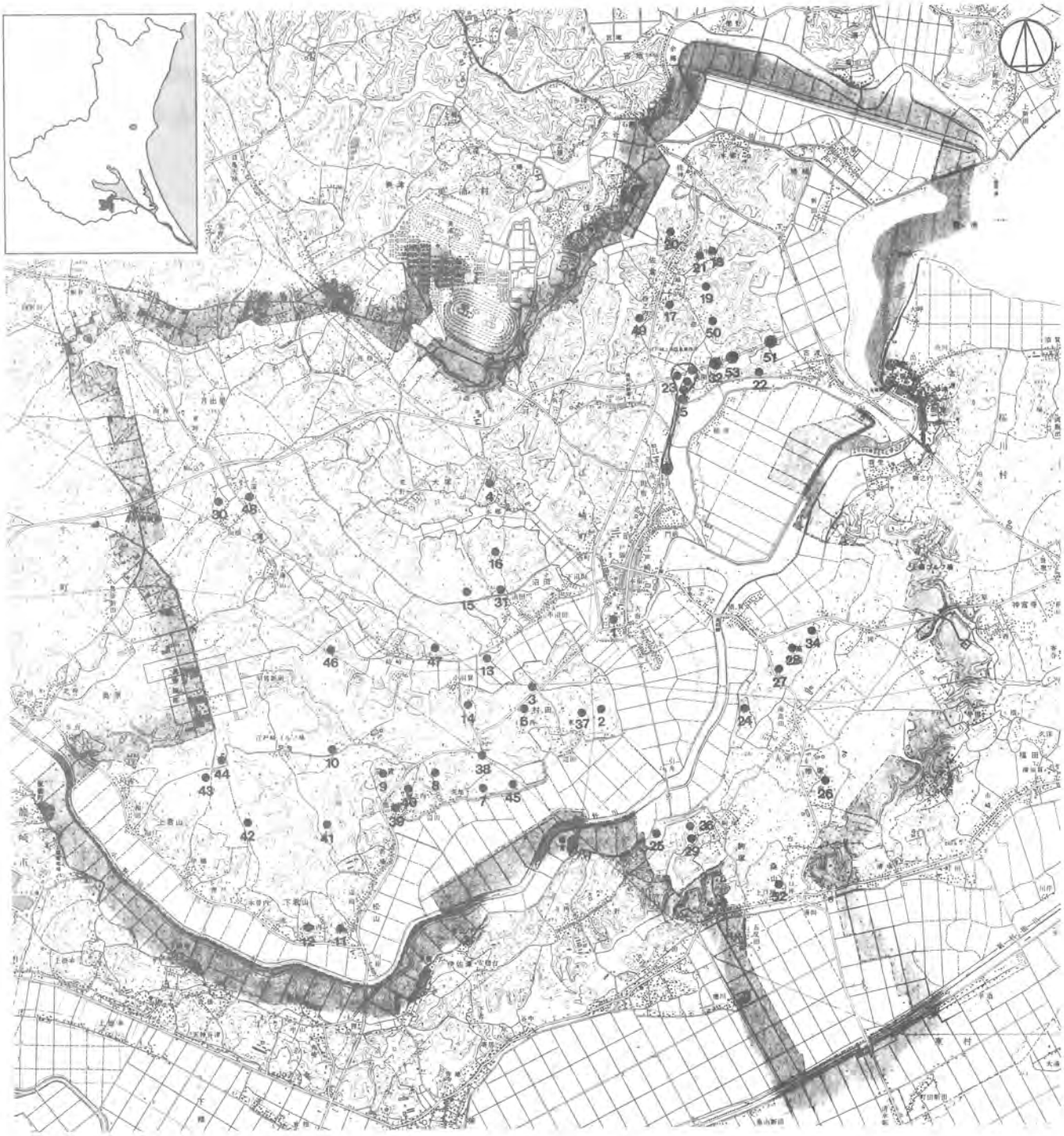
⑳ 嘉祥2年(849)，慈覚大師の開山と伝えられる。不動院の末寺。

㉑ 高田権現とも称し，承平年間(931～938)の創建と伝えられる。

㉒ 稲敷郡の大半(稲敷郡美浦村・阿見町・江戸崎町)，土浦市の桜川以南の地域，及び新治郡桜村(現つくば市)をも含む広大な荘園。信太庄には惣政所があり，所在地は本郷であったとみられ，現在の美浦村信太が本郷の地と推定されている。

㉓ 美濃国の豪族土岐原師親(戦国期に土岐氏を称す)は，弘安年間に信太庄の地頭となったと伝えられている(宍塚般若寺縁起)。その孫の秀成が関東管領上杉憲顕の被管となり，惣政所を称し，江戸崎周辺に勢力をのばした。

㉔ 北東に霞ケ浦を臨み，江戸崎の市街地を一望する，現江戸崎小学校裏手の標高25ｍ程の台地上にある(江戸崎町大宿甲3,194；通称城山の地)。現在，僅かに土塁や堀跡が残る。



第２図　周辺遺跡分布図

表１　江戸崎町遺跡地名表（市町村番号＝図中番号）（第２図）

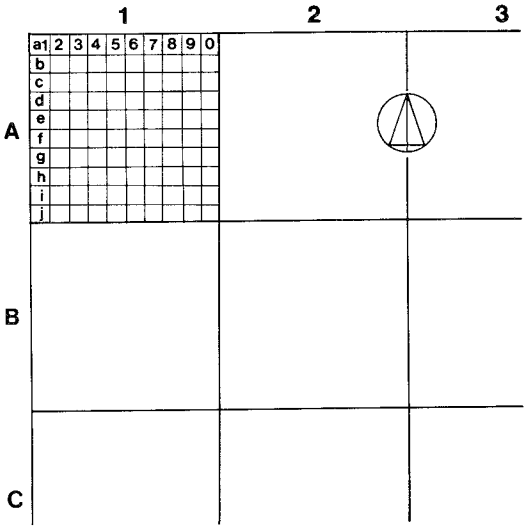
市町村番号	県通し番号	名称	所在地	種別	現況	時代 無土器	縄文	弥生	古墳	奈・平	中・近	備考
1	1612	江戸崎城跡	大宿甲3194	城館跡	山林，畑						○	
2	1613	見晴塚古墳	原　乙602	古墳	畑				○			
3	1614	豆薬師古墳	豆薬師乙426	古墳	山林				○			
4	1615	明神貝塚	犬塚三本松1248	貝塚	畑，宅地		○					
5	1616	吹上貝塚	法蓮坊甲526	貝塚	畑		○					
6	1617	村田貝塚	村田山後26	貝塚	畑		○					名称変更(旧･白畑野畑貝塚)
7	1618	亀ヶ谷城古墳	羽賀新畑1352	古墳	山林					○		
8	1619	荒地古墳群	羽賀荒地平1321	古墳群	山林					○		
9	1620	木納場古墳群	羽賀木納場1616	古墳群	山林					○		
10	1621	大塚古墳	羽賀大塚1881	古墳	山林					○		
11	1622	権現塚古墳	下君山羽黒1726	古墳	山林					○		
12	1623	下君山廃寺跡	下君山富士台2521	寺院跡	畑，原野					○		名称変更(旧･富士塚古墳)
13	1624	浅間山古墳群	沼田東前1106-1	古墳群	山林				○			湮滅
14	1625	神田道貝塚	小羽賀神田道690	貝塚	畑		○					
15	1626	自穢前古墳	自穢前2361	古墳	畑				○			
16	1627	大夫屋敷古墳	沼田大夫屋敷1856	古墳	畑				○			
17	1628	南平貝塚	佐倉南平2350	貝塚	畑		○					
18	1629	山中貝塚	佐倉1509	貝塚	山林		○					
19	1630	天神山古墳	佐倉山中平1621	古墳	山林				○			
20	1631	小松川貝塚	佐倉小松川896	貝塚	山林		○					
21	1632	殿屋敷古墳	佐倉殿屋敷1509	古墳	山林，宅地				○			
22	1633	楯の台古墳群	佐倉楯の台2728外	古墳群	山林		○	○	○			一部発掘調査，一部湮滅
23	1634	佐倉原古墳群	佐倉浅間2648外	古墳群	畑				○			
24	1635	椎塚貝塚	椎塚中の峯120	貝塚	山林		○					
25	1636	大塚山古墳	駒塚大塚420	古墳	山林				○			
26	1637	隠里の塚古墳	椎塚台1747	古墳	山林				○			
27	1638	蓮沼貝塚	高田蓮沼	貝塚			○		○			不明
28	1639	中根貝塚	高田中根	貝塚			○		○			不明
29	1640	駒塚貝塚	駒塚	貝塚			○		○			不明
30	1641	蒲ヶ山貝塚	蒲ヶ山	貝塚	畑		○					
31	1642	沼田貝塚	沼田寺台2077-6	貝塚	畑		○					
32	1643	**二の宮貝塚**	佐倉二ノ宮2608-2外	集落，墓跡	畑				○	○	○	発掘調査(Ｓ.63)
33	1644	センゲン貝塚	佐倉浅間	貝塚	宅地		○					湮滅
34	1645	高田岡貝塚	高田岡大畑	貝塚	畑							発掘調査
35	1646	台畑貝塚	台畑	貝塚								不明
36	2823	駒塚台上遺跡	駒塚	包蔵地	畑		○					
37	5636	中峰古墳	村田中峰3901	古墳	畑		○		○			
38	5637	大日古墳	羽賀大日1411-2	古墳	山林				○			
39	5638	根古屋古墳	羽賀根古屋1102-2	古墳	山林				○			
40	5639	中城古墳	羽賀中城1568	古墳	山林				○			
41	5640	大日峯古墳	松山大日峯2772	古墳	山林				○			
42	5641	山王古墳	下君山山王3305-1	古墳	山林				○			
43	5642	大塚古墳	下君山大塚2409	古墳	山林				○			
44	5643	沼口古墳	上君山沼口3492	古墳	神社境内				○			
45	5644	栗山古墳群	小羽賀栗山581-4外	古墳	山林				○			
46	5645	土戸古墳	時崎土戸255-1	古墳	畑		○		○			
47	5646	東前古墳	時崎東前619	古墳	神社境内		○		○			
48	5647	辺田台古墳	蒲ヶ山辺田台257-2	古墳	山林				○			
49	5648	長塚古墳	佐倉長塚326	古墳	山林				○			
50	5649	姫宮古墳群	佐倉迎坪1801-2	古墳	山林				○			
51	5650	**大日山古墳群**	古渡大日山1908	集落跡，塚	山林		○	○	○		○	発掘調査(Ｓ.63)
52	5651	桑山古墳群	桑山上ノ台307外	古墳	山林				○			
(53)		**思川遺跡**	佐倉思川2662外	集落	山林		○	○	○	○		発掘調査(Ｓ.63)

第３章　調査方法

第１節　地区設定

一般県道新川江戸崎線道路改良工事地内に確認された二の宮貝塚・思川遺跡・大日山古墳群の3遺跡は，同一路線上に隣接して所在している。地区設定に当たっては，3遺跡を日本平面直角座標系・第Ⅸ座標の方眼の中に組み入れ，各々の遺跡毎に調査区を設定した。

二の宮貝塚の地区設定は，同座標系のＸ軸（南北）－2,720ｍ，Ｙ軸（東西）＋45,160ｍの交点（C3a1区）を通る軸線を基準として，東西・南北に各々40ｍずつ平行移動し，大調査区を設定した。思川遺跡は，その基準点から北へ80ｍ，東へ160ｍ移動した点，Ｘ軸－2,640ｍ，Ｙ軸＋45,320ｍの交点（B2a1区）を通る軸線を基準とし，同様に大調査区を設定した。さらに，大日山古墳群については，二の宮貝塚の基準点から北へ240ｍ，東へ560ｍ（思川遺跡の基準点からは北へ160ｍ，東へ400ｍ）移動した点，Ｘ軸－2,480ｍ，Ｙ軸＋45,720ｍの交点（B2a1区）を通る軸線を基準として，他の２遺跡と同様に大調査区を設定した。なお，調査区の名称については，まず大調査区を北から南へ「Ａ」・「Ｂ」・「Ｃ」‥‥，西から東へ「1」・「2」・「3」‥‥「14」と大文字を付し，「Ａ1」区・「Ｂ2」区のように呼称した。さらに，大調査区を4ｍ方眼の小調査区に100分割し，それぞれ同様に，北から南へ「a」・「b」・「c」‥‥「j」，西から東へ「1」・「2」・「3」‥‥「9」・「0」と小文字を付した。各小調査区の名称は，大調査区の名称と合わせた四文字で「A1a1」区・「B2b2」区のように呼称した（第３図）。



第３図　調査区呼称方法概念図

二の宮貝塚は，南北120ｍ，東西160ｍ，思川遺跡及び大日山古墳群は，それぞれ南北80ｍ，東西120ｍの範囲に位置する。3遺跡の位置関係については，第４図に示した通りである。

また，基準点の測量杭打ちは，茨城県建設技術公社に委託した。

Y= +45,080 +45,120 +45,160 +45,200 +45,240 +45,280 +45,320 +45,360 +45,400 +45,440 +45,480 +45,520 +45,560 +45,600 +45,640 +45,680 +45,720 +45,760 +45,800

X= −2400 −2440 −2480 −2520 −2560 −2600 −2640 −2680 −2720 −2760

1 2 3 4
A B C

1 2 3
A B

1 2 3
A B

二の宮貝塚(1) 思川遺跡(2) 大日山古墳群(3)

0 80m

(1)

(2)

(3)

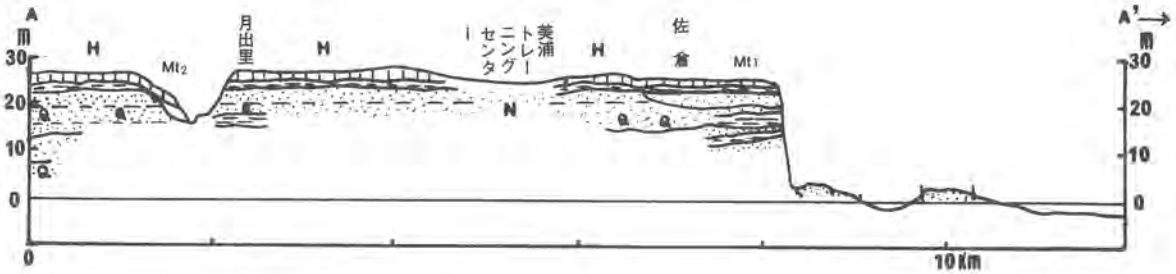
第4図 遺跡関連図

第２節　基本層序の検討

江戸崎町の地形は，小野川河谷と江戸崎入りを挟んで，その北東部と東部に広がる稲敷台地と，霞ケ浦沿いに広がる霞ケ浦湖岸低地及び小野川の谷底平野からなる。二の宮貝塚外2遺跡の所在する台地は，稲敷台地の東端部付近に当たり，標高31.7ｍを最高に，標高25～30ｍ程の台地が広がっている。江戸崎町の台地の地層を茨城県が作成した「土地分類基本調査(佐原)」(茨城県農地部農地計画課 1988)をもとにみていくことにする(第5・6図)。

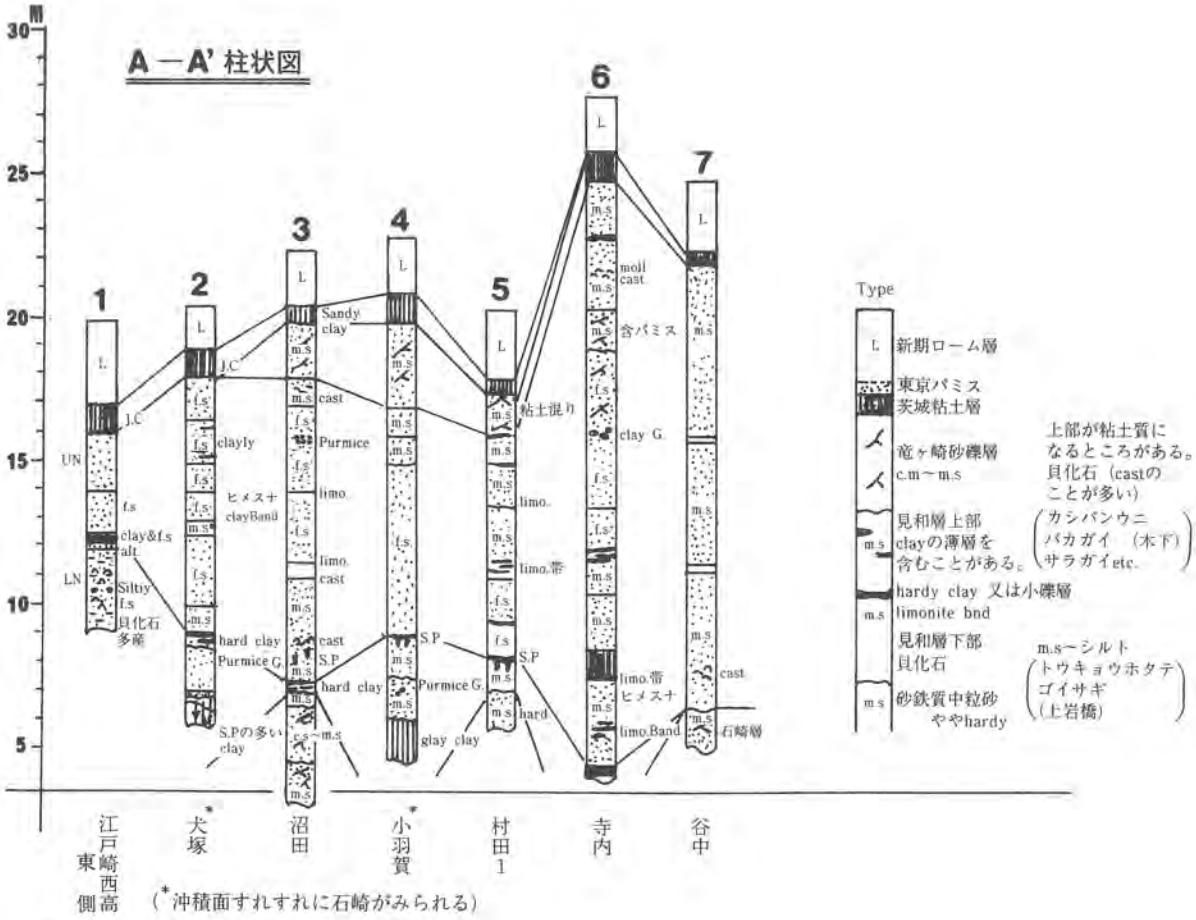
台地の地層は，海成Ｃ層・石崎層(海成Ｂ層)・見和層(成田層・海成Ａ層)・段丘砂礫層または竜ヶ崎層(竜ヶ崎砂礫層)・茨城粘土層(常総粘土層)，それに新期関東ローム層の順で堆積している。海成Ｃ層は，地表からの深度100～120ｍ程の深さにあり，砂・シルト・粘土を挟む層からなる。石崎層は，千葉県北部の薮層・地蔵堂層・金剛地層・成東層と呼ばれる地層を総称したもので，本県南部では，鉾田層・手野層・先成田層と呼ばれている。見和層は成田層とも呼ばれる砂層であり，その下部は上岩橋層・島津層，上部は木下層・半田層と呼ばれている。見和層は，下位から上位にかけて黄灰色砂層・黄褐色砂層・黄褐色ないし赤褐色の砂層・黄褐色砂層に細分される。黄灰色砂層は，上位台地構成層の基盤となる海成の中部洪積層で，ヒメナホリの生痕がみられる。下位の黄褐色砂層は層厚2～4ｍで，海進初期の海浜堆積物を主体とする。黄褐色ないし赤褐色の砂層は層厚3～4ｍで，海進最盛期の浅海堆積物である。下部に1～2ｍの貝化石の集積層を挟み，所によってはこの直上にシルトの薄層を挟むことがある。上位の黄褐色砂層は海退期の海浜堆積物を主体とし，海浜の環境に生息するヒメスナホリの生痕がみられる。段丘砂礫層は，埋没段丘と河岸段丘の堆積物からなる。竜ヶ崎層(竜ヶ崎砂礫層)は，竜ヶ崎から牛久沼方面にかけて分布する特徴的な礫質砂層であり，近辺では，桜川村古渡や新利根村柴崎付近でみられる。茨城粘土層(常総粘土層)は，新期関東ロームの直下に分布する層厚2ｍ以下の灰色粘土層であり，灰色火山灰質シルトまたは粘土層からなる。下末吉ロームに対比される。新期関東ローム層は，南関東の武蔵野ローム・立川ロームに対比され，層厚1～3ｍを測る。このローム層の最下部近くには，最大20cmの厚さの黄色軽石が断続的に観察される部分がある。この軽石層は，箱根火山の新期外輪山活動によって噴出した東京軽石(TP)と呼ばれる降下軽石層に対比され，その降下年代は5万年前頃(49,900±5,000FT年)とされている。新期関東ローム層の上面は，黒褐色または暗褐色の腐植土層によって覆われている。

二の宮貝塚外2遺跡では，基本層序を確認するため，深さ2～2.5ｍ前後のテストピットを設け，土層の堆積状況を観察した。各遺跡の基本層序は，茨城粘土層，新期関東ローム層(層厚1ｍ前後，褐色でソフトローム・ハードロームに分かれる)，表土層(層厚30～50cm，暗褐色または黒褐色で，ローム粒子・炭化粒子・焼土粒子を少量含み，締まりが弱い)の順で堆積しており，思川遺跡では，



	関東ローム	H	上位台地
	シルト・粘土	Mt1	中位段丘1
	砂	Mt2	中位段丘2
Q	貝化石・サンドパイプ	N	成田層

第5図　地質断面図



第6図　地質柱状図

標高26.9m前後(表土下1.6m)のローム層最下部付近に，層厚20cmほどの東京軽石(TP)層を検出した。各遺跡の斜面部においては，ローム層の上位(ソフトローム層)が流出し，失われている部分もみられた。

遺構の多くは，新期関東ローム層を掘り込んで構築されていたが，茨城粘土層に達するものや，二の宮貝塚第1号地下式壙のように，見和層上位の砂層に達する例も見られた。

第3節　遺構確認

伐開後の踏査により，二の宮貝塚においては，調査区のほぼ中央部に存在する土塁状の遺構がさらに調査区の北西側に続いていることや，南西側の台地上に人為的な成形跡が認められることが明らかとなった。また，思川遺跡においては，調査区内の一部に馬の背状に連なる起伏が認められ，中央部が南東方に傾斜するなど地形が変化に富むことが観察された。大日山古墳群においては，周知の古墳(後に塚と判明)1基のほかにも，古墳とみられるマウンドが2か所に存在することが明らかとなった。この結果に基づき，3遺跡について事前に地形測量を実施した。その後，路線のセンター杭を利用し，グリッド及びトレンチを併用して，約10分の1ないし16分の1に当たる試掘を実施した。試掘の段階で，いずれの遺跡からも濃密に遺構の存在が確認されたため，遺構確認面までの深さを検討した後，調査区全域について重機による表土除去を実施した。

第4節　遺構調査

当遺跡における遺構の調査は，次のように実施した。

土坑の調査は，長径方向で二分して掘り込む「二分割法」で実施した。大形のものについては，長径方向とそれに直角に交わる方向に土層観察用ベルトを設定し，四分割して掘り込む「四分割法」で実施し，地区の名称は，北から時計回りに1～4区とした。重複している場合には，新旧関係が把握できるような位置にベルトを設定した。溝の調査は，適宜な位置に土層観察用ベルトを設定し，掘り込みを実施した。

土層観察は，色相・含有物・混入物の種類や量・粘性・吸水性・締まり具合を観察し，分析の基準とした。色相の判定は『新版標準土色帳』(小山正忠・竹原秀雄　日本色研事業株式会社)を使用した。

遺構や遺物の平面実測は，水糸方眼地張り測量で実施した。また，土層断面や遺構断面の実測は，遺跡内の水準点を基準とし，標高を測って水平にセットした水糸を基準にして実測した。遺物は，出土位置・標高・遺物番号等を遺物出土状況図に記載しながら取り上げた。縮尺は20分の

1を基本とした。

調査の記録は，土層断面写真撮影→土層断面図作成→遺物出土状況写真撮影→遺物出土状況図作成→遺物平面(完掘)写真撮影→遺構断面図作成→遺構平面図作成の順で行った。

第４章　遺構・遺物の記載方法

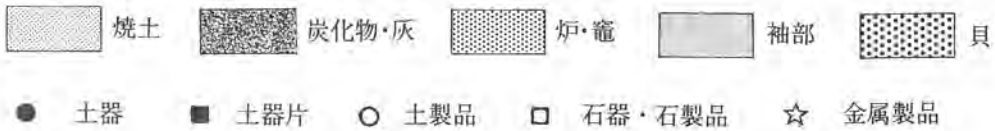
第１節　遺構の記載方法

本書における遺構の記載方法は，以下の通りである。

1　使用記号

名称	住居跡	掘立柱建物跡	土坑・墓壙	溝	井戸	貝塚	塚	土塁状遺構
略号	ＳＩ	ＳＢ	ＳＫ	ＳＤ	ＳＥ	ＳＭ	ＴＭ	ＳＡ

2　遺構及び遺物の表示方法



3　遺構番号

遺構番号については，遺構の種別ごとに調査順に付したが，調査や整理の過程で遺構でないと判断したものについては，欠番とした。また，整理の過程で新たに番号を付したものについては，旧番号を（　）内に表示した。

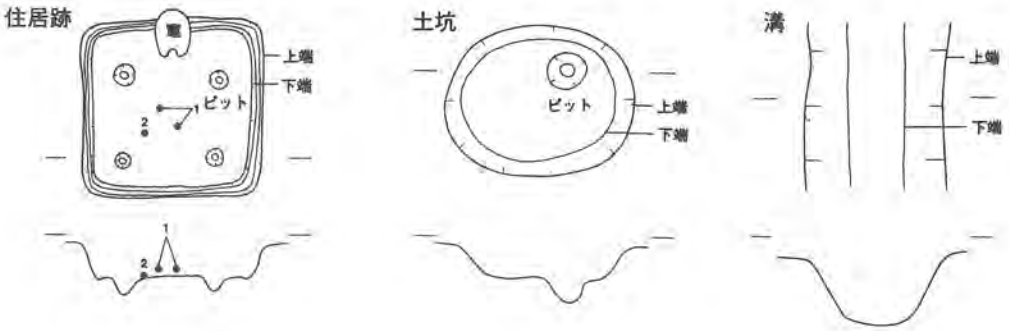
4　土層の分類

土層観察における色相・含有物の量の判定については，「新版標準土色帖」を使用し，図版中に記載した。

5　遺構実測図の掲載方法

(1)実測図中のレベルは標高であり，ｍ単位で表示した。また，同一図中において標高が同じ場合は１か所にのみ標高を表示し，異なる場合は各々表示した。

(2)実測図中の破線は，推定を表す。



6　本文中の記載

(1)**位置**は，遺構が占める面積の割合が最も大きい小グリッド名をもって表示した。

(2)**重複関係**は，他の遺構との切り合いの状況や，新旧関係を記述した。

(3)**主軸方向**は，炉または竈をとおる線を主軸とし，その主軸が座標北からみて，どの方向にどれだけ傾いているかを，角度で表示した(例；N-28°-W＝主軸が座標北からみて西側に28°傾く)。

(4)**規模と平面形**

規模は，壁の上端の計測値であり，長軸×短軸の順にｍ単位で表記した。壁高は，残存壁高の計測値である。

平面形は，方形・長方形について下記の分類基準を設け判断した。

方形（短軸：長軸＝1：1.1未満のもの）長方形（短軸：長軸＝1：1.1以上のもの）

※円形や楕円形など，円を基調とするものについては，短軸→短径，長軸→長径と表記した。

(5)**炉・竈**は，その種類と位置・規模・特徴を表記した。

(6)**床**は，傾斜(「平坦」・「緩い傾斜」)や床質等を表記した。

(7)**壁**は，床面(底面)から立ち上がる角度によって，下記の基準を設け表記した。

垂直＝80°以上90°　外傾＝65°以上80°未満　緩斜＝65°未満　内傾＝90°を越すもの

(8)**壁溝**は，その形状や規模を表記した。規模は床面からの計測値とした。

(9)**貯蔵穴**は，位置や形状，規模を表記した。

(10)**覆土**は，堆積状況(「自然堆積」・「人為堆積」・「撹乱」)や特徴等を表記した。

(11)**遺物**は，主な遺物の種類や出土位置，出土地点等を記述した。

(12)**所見**は，特記すべき事項について記述した。

7　一覧表

(1)一覧表の作成に当たっては，６の「本文中の記載」方法に準じた。なお，土坑の平面形の表記については以下の分類基準を設け，判断した。

方形（長軸：短軸＝1：1.2未満のもの）長方形（長軸：短軸＝1：1.2以上のもの）

※円形や楕円形など，円を基調とするものについては，短軸→短径，長軸→長径と表記した。

(2)深さについては，確認面から坑底の最も深い部分までの計測値を表記した。

第2節　遺物の記載方法

本書における遺物の記載方法は，以下の通りである。

1　遺物の実測図中の表示方法

(1)土器

須恵器断面　黒色処理・施釉部分　施釉部分　繊維土器

(2)石器

敲きの範囲は，|←□　□→|及び－－－で表した。

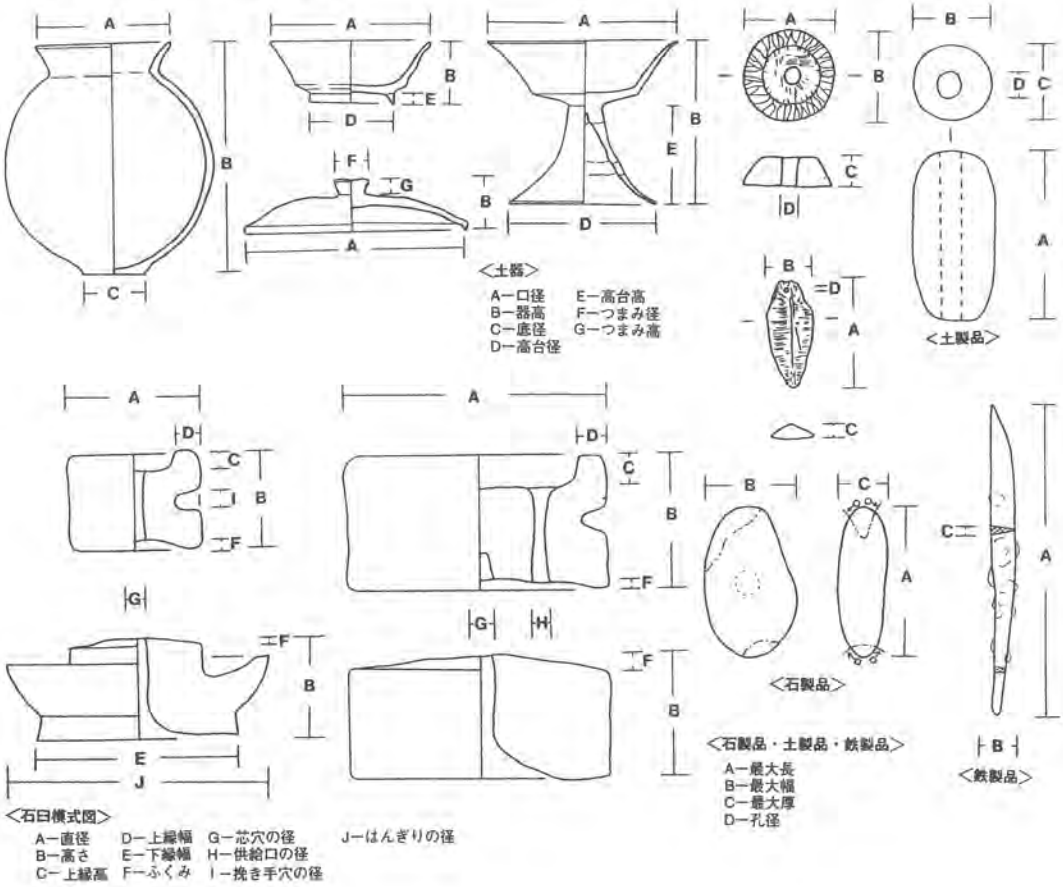
磨りの範囲は，|←○　○→|及び－－－－で表した。

凹みの範囲は，破線で……のように表した。

(3)土器の実測は，四分割法を用い，中心線の左側に外面，右側に内面及び断面を表した。

(4)土器の拓影図は，右側に断面を表し，表裏2面を掲載したものは，断面を挟んで左側に外面，右側に内面を掲載した。

2　各部位の名称と法量表現



3　出土遺物観察表

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考

(1)遺物番号は，実測図中の番号である。

(2)法量は，A…口径，B…器高，C…底径，D…高台径，E…高台高，F…つまみ径，G…つまみ高とし，(　)は現存高，[　]は復元推定値を表す。

(3)色調は，前記の「新版標準土色帖」を使用し表記した。

(4)備考の欄に表記したP・DP…は，記録した遺物の固有番号であり，整理の過程で付したものである。

名称	土器	拓本土器	土製品	石器・石製品	金属製品
記号	P	TP	DP	Q	M

第5章　二の宮貝塚

第1節　遺跡の概要

二の宮貝塚は，江戸崎町の市街地の北東2.3km程に位置する標高28m程の南東側に張り出す舌状台地(小字名「二ノ宮脇」・「原佐倉」)の平担面に位置している。遺跡の所在する台地の南東側には，「楯の台」と呼ばれる台地との間に幅100m前後の谷が北東方向から侵入し，南西側及び北東側は，その谷から派生する小支谷によって開析されている。このため，北西側を除く台地の縁辺部は急崖をなしている。台地と南東側の谷(低地)との比高は約18mである。当遺跡の南東側には谷を挟んで楯の台古墳群(一部は調査後の土取りにより湮滅)が所在し，さらにその南側には，県道新川江戸崎線を挟んで江戸崎入干拓が広がっている。本調査区の現況は畑及び竹林であり，調査は東西に細長く延びる南北21～29m，東西115mの道路幅について実施した。調査対象面積は2,846m²である。

二の宮貝塚は，県の遺跡台帳(県番号1,643；市町村番号32)に「貝塚」として登録されている周知の遺跡であるが，調査の結果，貝塚は中世末から近世にかけて形成された小規模な地点貝塚が数箇所に認められたに過ぎない。当遺跡は，貝塚と言うよりも古墳時代後期及び平安時代後期の集落跡，あるいは中・近世の墓域としての性格が強い。また，調査による遺構の検出状況から，集落や墓域はさらに調査区外(南北)に広がりを見せていることも明らかとなった。当遺跡から検出された主な遺構・遺物は下記の通りである。

〔**遺　構**〕竪穴住居跡　9軒（古墳時代後期5軒，平安時代後期3軒，時期不明1軒）
掘立柱建物跡　4棟（平安時代3棟，中・近世1棟）
土　　坑　105基〔古墳時代後期8基，古墳時代後期～平安時代3基，平安時代11基，中・近世59基(内，中・近世の墓壙及び墓壙と思われる土坑45基)，時期不明24基〕※ただし，時期については推定を含む。
地下式壙　2基（中世）
溝　11条（中・近世）
井　　戸　6基（中・近世）
地点貝塚　3地点（近世）
土塁状遺構　1か所（近世）

〔**遺　物**〕土　　器　縄文式土器，弥生式土器，土師器(甕・甑・埦・坏・高台付坏・高台付埦・高坏等)，須恵器(坏・蓋等)，内耳土器，土師質土器(皿)，陶磁器(埦・擂鉢・瓶子・花瓶・香炉等)，手捏土器

石　　器　打製石斧

石　製　品　磨石・凹石・管玉・石臼・砥石・宝篋印塔・五輪塔

土　製　品　球状土錘・管状土錘・紡錘車

金属製品　煙管・刀子・鎌

古　　銭　寛永通寶

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

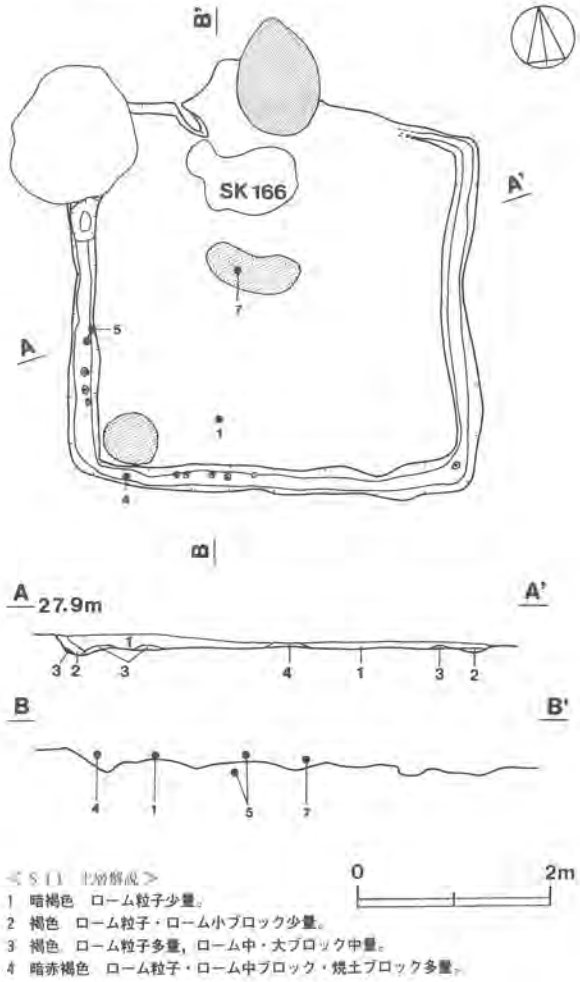
当遺跡からは，支谷を挟んで思川遺跡と対峙するB3区を中心とした東側の台地上から，古墳時代後期及び平安時代に比定される竪穴住居跡8軒，時期不明の竪穴住居跡1軒が検出されている。検出されたこれらの竪穴住居跡の内4軒は，北側及び南側の調査区外に住居跡の一部が存在しており，他の遺構の検出状況等から見ても，集落はさらに調査区の外側(東西)に広がりを持つことは明らかである。ここでは，調査区内に存在する9軒の竪穴住居跡について記載する。なお，確認調査の過程で付した住居番号は10号までであるが，第9号が調査の結果欠番となったため，整理の過程で第10号住居跡を第9号住居跡と変更し，(　)内に旧番号を記載した。

第1号住居跡（第7図）

位置　調査区の中央部B3f6区に位置する。

重複関係　北壁中央部の竈付近及び北西コーナーを第3号掘立柱建物跡，北壁際の床面を第166号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形　一辺4.14mのやや形の崩れた方形を呈する。



第7図　第1号住居跡実測図

主軸方向　N-7°-E。

壁　僅かに残存しているにすぎず，壁高10cmを測り，緩い傾斜で立ち上がる。撹乱が激しく，遺存状態が悪い。

壁溝　上幅10～20cm，深さ5～10cmを測る。北壁中央部付近が浅く不明瞭であるが，壁下を全周していたものと思われる。また，壁溝の底面からは10数か所に小ピットが検出されている。

床　北壁中央部付近に僅かに硬化面が見られる程度であり，全体に軟弱で凹凸が激しい。中央部及び南西コーナー部付近の床面には，薄く焼土が堆積する。

竈　北壁中央部付近に竈の火床の痕跡が認められ，袖の一部が僅かに残存するが，既にその大半は遺存していない。

ピット　ピット，主柱穴とも検出されていない。

覆土　自然堆積と考えられる。

遺物　高脚高台坏の底部片(7)が中央部付近の覆土下層から伏せた状態で，土師質土器の皿(1・4)が南壁際の床面及び南壁下からやはり伏せた状態で出土している。覆土からは管状土錘(8)や土師器片，須恵器片等も出土している。

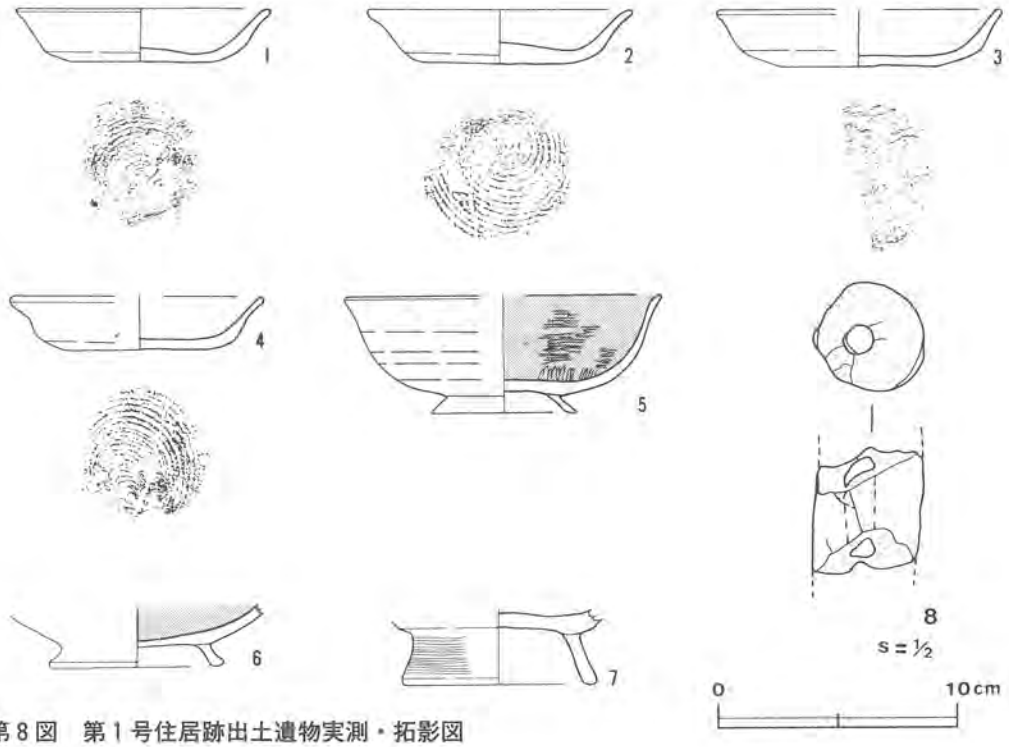
所見　本跡の西側から南側にかけて浅い住居跡状の落ち込み(段差)が認められることから，重複する住居跡の存在も推定されるが不明瞭である。出土遺物の時期等から，平安時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第８図）

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
1	皿 土師質土器	A 10.50 B 2.30 C 6.00	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で暖く外反する。水挽き整形。底部回転糸切り。体部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 浅黄橙色 普通	P2 80% 南側床面直上
2	皿 土師質土器	A 11.20 B 2.30 C 5.90	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で暖く外反する。底部に厚みを持つ。水挽き整形。底部回転糸切り。体部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 浅黄色 普通	P3 50% 覆土
3	皿 土師質土器	A [12.00] B 2.40 C 6.60	やや上げ底気味の平底で，体部は直線的に外傾し，口縁部は緩く外反しながら斜上方に立ち上がる。体部と口縁部との境に弱い稜を持つ。水挽き整形。底部回転糸切り。体部外面ヘラナデ。口縁部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 明赤褐色 普通	P4 35% 覆土
4	皿 土師質土器	A [10.60] B 2.30 C 6.00	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で外反する。水挽き整形。底部回転糸切り。体部内外面横ナデ調整。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P1 70% 南壁下覆土中層
5	高台付坏 土師器	A [13.50] B 5.00 D 6.20 E 0.70	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部で緩く外反し，端部を丸くおさめている。水挽き整形。貼り付け高台。内面はヘラ磨き後黒色処理。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P5 30% 西壁下覆土下層及び床面
6	高台付坏 土師器	B (2.60) D 7.30 E 0.90	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台が付く。底部内面中央が僅かに窪む。水挽き整形。貼り付け高台。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。内面はヘラ磨き後黒色処理。	砂粒・雲母 黒褐色 良好	P7 20%（底部片） 覆土

7	高脚高台坏 土　師　器	B（3.10） D　8.00 E　2.00	平底で，「ハ」の字状に開く高い高台が付く。水挽き整形。貼り付け高台。底部は回転ヘラ切り後ナデ調整。高台の内外面横ナデ調整。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P6 15%（底部片） 中央部覆土下層

遺物番号	器　種	法　量(cm)			孔　径	重　量	現存率	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
8	管状土錘	(3.5)	3.1	3.1	9.0	(24.0)	40	覆　土	DP1 両端欠損



第8図　第1号住居跡出土遺物実測・拓影図

第2号住居跡（第9図）

位置　調査区の北西側B3d7区に位置する。

重複関係　南西壁を第3号掘立柱建物跡，北東・南東両壁及び南東側の床面を第8号溝，南東コーナー部を第9号溝，床中央部付近を第120号土坑によってそれぞれ掘り込まれている。

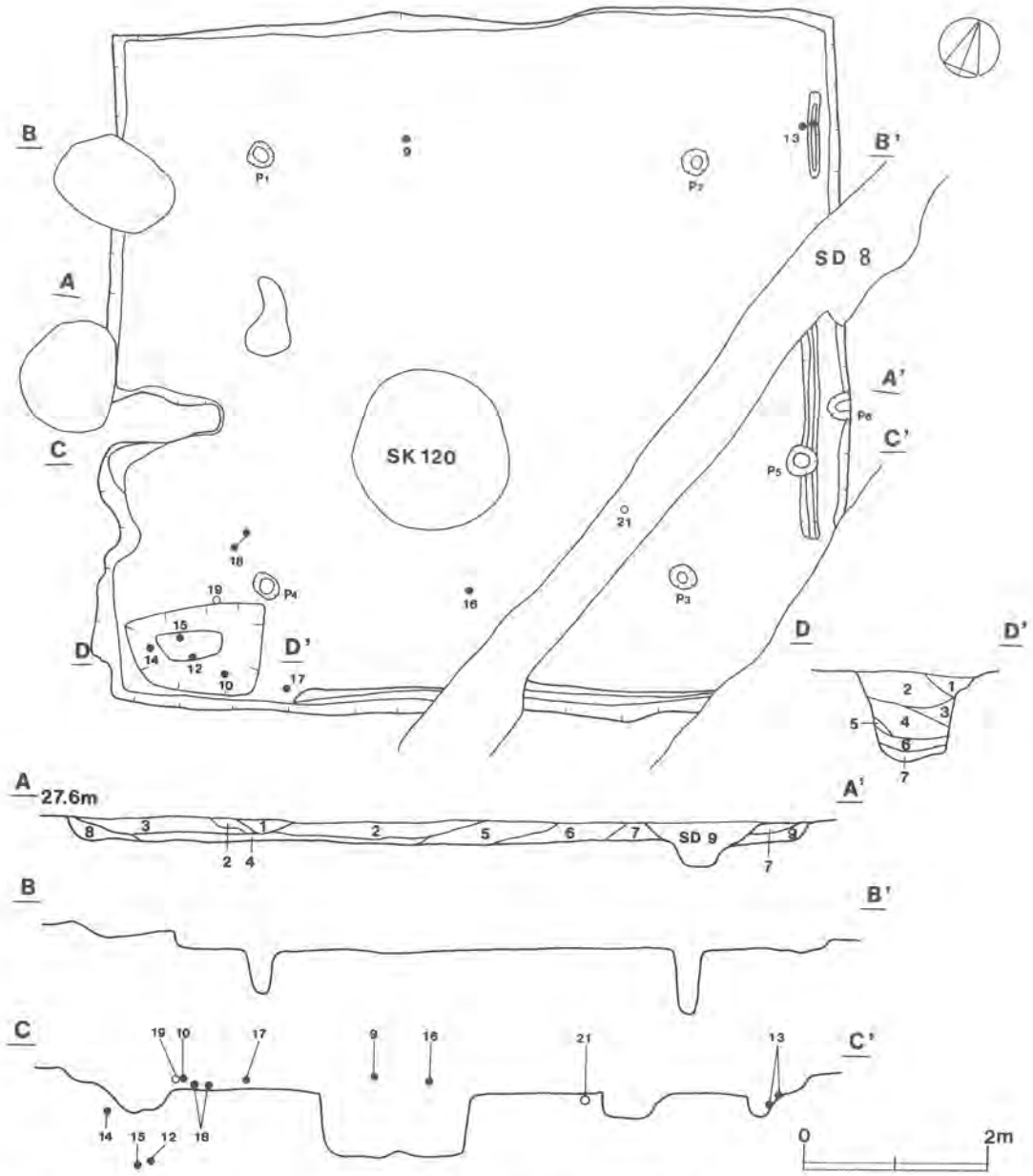
規模と平面形　8.06×7.64ｍの，主軸方向がやや長い方形状を呈する。

主軸方向　N-114°-W(南西方向)。

壁　緩斜または外傾して立ち上がり，壁高20～32cmを測る。

壁溝　南東及び北東壁下に部分的に検出されているが，全体に浅く不明瞭である。上幅10～20cm，深さ5～10cmを測り，皿状に掘り込まれている。

床　ほぼ平坦で全体に締まりを帯びており，特に出入口部と想定される北東側，中央部，竈周辺が堅緻である。



＜S12　主層解説＞

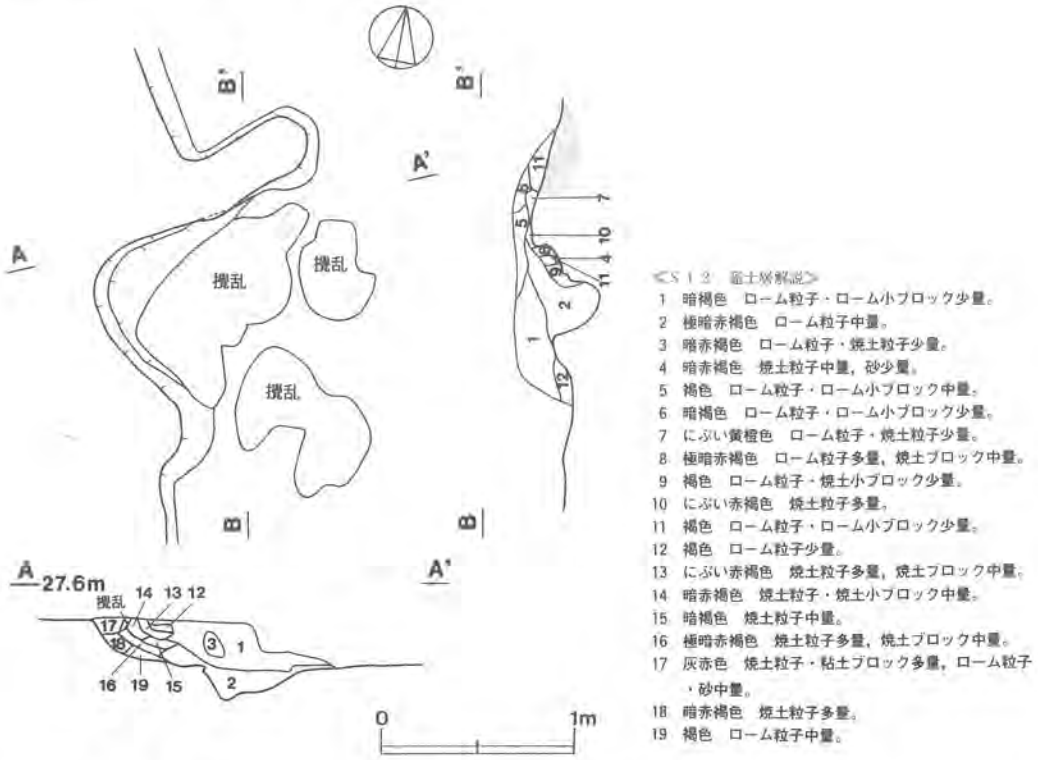
1　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量。
2　褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，ローム小ブロック中量。
3　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量。
4　褐色　ローム粒子中量。
5　褐色　ローム粒子多量。
6　褐色　ローム大ブロック多量，ローム粒子・ローム小ブロック中量。
7　褐色　ローム小ブロック中量。
8　褐色　ローム粒子中量。
9　褐色　ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量。

＜S12　貯蔵穴土層解説＞

1　暗褐色　ローム粒子中量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
3　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量。
4　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子・ローム中・大ブロック中量。
6　極暗褐色　ローム粒子中量。
7　褐色　ローム粒子多量。

第9図　第2号住居跡実測図

竈　南西壁の西コーナー寄りに付設されており，南西壁を外側に12cm程掘り込み砂・粘土・ロームで構築されている。竈の左(北西側)袖部は良好に遺存するが，中央部及び右(南東側)袖部は後世の撹乱により破壊されている。僅かに遺存する火床部はレンガ状に赤変硬化しており，その上面には灰や焼土粒子・炭化粒子が堆積している。



第10図　第２号住居跡竈実測図

ピット　床面に4か所，北東壁際に2か所の計6か所に検出されている。P_1～P_4が主柱穴であり，4.6～4.8ｍのほぼ等間隔に規則的に配置されている。P_1～P_4は径30cm程の円形状に55～76cm掘り込まれている。P_5・P_6は出入口の施設に伴うものとも考えられるが，その性格については不明である。

貯蔵穴　竈に近接する西コーナー部に設けられており，1.40×0.96ｍの長方形状を呈し，1.06ｍ程の深さに掘り込まれている。断面形は逆台形状を呈する。

覆土　自然堆積。

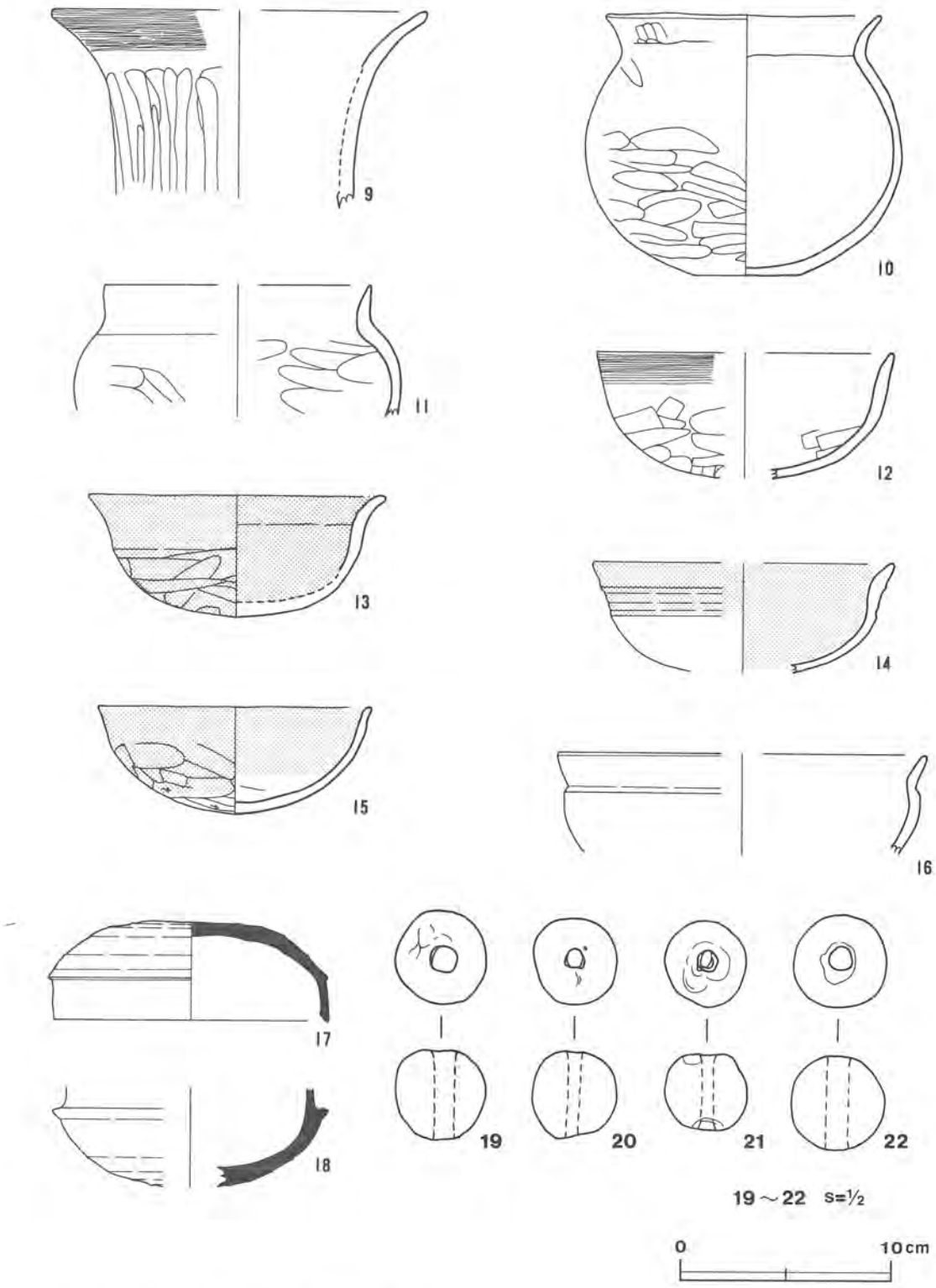
遺物　竈付近及び北西壁際から土師器片・須恵器片が出土している。10の土師器の小形甕，12・14・15の土師器の坏は貯蔵穴，18の須恵器の坏は南東側の竈袖部上面，13の土師器の坏は北壁下の床面から出土したものである。

所見　本跡は出土遺物や住居跡の規模，形態等から古墳時代後期前半の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第11図）

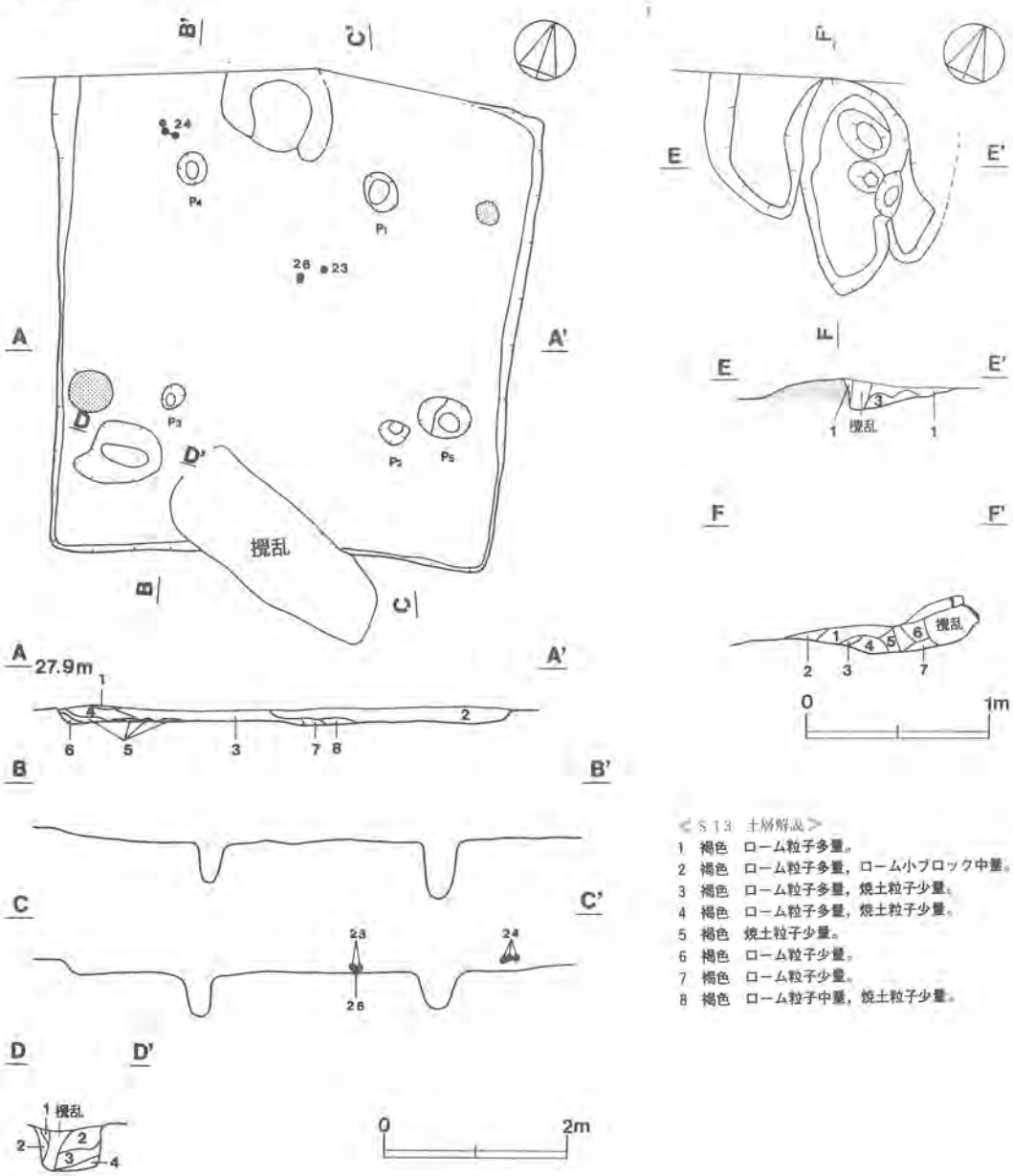
遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
9	壺 土師器	A [17.80] B (9.40)	頸部は僅かに外傾しながら立ち上がり，口辺部で外反する。口縁部内外面横ナデ。頸部外面ヘラナデ調整。内面は剥離が著しい。	砂粒・スコリア 黄橙色 普通	P8 15% 北西側床面
10	小形甕 土師器	A 13.10 B 12.40 C 5.00	平底で，胴部は球形を呈し内彎しながら立ち上がり，頸部から口辺部にかけて外反する。底部外面ヘラ削り後ヘラナデ。胴部から口縁部にかけての内外面ヘラナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P9 70% 貯蔵穴覆土上層
11	椀 土師器	A [12.80] B (6.20)	体部は内彎しながら立ち上がり，口辺部はほぼ直立する。体部内外面ナデ。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P17 15% 覆土
12	坏 土師器	A [14.00] B (6.00)	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部で僅かに外反する。底部から体部にかけての外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P14 30% 貯蔵穴覆土下層
13	坏 土師器	A 14.00 B 5.80	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部で緩く外反する。体部と口辺部との境に弱い稜を持つ。底部から体部にかけての外面ヘラ削り後ヘラナデ。口辺部外面横ナデ。内面ナデ調整。全面に赤彩を施すが，内面は一部剥離している。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通	P12 90% 北壁下床面
14	坏 土師器	A [14.40] B (5.20)	扁平な丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部で緩く外反する。体部から口辺部にかけて器厚を増す。底部から体部にかけての外面ヘラナデ。口辺部外面に強い横ナデ調整痕。内面ナデ調整。全面に赤彩を施す。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通	P15 20% 貯蔵穴覆土中層
15	坏 土師器	A 13.00 B 5.10	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部で僅かに外反する。底部外面ヘラ削り。体部外面ヘラナデ。口辺部外面横ナデ。内面ナデ調整。底部の内外面を除き，赤彩が施されている。	砂粒・石英 赤色 普通	P13 70% 貯蔵穴覆土下層
16	坏 土師器	A [17.70] B (4.80)	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は直線的に外傾する。体部と口辺部との境に明瞭な稜を持つ。体部外面ヘラナデ。内面ナデ調整。口辺部内外面横ナデ調整。器表面は摩滅している。	砂粒 橙色 普通	P16 15% 南東側覆土下層
17	蓋 須恵器	A 13.10 B 4.70	口縁部は明瞭な稜を有し，直線的に下る。口縁端部は内傾し段を有する。天井部は丸味を持つ。水挽き整形。天井部外面回転ヘラ削り。口縁部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P24 60% 南東壁際覆土下層
18	坏 須恵器	B (4.70)	底部の立ち上がりは比較的低く，内彎しながら外上方に立ち上がり，その端部は内傾し明瞭な段を有する。立ち上がりは比較的低く，やや内傾気味に立ち上がる。水挽き整形。底部外面回転ヘラ削り。	砂粒・石英・長石 灰色 良好	P25 40% 竈南東側袖部上面

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
19	球状土錘	2.8	2.9	2.9	8.0	21.8	100	覆土	DP5 両方向から穿孔
20	〃	2.7	2.7	2.7	5.0	17.5	100	〃	DP2 一方向から穿孔
21	〃	2.4	2.7	2.6	6.0	16.5	100	床面	DP3 両方向から穿孔，上下ヘラ調整
22	〃	2.9	3.0	2.9	7.0	24.5	100	覆土	DP4 〃



第11図　第２号住居跡出土遺物実測図

第３号住居跡（第12図）



＜ＳＩ３　土層解説＞
1　褐色　ローム粒子多量。
2　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
3　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量。
4　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量。
5　褐色　焼土粒子少量。
6　褐色　ローム粒子少量。
7　褐色　ローム粒子少量。
8　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。

＜ＳＩ３　貯蔵穴土層解説＞
1　褐色　ローム粒子少量。
2　褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
3　褐色　ローム粒子中量，ロームブロック・焼土粒子少量。
4　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。

＜ＳＩ３　竈土層解説＞
1　褐色　焼土粒子多量，ローム粒子中量。
2　暗赤褐色　焼土粒子多量。
3　暗赤褐色　焼土粒子多量。
4　褐色　ローム粒子少量。
5　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
6　褐色　ローム中ブロック中量。
7　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化物少量。

第12図　第３号住居跡実側図

位置　調査区の北東側B3b7区に位置し，北西壁及び竈の一部が調査区外に存在する。

重複関係　南東壁中央部及び南東壁下の床面が芋穴によって掘り込まれている。

規模と平面形　北東壁が調査区外に存在するため不明瞭であるが，一辺5.10m程の方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N-17°-W。

壁　壁高15cm前後を測り，南西及び南東壁は緩斜，北東壁は外傾して立ち上がる。壁は，上位が耕作等によって削平されており，遺存状態が悪い。

床　平坦で，中央部及び竈前面が特に良く踏み固められている。北東及び南西壁際の床面からは焼土，中央部付近の床面からは少量の炭化物が検出されている。

竈　北西壁中央部を外側に僅かに掘り込み，ロームと砂で構築されている。天井部は既に崩落し両袖部のみが残存する。火床は楕円形状に最大16cm程の深さに掘り込まれており，熱を受けレンガ状に赤変硬化している。

ピット　5か所。P_1～P_4(24～36×30～46×42～56cm)が主柱穴であり，P_1とP_4(柱間2.1m)・P_4とP_3(柱間2.5m)の主柱を結ぶ線は直交するが，P_2がやや外側に配置されているため，全体としては台形状の配置となっている。

貯蔵穴　南西コーナー部に設けられており，0.76×0.66cmの長方形状を呈し，逆台形状に58cm程掘り込まれている。底面は平坦であり，貯蔵穴の南西壁の上位は一部崩落し，形が崩れている。覆土は自然堆積であるが，一部撹乱を受けている。

覆土　自然堆積。

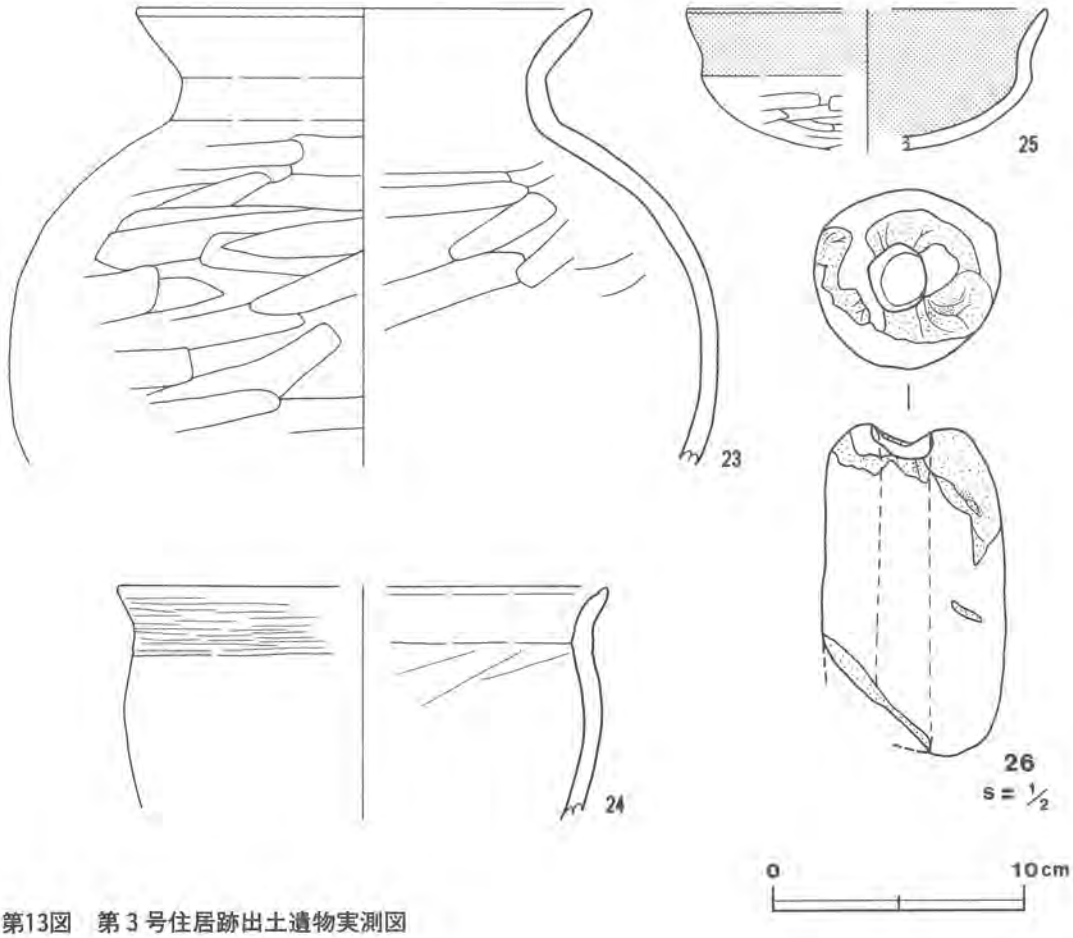
遺物　23の土師器の甕は中央部の床面，24の土師器の甑は竈西側覆土中層，25の土師器の坏(赤彩)は覆土から出土したものである。この他に，球状土錘や須恵器(坏・甕・かえりをもつ蓋坏)，土師器(坏)の破片等が出土しているが，いずれも小片のため実測不可能であった。

所見　古墳時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第13図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
23	甕 土師器	A 18.30 B (18.30)	胴部は上位に最大径を有し，内彎しながら立ち上がる。頸部は内傾し，口縁部は直線的に外傾する。胴部外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英 橙色 普通	P 26 30% 中央部床面
24	甑 土師器	A [19.40] B (9.20)	胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，頸部から口辺部にかけて外反する。胴部外面ヘラナデ。胴部内面ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P 27 10% 竈西側覆土中層
25	坏 土師器	A [14.40] B (5.70)	丸底で，体部は緩く内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は僅かに外反する。底部から体部にかけての外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。内面ヘラ磨き。全面に赤彩が施されているが，外面は摩滅している。	砂粒・石英・雲母 (雲母を多量に含む。) 赤色 普通	P 28 20% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
26	管状土錘	8.8	4.9	4.7	16.0	(169.9)	80	床面	DP6 両端欠損



第13図　第3号住居跡出土遺物実測図

第4号住居跡（第14図）

位置　調査区の北西側A3j₀区に位置する。

重複関係　中央部を北東から南西方向にかけて第9号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形　本跡は北西側の三分の一程が調査区外となっているため，全体的な規模・平面形については不明瞭であるが，竈の位置や主柱穴の配置等から，5.8×(5.4)mの主軸方向がやや長い方形状を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N-66°-E。

壁　北西壁は不明であるが，残存壁は壁高25～30cmを測り，外傾または垂直に立ち上がる。

床　平坦で，全体に良く踏み固められており堅緻である。

竈　北東壁のやや南東コーナー寄りに付設されており，比較的良好な状態(天井部の一部，両袖部，

煙道部が遺存)で検出されている。北東壁を外側に10cm程掘り込み，粘土・砂・ロームで構築されている。燃焼部の底面はロームを5cm程皿状に掘り込み，壁に向かって緩やかな傾斜で立ち上がる。煙道は緩い傾斜で屋外に延びている。火床はレンガ状に赤変硬化しており，その上には多量の焼土や灰が堆積している。規模は1.40×0.95mを測る。

ピット　2か所に検出されており，いずれも主柱穴である。残る主柱穴は調査区外に存在するものと思われ，検出された主柱穴の配置からすれば本来は4本主柱を有する住居跡と考えられる。P_1は34×28×64cm，P_2は46×39×64cmを測る。

貯蔵穴　南東コーナー部(竈の右側)に設けられており，1.05×0.90mの隅丸長方形を呈し，逆台形状に床を0.7m程掘り込んで構築されている。底面は平坦で硬く締まっており，覆土は自然堆積である。

覆土　自然堆積。一部第9号溝によって掘り込まれている。

遺物　完形及び完形に近い遺物(土師器の甕・甑・坏等)が，竈及び貯蔵穴付近から多数出土している。竈の南東側の床面からは29・30の甕が直立の状態で，覆土下層及び貯蔵穴からは27・35の甕(35は円窓土器)が横位の状態で出土している。また，43の把手付の甑は竈の上面から，34の甕は貯蔵穴内，44の甑は貯蔵穴付近の床面から横位の状態で出土している。28の甕・42の甑は，南西壁際の覆土下層から上層にかけて，投棄された状態で出土したものである。

所見　出土遺物から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

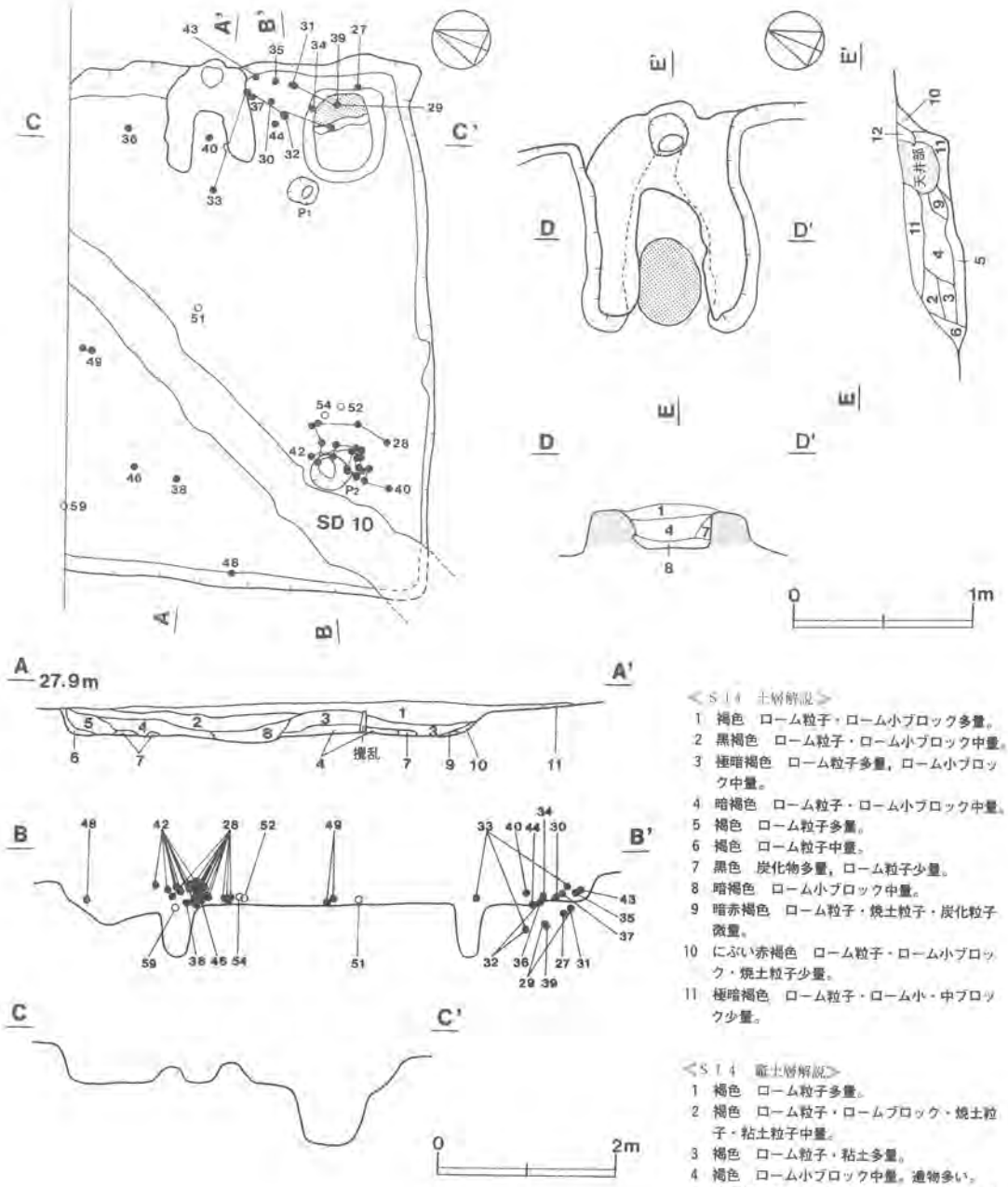
出土遺物観察表（第15～20図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
27	甕 土師器	A 19.10 B 29.80 C 6.30	平底で，胴部は球形を呈し内彎しながら立ち上がる。頸部は直立し，口辺部は大きく外反する。胴下半部外面ヘラ磨き，胴中央から上半部にかけての外面ヘラナデ。口辺部内外面ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 灰褐色 普通	P30 95% 貯蔵穴覆土上層
28	甕 土師器	A 19.80 B 25.80 C 7.00	平底で，胴部は球形を呈し内彎しながら立ち上がり，口辺部で外反する。胴部外面ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ調整。頸部に接合痕が見られる。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P36 65% 南西側覆土下層～中層
29	甕 土師器	A 20.50 B (30.00)	胴部は球形を呈し，胴中位よりもやや下に最大径を有する。口辺部は「く」の字状に外反する。内外面ヘラナデ調整。胴部外面に煤付着。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P32 70% 北東壁際床面及び貯蔵穴覆土上層
30	甕 土師器	A 18.40 B (24.00)	胴部は球形を呈し，内彎しながら立ち上がる。頸部から口辺部にかけて大きく外反し，口縁部で直立する。胴部外面ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ調整。頸部に輪積み成形痕が残る。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P31 80% 北東壁際床面
31	甕 土師器	A 20.00 B (18.80)	胴上半部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口辺部にかけて外反する。頸部内面に輪積み成形痕が残る。二次焼成を受け，内外面とも剥離が著しい。胴部外面はヘラナデ調整と思われる。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P34 40% 北東壁際床面

32	甕 土師器	A 21.20 B (19.00)	胴部はやや扁平な球形を呈し，口辺部は大きく外反する。胴部外面ヘラナデ。口辺部内外面ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 33 55% 北東壁際床面及び貯蔵穴覆土中層
33	甕 土師器	A [19.80] B (12.20)	胴部は内彎しながら立ち上がり，口辺部は上位で強く外反する。胴部内外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P 37 20% 北東側覆土下層，貯蔵穴覆土中層
34	甕 土師器	A 17.80 B (15.80)	胴部は内彎しながら立ち上がり，上半部は頸部に向かって強くすぼまる。口辺部は大きく外反する。胴部内外面に丁寧なヘラナデ調整が施され，ハケ目状の擦痕が見られる。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 35 40% 貯蔵穴覆土中層
35	甕 土師器	A 14.20 B 17.00 C 6.90	円窓土器。平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は外反する。胴中央部から上半部にかけて横7.9cm，縦5.1cmの楕円形を呈する円窓がやや右下がりに開けられている（成形時）。輪積み成形。底部・胴部・口辺部の外面ヘラ削り後ヘラナデ。内面ヘラナデ後，口縁部内面ヘラ削り。胴下半部内面に少量の煤付着。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P 29 100% 北東壁下覆土下層
36	小形甕 土師器	A 10.60 B 13.70	丸底で，胴部は球形を呈し，内彎しながら立ち上がる。口辺部は直立気味に上方にのび，上位で僅かに外反する。胴部外面粗いヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。外面及び口辺部内面に赤彩。	砂粒・石英・長石・雲母 赤色 普通	P 42 70% 北東側床面
37	小形甕 土師器	A 14.10 B 11.90 C 7.50	底部は中央が窪む。胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口辺部にかけて外反する。口縁部に最大径を有し，器形はやや歪んでいる。底部外面粗いヘラ削り，胴部外面粗いヘラ削り後ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ。頸部内面ヘラナデ。胴部から底部にかけての内面に放射状のヘラ磨き。	砂粒・石英・長石・雲母 赤褐色 普通	P 41 90% 竈南東側覆土下層
38	小形甕 土師器	A 10.40 B (7.10)	胴部は内彎しながら上方に立ち上がり，口辺部はほぼ直立する。胴部外面ヘラ磨き。胴部内面ヘラナデ後ヘラ磨き。口辺部内面横ナデ調整。	砂粒・長石・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 48 30% 南西側覆土下層
39	小形甕 土師器	A [13.60] B (7.60)	胴上半部は内彎気味に上方に立ち上がり，口辺部は外傾する。胴部内外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P 49 20% 貯蔵穴覆土上層
40	坩 土師器	A 10.30 B (8.00)	口辺部は直線的に外傾する。口辺部外面ヘラナデ後口縁部横ナデ。口辺部内面ヘラナデ。口辺部内外面に赤彩が施されている。	砂粒・雲母 赤色 普通	P 50 20% 竈内覆土
41	瓶 須恵器	B (4.30)	体部は上位で内傾し，口辺部は外傾して立ち上がる。体部の肩に稜が見られる。体部外面に波状文を施し，上位には指頭痕が残る。水挽き成形。	砂粒 灰色 良好	P 53 10% 覆土
42	甑 土師器	A 25.20 B 25.10 孔径 7.60	無底式の甑。胴下半部は内彎気味に外上方に立ち上がり，胴中央部から頸部にかけて内彎気味に上方に立ち上がる。口辺部は緩く外反する。内外面ヘラナデ後，口辺部内外面横ナデ調整。内面に輪積み成形痕が残る。	砂粒 明赤褐色 普通	P 40 50% 北西側覆土中・上層

43	甑 土師器	A 19.70 B 27.20 孔径 6.00	無底式の甑。胴部は長胴で内彎気味に外上方に立ち上がり，上位に最大径を有する。口辺部は緩く外反し，口唇部は外そぎ状となっている。胴部上位に一対の角状の把手が付く。外面ヘラナデ後，口辺部外面横ナデ。口辺部内面ヘラナデ後横ナデ調整。胴部内面ヘラ磨き。内面にハケ目状の擦痕が残る。	砂粒・石英・スコリア 橙色 普通	P38 95% 北東壁際覆土下層
44	甑 土師器	A 19.50 B 17.20 孔径 6.00	無底式の甑。胴下半部は内彎気味に外上方に立ち上がり，胴中央部から頸部にかけて直立する。口辺部は緩く外反する。胴部外面ヘラ削り後粗いヘラナデ。胴部内面丁寧なヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。内面は一部剝離している。	砂粒・長石 赤色 普通	P39 98% 北東側床面 貯蔵穴
45	坏 土師器	A [14.80] B 5.00 C 5.00	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部はほぼ直立する。底部外面ヘラ削り，体部内外面丁寧なヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ調整。全面に赤彩が施されている。	砂粒 赤色 普通	P47 30% 覆土
46	坏 土師器	A 14.10 B 5.90	丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は緩く外反する。体部と口辺部との境に段を有し，シャープな稜を持つ。底部から体部にかけての外面ヘラ削り。口辺部外面横ナデ。内面丁寧なヘラ磨き。全面に赤彩を施すが，外面は摩滅し，内面は一部剝離している。	砂粒・スコリア 赤色 普通	P43 90% 北西側覆土下層
47	坏 土師器	A 15.20 B 6.50	扁平な丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は外傾する。体部と口辺部との境に稜が見られる。底部外面粗いヘラ削り。体部内外面ナデ調整。口辺部内外面横ナデ調整。体部外面には輪積み成形痕が明瞭に残る。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P45 80% 覆土
48	坏 土師器	A 15.00 B 5.20	扁平な丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は外反する。内外面ナデ調整。全体に摩滅している。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P46 30% 南西壁下覆土中層
49	坏 土師器	A 10.60 B 5.00	扁平な丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は内傾する。体部外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。体部内面ヘラ磨き。全面に赤彩を施すが，外面は摩滅している。	砂粒 明赤褐色 普通	P44 80% 北西側覆土下層
50	高坏 土師器	B (5.80) D 12.40 E 5.10	脚部は裾部で大きく「ハ」の字状に開き，裾端部で外反する。脚部内外面ヘラナデ後，裾部内外面ナデ調整。	砂粒・長石 橙色 普通	P51 30% 北西側床面

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径 (mm)	重量 (g)	現存率 (%)	出土地点	備考
51	球状土錘	2.6	3.5	3.2	8.0	30.9	100	覆土下層	DP9 一方向から穿孔，上下ヘラ調整
52	〃	2.4	3.0	2.8	6.0	20.1	100	覆土中層	DP10 〃 , 〃
53	〃	2.8	3.3	3.1	6.0	29.3	100	覆土	DP11 〃 , 〃
54	〃	3.2	3.2	3.2	7.0	(32.2)	99	覆土中層	DP12 両方向から穿孔
55	〃	2.9	3.3	3.2	7.0	28.7	100	覆土	DP13 〃 ,上下ヘラ調整
56	〃	2.8	3.0	2.9	6.0	22.0	100	〃	DP14 一方向から穿孔， 〃
57	〃	2.9	3.1	(2.7)	7.0	(21.0)	85	〃	DP15 一部欠損
58	〃	2.5	3.3	3.0	7.0	26.1	100	〃	DP16 一方向から穿孔，上下ヘラ調整
59	管状土錘	10.0	5.4	5.1	15.0	262.7	100	床面直上	DP8 上下ヘラ調整，外面に指頭痕
60	紡錘車	4.0	4.9	—	—	(35.4)	70	覆土	DP7 土製，外面ヘラ削り



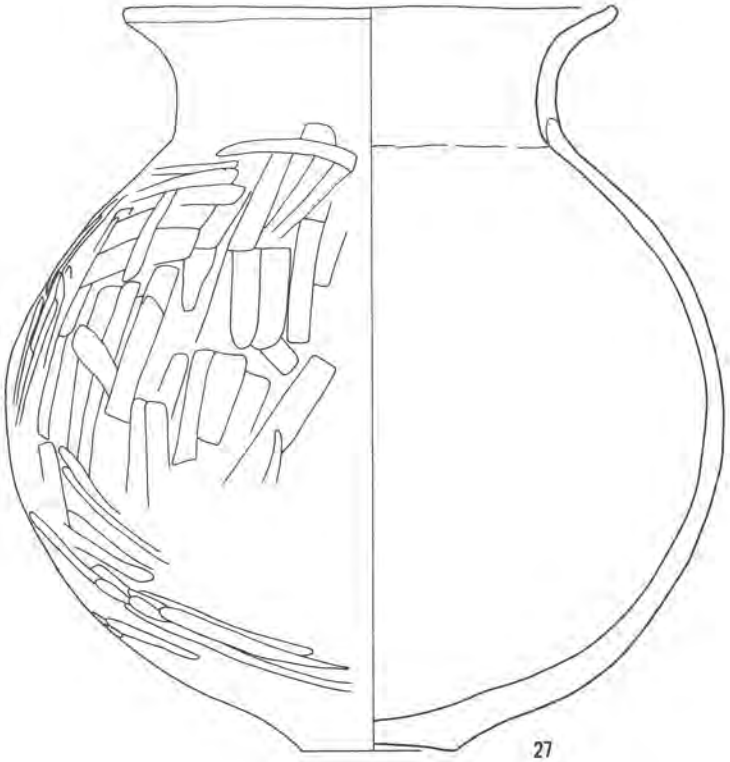
＜S14　土層解説＞

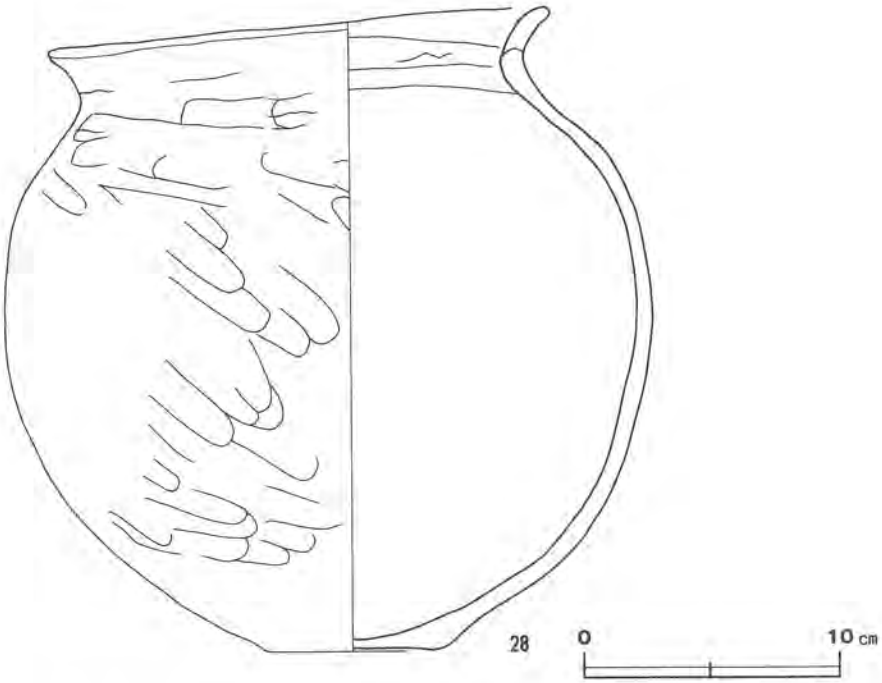
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
2　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
3　極暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子多量。
6　褐色　ローム粒子中量。
7　黒色　炭化物多量，ローム粒子少量。
8　暗褐色　ローム小ブロック中量。
9　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子微量。
10　にぶい赤褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量。
11　極暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック少量。

＜S14　竈土層解説＞

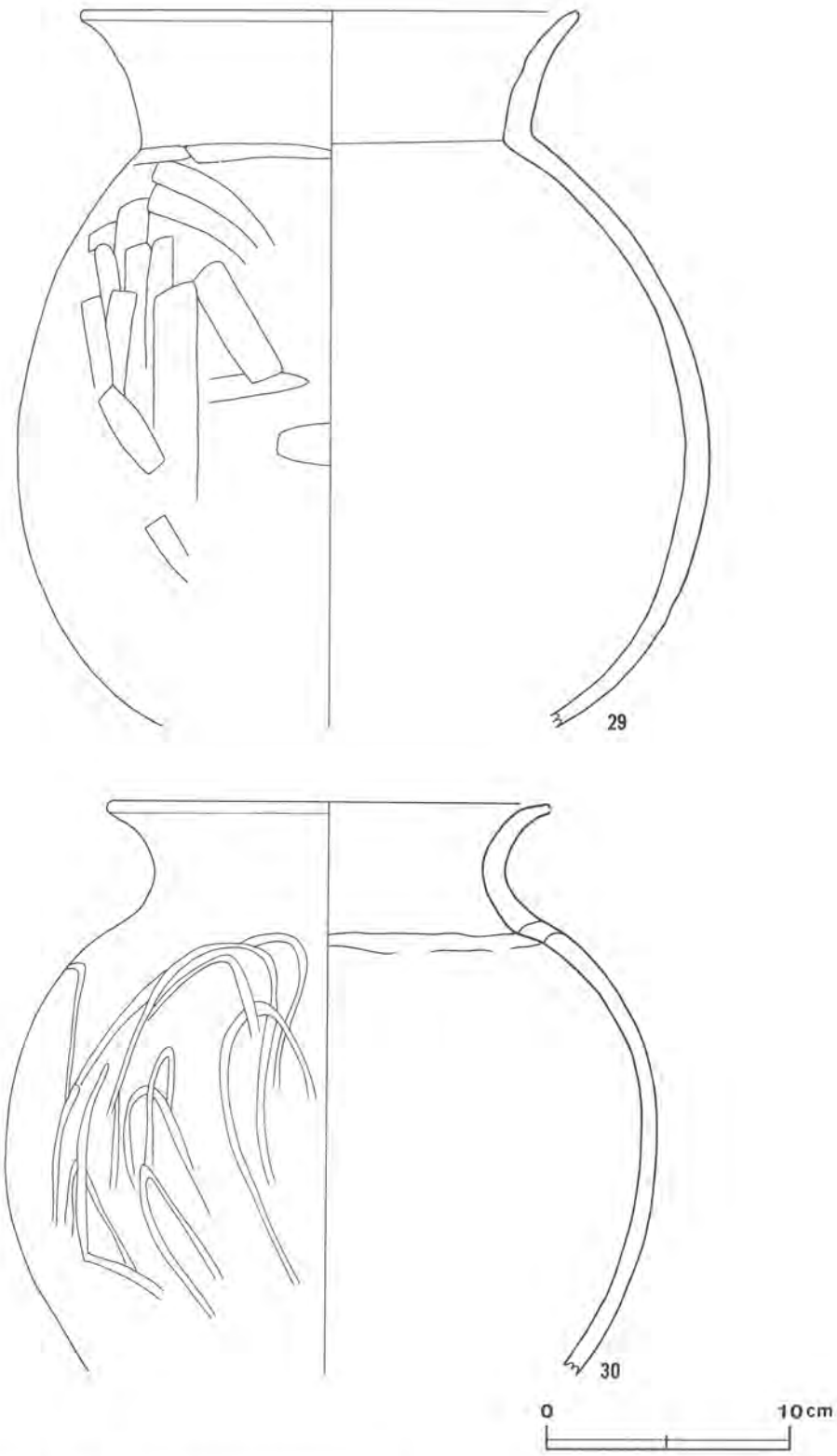
1　褐色　ローム粒子多量。
2　褐色　ローム粒子・ロームブロック・焼土粒子・粘土粒子中量。
3　褐色　ローム粒子・粘土多量。
4　褐色　ローム小ブロック中量。遺物多い。
5　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子多量，灰少量。
6　暗褐色　ローム粒子中量。
7　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，粘土粒子中量。
8　暗赤褐色　焼土粒子多量。
9　暗赤褐色　ローム粒子・焼土ブロック・砂中量。
10　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
11　暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子少量。
12　褐色　ローム粒子多量，砂中量。

第14図　第４号住居跡実測図

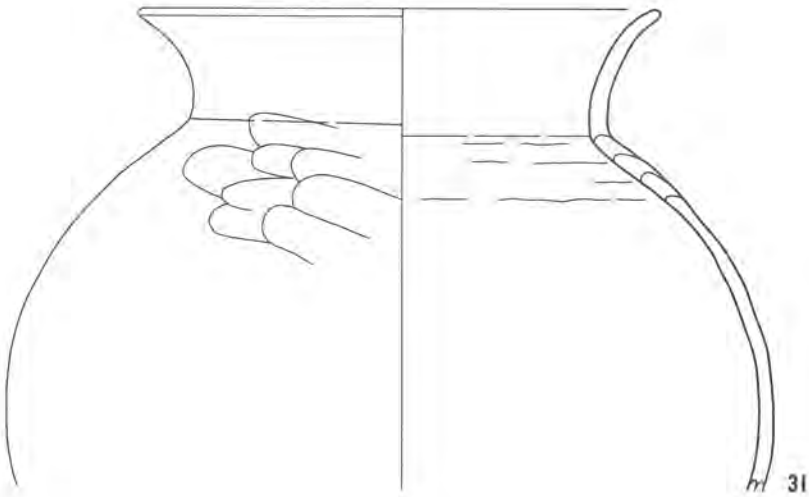


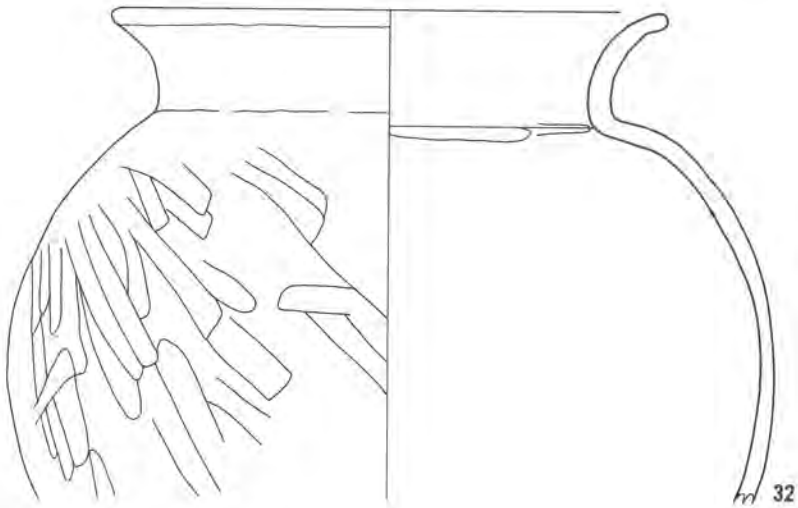


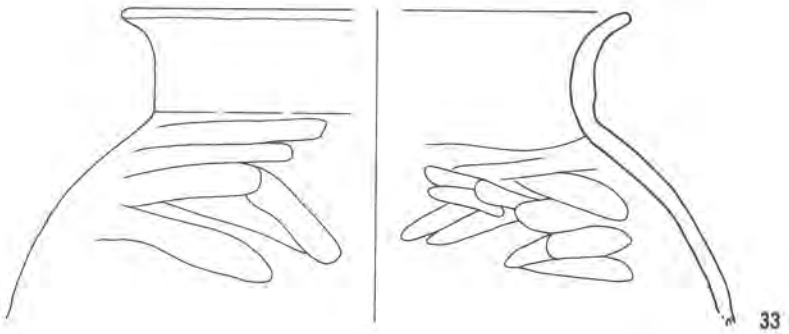
第15図　第４号住居跡出土遺物実測図（1）



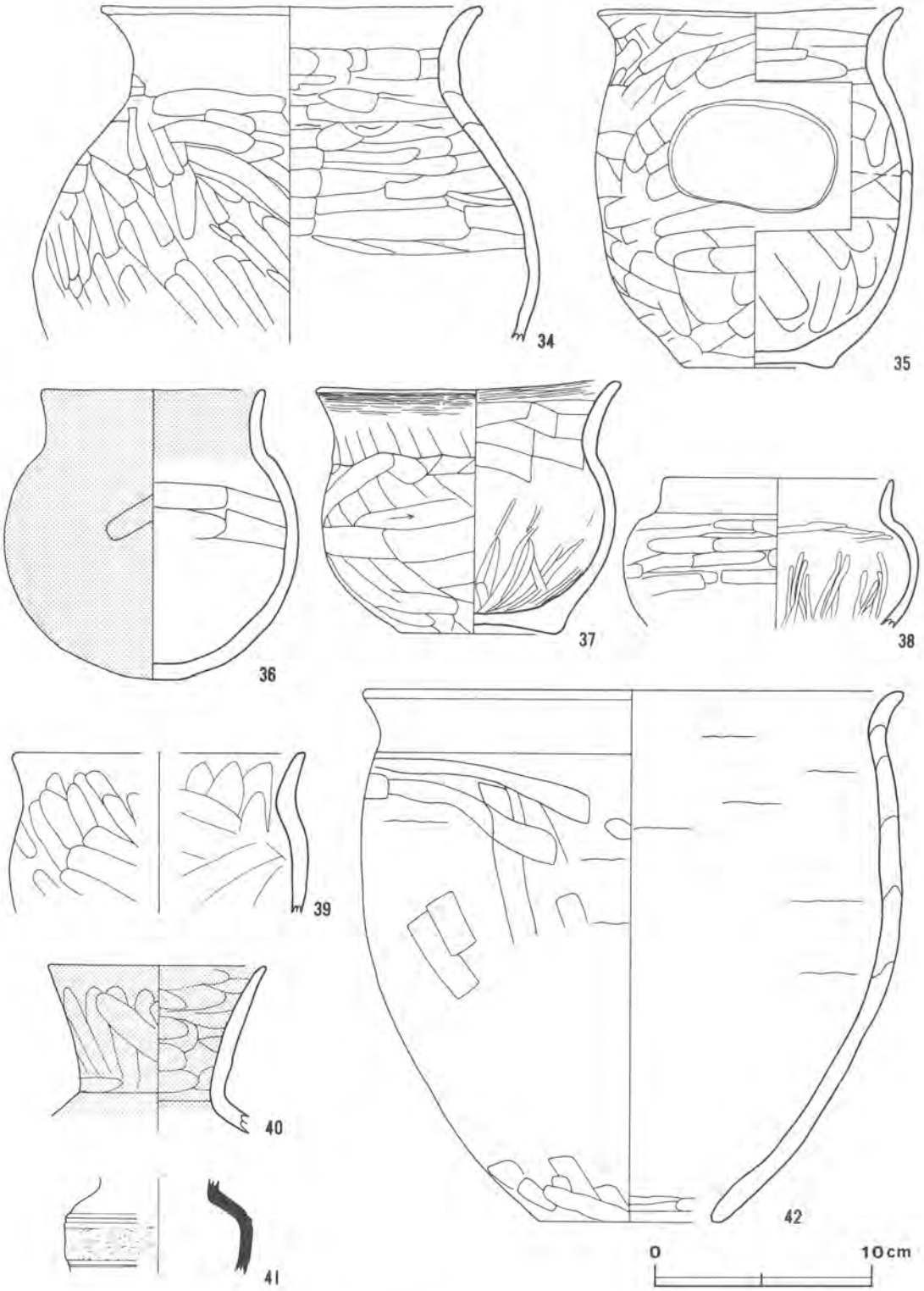
第16図　第４号住居跡出土遺物実測図　(2)



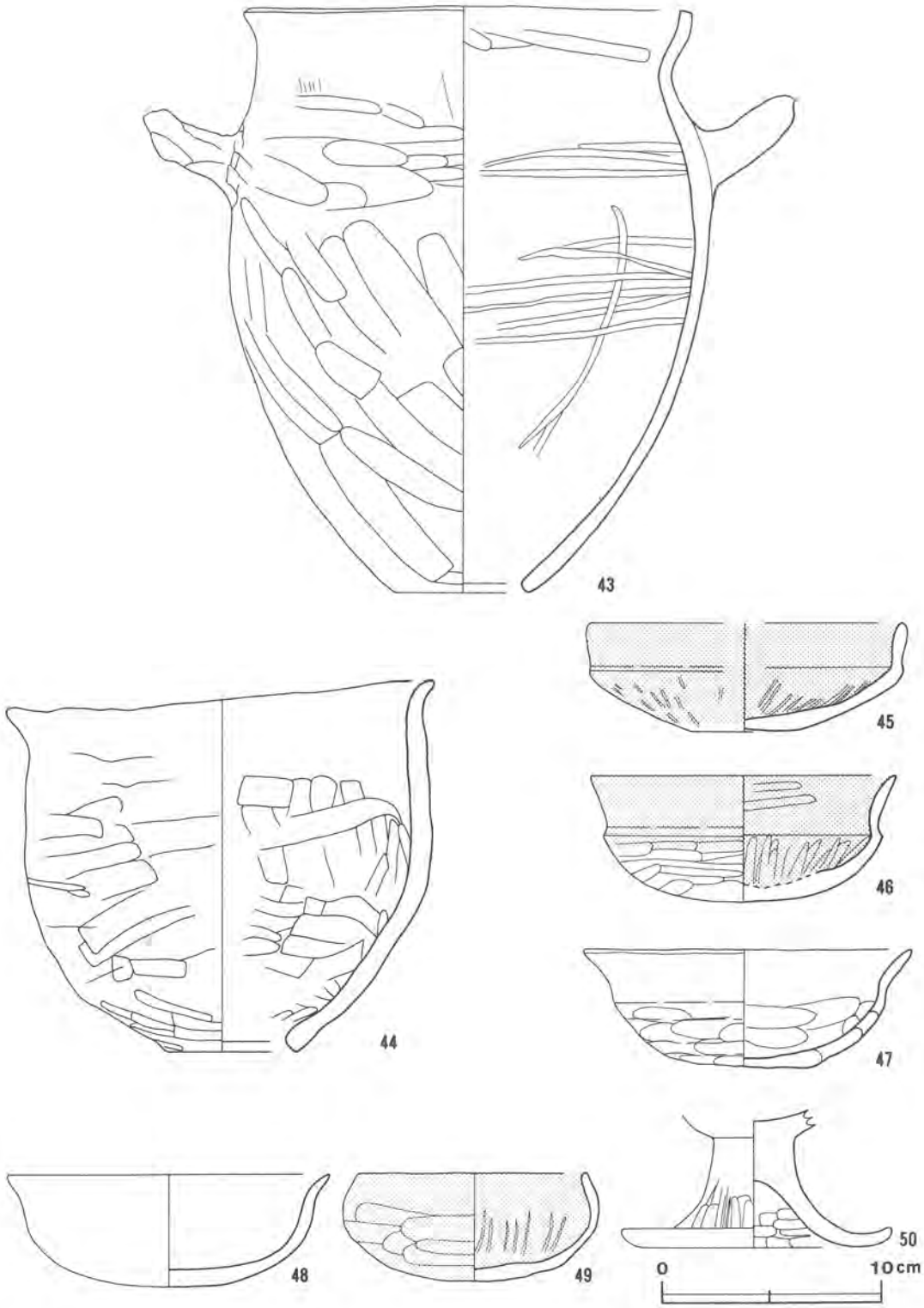




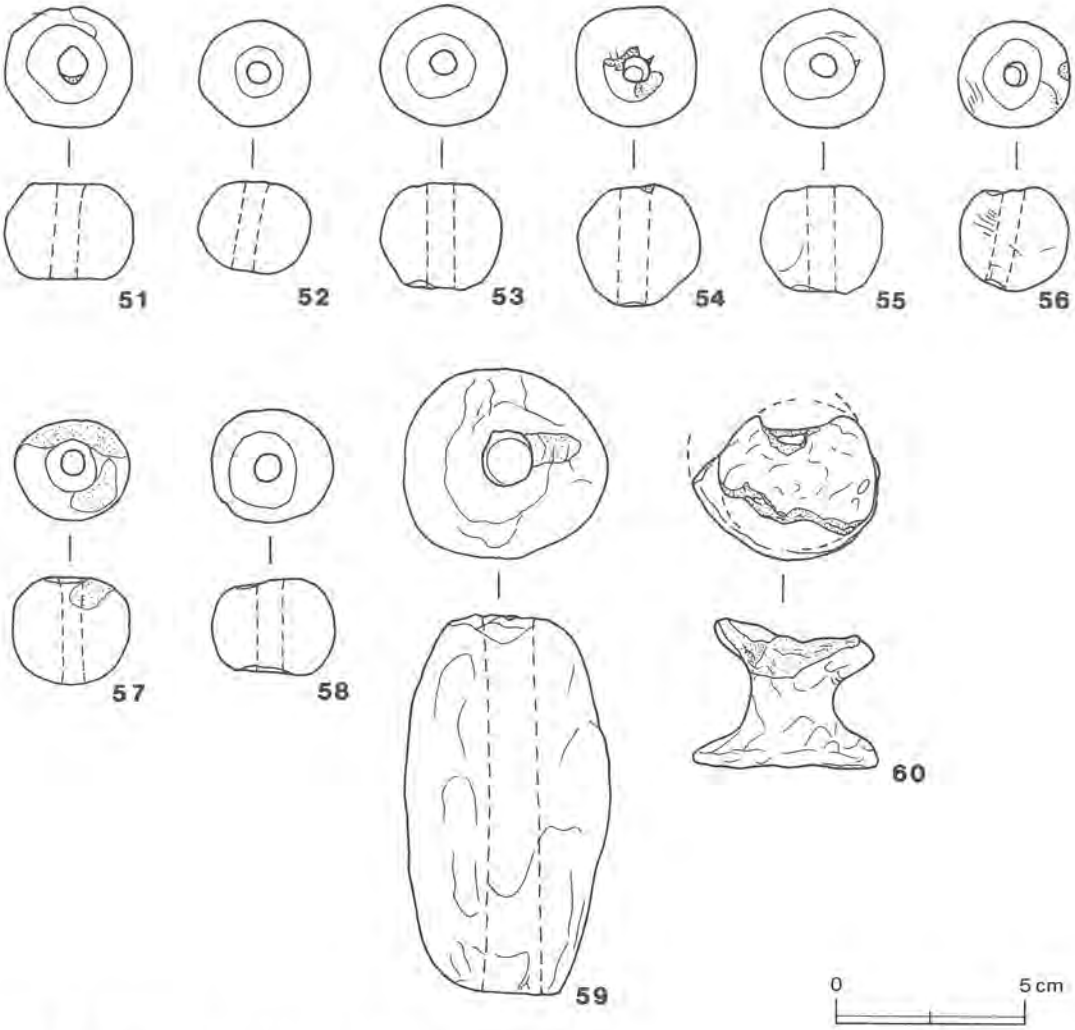
第17図　第４号住居跡出土遺物実測図（3）



第18図　第４号住居跡出土遺物実測・拓影図 (4)



第19図　第４号住居跡出土遺物実測図　(5)



第20図　第４号住居跡出土遺物実測図（6）

第５号住居跡（第21図）

位置　調査区の南東側B4e4区を中心に位置する。

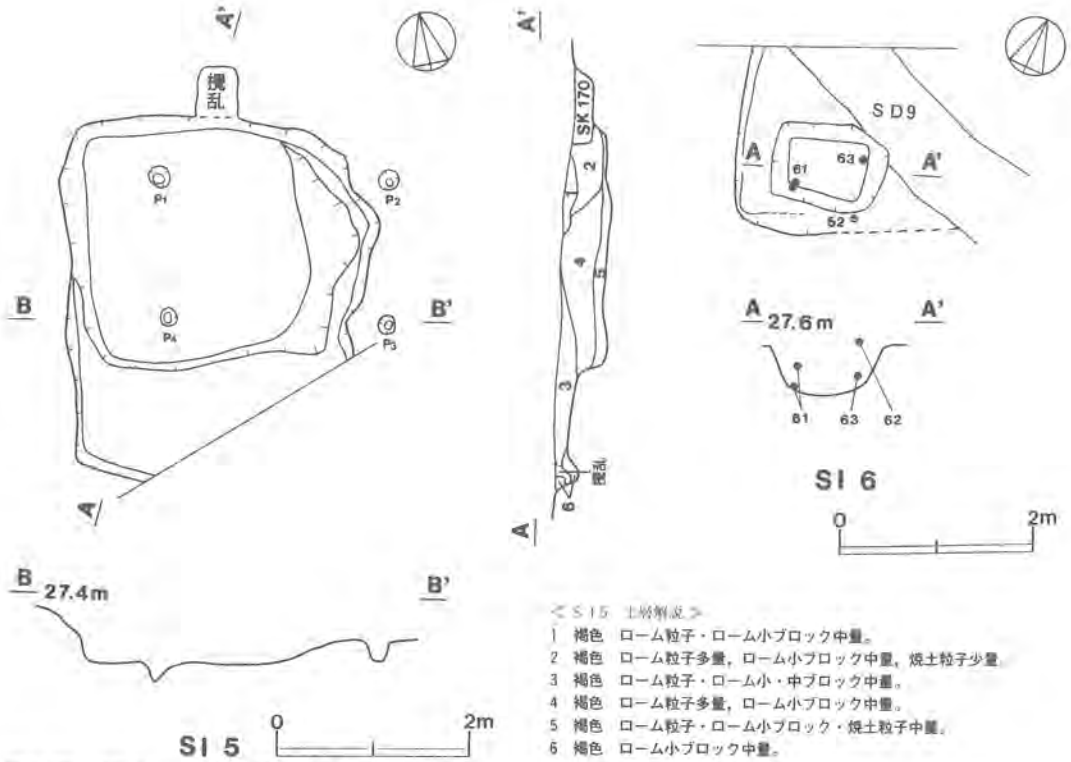
重複関係　本跡は北東側を第170号土坑によって，中央部から南西側にかけての上面を性格不明の長方形状の遺構によって掘り込まれている。第170号土坑は，本跡の土層調査の過程でその存在が明らかになったもので，規模・形状については不明であるが，掘り込みは本跡のほぼ床面に達している。

規模と平面形　2.75×2.60ｍの東西に長い隅丸方形状を呈する。

主軸方向　N-98°-E。

壁　壁高25～54cmを測り，北東壁は緩い傾斜で立ち上がるが，他の壁は外傾して立ち上がる。

床　北東側を除く床面は平坦であるが，北東側は緩やかな傾斜で壁に向かって立ち上がっている。



第21図　第5・6号住居跡実測図

全体に堅く締まっている。

竈　竈は遺存していないが，北東壁中央部が外側に向かって30cm程張り出しいる。北東壁下から竈を構築していたと考えられる多量の粘土塊や砂及び中量の焼土粒子が検出されていることから，竈は北東壁中央部に付設されていた可能性も考えられる。

ピット　短軸線上の床面に2か所(P_1・P_4)，竈北東側の屋外に2か所(P_2・P_3)検出されている。P_1・P_4(径18～25，深さ21～50cm)が主柱穴，P_2・P_3(径18～22，深さ24～27cm)は補助的な柱穴と考えられる。

覆土　自然堆積。

所見　竪穴住居跡として扱ったが，柱穴配置が変則的であり，作業場あるいは倉庫等の機能も考えられるが，遺物が出土していないため時期や性格等については不明である。

第6号住居跡（第21図）

位置　調査区の北東端A4i_2区に位置する。

重複関係　南西コーナー部を除き，その大部分を第8号溝，第9号溝によって掘り込まれている。

規模と平面形　本跡は全体の二分の一程が北西側の調査区外に存在するものと推定され，また調査区内においてもその大部分が重複遺構によって既に破壊されているため，規模や平面形につい

ては不明である。

主軸方向　残存する壁(南西・南東両壁の方向)の状況や貯蔵穴の位置等から，北西または北東方向に主軸を持つ住居跡と推定される。

壁　壁の立ち上がりがかろうじて検出された程度であり，不明瞭である。

床　貯蔵穴の周囲に硬化面が認められる。

貯蔵穴　住居跡の南西コーナー部から検出されており，1.19×0.85mの長方形状を呈し，58cm程の深さに掘り込まれている。底面はほぼ平坦で硬く締まっており，断面形は逆台形状を呈する。南東壁は一部崩落している。

覆土　自然堆積。

遺物　貯蔵穴内から土師器の甕(61)・小形甕(62)・坏(63)や，実測は不可能であったが，須恵器の蓋坏の破片が1点出土している。

所見　全容については不明であるが，貯蔵穴の覆土下層から出土した坏の形態等から古墳時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第22図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
61	甕 土師器	A 16.40 B 31.40 C 8.50	平底で，胴部は球形を呈し内彎しながら上方に立ち上がり，頸部で直立し，口辺部で外傾する。胴部中位に最大径を有する。胴部から頸部にかけての内外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。頸部に接合痕が見られる。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P54 70% 貯蔵穴
62	小形甕 土師器	B (12.70) C 7.00	平底で，胴部は内彎しながら上方に立ち上がる。底部外面ヘラ削り。胴部内外面ナデ調整。	砂粒 赤色 普通	P56 50% 貯蔵穴
63	坏 土師器	A 14.20 B 4.50	扁平な丸底で，底部内外面の中央が僅かに窪む。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は緩く外反する。底部外面ヘラ削り。体部外面ヘラナデ。口辺部外面横ナデ。口辺部内面ヘラナデ調整。体部上位から口縁部にかけての内外面に赤彩を施す。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色・赤色 普通	P55 70% 貯蔵穴

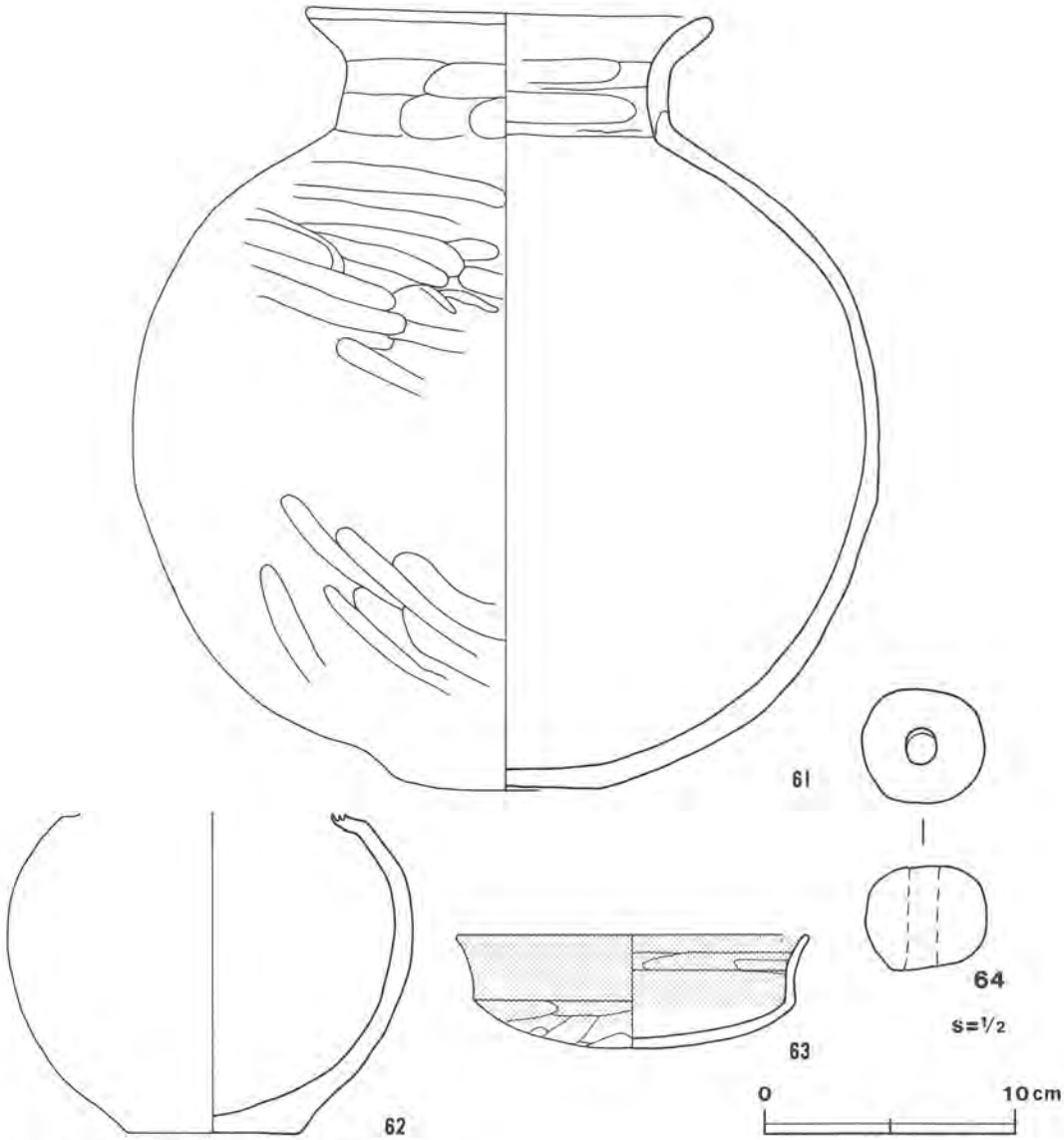
遺物番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
64	球状土錘	2.7	3.3	3.2	9.0	27.5	100	覆土	DP18 一方向から穿孔,片面ヘラ調整

第7号住居跡（第23～25図）

位置　調査区の東側B4d₁区に位置する。

重複関係　本跡の北西側上面に第8号住居跡が構築されており，西コーナー部付近を第1号掘立柱建物跡に，北東壁中央部を第161号土坑によって掘り込まれている。

規模と平面形　一辺7.8m前後の方形を呈する。



第22図　第6号住居跡出土遺物実測図

主軸方向　N-115°-W。

壁　壁高40～56cmを測り，外傾または垂直に近い傾斜で立ち上がる。遺存状態は良好である。

床　平坦で全体に硬く踏み固められており，特に中央部や竈前面の床面が堅緻である。

竈　南西壁の南コーナー寄りに偏在する。竈は南西壁を外側に10cm程掘り込み，白色粘土・砂を主体として構築されている。両袖部，天井部の一部，煙道部が比較的良好に遺存する。火床は床面を皿状に僅かに掘り窪めた程度であるが，レンガ状に赤変硬化し，その上面に灰・焼土粒子が堆積している。

ピット　4か所に検出されており，P_1～P_4(28～45×30～47×60～65cm)はいずれも主柱穴である。

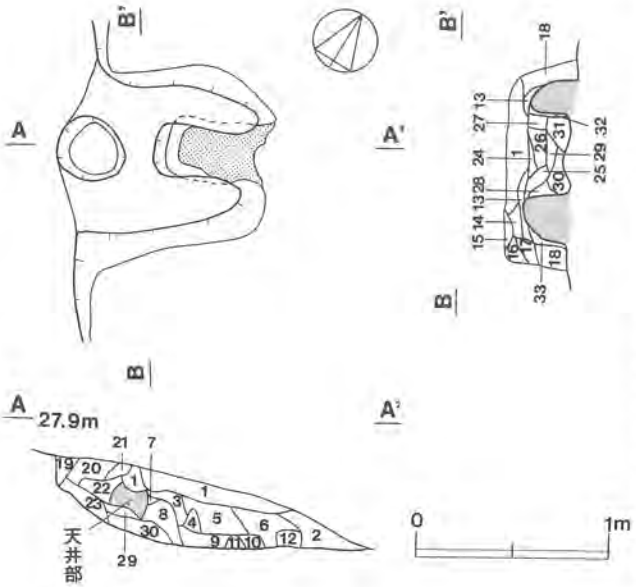
主柱穴は，一辺4.7m前後の方形状に規則的に配置されている。

貯蔵穴　竈の左側(南東側)に当たる北西コーナー部に設けられており，1.00×0.80mの長方形を呈し，82cm程の深さに掘り込まれている。底面は平坦で硬く締まっており，断面形は逆台形状を呈する。貯蔵穴内には暗褐色土や極暗褐色土が自然堆積している。

覆土　自然堆積。

遺物　土師器の甕，甑，高坏，坏，須恵器片，球状土錘，管状土錘，刀子(109)等が出土している。79・81・83の土師器の坏は，いずれも床面または床面直上から出土したものである。

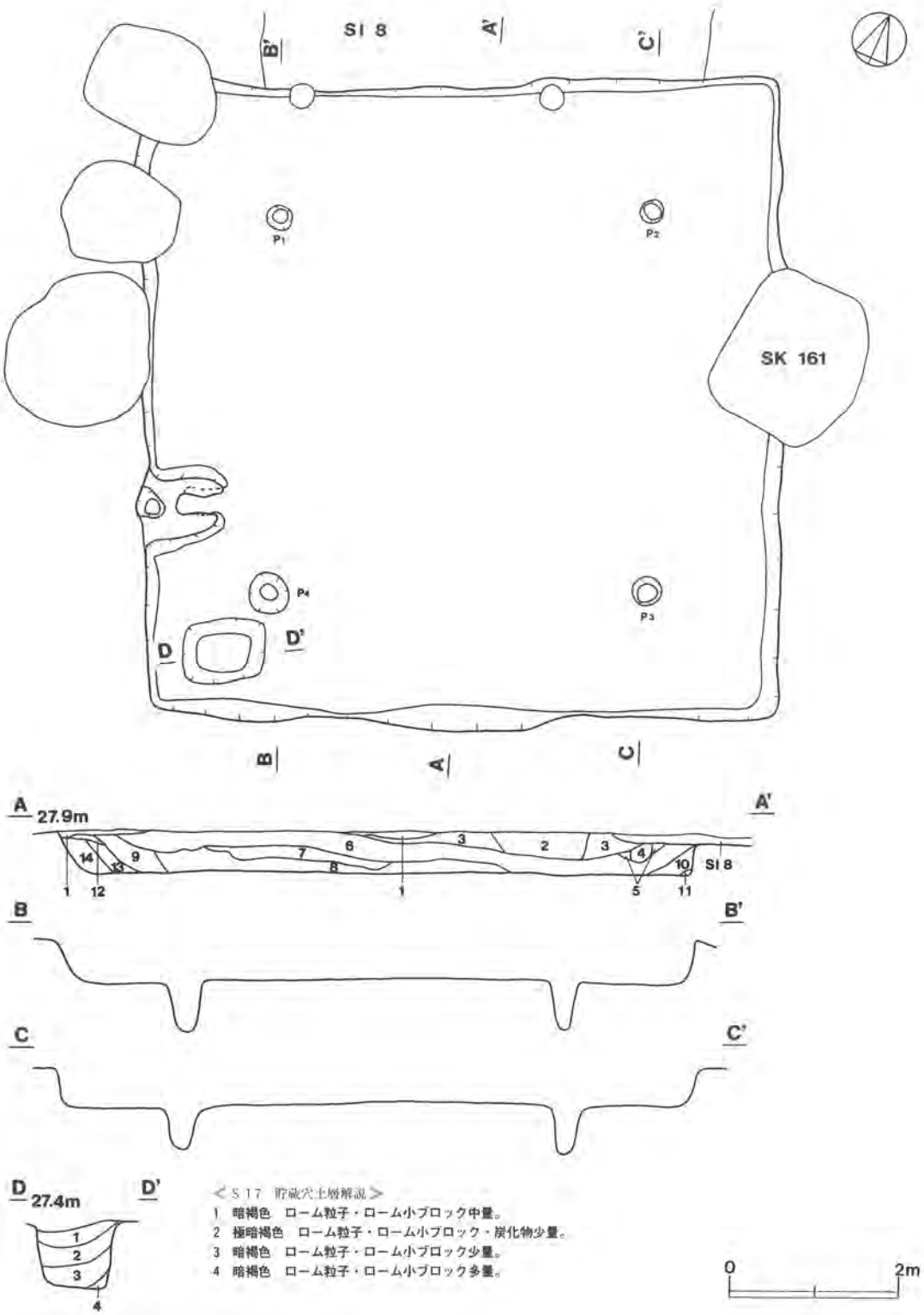
所見　出土遺物や住居跡の形態から，古墳時代後期の住居跡と考えられる。



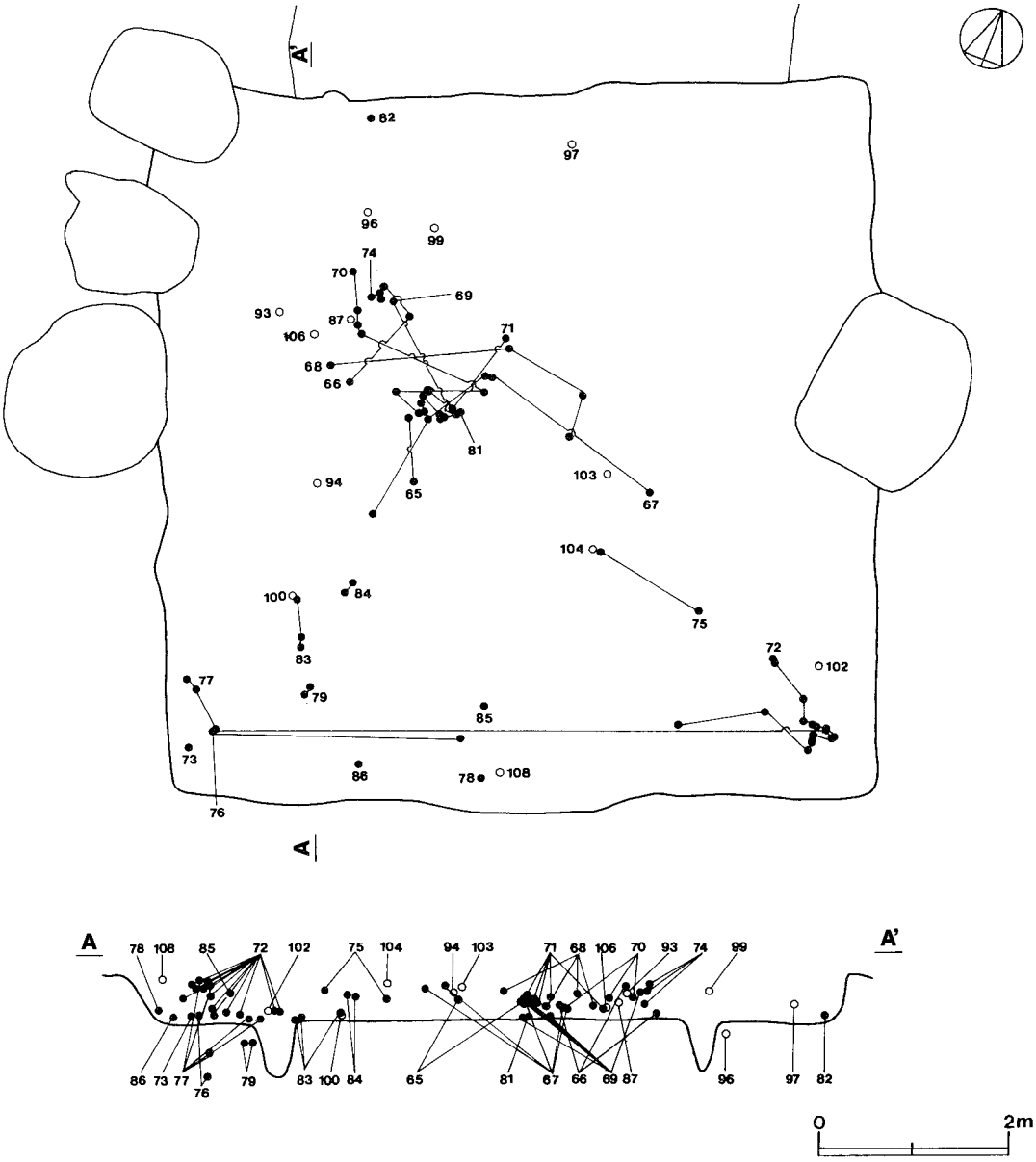
<S17　竈土層解説>

1　暗褐色　焼土粒子・粘土粒子少量。
2　褐色　粘土粒子少量。
3　暗褐色　焼土粒子・焼土ブロック多量，粘土粒子中量。
4　褐色　粘土粒子多量，焼土小ブロック中量。
5　褐色　粘土粒子中量，焼土粒子少量。
6　褐色　粘土粒子少量。
7　褐色　粘土粒子少量。
8　暗褐色　粘土粒子多量，焼土粒子・焼土小ブロック中量。
9　灰褐色　焼土ブロック・灰多量，ローム粒子中量。
10　暗褐色　焼土粒子中量。
11　褐色　焼土粒子多量，粘土粒子中量。
12　褐色　ローム粒子少量。
13　褐色　白色粒子多量。
14　褐色　ローム粒子・焼土粒子・粘土粒子少量。
15　暗褐色　焼土粒子少量。
16　褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
17　褐色　粘土粒子中量，ローム粒子・焼土粒子少量。
18　褐色　焼土粒子少量。
19　褐色　ローム小ブロック多量。
20　褐色　白色粒子多量，ローム粒子中量。
21　褐色　粘土粒子多量。
22　褐色　焼土粒子・粘土粒子多量。
23　褐色　ローム粒子・粘土粒子少量。
24　にぶい褐色　ローム粒子少量。
25　にぶい黄橙色　砂多量。
26　にぶい黄橙色　砂多量，焼土小ブロック少量。
27　褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
28　にぶい赤褐色　焼土粒子・砂多量。
29　にぶい黄橙色　砂多量，焼土粒子中量。
30　極暗赤褐色　焼土粒子中量。
31　褐色　ローム粒子・焼土粒子中量。
32　にぶい褐色　焼土粒子中量。
33　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。

第23図　第7号住居跡竈実測図



第24図　第７号住居跡実測図



≪S17　土層解説≫

1　暗褐色　ローム粒子中量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
3　黒色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
4　暗褐色　ローム粒子中量。
5　褐色　ローム粒子中量。
6　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
8　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
9　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
10　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
11　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
12　褐色　ローム粒子少量。
13　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
14　褐色　ローム粒子中量，ローム中・大ブロック少量。

第25図　第７号住居跡遺物出土位置図

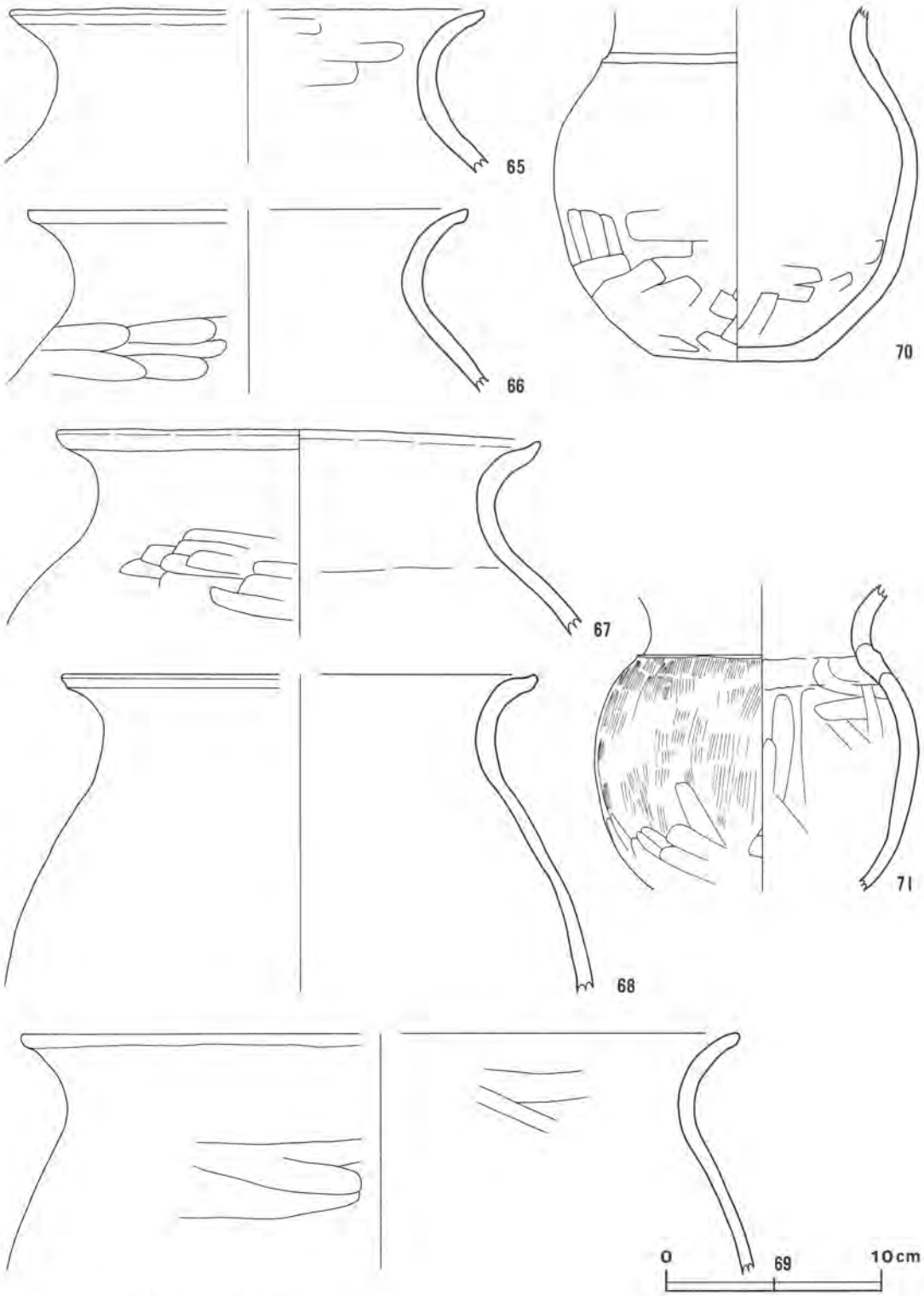
出土遺物観察表（第26～29図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
65	甕 土師器	A [12.00] B (7.60)	口辺部は大きく外反し，口縁部は外傾して立ち上がる。口辺部外面横ナデ。口辺部内面ヘラナデ後横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P58 10% 中央部覆土中層
66	甕 土師器	A [20.60] B (8.60)	口辺部は大きく外反し，口縁部はほぼ直立する。胴部外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P59 10% 覆土中・下層
67	甕 土師器	A 22.50 B (9.70)	口辺部は大きく外反し，口縁部は斜上方に立ち上がる。胴部外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。頸部内面に輪積み成形痕が残る。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P57 10% 覆土
68	甕 土師器	A [22.00] B (14.90)	胴上半部は内彎しながら上方に立ち上がり，口辺部は大きく外反する。口縁部は斜上方に立ち上がる。口辺部内外面横ナデ調整。胴部外面は摩滅している。	砂粒・石英・雲母 橙色 普通	P60 10% 中央部覆土中層
69	甕 土師器	A [33.40] B (11.30)	口辺部は大きく外反し，口縁部は外側に折り返されている。胴部外面ヘラナデ。口辺部外面横ナデ。内面ナデ。口縁部内面横ナデ調整。	砂粒・雲母 浅黄橙色 普通	P61 10% 覆土中・下層
70	小形甕 土師器	B (16.60) C 7.60	平底で，胴部は内彎しながら上方に立ち上がり，口辺部は緩く外反して立ち上がる。頸部外面に弱い稜を持つ。底部及び胴下半部外面ヘラ削り。頸部内面横ナデ調整。全体に粗い作りである。	砂粒・石英 赤色 普通	P63 50% 中央部から北西側にかけての覆土中層
71	小形甕 土師器	B (14.30)	胴部は内彎しながら上方に立ち上がり，頸部から口辺部にかけて外反する。頸部外面に明瞭な稜を有する。胴部外面ヘラナデ（ハケ目状の擦痕が残る）。口辺部内外面横ナデ調整。胴部外面に煤付着。口辺部内面赤彩か。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P64 50% 中央部覆土下層～中層
72	小形甕 土師器	A 15.20 B 13.80 C 8.60	不安定な平底で，胴部は内彎しながら上方に立ち上がり，口辺部は緩く外反する。底部は器厚が厚く，胴部から頸部にかけて器厚を減じ，口辺部でやや器厚を増す。底部外面不定方向のヘラ削り。口辺部内外面横ナデ調整（ハケ目状の強い擦痕を残す）。頸部内面に接合痕。二次焼成。	砂粒 橙色 普通	P62 70% 南東側コーナー部覆土下層～上層
73	小形甕 土師器	A 14.60 B (9.80)	胴部は内彎して立ち上がり，口辺部は直立し，上位で外反する。胴部内外面ヘラナデ。口辺部内外面ヘラナデ後横ナデ調整。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P65 15% 南西コーナー部覆土下層
74	小形鉢 土師器	A [7.80] B 8.00 C 5.80	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は内傾する。胴部と口辺部との境に稜を有する。底部及び胴部外面ヘラ削り。口辺部内外面横ナデ。内面ヘラナデ調整。	砂粒・石英 橙色 普通	P67 40% 北西側覆土中層
75	小形鉢 土師器	A [8.80] B (6.20)	体部は内彎しながら立ち上がり，口辺部は直立する。頸部内面に稜を有し，頸部外面に接合痕が残る。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P68 20% 南東側覆土中層
76	鉢 土師器	A [17.00] B (9.30)	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部で僅かに外傾する。体部外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。体部内面ナデ調整。体部外面に煤が付着する。	砂粒・石英・雲母 にぶい褐色 普通	P66 30% 貯蔵穴覆土中層

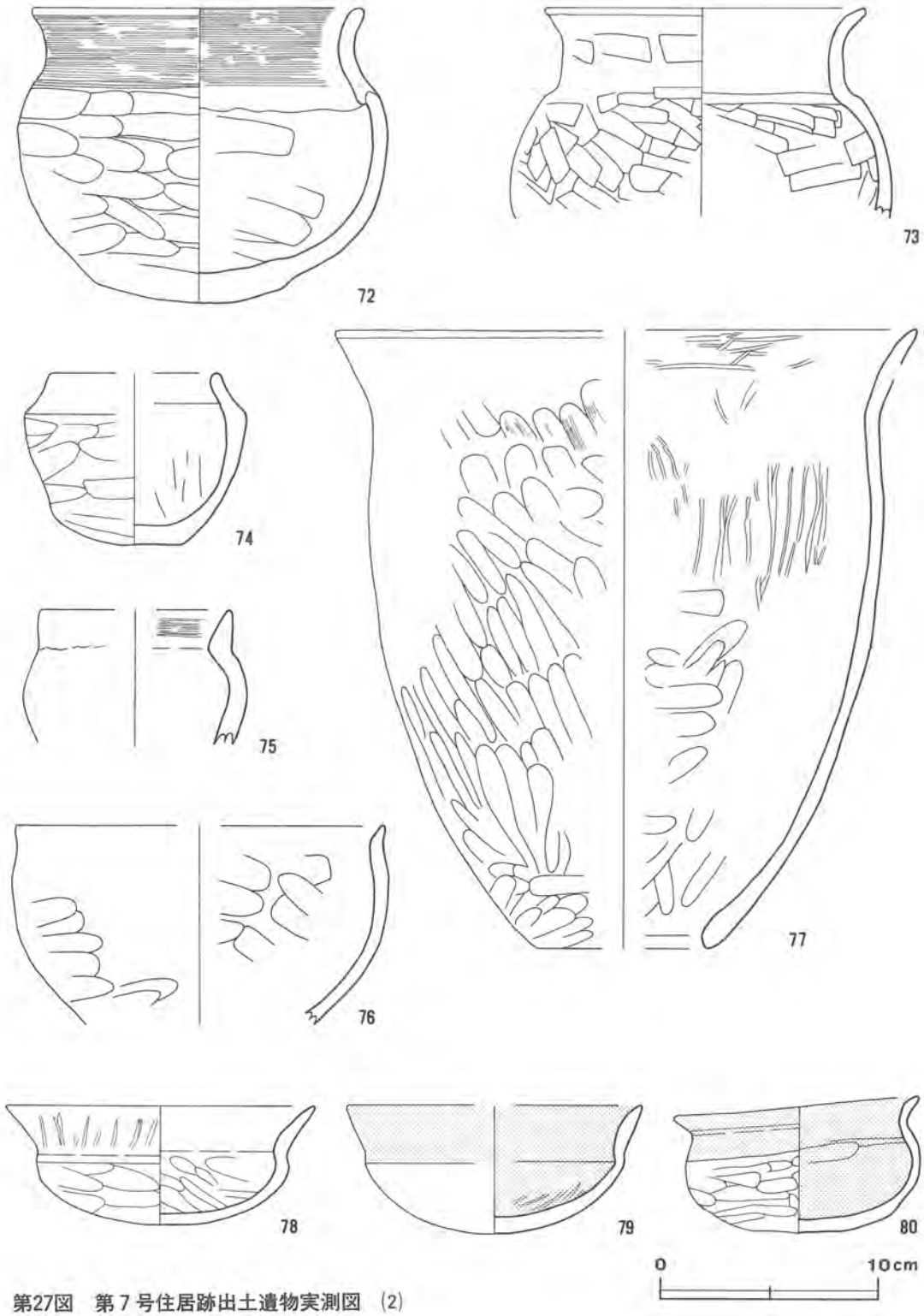
77	甑 土師器	A [26.90] B 28.90 孔径 8.00	長胴で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は外反する。胴部内外面ヘラ磨き。口辺部外面横ナデ。内面ヘラ磨き調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P82 40% 貯蔵穴覆土中層，床面，覆土上層
78	坏 土師器	A 14.20 B 5.60	扁平な丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は大きく外傾して開く。口辺部と体部との境に明瞭な稜を有する。体部内外面ヘラ磨き。口辺部外面横ナデ後ヘラ磨き。口辺部内面ヘラナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P70 70% 南側覆土下層
79	坏 土師器	A [13.80] B 6.00	丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は外傾して立ち上がる。体部と口辺部との境には，外面に弱い稜を有する。体部外面粗いヘラナデ。口辺部外面及び内面ヘラ磨き。口辺部外面及び内面に赤彩が施されている。	砂粒・雲母 赤色 普通	P72 30% 床面
80	埦 土師器	A 11.40 B 6.40	扁平な丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，上位で内傾する。口辺部は大きく「く」の字状に外反する。体部外面ヘラ削り後ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。体部内面ヘラナデ調整。口辺部外面及び内面に赤彩が施されている。	砂粒・石英・雲母 赤色 普通	P71 70% 覆土
81	坏 土師器	A [8.90] B 8.30	丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部はやや内傾して立ち上がる。全体に器厚が厚い。体部内外面ヘラナデ。口辺部内外面横ナデ調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P74 45% 中央部床面直上
82	坏 土師器	A 13.80 B 5.30	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は緩く外反する。底部外面ヘラ削り。体部外面丁寧なヘラナデ。口辺部内外面横ナデ。体部内面ナデ調整後ヘラ磨き。全面に赤彩が施されている。	砂粒・雲母 赤色 普通	P81 100% 北西壁際覆土下層
83	坏 土師器	A [13.80] B 6.00	丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，上位で直立し，口辺部は外反する。体部と口辺部との境には，内面に弱い稜を有する。口辺部内面ヘラ磨き。体部内面ナデ調整。外面は二次焼成を受け剝離が著しい。	砂粒・雲母 橙色 普通	P73 20% 南西側床面
84	高坏 土師器	A [18.50] B (8.90) E (4.10)	坏部は内彎気味に外上方に大きく開いて立ち上がり，口縁部で僅かに外傾する。脚部は接合部から下方に向かって開いている。脚部及び坏部内外面ヘラ磨き。口縁部外面横ナデ調整。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P83 30% 南西側覆土中層
85	手捏土器	A 8.80 B 5.50 C [6.40]	平底で，体部下半は外傾し，中央から上半にかけて緩く内彎して開き，口辺部で内傾する。粗雑な手捏。内外面ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	P69 35% 南側覆土中層
86	手捏土器	A 2.40 B 2.20 C 1.50	ミニチュアの手捏土器。平底で，胴部は内彎気味に立ち上がり，口辺部は直立する。内外面に指頭痕が残る。	砂粒 橙色 普通	P84 100% 南東壁際覆土下層

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
87	球状土錘	3.0	3.6	3.3	9.5	29.5	100	覆土中層	DP21 一方向から穿孔，上下ヘラ調整
88	〃	3.1	3.3	3.1	7.0	31.6	100	覆土	DP22 〃 , 〃
89	〃	2.5	3.4	3.1	7.5	26.1	100	〃	DP23 〃 , 〃
90	〃	2.3	3.1	2.9	8.5	22.1	100	〃	DP24 〃 , 〃
91	〃	2.3	3.2	3.0	9.0	22.7	100	〃	DP25 〃 ,片面ヘラ調整

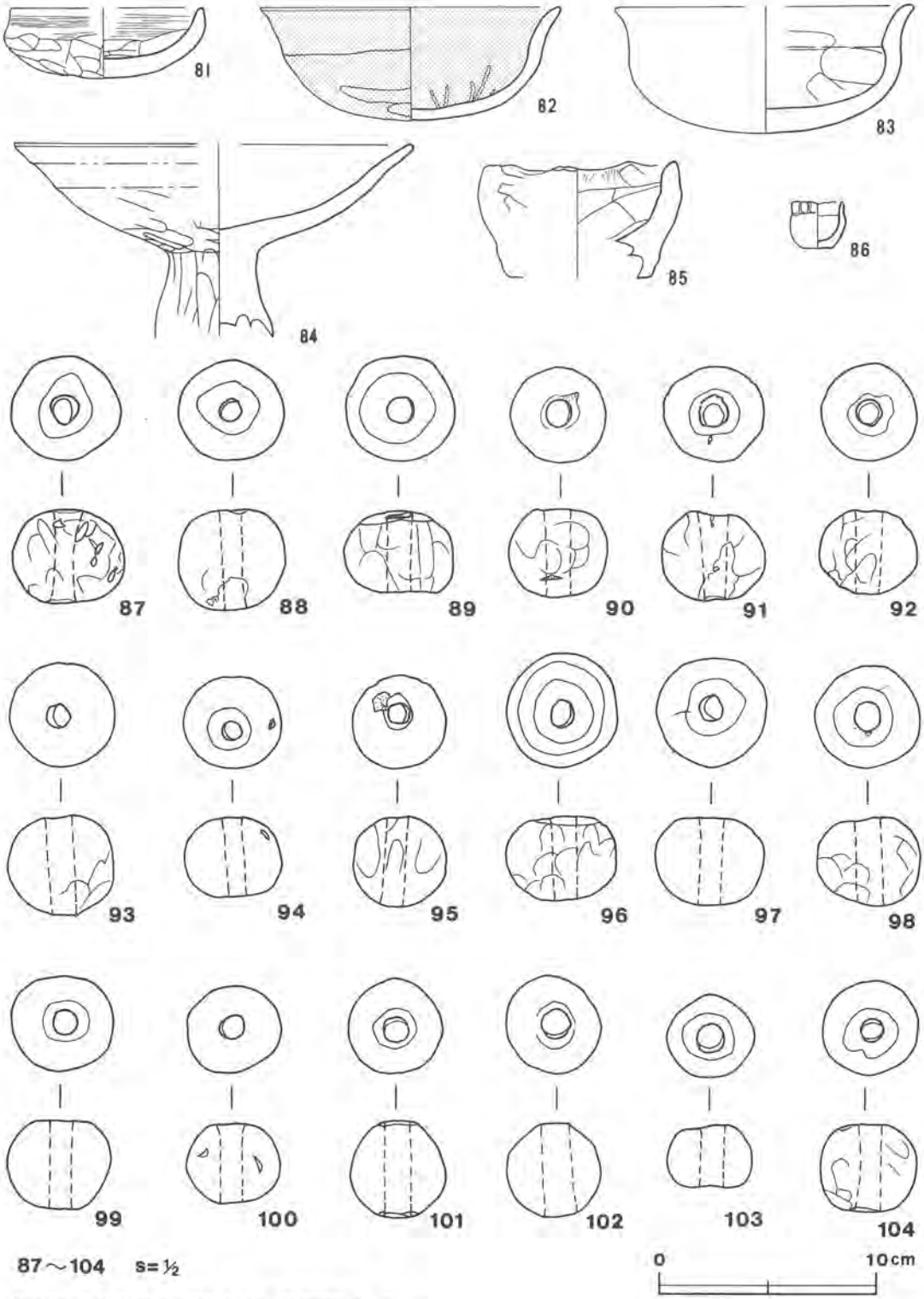
92	球状土錘	2.7	3.0	3.0	8.0	21.6	100	覆土	DP26 一方向から穿孔,片面ヘラ調整
93	〃	3.1	3.4	3.2	8.0	30.3	100	覆土中層	DP27 〃
94	〃	2.5	3.0	2.8	7.0	21.0	100	〃	DP28 〃 ,上下ヘラ調整
95	〃	2.8	2.9	2.9	7.0	22.0	100	覆土	DP29 〃
96	〃	2.5	3.5	3.5	8.0	33.1	100	床面	DP30 〃 ,上下ヘラ調整
97	〃	2.7	3.4	3.3	7.0	26.3	100	覆土中層	DP31 両方向から穿孔, 〃
98	〃	2.7	3.3	3.2	8.0	24.2	100	覆土	DP32 一方向から穿孔,片面ヘラ調整
99	〃	2.8	3.2	2.9	7.0	24.0	100	覆土中層	DP33 〃 , 〃
100	〃	2.5	2.9	2.7	8.0	18.1	100	覆土下層	DP34 〃
101	〃	3.0	3.0	3.0	10.0	21.6	100	覆土	DP35 〃 ,上下ヘラ調整
102	〃	2.9	3.1	3.0	9.0	21.3	100	〃	DP36 〃
103	〃	2.0	2.7	2.6	7.0	11.2	100	覆土中層	DP37 〃 ,上下ヘラ調整
104	〃	2.9	3.1	3.0	8.0	(22.4)	99	覆土上層	DP38 〃 〃
105	〃	2.4	2.8	2.7	7.0	16.3	100	覆土	DP39 上下ヘラ調整
106	〃	1.6	2.0	2.0	6.0	5.7	100	覆土中層	DP40 一方向から穿孔,片面ヘラ調整
107	管状土錘	7.6	4.6	4.4	19.0	156.5	100	覆土	DP19
108	〃	5.8	4.7	(3.5)	21.0	(76.1)	60	覆土上層	DP20
109	刀子	現在長(7.3) 刀身幅1.6 刀身重ね0.5 茎長5.1				(12.3)	40	覆土	M1 刀身の大半欠損



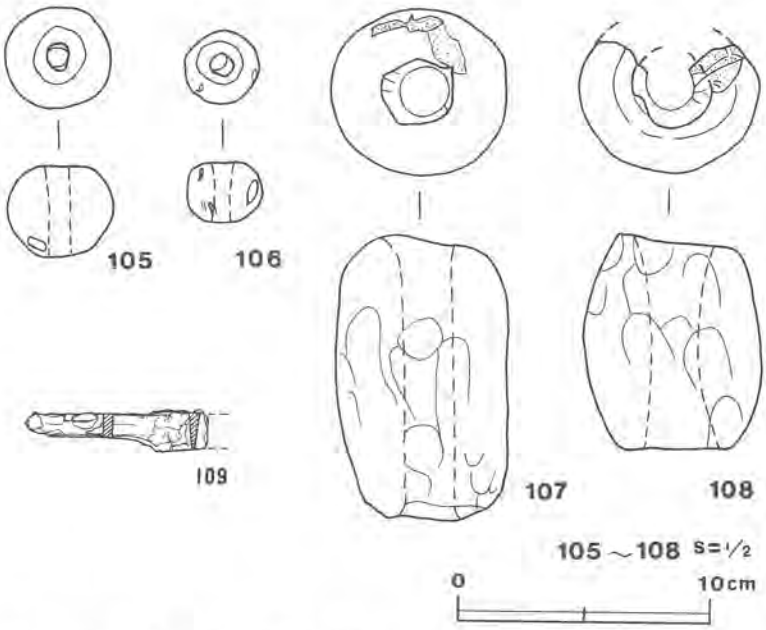
第26図　第７号住居跡出土遺物実測図　(1)



第27図　第７号住居跡出土遺物実測図　(2)



第28図　第７号住居跡出土遺物実測図（3）



第29図　第７号住居跡出土遺物実測図（4）

第８号住居跡（第30図）

位置　調査区の北東側B4b₁区に位置する。

重複関係　本跡の南東側は第7号住居跡の上面に構築(貼床)されており，南西壁は第1号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形　5.50×6.50ｍ程の長方形状を呈し，短軸方向に主軸を持つ。長軸(北西－南東)方向の規模については，南東壁が不明瞭なため，貼床の範囲から推定したものである。

主軸方向　N-68°-E。

壁　床面が既に露呈している状況であり，壁は全体に遺存状態が悪く，僅かに残存しているにすぎない(南西壁については不明瞭であり，検出された主柱穴の配置からすれば，さらに南西側に広がっていた可能性も考えられる)。

床　平坦であり，主柱穴に囲まれた中央部及び竈前面が良く踏み固められている。また，南東側(P_1とP_2を結ぶ線の外側)の床面は，第7号住居跡の覆土上層に10cm程の厚さで貼床しており，特に堅緻である。

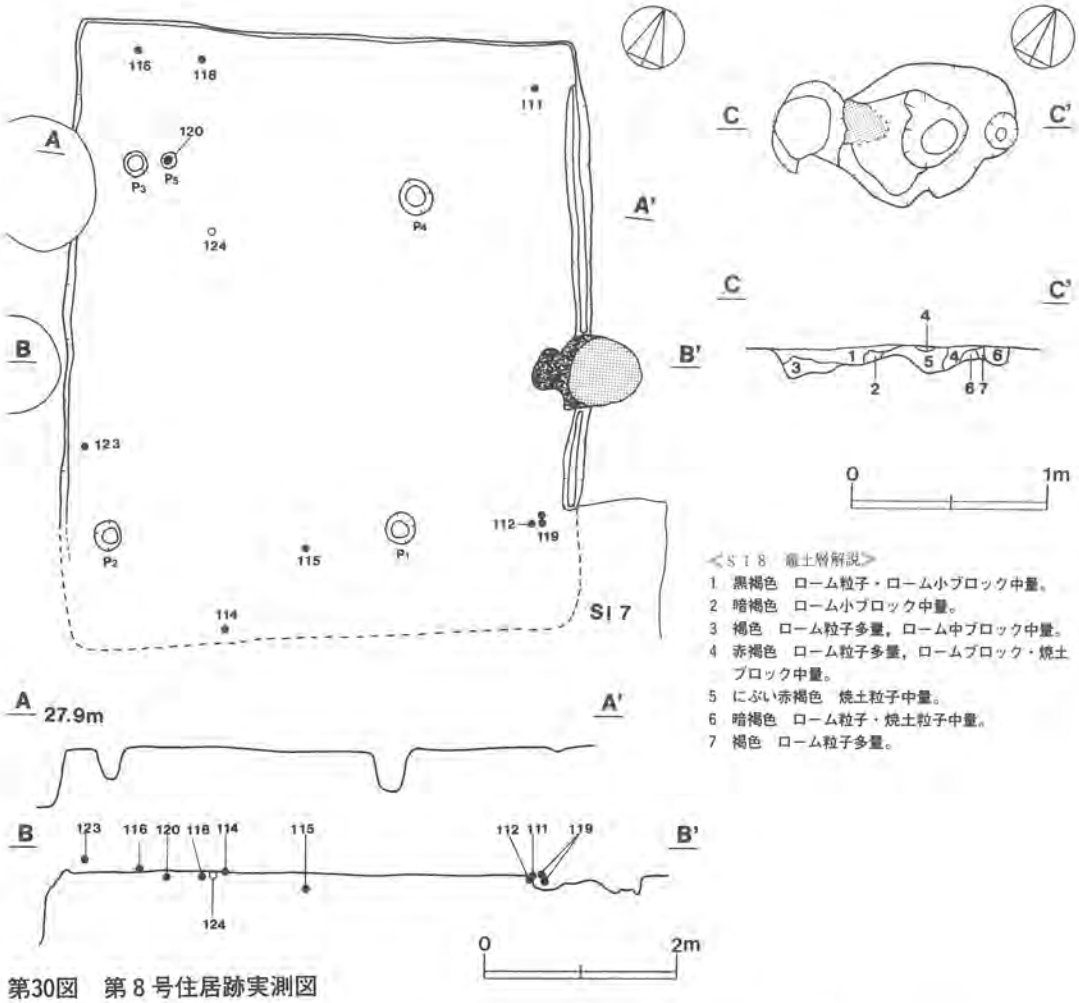
竈　北東壁の中央部付近に付設されており，北東壁外に52cm程張り出している。天井部・袖部等は既に削平され，僅かに火床部が残存する程度である。火床は床面を4～16cm程掘り窪めたもので，凸凹状を呈し，良く熱を受けレンガ状に赤変硬化している。竈前面からは焼土や炭化物・灰が検出されている。

ピット　5か所。P_1～P_4(24～34×27～38×27～51cm)が主柱穴であり，台形状に配置されている。

覆土　不明。

遺物　土師器の坏・高台付坏(内黒1点含む)，須恵器の盤，球状土錘が出土している。119の土師器の高台付坏，111・112・114・116・118の土師質土器の皿，123の須恵器の高台付坏は，いずれも床面から出土したものである。

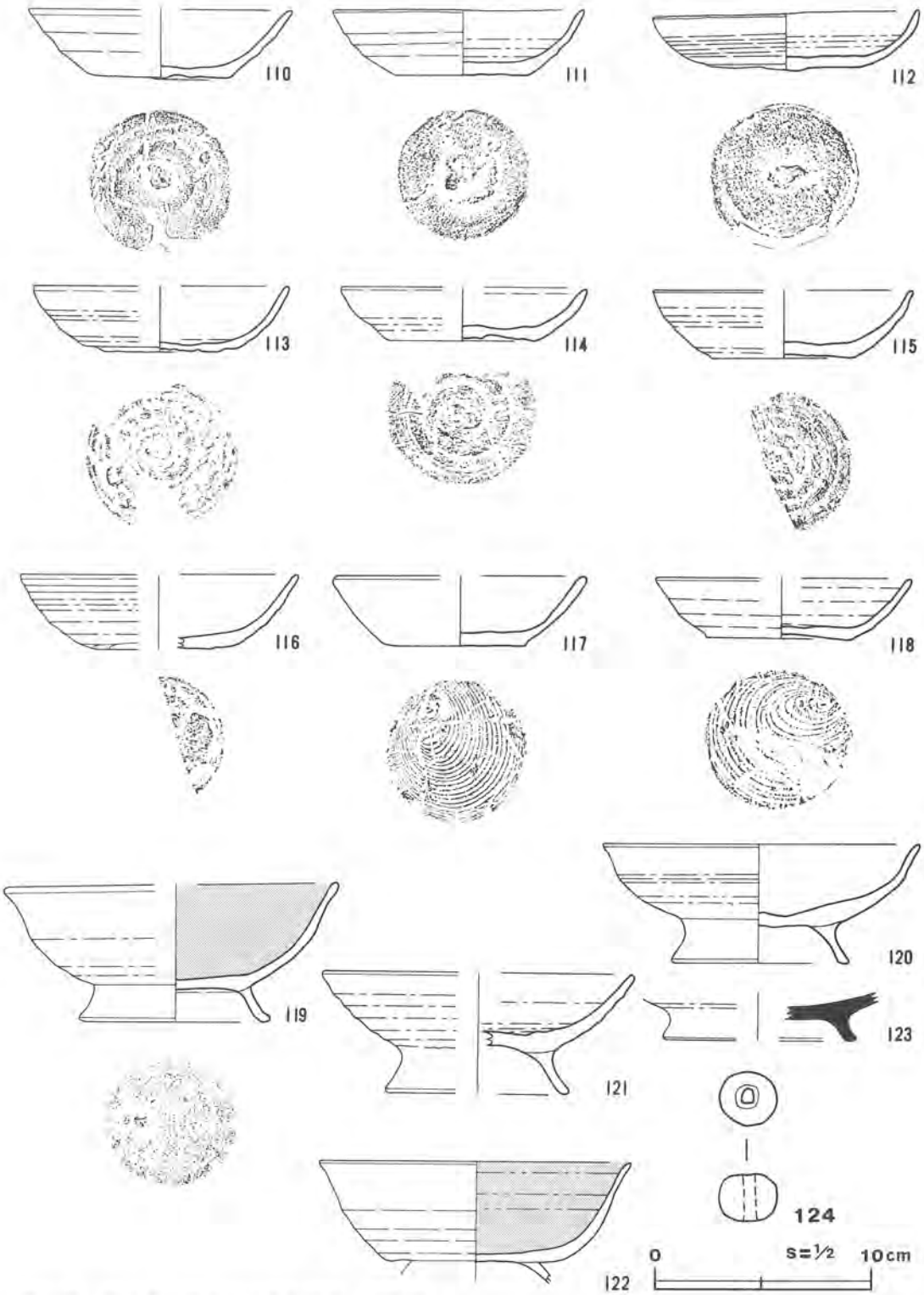
所見　出土遺物から，平安時代後期の住居跡と考えられる。



第30図　第8号住居跡実測図

出土遺物観察表（第31図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
110	Ⅲ 土師質土器	A [12.40] B 3.20 C 6.60	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P77 60% 南東側覆土
111	Ⅲ 土師質土器	A 11.60 B 3.10 C 6.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P87 90% 北コーナー部付近床面
112	Ⅲ 土師質土器	A 12.60 B 2.70 C 6.80	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。内面に煤と思われる付着物。	砂粒・雲母 橙色 普通	P88 60% 北東壁際床面
113	Ⅲ 土師質土器	A [11.90] B 3.10 C 7.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。切り離しは雑である。	砂粒 にぶい橙色 普通	P79 30% 南東側覆土
114	Ⅲ 土師質土器	A [11.20] B 2.50 C 7.00	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P89 30% 南東側床面



第31図　第８号住居跡出土遺物実測・拓影図

115	皿 土師質土器	A [11.90] B 3.20 C 6.60	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P80 35% 覆土
116	皿 土師質土器	A [12.90] B 3.50 C [6.00]	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り後ヘラ削り。体部下端手持ちヘラ削り調整。	砂粒 橙色 普通	P92 25% 北西壁際床面
117	皿 土師質土器	A [11.80] B 3.20 C 6.50	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 赤色 普通	P78 60% 南東側覆土
118	皿 土師質土器	A [11.90] B 2.90 C 6.70	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P90 30% 北西壁際床面
119	高台付坏 土師器	A [15.60] B 6.50 D 8.90 E 1.80	平底で，「ハ」の字状に開く高い高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は緩く外反し，端部に丸味を持つ。水挽き成形。貼り付け高台。底部回転糸切り。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 内―黒色 外―橙色 普通	P86 45% 北東壁際床面
120	高台付坏 土師器	A 14.60 B 5.60 D 8.00 E 1.70	平底で，「ハ」の字状に開く高い高台が付く。体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で緩く外反する。水挽き成形。貼り付け高台。体部外面に煤付着。	砂粒・雲母 橙色 普通	P85 80% 覆土
121	高台付坏 土師器	A [14.30] B 5.60 D [8.30] E 2.00	平底で，「ハ」の字状に開く高い高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P76 40% 覆土
122	高台付坏 土師器	A 14.40 B (5.70) E (1.00)	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で緩く外反する。水挽き成形。貼り付け高台。内面ヘラ磨き。黒色処理。内外面とも摩滅している。	砂粒・石英・雲母 内―黒色 外―にぶい橙色 普通	P75 90% 覆土
123	高台付坏 須恵器	B (2.30) D [8.80] E 1.00	平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がり，「ハ」の字状に開く高台が付く。水挽き成形。底部回転ヘラ削り。貼り付け高台。	砂粒・石英 灰色 良好	P91 20% 南西壁際床面

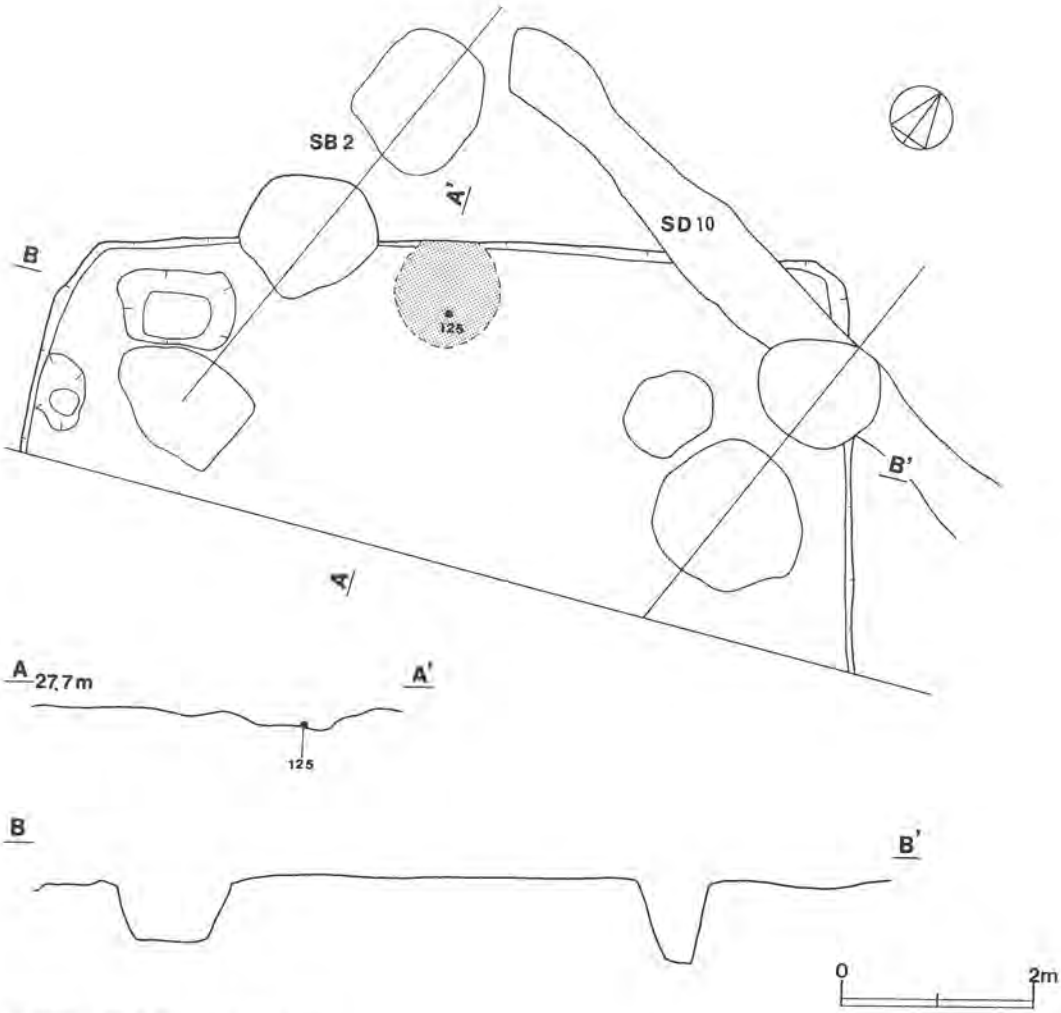
遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
124	球状土錘	1.5	2.9	2.7	5.0	4.0	100	床面	DP44 両方向から穿孔

第9号住居跡 {旧SI10（第32図）}

位置 調査区の東側B3g8区に位置する。

重複関係 北東コーナー部を第10号溝，床面及び壁を第2号掘立柱建物跡によって掘り込まれている。

規模と平面形 本跡の南東側三分の二程が調査区外に存在するため，規模・形状については不明であるが，調査区内から検出された壁や竈の状況から，一辺8m前後の方形状を呈する住居跡と推定される。



第32図　第9号住居跡実測図

主軸方向　N-36.5°-W前後と推定される。

壁　僅かに5cm程残存しているにすぎず，緩い傾斜で立ち上がり，全体に遺存状態が悪い。

床　ほぼ平坦であるが，全体に軟弱であり，竈前面に僅かに硬化面が認められる程度である。

竈　北西壁中央部に付設されているが，竈の大部分は既に削平され，さらに中央部が攪乱を受けているため，両袖の一部と火床が僅かに残存しているにすぎない。袖は白色粘土・砂で構築されており，残存する火床はレンガ状に赤変硬化している。

ピット　不明。主柱穴が配置されていたと想定される箇所が，いずれも第2号掘立柱建物跡の柱掘方によって掘り込まれているため，主柱穴の存在については不明である。

貯蔵穴　竈の南西側に当たる北西コーナー部に設けられており，1.18×0.78mの長方形状を呈し，70cmの深さに掘り込まれている。底面は平担で断面形は逆台形状を呈する。

覆土　暗褐色を呈する覆土が僅かに数cm程の厚さで堆積しているにすぎず，覆土の堆積状況に

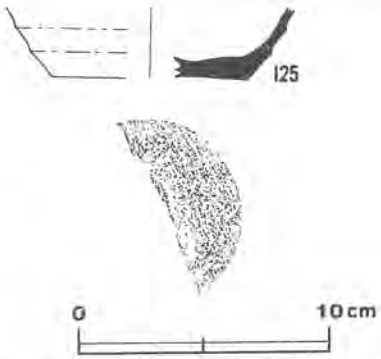
出土遺物観察表(第33図)

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
125	坏 須 恵 器	B (2.90) C [7.80]	平底で，体部は直線的に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。体部下端回転ヘラ削り調整。	砂粒・雲母 灰色 普通	P93 15% 覆土

ついては不明である。

遺物　須恵器の坏片(125)1点，土師器の甕の底部片2点が出土している。

所見　遺存状態が悪く，大半が調査区外となっているため，不明な点が多いが，住居跡の推定規模や形態，出土遺物等から平安時代の住居跡と推定される。



第33図　第9号住居跡出土遺物実測・拓影図

2　掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は4棟検出されており，その内の3棟(第1～3号)は，古墳時代後期及び平安時代の竪穴住居跡が検出された調査区の東側(B3区)の台地上に，残る1棟(4号)は中世から近世にかけて墓域が形成され，近世に屋敷が存在していたとの伝承のある調査区の西側(C2区)の台地上に位置している。出土遺物や重複遺構との関連等から，前者は平安時代後期またはそれ以降，後者は中世から近世にかけての遺構と考えられる。しかし，これらの掘立柱建物跡の規模や時期については，第2号・第4号の2棟の掘立柱建物跡の一部が調査区外に存在することや，遺構に伴う出土遺物が少ないこと等から，検討の余地を残している。

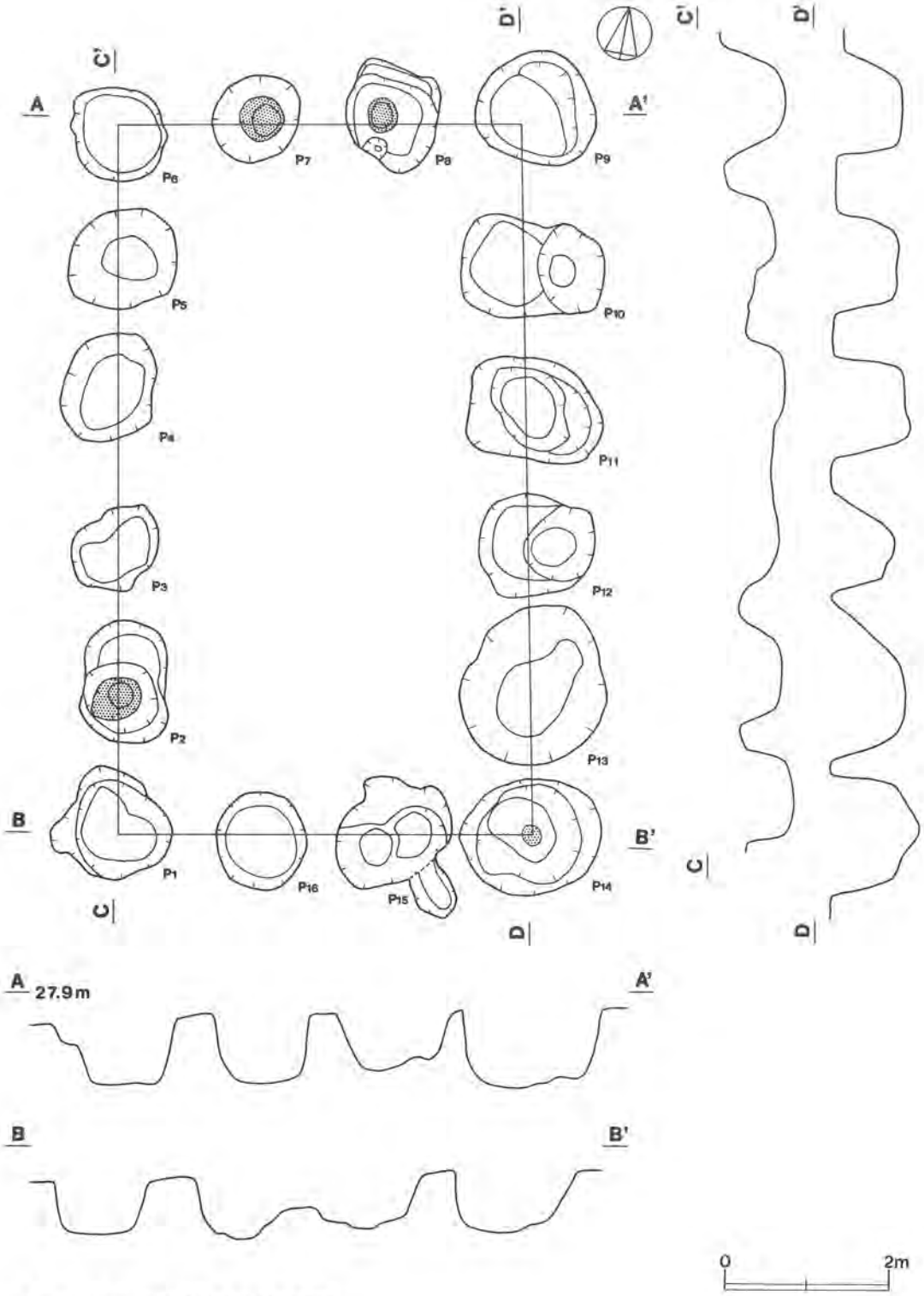
第1号掘立柱建物跡（第34図）

位置　調査区の北東側B3c9区を中心に確認されたもので，本跡の南西側7m程に位置する第2号掘立柱建物跡，西側10m程に位置する第3号掘立柱建物跡の2棟と棟通りがほぼ一致する。

重複関係　本跡の柱掘方は東側に位置する第7号，第8号住居跡の2軒を掘り込み，西側では柱掘方の上位を第8号，第9号の両溝によって掘り込まれている。

規模　南北5間(約9.08m)×東西3間(5.14m)の南北棟の建物であり，柱間寸法は桁行が1.7～2.0m，梁行が1.4～1.7mである。柱掘方は規模・形状とも様々であり，2.60×1.70～1.16×1.14m程の不定形，円形，楕円形状を呈する。柱痕跡はP_2・P_7・P_8・P_{14}の底面で確認されており，径26～40cm，深さ49～108cmを測る。

覆土　柱掘方内覆土には，ローム粒子やロームブロックが混入する硬く締まった褐色土や暗褐色土が観察され，P_{13}やP_{14}のように褐色土，暗褐色土が帯状に交互に堆積するものも見られることから，簡単な版築が行われたものと思われる。



第34図　第１号掘立柱建物跡実測図

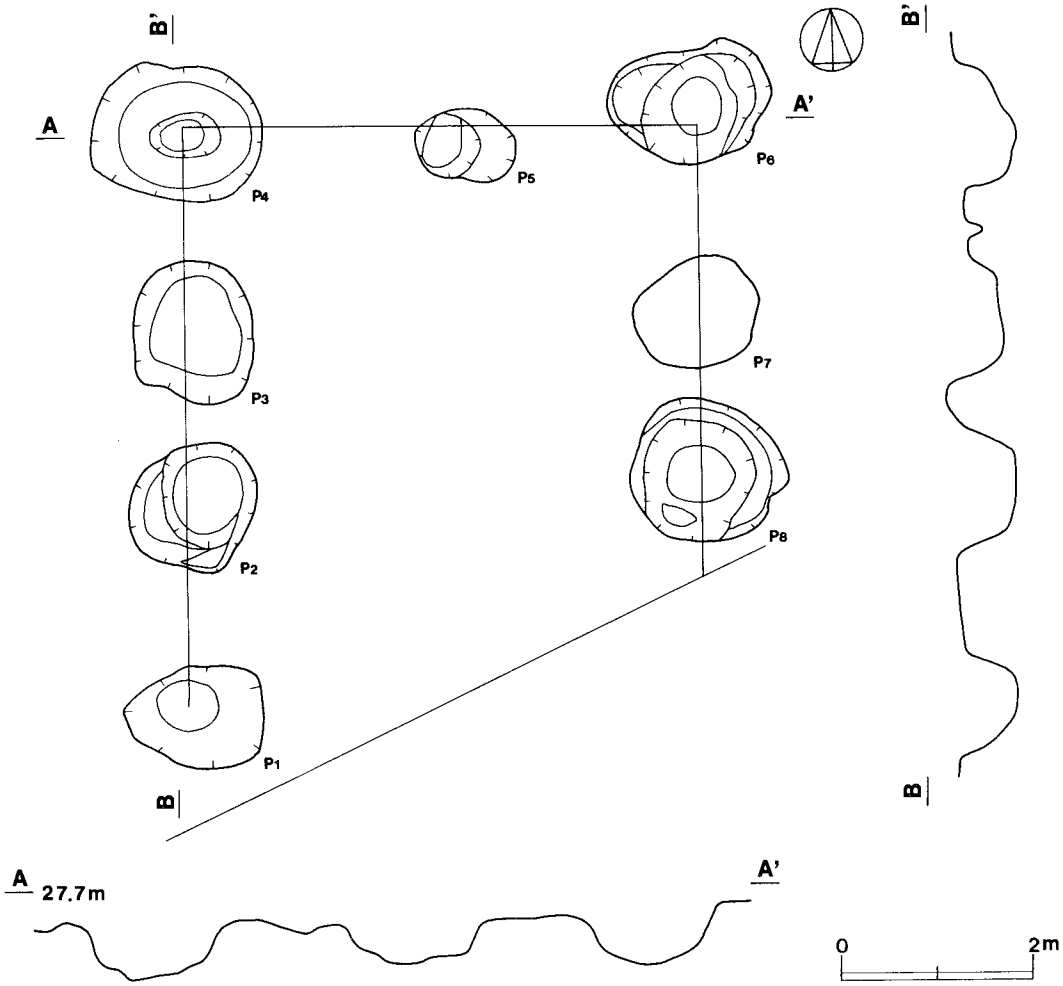
遺物　柱掘方内覆土から縄文式土器片4点，弥生式土器片3点，土師器片79点(高台付坏，坏－墨書土器片を含む)，須恵器片45点(坏，多孔式の甑底部片，蓋，台付盤を含む)，不明金属製品1点が出土している。

所見　出土遺物や重複遺構との関連等から，本跡は平安時代後期またはそれ以降に属するものと推定される。

第2号掘立柱建物跡（第35図）

位置　調査区の東側B3g8区を中心に位置し，本跡の南側は一部調査区外に存在する。

重複関係　本跡は第9号住居跡(平安時代)の上面に構築されており，本跡の柱掘方の一部は，その上位を第9号，第10号溝によって掘り込まれている。



第35図　第2号掘立柱建物跡実測図

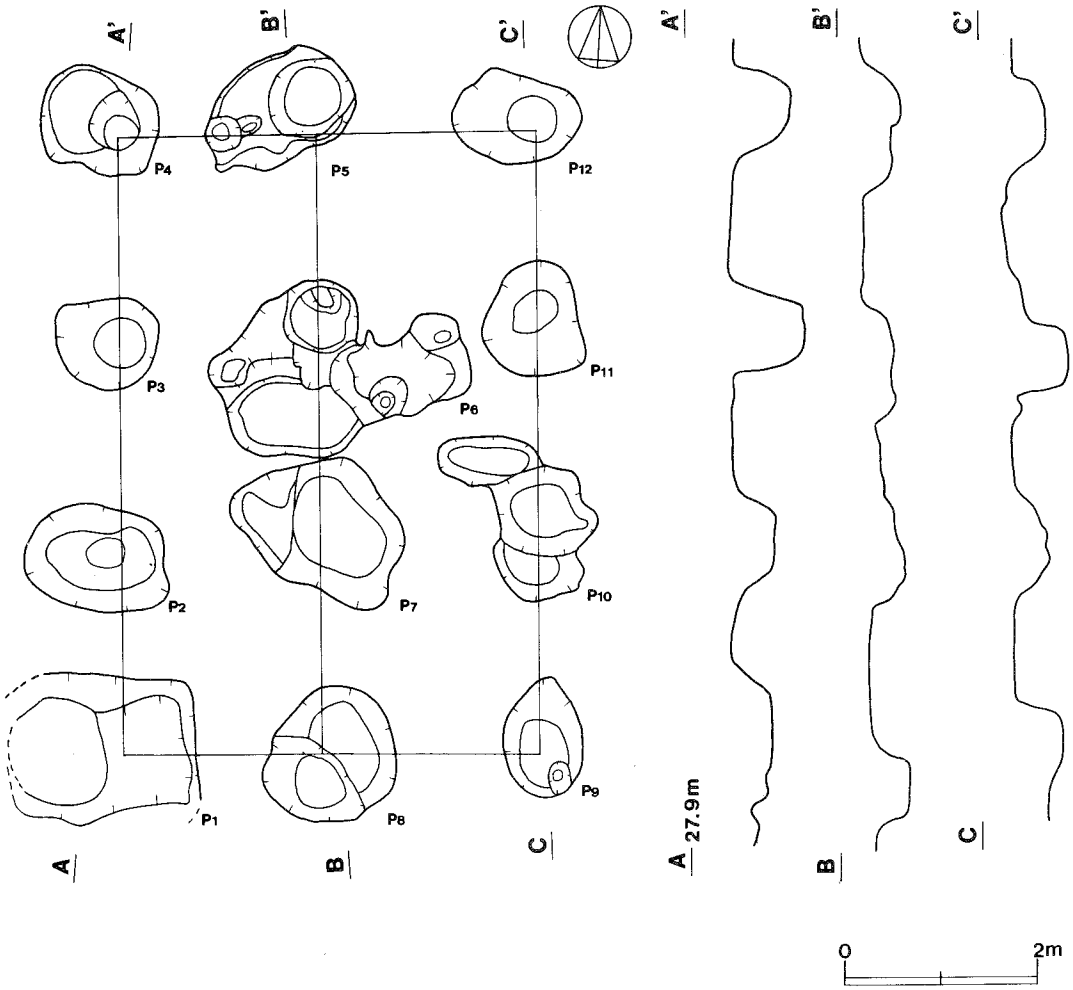
規模　本跡の南側は調査区外となっているため不明であるが，南北3間(約6.10m)×東西2間(約5.5m)の南北棟の建物と推定され，柱間寸法は桁行が約1.8～2m，梁行が約2.7～2.8mである。柱掘方は様々で，1.42×1.04～1.62×1.53m程の不定形，円形，楕円形状を呈し，深さは59～68cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

覆土　柱掘方内覆土には，ローム粒子やロームブロックが混入する締まりのある褐色土，暗褐色土が観察された。

遺物　土師器片48点(坏，高台付坏を含む)，須恵器片2点，手捏土器片(129)1点等が出土している。

所見　出土遺物や重複遺構との関連等から，平安時代後期またはそれ以降に属するものと推定される。

第3号掘立柱建物跡（第36図）



第36図　第3号掘立柱建物跡実測図

位置　調査区の北東側B3e6区を中心に確認されたものである。

重複関係　本跡の柱掘方は東側に位置する第2号住居跡(古墳時代後期)，南側に位置する第1号住居跡(平安時代)をそれぞれ掘り込んでいる。

規模　南北3間(約6.70m)，東西2間(約4.5m)の南北棟の総柱建物であり，柱間寸法は桁行が2～2.5m，梁行が2.2～2.3mである。柱掘方は規模・形状とも様々であり，1.15×1.00～1.76×1.40m程の不定形または楕円形状を呈し，深さは30～84cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

覆土　柱掘方の覆土内には，ローム粒子やロームブロックが混入する締まりのある褐色土，暗褐色土が観察された。

遺物　P_7・P_8・P_{11}の柱掘方覆土から，合わせて須恵器片2点(盤を含む)，土師器片1点が出土しているにすぎない(いずれも実測不可能)。

所見　出土遺物は少ないが，第1号住居跡との重複関係から，平安時代後期またはそれ以降に属するものと推定される。

第4号掘立柱建物跡（第37図）

位置　調査区の西端C2c2区から確認されたものであり，調査区の北東側から確認された3棟の掘立柱建物跡とは棟通りを異にする。

重複関係　不明。

規模　本跡の南側二分の一程が調査区外となっており，柱掘方も竹の根による撹乱が激しく，規模等については不明瞭な点が多い。調査区内から検出された柱掘方から推定するなら，棟通りを東西方向とする東西棟の総柱建物(東西6間；約10m)の可能性が高い。柱間寸法は桁行が1.3～1.5m，梁行は1.0～1.5m前後であり，柱掘方は規模・形状とも様々である。深さは49～97cmを測る。柱痕跡は確認できなかった。

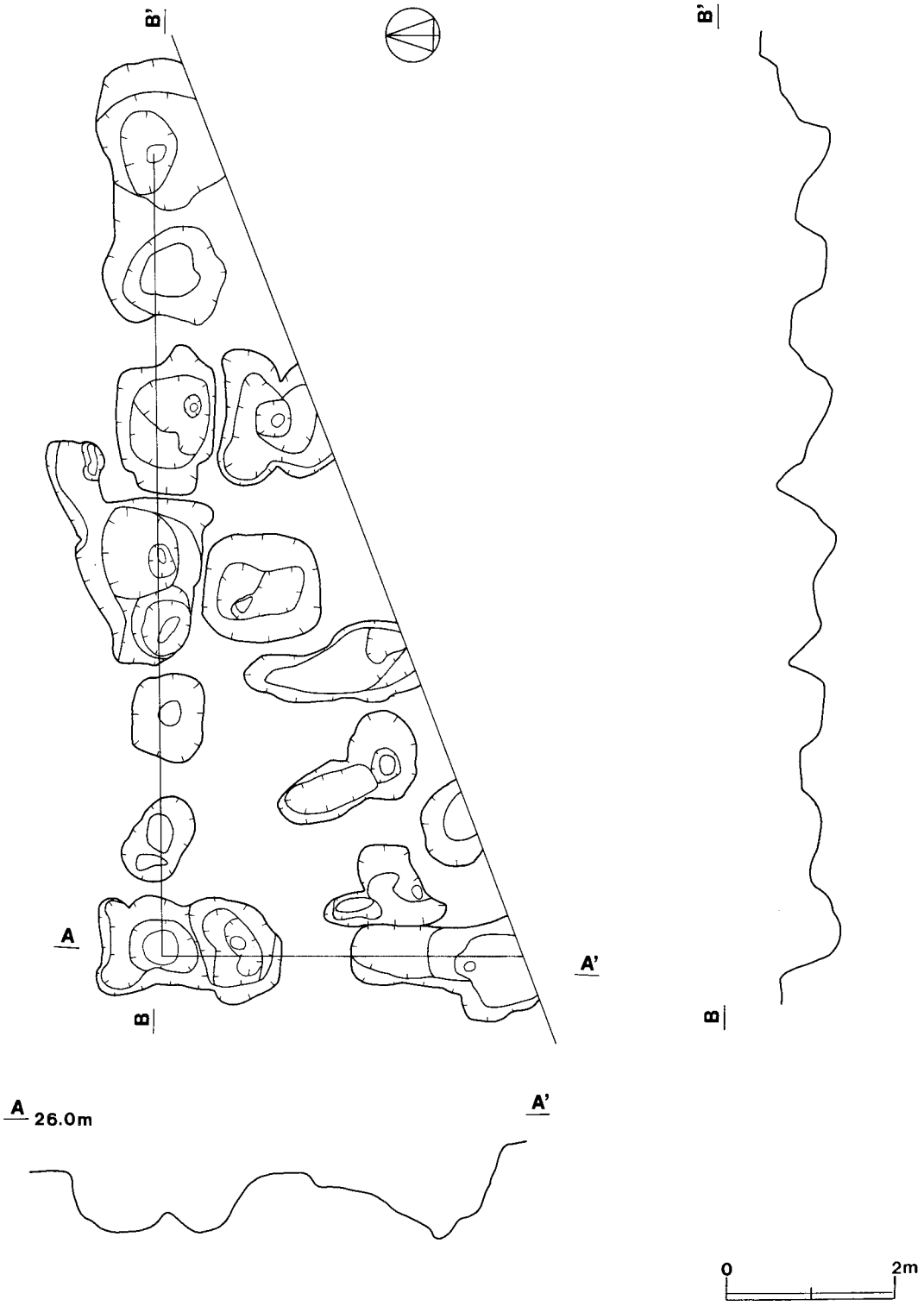
覆土　本跡は，粘土ブロックやロームブロック，ローム粒子を多量に含む褐色土や暗褐色土によって全面的に埋め戻されていた。

遺物　P_1の柱掘方内覆土から，土師質土器(皿)片3点，陶器片(131) 1点，磁器片1点が出土している。

所見　遺存状態が悪く，調査も全体の二分の一について実施しただけであり，詳細については不明であるが，出土遺物から中世末から近世前半頃に属するものと思われる。

第1号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第38図)

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
126	坏 土師器	B (1.80) C [6.30]	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。体部下端回転ヘラ削り。底部外面ヘラ調整。底部外面に墨書。	砂粒・雲母 橙色 普通	P185-A 10% 覆土



第37図　第４号掘立柱建物跡実測図

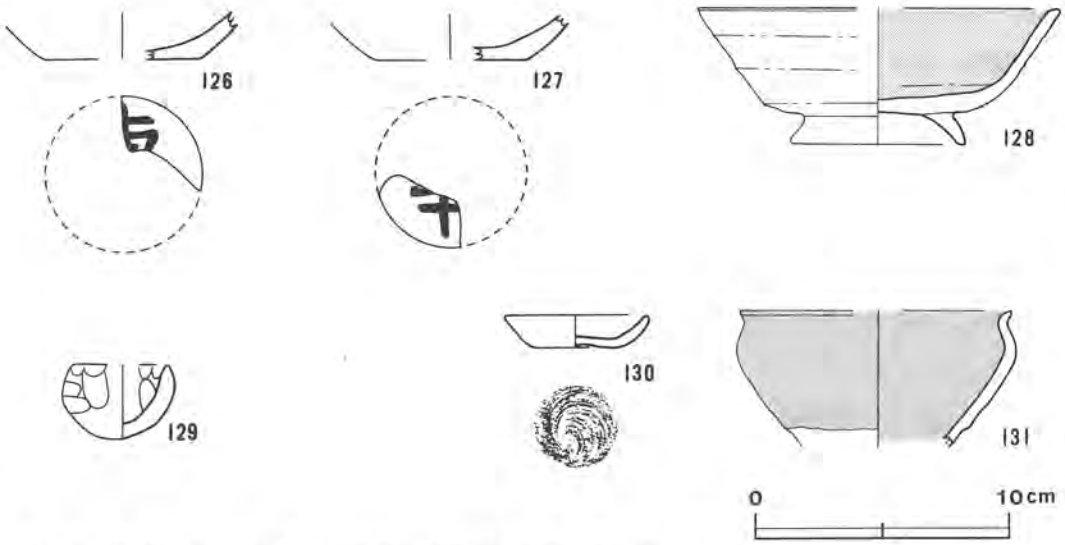
127	坏 土師器	B (1.75) C [6.00]	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。体部下端回転ヘラ削り。底部外面ヘラ調整。底部外面に墨書。	砂粒・雲母 橙色 普通	P185-B 10% 覆土
128	高台付坏 土師器	A [14.30] B 5.40 D 6.90 E 1.20	平底で，底部には「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は器厚を保ちながら直線的に外傾して立ち上がる。水挽き成形。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒 内―黒色 外―にぶい黄橙色 普通	P148 50% 旧SK121 覆土

第2号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第38図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
129	手捏土器	A [3.90] B 3.00	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は器厚が薄く内傾気味に立ち上がる。手捏。内外面に指頭痕。	砂粒・雲母 明黄褐色 普通	P166 40% 旧SK141 覆土

第4号掘立柱建物跡出土遺物観察表(第38図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
130	皿 土師質土器	A 5.50 B 2.30 C 3.40	平底で，底部外面中央がやや窪む。体部は直線的に外傾して開く。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P136 95% 旧SK55 覆土
131	椀 陶器	A [10.60] B (5.40)	天目茶椀。体部は外傾して立ち上がり，上位で内彎し，口縁部は内外面に黒褐色の釉が掛けられている。体部下半(外面)露胎。水挽き成形。	(胎土) 淡黄色 (釉) 黒褐色	P126 20% 瀬戸・美濃 旧SK55 覆土



第38図　第1・2・4号掘立柱建物跡出土遺物実測・拓影図

3　土坑

当遺跡からは，調査区の西側を中心に多数の土坑が検出されている。調査当初，土坑として番号を付した遺構数は計173基を数えるが，調査及び整理の過程で掘立柱建物跡の柱掘方，井戸，地下式壙等として分類・整理したものや，明らかに近代に属する掘り込み(芋穴等)及び撹乱・木根痕と判断し欠番としたものを除いた最終的な土坑数は105基となる。105基の土坑の内，中世から近世にかけての墓壙及び墓壙の可能性のある土坑，地下式壙，粘土貼り土坑，平安時代のフラスコ状土坑等，特徴的な土坑については種類毎に分類して記載することとし，残る土坑についてはその他の土坑として一覧表に記載した。

(1)　墓壙及び墓壙の可能性のある土坑

B2区を中心とする調査区の西側の台地からは，「コ」の字状に区画された溝(SD4)の内側から，平面形が隅丸方形や隅丸長方形状を呈し，覆土下層または土坑底面に多量の灰や焼土・炭化物が堆積する特徴的な土坑や，これらの土坑に類似する多数の土坑が複雑に重複し合った状況で検出されている。これらの土坑からは，土師質土器の皿や内耳土器，擂鉢，瀬戸の茶碗，皿，花瓶等の陶磁器片が出土しており，形状や出土遺物等から墓壙と考えられる。墓壙(墓)は数世代に亙って溝によって区画された限定された場所(墓域)に形成されたものと思われ，墓壙群を形成している。このため重複が激しく，個々の墓壙の規模や形状等が明確に捉えられたものは少なく，新旧関係について不明なものが多い。以下特徴的なものについて記載し，他は一覧表に掲載した。

A　土坑底面に灰の堆積する土坑

第19号土坑（第39図）

位置　調査区の西側B2g_7区に位置する。

重複関係　第28号土坑の覆土上層を掘り込んでいる。

規模と形状　1.76×1.28m前後の隅丸長方形状を呈するものと思われ，底面はほぼ平坦で，断面形は逆台形状を呈し，深さは最大53cmを測る。北西壁及び南西壁の上位は不明瞭である。

長軸方向　N-67°-W。

覆土　人為堆積。南西壁際及び底面に，灰や炭化物を含む締まりの弱い黒色土が6～36cmの厚さで堆積し，その上にローム粒子やローム小・中ブロックを含む締まりを帯びた褐色土が不整合に堆積している。

遺物　覆土から，底部外面に「大」の字を刻書した陶器片(132)1点が出土している。

所見　形状や覆土の状況から墓壙と考えられる。中・近世。

第32号土坑（第39図）

位置　調査区の西側B2h_6区に位置する。

重複関係　第28・37号土坑と重複するが，新旧関係については不明である。

規模と形状　南壁及び南東壁が不明瞭であるが，1.50×1.40ｍ前後の隅丸長方形状を呈するものと思われる。断面形状は逆台形状を呈し，深さは最大46cmを測る。

長軸方向　N-16.5°-W前後と推定される。

覆土　人為堆積。南東側の底面及び壁際には多量の灰，中量の焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子・炭化物を含む締まりの弱い明褐灰色土，中央底面に灰を含む締まりのある褐灰色土，北西壁際に多量のローム粒子やローム小ブロックを含む褐灰色土が堆積し，その上にローム粒子・ローム小～大ブロックを含む褐色土が堆積している。

遺物　覆土からは内耳土器片３点の他に，混入したものと考えられる土師器や須恵器の小片が各1点出土している。

所見　規模・形状は不明瞭であるが，覆土の状況から墓壙と考えられる。中・近世。

第39号土坑（第39図）

位置　調査区の西側B2g_6区に位置する。

重複関係　東側を第43号土坑，壁の周囲を多数のピット状の遺構によって掘り込まれている。

規模と形状　重複が激しく形状が崩れているが，2.10×2.00ｍ前後の隅丸方形状を呈するものと思われる。断面形は逆台形状を呈し，深さは最大43cmを測る。南西壁下に3か所，北西壁中央部・北東コーナー部に各々1か所ピットが検出されている。ピットは長径27～52cm，短径19～36cmの楕円形を呈し，底面を14～31cm掘り込んでいる。

長軸方向　N-81°-W。

覆土　人為堆積。南東壁際底面に，多量の灰・炭化粒子を含む褐灰色土・黒色土・灰褐色土が15cm程の厚さで堆積し，その上にローム粒子やローム小・中ブロックを含むにぶい褐色土及び褐色土が不整合に堆積する。中央部の覆土中・上層には，ヤマトシジミを主体とする貝が投棄(SM3)されている。

所見　本跡は形状や覆土の状況から墓壙と考えられる。また，壁際から検出されたピットは本跡に伴うものである。中・近世。

第59号土坑（第39図）

位置　調査区の西側B2h_6区に位置する。

規模と形状　2.12×1.76ｍの隅丸長方形状を呈し，南東コーナー部に不整形の張り出しが見られ

る。断面形は逆台形状を呈し，深さは最大57cmを測る。壁はほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がるが，張り出し部はなだらかな傾斜で立ち上がる。北東及び南東コーナー部，北壁及び西壁中央部に長径20～43cm，短径15～34cmの楕円形状を呈する最大26cmの深さのピットが見られる。

長軸方向　N-90°。

覆土　人為堆積。北東壁際底面に多量の灰が堆積し，下層に褐色土，中層に褐色土・明褐色土，上層に黒褐色土・暗褐色土が不整合に堆積し，覆土には多量のローム粒子やローム小ブロック，少量のローム中ブロックや粘土ブロックが含まれている。覆土中層は特に締まりを帯びている。

遺物　土師器片が4点出土しているが，いずれも混入したものと考えられる。

所見　形状や覆土の状況から墓壙と考えられる。中・近世。

第63号土坑（第39図）

位置　調査区の西側B2h_5区に位置する。

重複関係　第64号土坑の北側三分の二を掘り込んでいる。

規模と形状　南壁は第64号土坑を掘り込んで構築しており，不明瞭であるが，土層から判断可能である。平面形は2.33×1.76m前後の隅丸長方形状を呈するものと思われ，中央部及び壁際からピットが8か所検出されている。断面形は逆台形状を呈し，深さは最大40cmを測る。中央部及び壁際から検出されたピットは，長径15～50cm，短径14～36cmの円形または楕円形を呈し，北東コーナー部から検出されたピットが最も深く69cmを測るが，他はいずれも7～17cmと浅い。

長軸方向　N-86°-W前後と推定される。

覆土　人為堆積。下層から上層にかけてローム小ブロックや中ブロックを含む明褐色土，暗褐色土，褐色土が不整合に堆積し，北東コーナー部付近の底面からは多量の灰が検出されている。最上層には，住居跡の床面に類似する厚さ5～6cmの褐色の硬化面が認められた。

遺物　覆土からは内耳土器片1点とともに，混入したと考えられる土師器片，球状土錘片，勾玉が出土している。

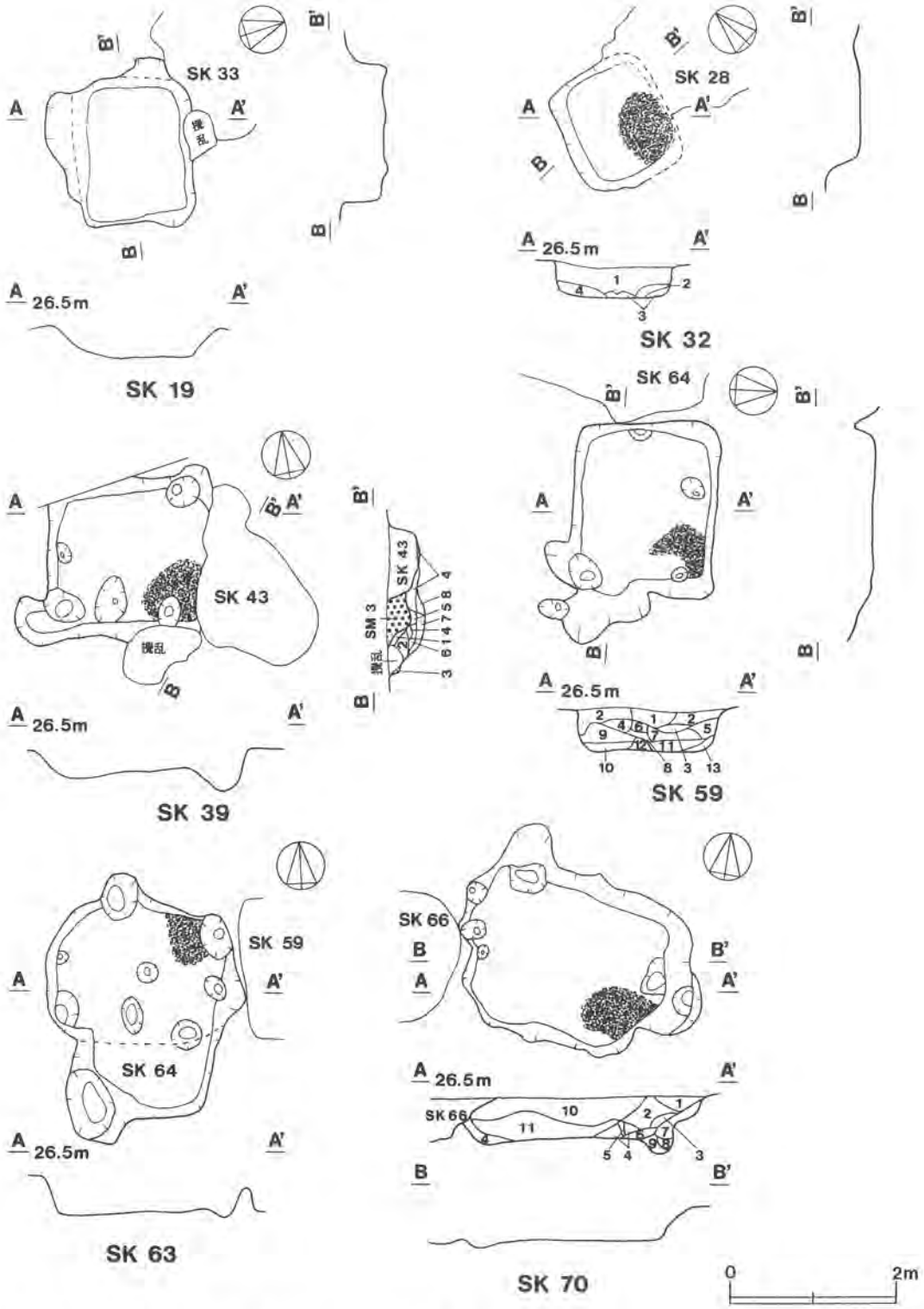
所見　形状及び覆土の状況から墓壙と考えられる。中・近世。

第70号土坑（第39図）

位置　調査区の西側B2i_6区に位置する。

重複関係　本跡の西側は第66号土坑によって掘り込まれている。

規模と形状　北西コーナー部及び南壁の一部が撹乱を受けているが，南東壁中央部に張り出しを持つ3.18×2.05m前後の隅丸長方形を呈するものと思われる。断面形は逆台形状を呈し，深さは最大55cmを測る。北西コーナー部，西壁下，南東壁下及び張り出し部に計6か所のピットが検出



第39図　墓壙及び墓壙の可能性のある土坑実測図（1）

≪ＳＫ32　土層解説≫
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。
2　褐灰色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
3　褐灰色　灰中量，焼土粒子・炭化物少量。
4　明褐灰色　灰多量，焼土粒子・炭化物中量。

≪ＳＫ39　土層解説≫
1　褐色　ローム粒子中量。
2　にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
3　明褐色　ローム粒子・ロームブロック多量。
4　褐色　ローム粒子・ロームブロック・炭化物中量。
5　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
6　灰褐色　ローム粒子・ローム中ブロック・灰中量。
7　黒色　灰多量。
8　褐灰色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。

≪ＳＫ59　土層解説≫
1　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック少量。
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
3　暗褐色　ローム中ブロック多量，粘土ブロック少量。
4　暗褐色　ローム小ブロック中量。
5　暗褐色　ローム小ブロック多量，粘土ブロック少量。
6　暗褐色　ロームブロック少量。
7　褐色　粘土ブロック多量，ローム小ブロック中量。
8　褐色　粘土ブロック多量。
9　明褐色　ローム大ブロック多量。
10　褐色　ローム小ブロック多量，粘土ブロック中量。
11　褐色　ローム小ブロック多量，粘土ブロック中量，焼土粒子少量。
12　褐色　ローム大ブロック多量。
13　褐色　ローム小ブロック少量。

≪ＳＫ70　土層解説≫
1　褐色　ローム小ブロック・焼土粒子多量。
2　褐色　ローム粒子・ロームブロック多量。
3　褐色　ローム小ブロック少量。
4　褐色　灰多量，ローム小ブロック中量。
5　褐灰色　灰多量。
6　褐色　ローム小ブロック多量。
7　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
8　褐色　ローム小ブロック多量。
9　褐色　ローム小ブロック・粘土ブロック少量。
10　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
11　褐色　ローム小ブロック・粘土ブロック中量。

されている。ピットは長径18～43cm，短径13～24cmの楕円形または不整形を呈し，深さ20～28cmを測る。

長軸方向　N-80°-W。

覆土　人為堆積。南東側底面に多量の灰が堆積し，下層及び壁際に灰やローム小ブロックを含む褐色土，中・上層にローム粒子やローム小ブロックを多量に含む褐色土や褐灰色土が不整合に堆積している。

遺物　内耳土器片2点，擂鉢片1点の他に，混入と思われる土師器片3点，須恵器片1点，球状土錘1点，管状土錘1点が出土している。

所見　形状や覆土の状況から墓壙と考えられる。中・近世。

第19号土坑出土遺物観察表（第40図）

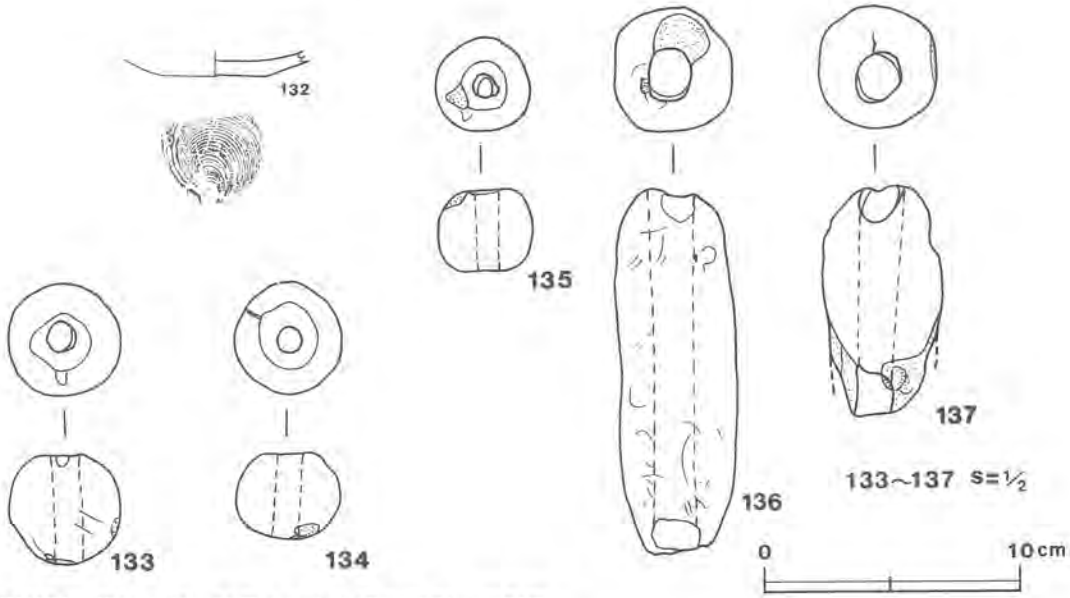
遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
132	皿 陶器	B　(0.6) C　4.0	平底で，体部は外上方に大きく開いて立ち上がる。 水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 淡黄色 普通	P247 25% 底部外面に「大」の刻書

第63号土坑出土遺物観察表（第40図）

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
133	球状土錘	2.9	3.0	3.0	8.0	22.8	100	覆土	DP47　一方向から穿孔，片面ヘラ調整
134	〃	2.3	3.0	2.8	7.0	(18.6)	98	〃	DP48　〃　〃

第70号土坑出土遺物観察表（第40図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
135	球状土錘	2.2	2.5	2.5	6.0	(13.7)	98	覆土	DP51 両方向から穿孔，上下ヘラ調整
136	管状土錘	9.7	3.3	3.2	13.0	(86.5)	95	〃	DP49 一方向から穿孔
137	〃	6.1	3.2	3.1	12.0	(47.0)	60	〃	DP50



第40図　第19・63・70号土坑出土遺物実測・拓影図

B　粘土貼りの土坑

第80号土坑（第41図）

位置　調査区の南西側B2j6区から検出されたもので，墓壙群内に位置する。

重複関係　第79号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　撹乱及び重複により，南西側は全体に遺存状態が悪く不明瞭であるが，1.31×1.10m前後の不整楕円形を呈するものと思われる。断面形は円筒状を呈し，深さは最大43cmを測る。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がり，底面及び壁際に白色の粘土を貼っている。

長径方向　N-33°-W前後と推定される。

覆土　人為堆積。円筒状の土坑を掘り込んだ後，底面及び壁に粘土を貼っている。下層及び壁際には粘土ブロックを多量に含む褐色土，その上にはやはり粘土ブロックを含む暗褐色土や褐色土が不整合に堆積している。覆土は全体に締まっている。

遺物　覆土から陶器の甕の口縁部片(138)が出土している。

所見　墓壙群内から検出されたものであり，人骨は検出されていないが，甕による埋葬形態をとった円形の土壙墓と考えられる。中・近世。

第86号土坑（第41図）

位置　調査区の南西側B2j6区から検出されたもので，墓壙群内に位置する。

重複関係　第87号土坑によって掘り込まれている。

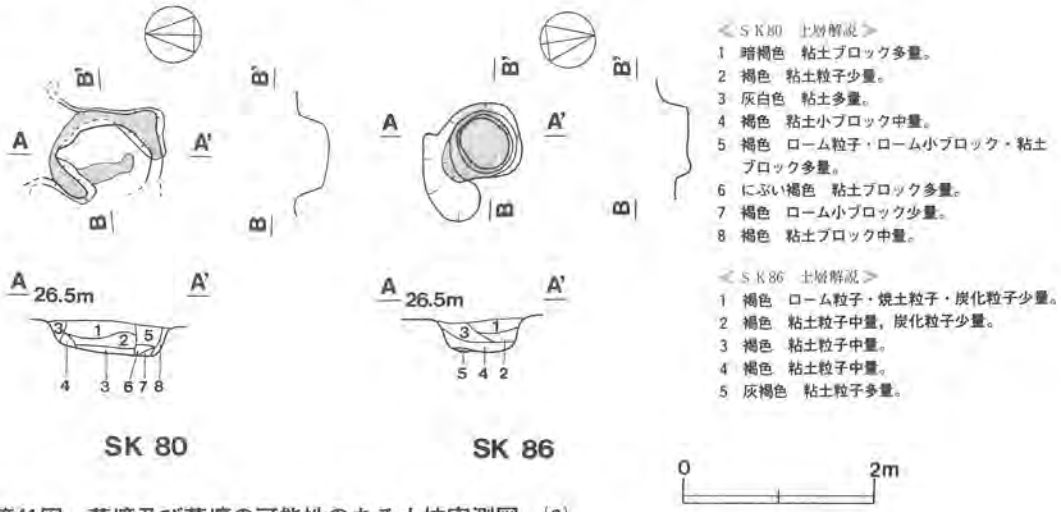
規模と形状　北東側が第87号土坑によって掘り込まれているが，0.92×0.81ｍ前後の不整楕円形を呈するものと思われる。断面形状は円筒状または逆台形状を呈し，深さは最大36cmを測る。底面は平坦で円形状を呈し，周囲に上幅10cm，深さ5～6cm程のＶ字状の溝が巡り，その外側の壁際には一段高くなった幅10cm前後の馬の背状の高まりが見られる。底面及び壁際には全体に白色粘土が貼られている。

長径方向　不明。

覆土　人為堆積。覆土下層から上層にかけて粘土粒子を多量に含む褐色土が不整合に堆積しており，上層には少量のローム粒子や焼土粒子・炭化粒子が含まれている。

遺物　覆土から，陶器の壺(139)や磁器の碗(140)，銅銭(銭の一部)が出土している。

所見　形状や覆土の状況，出土遺物等から円形の土壙墓と考えられる。中・近世。



第41図　墓壙及び墓壙の可能性のある土坑実測図　(2)

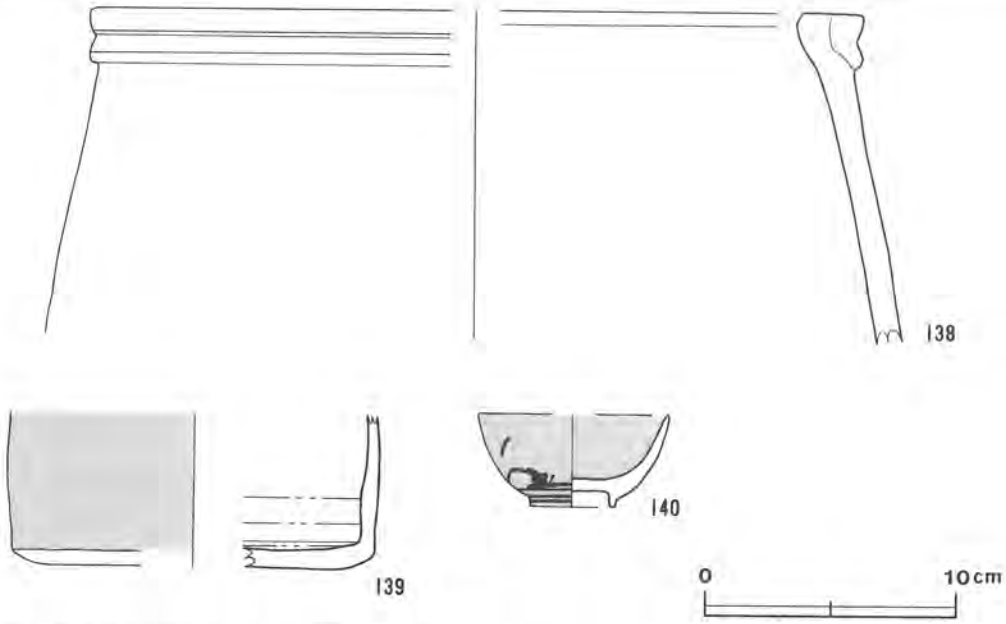
第80号土坑出土遺物観察表（第42図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
138	甕 陶器	A〔38.00〕 B（13.00）	胴上半部は内傾して立ち上がり，口縁直下には段状を呈する凸帯（貼り付け）が巡る。口唇部は幅が広く平坦である。内外面とも摩滅している。	砂粒・長石・雲母 黒褐色 普通	P131 5% 覆土

第86号土坑出土遺物観察表（第42図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
139	壺 陶器	B（6.10） C〔12.00〕	平底で，体部は直線的に上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。底部の周縁回転ヘラ削り。体部外面及び底部の周縁を除く外面に鉄釉が掛けら	(胎土)灰白色 (釉)暗赤褐色 普通	P133 10% 覆土

			れている。		
140	碗 磁　　器	A 〔7.50〕 B 3.70 D 3.40 E 0.60	高台は直立し，体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がる。体部外面に草花文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。水挽き成形。全面に釉が掛けられている。	(胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P 134 60% 覆土



第42図　第80・86号土坑出土遺物実測図

C　その他の墓壙及び墓壙の可能性のある土坑

以下の一覧表に掲載した土坑の中には，重複等により形状や規模が不明瞭なもの，遺存状態が悪く，また遺物がほとんど出土していないこと等から，時期や性格を特定することが困難なものも含んでいる。しかし，これらの土坑はいずれも墓壙を区画する第4号溝の内側から検出されたものであり，覆土の状態(いずれも人為堆積)や重複遺構との関連等から，墓壙及び墓壙の可能性のある土坑として扱ったものである。

表2　土坑一覧表(墓壙の可能性のある土坑)(第43図)

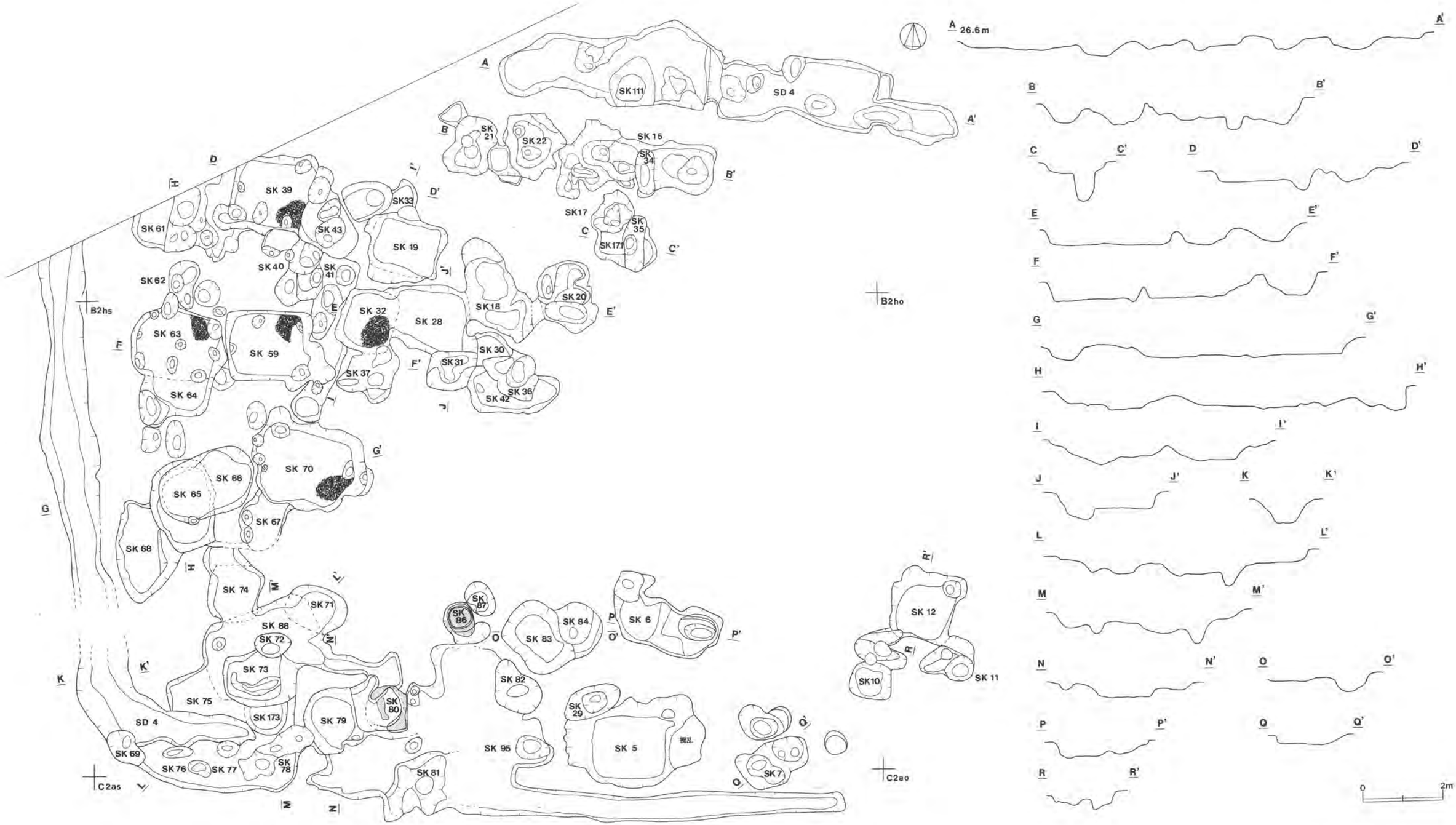
番号	位置	方　向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	断面形	覆土	ピット数	出土遺物	備考
12	B2j6	N-15.5°-E	隅丸方形状	1.74 × 1.62	24	B	人為	—		壁際・下層に炭化粒子を多く含む。北東コーナー部に径40cm，深さ20cm程の円形状のピット。
15	B2g8	(N-82°-W)	不定形	(4.00)×(1.26)	53	(B)	人為	2		長径端1の両壁際にピット，底面凸凹，SK34から切る。
17	B2g8	(N-52.5°-W)	不定形	(1.58)×(1.20)	25	(B)	不明	2		SK171→本跡→SK35。
18	B2h7	(N-26°-W)	不定形	(2.91)×(1.20)	54	(B)	人為	—		底面凸凹。
20	B2h8	(N-7°-W)	不定形	(1.96)×(1.38)	38	(D)	人為	—		底面凸凹。
21	B2g7	N-15°-E	不定形	1.46 × 0.85	62	C	人為	—	土師質土器(皿)2，球状土錘1	底面に焼土・炭化粒子。
22	B2g7	(N-5°-E)	不定形	(1.75)×(1.60)	64	(B)	人為	2	陶器片(皿)1	SK16と重複。新旧不明。

28	B2h7	N-76°-W	(隅丸長方形)	(2.28)×1.68	50	B	人為	—	内耳土器片1	本跡→SK19。SK32との新旧不明。
29	B2j8	N-66°-E	不整楕円形	(1.60)×(0.80)	62	(D)	人為	—		SK5→本跡。
30	B2h7	—	不定形	—×—	26	—	人為	—		本跡→SK31
31	B2h7	N-87°-E	(不整長方形)	1.18×0.95	74	(B)	人為	—		SK28→本跡。
33	B2g6	(N-79°-E)	不定形	(1.55)×(0.70)	54	F	人為	—		SK19と重複。
34	B2g8	N-3.5°-W	不整楕円形	1.22×0.50	81	B	人為	—		SK15・16を切る。
36	B2h7	N-65°-W	不定形	(1.50)×(1.20)	90	B	人為	—		SK42→本跡。
37	B2h6	(N-7°-E)	不定形	(1.68)×(1.27)	65	D	人為	—		SK32と重複。本跡→SK32。
40	B2g6	—	不定形	(0.90)×(0.80)	42	(D)	人為	2		底面凸凹。
41	B2g6	—	不定形	(1.80)×—	35～53	(C)	人為	2		
42	B2h7	N-84°-E	(楕円形)	2.28×(1.20)	37	B	人為	—		本跡→SK36。
43	B2g6	—	不定形	—×—	36	B	人為	1		SK39→本跡。
64	B2h5	N-17°-E	(隅丸長方形)	(2.61)×(1.68)	42	B	人為	不明	土師器片4,内耳土器片1,瓦片1	本跡→SK63。底面に焼土・炭化物。
65	B2i5	(N-12°-W)	(隅丸長方形)	2.26×1.20	53	(B)	人為	—	陶器片(皿)1	本跡→SK66。
66	B2i5	N-71°-E	(隅丸長方形)	(2.52)×1.58	55	(B)	人為	—		SK65,70→本跡。底面に灰堆積。
67	B2i6	N-20°-E	(不整楕円形)	—×1.16	44	(B)	人為	(2)	内耳土器片1,石片1	壁際にピット。
68	B2i5	(N-6°-E)	(隅丸長方形)	2.50×1.65	40	(C)	人為	—		SK65と重複。
71	B2i6	N-65°-W	(隅丸長方形)	1.51×(1.09)	38	C	人為	—		SK88と重複。
72	B2j6	N-86°-E	楕円形	0.88×0.65	95	A	人為	—		SK73→本跡。
73	B2j6	N-90°-E	隅丸長方形	1.83×1.45	62	(B)	人為	—		底面に灰。覆土下層に多量の焼土。底面に溝状の落ち込み。
74	B2i5	—	(隅丸方形)	(1.40)×1.24	30	B	人為	—		
75	B2i5	—	—	—×—	28	—	—	—		SK73・88,SD4と重複。形状・規模不明。
79	B2j6	(N-11.5°-W)	不整楕円形	1.66×(1.32)	31	(B)	人為	1	天目茶腕片1(P130)	本跡→SK80。
81	C2a7	—	不定形	(2.20)×(1.48)	54	F	(人為)	—	内耳土器片1,陶器片1(P132),磁器片(碗)2,管状土錘1(DP52)	
82	B2j7	N-29°-W	不整楕円形	1.56×(1.00)	62	(B)	—	—		
83	B2j7	N-44°-W	(隅丸長方形)	1.87×(1.50)	40	(C)	人為	—	土師器片2,須恵器片3,内耳土器片3	本跡→SK84。
87	B2i7	N-30°-W	不整楕円形	0.97×(0.70)	23	(C)	(人為)	—		底面凸凹。
88	B2j6	N-69°-W	(隅丸長方形)	(3.02)×(1.80)	(23)	(B)	(人為)	1		SK71・73と重複。
95	B2j7	N-83°-W	楕円形	0.99×0.56	57	C	—	—		
173	B2j6	—	(楕円形)	—×1.11	30	(C)	—	—		本跡→SK73。

※断面形は，A.円筒状　B.逆台形状　C.皿状　D.V字状　E.袋状　F.その他　を表す。以下同様

第21号土坑出土遺物観察表(第44図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
141	皿 土師質土器	A 6.00 B 1.30 C 4.00	平底で，体部は内面にやや丸味を持ちながら直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母 橙色 普通	P123 100% 覆土
142	皿 土師質土器	A 7.30 B 1.80 C 4.20	平底で，底部外面中央が僅かに窪む。体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・長石 橙色 普通	P124 95% 覆土


SK111
SD 4
SK 21
SK 22
SK 15
SK 34
SK 39
SK33
SK17
SK 35
SK171
SK 61
SK 43
SK 19
SK 40
SK 41
SK 62
SK 32
SK 28
SK18
SK 20
SK 63
SK 59
SK 30
SK 31
SK 37
SK 36
SK 42
SK 64
SK 70
SK 66
SK 65
SK 67
SK 68
SK 74
SK 71
SK 87
SK 86
SK 88
SK 72
SK 73
SK 83
SK 84
SK 6
SK 12
SK 82
SK 75
SK 173
SK 79
SK 80
SK 29
SK 5
SK10
SK 11
SK 69
SK 76
SK 77
SK 78
SK 95
SK 81
SK 7
SD 4
B2hs
B2ho
C2as
C2ao
26.6m
0
2m

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
143	球状土錘	3.0	3.1	3.0	9.0	(24.7)	95	覆土	DP45 一方向から穿孔,一部欠損

第22号土坑出土遺物観察表(第44図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
144	皿 陶器	A [17.80] B 4.70 D 8.00 E 1.00	延形の高台付皿。体部はほぼ直線的に外傾して開き,口唇部は外削ぎ状となっている。口縁部外面及び見込みに灰白色の釉が掛かる。水挽き成形。削り出し高台。	(釉)灰白色	P125 40% 覆土

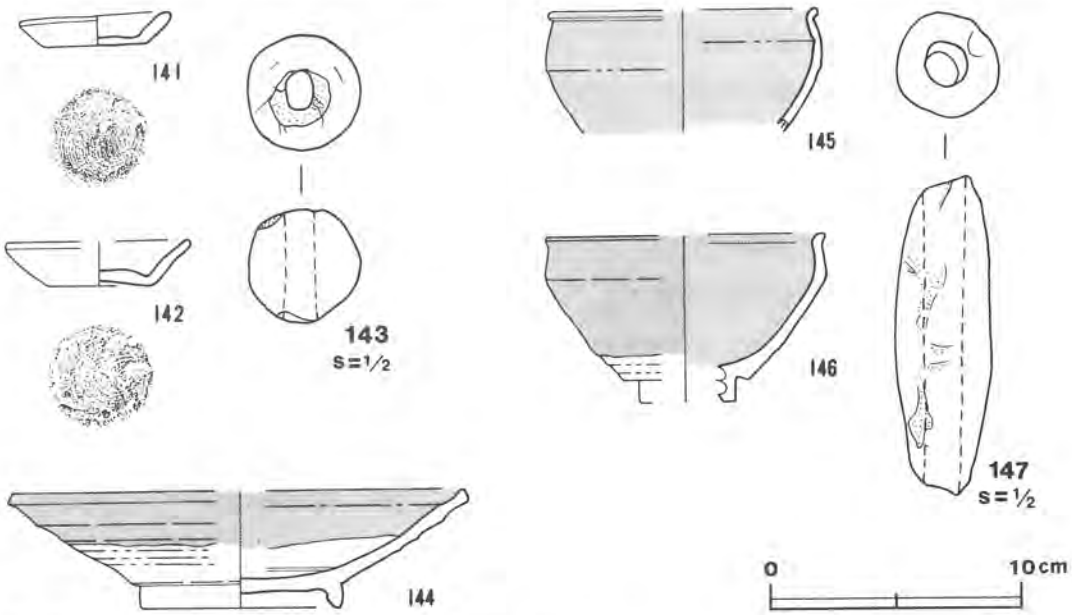
第79号土坑出土遺物観察表(第44図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
145	椀 陶器	A [10.80] B (4.90)	天目茶椀。体部は外傾して立ち上がり,上位で内彎し,口縁部は外反する。内外面に黒色の釉が掛かる。水挽き成形。	(釉)黒色	P130 30% 覆土

第81号土坑出土遺物観察表(第44図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
146	椀 陶器	A [11.10] B 6.70 D [3.90] E 1.00	天目茶椀。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり,上位で内彎し,口縁部は外反する。体部下半以下を除く全面に,黒色の釉が掛けられている。水挽き成形。削り出し高台。	(釉)黒色	P132 30% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
147	管状土錘	8.6	2.8	2.6	12.0	(48.6)	95	覆土	DP52



第44図 第21・22・79・81号土坑出土遺物実測・拓影図

(2) 地下式壙

第1号地下式壙 ｛SK60（第45図）｝

位置 調査区の北西側B2h_4区を中心に位置する。

重複関係 本跡の竪坑の壁上位を第4号溝が南北に掘り込んでいる。

規模と形状 竪坑と主室からなり，主室の天井部が一部良好に残存している。全長は5.1ｍであり，竪坑の確認面における平面形は，壁上位が第4号溝によって掘り込まれ形状が崩れているため，2.22×2.10ｍの不整円形を呈する。土層の状態や底面の形状等から想定すると，構築時には2.10×1.55ｍ前後の主室方向にすぼまる卵形に近い形状を呈していたものと思われる。壁は底面からほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がり，上位でやや外傾している。竪坑の掘り込みは砂層に達しており，確認面から底面までの深さは3.55ｍを測る。竪坑の北東側底面は一辺1.2ｍ程の隅丸長方形状を呈し平坦であるが，南西側は主室方向に逆台形状にすぼまり，馬の背状を呈しながら主室へと続いている(∽状)。主室の壁は下位から上位に向かって内傾しながら立ち上がっている。

土層から見ると天井部が良好に遺存する奥壁で底面から2ｍで天井部に達し，また確認面から天井部までの厚さは1.36ｍを測る(確認面から底面までの深さは3.36ｍ)。主室の底面の掘り込みは砂層に達しており，底面は砂を基盤として，その上に10～20cmの厚さで粘土を貼り平坦面を形成している。竪坑と主室との接続部は，底面から上位1.2ｍの位置で幅40cmと極端にせばまっているが，その位置から底面にかけてはアーチ状(∩状)となり，幅が76cm程に広がっている。

主軸方向 N-52.5°-E(竪坑の主軸は主室の主軸よりも東側に12.5°程傾く)。

覆土 覆土は72層からなり，竪坑から主室方向に向かって斜め方向に自然堆積している。中層から上層にかけては，竪坑の開口部から主室方向に向かって数度にわたり貝が投棄されている。

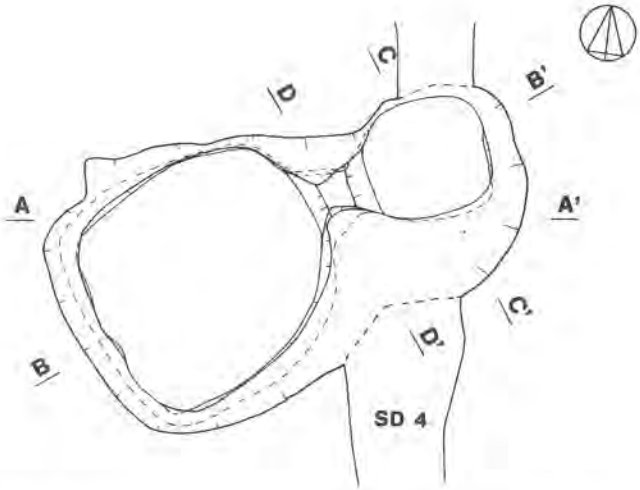
遺物 砥石(1点)や土器の細片が数点出土している。

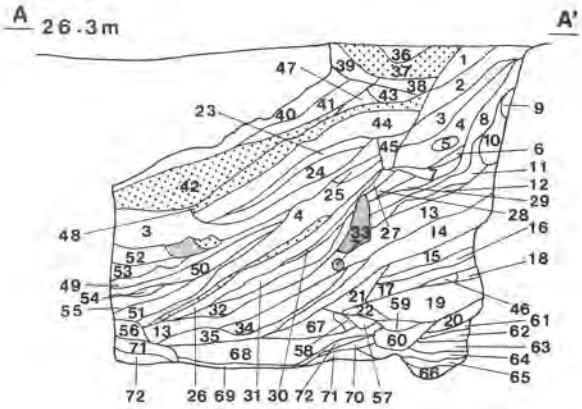
時期 中世または近世に属するものと考えられる。

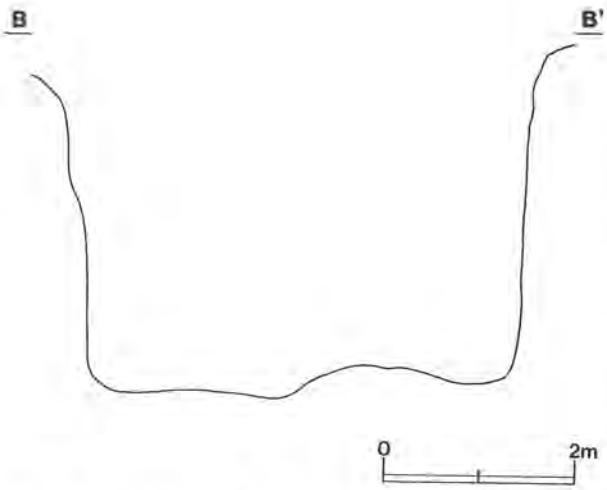
第2号地下式壙 ｛SK126（第46図）｝

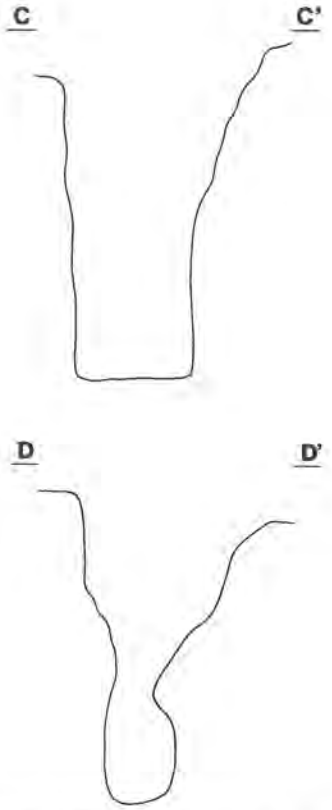
位置 調査区の北側B3c_3区を中心に位置する。

重複関係 竪坑と主室からなり，主室の北西側二分の一が調査区外となっているが，全長は3.8ｍ前後と推定される。天井部は既に崩落し残存していない。竪坑の確認面における平面形は台形状を呈するが，深さ50～60cm前後まで耕作による撹乱を受けており，本来の形状が失われている。竪坑底面が径1.08ｍ程の円形状に掘り込まれていることから，竪坑の開口部についても底面の径よりもやや規模の大きい円形または楕円形状を呈していたものと思われる。底面は皿状を呈し堅緻であり，壁は底面からほぼ垂直に立ち上がり，竪坑の確認面からの深さは1.96ｍを測る。竪坑と主室との境は底面が馬の背状に高まっており，竪坑よりも主室の方が深く掘り込まれている。









＜第1号地下式壙　土層解説＞

1	褐色	29	褐色	57	にぶい褐色
2	褐色	30	褐色	58	にぶい黄色
3	暗褐色	31	暗褐色	59	褐色
4	褐色	32	褐色	60	暗褐色
5	褐色	33	浅黄色	61	暗褐色
6	褐色	34	褐色	62	褐色
7	褐色	35	暗褐色	63	暗褐色
8	褐色	36	褐色	64	暗褐色
9	褐色	37	褐色	65	暗褐色
10	明褐色	38	暗褐色	66	浅黄色
11	暗褐色	39	褐色	67	暗褐色
12	明褐色	40	褐色	68	暗褐色
13	暗褐色	41	褐色	69	褐色
14	褐色	42	暗褐色	70	暗褐色
15	褐色	43	褐色	71	褐色
16	暗褐色	44	褐色	72	灰褐色
17	褐色	45	暗褐色		
18	暗褐色	46	灰白色		
19	褐色	47	暗褐色		
20	暗褐色	48	暗褐色		
21	褐色	49	褐色		
22	暗褐色	50	褐色		
23	褐色	51	褐色		
24	褐色	52	暗褐色		
25	暗褐色	53	暗褐色		
26	暗褐色	54	褐色		
27	褐色	55	暗褐色		
28	褐色	56	極暗褐色		

第45図　土坑実測図（第１号地下式壙）　－１

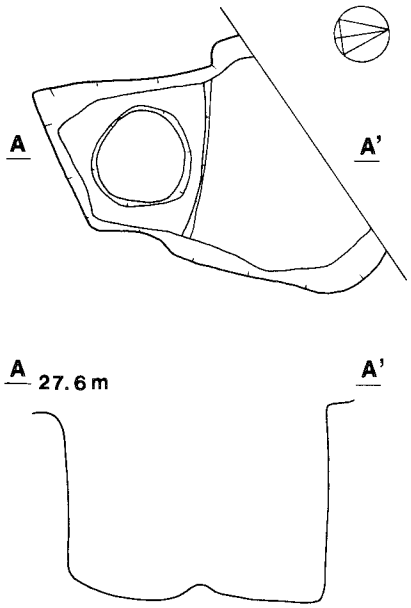
主室はさらに調査区外に広がりを見せているため，詳細については不明である。

主軸方向　N-12°-E。

覆土　覆土は27層からなりレンズ状に自然堆積している。底面や壁際には天井部や壁の崩落によって混入したと思われるロームブロックが多量に含まれている。

遺物　覆土から土師質土器片1点，内耳土器片10点，擂鉢片3点，陶器片4点等が出土している。

所見　全体の二分の一程の調査であり，遺存状態も悪く詳細については不明であるが，出土遺物から，中世または近世に属するものと考えられる。



第46図　土坑実測図（第2号地下式壙）－2

(3)　フラスコ状土坑

底面が平坦で壁が内傾して立ち上がる，所謂「フラススコ状の土坑」が，調査区の北東側を中心に5基検出されている。これらの土坑からは，土師器の坏や高台付坏，高脚高台坏，土師質土器の皿等が出土しており，いずれも出土遺物から平安時代後期頃に位置付けられるものと思われる。以下，これらの土坑について遺構毎に記載する。

第120号土坑（第47図）

位置　調査区の北東側B3d7区に位置する。

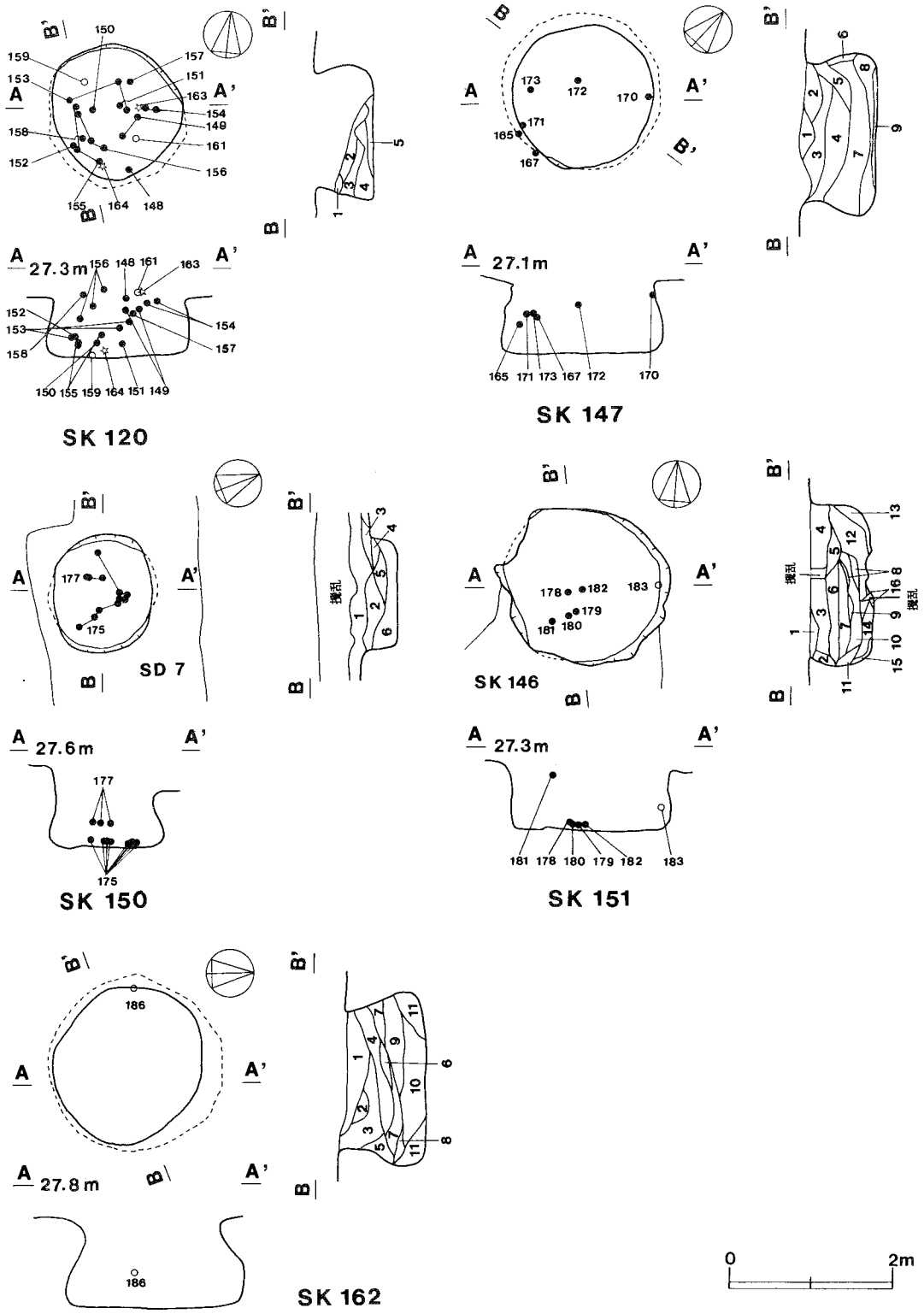
重複関係　第2号住居跡(古墳時代後期)の床面を掘り込んでいる。

規模と形状　確認面における平面形は1.64×1.52ｍの円形状を呈し，深さ75cm前後を測る。底面は1.74×1.58ｍの円形状を呈し，平坦で堅緻であり，壁は内傾して立ち上がる。

覆土　人為堆積(下層に焼土が堆積する)。

遺物　土師器の小形甕(149)，皿(150～152)，高台付坏(153～157)や土師器片，須恵器片，球状土錘(159～162)，刀子(164)，不明鉄製品(163)等が出土している。また，覆土下層からは魚骨が検出されている。

所見　出土遺物から，平安時代に属するものと考えられる。



第47図　土坑実測図（フラスコ状土坑）　－3

≪ＳＫ120　土層解説≫
1　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
2　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子少量。
3　褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック・焼土粒子少量。
4　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量，ローム大ブロック少量。

≪ＳＫ147　土層解説≫
1　明褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
2　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量。
3　暗褐色　ローム粒子中量，ロームブロック少量。
4　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
6　暗褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量。
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック中量。
8　極暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。
9　黒褐色　ローム粒子微量。

≪ＳＫ150　土層解説≫
1　褐色　ローム粒子・ロームブロック中量，焼土粒子少量。
2　暗褐色　ローム粒子・ロームブロック多量。
3　褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
4　暗赤褐色　ローム粒子多量。
5　黒褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
6　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。

≪ＳＫ151　土層解説≫
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
2　褐色　ローム粒子中量，ローム小・中ブロック少量。
3　黄褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
4　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子・ロームブロック中量。
6　褐色　ローム粒子中量。
7　褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック・焼土粒子少量。
8　暗褐色　灰多量。
9　褐色　ローム粒子中量。
10　暗褐色　ローム粒子中量。
11　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子少量。
12　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
13　褐色　ローム粒子多量。
14　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
15　褐色　ローム粒子多量。
16　極暗褐色　灰多量。

≪ＳＫ162　土層解説≫
1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，炭化粒子中量。
2　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。
3　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。
4　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
6　にぶい赤褐色　ローム粒子多量，焼土ブロック・灰中量。
7　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
8　褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック多量。
9　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
10　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。
11　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，焼土粒子少量。

第147号土坑（第47図）

位置　調査区の北東端B4b5区を中心に位置する。

規模と形状　確認面における平面形は1.84×1.74ｍの円形を呈し，深さ96cmを測る。底面は径1.95ｍ程の円形を呈し，平坦で堅緻であり，壁は内傾して立ち上がる。

覆土　自然堆積。

遺物　土師質土器の皿(165～169)，高脚高台坏(170～172)，須恵器の坏(173)，蓋(174)等が出土している。

所見　出土遺物から平安時代に属するものと考えられる。

第150号土坑（第47図）

位置　調査区の中央部B3e4区に位置する。

重複関係　中層を第8号溝によって掘り込まれ，上層を耕作により撹乱されている。

規模と形状　残存部の本跡の平面形は1.49×1.24ｍの楕円形を呈し，深さ42cmを測る。確認面からの深さは102cmである。底面は1.35×1.32ｍの円形を呈し，平坦で堅緻であり，南北壁は垂

直に，東西壁は内傾して立ち上がる。

覆土　自然堆積。

遺物　土師器の甕(175)，高脚高台坏(176・177)及び土師器片，須恵器片等が出土している。

所見　出土遺物から平安時代に属するものと考えられる。

第151号土坑（第47図）

位置　調査区の北東端B4b4区に位置する。

規模と形状　確認面における平面形は2.20×1.96mの不整円形を呈し，深さ90cmを測る。底面は1.98×1.90mの不整円形を呈し，底面はほぼ平坦で堅緻である。壁は内傾または垂直に立ち上がる。

覆土　自然堆積。中層に多量の灰を含む暗褐色土が堆積している。

遺物　土師質土器の皿(178～180)，高台付皿(182)，高台付坏(181)及び須恵器片，管状土錘(183)等が出土している。

所見　壁上位が崩れ，形状がやや異なるが，本来はフラスコ状を呈していたものと思われる。出土遺物から平安時代に属するものと考えられる。

第162号土坑（第47図）

位置　調査区の北東側B4c2区に位置する。

規模と形状　確認面における平面形は1.95×1.77ｍの円形状を呈し，深さ115cmを測る。底面は径2.10ｍ程の円形状を呈し，平坦で堅緻である。壁は底面から内傾して立ち上がり，上位で垂直または外傾して立ち上がる。

覆土　自然堆積。中層に多量の焼土粒子や中量の焼土小ブロック，灰を含むにぶい赤褐色土が堆積している。

遺物　土師質土器の皿(184)及び土師器片，須恵器片，球状土錘(185・186)等が出土している。

所見　本跡は，出土遺物や他のフラスコ状土坑との関連から，平安時代に属するものと考えられる。

第120号土坑出土遺物観察表（第48図）

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
148	甕 須恵器	A [24.40] B (8.80)	頸部は外傾して外上方に立ち上がり，口辺部は強く外反する。口縁部は下方に屈曲し，口縁端部は上方につまみ上げられている。口辺部外面にヘラ描文。水挽き成形。	砂粒 内―褐灰色 外―にぶい褐色 良好	P147 5% 覆土

149	小形甕 土師器	A [15.60] B (9.00)	胴部は内彎しながら上方に立ち上がり，口辺部で「く」の字状に外反する。胴部外面縦位のヘラ削り。口辺部内外面横ナデ。胴部内面ヘラナデ調整。	砂粒 明赤褐色 普通	P 144 10% 覆土上層
150	皿 土師質土器	A 11.00 B 2.90 C 6.00	平底で，底部は器厚が厚い。体部は器厚を減じながら直線的に外傾して立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。体部外面に指頭痕。	砂粒・石英 にぶい橙色 普通	P 141 80% 覆土
151	皿 土師質土器	A 10.00 B 2.00 C 5.50	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 142 80% 覆土下層
152	皿 土師質土器	A 11.20 B 2.20 C 6.40	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 143 50% 覆土中層
153	高台付坏 土師器	A 14.10 B (5.40) D 〔6.50〕 E (0.70)	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は僅かに外反する。水挽き成形。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。高台は大半を欠損するが，貼り付け高台。	砂粒 内―黒色 外―にぶい橙色 普通	P 138 70% 覆土中層
154	高台付坏 土師器	A [15.00] B 6.20 D 6.80 E 1.10	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は僅かに外反する。水挽き成形。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。貼り付け高台。二次焼成を受け，部分的に変色。	砂粒・雲母 内―黒色 外―明褐灰色 普通	P 139 70% 覆土上層
155	高台付坏 土師器	A [17.60] B 6.60 D 8.50 E 0.90	平底で，「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部で外反する。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。内外面ヘラ磨き。高台接合部の体部下半ナデ調整。底部内面剥離。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 140 50% 覆土中・下層
156	高台付坏 土師器	A [16.90] B 7.10 D [8.00] E 1.20	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部で外反する。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 145 30% 覆土上層
157	高台付坏 土師器	A 14.40 B 5.10 E 〔1.10〕	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は僅かに外反する。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒・石英 明黄褐色 普通	P 137 95% 覆土上層
158	高脚高台坏 土師器	B (3.90) D [9.20] E 3.10	底部に「ハ」の字状に開く高脚の高台が付く。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒・石英 浅黄橙色	P 146 20% 覆土上層

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
159	球状土錘	3.9	3.8	3.7	9.0	(46.4)	98	床面	DP55 一方向から穿孔
160	〃	2.9	3.3	3.1	7.0	(28.0)	99	覆土	DP56 〃 ,片面ヘラ調整
161	〃	2.4	2.7	2.7	7.0	(16.1)	97	覆土上層	DP57 〃
162	〃	2.3	3.0	2.9	7.0	21.8	100	覆土	DP58 〃 ,上下ヘラ調整
163	不明鉄製品	—	—	—	—	66.3	—	覆土上層	M6 7～8片の鉄製品が付着
164	刀子	20.0	1.9	0.4	—	—	80	覆土下層	M5 木質が良好に遺存する

第147号土坑出土遺物観察表(第49図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
165	皿 土師質土器	A 9.30 B 1.60 C 4.50	平底で，底部内面中央が窪み，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転糸切り。器形が全体に歪んでいる。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 172 60% 覆土中層

166	皿 土師質土器	A [8.30] B 1.50 C 5.20	平底で，底部中央に厚味を持ち，体部は直線的に外傾し大きく開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 橙色 普通	P 174 55% 覆土
167	皿 土師質土器	A 9.80 B 2.00 C 5.00	平底で，底部外面中央がやや窪み，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 170 90% 覆土中層
168	皿 土師質土器	A [9.90] B 2.30 C 6.30	平底で，底部中央に厚味を持つ。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転糸切り。内面に煤付着。	砂粒 橙色 普通	P 171 50% 覆土
169	皿 土師質土器	A [7.40] B 1.20 C 5.50	平底で，体部は直線的に外傾して開き，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転糸切り。扁平である。	砂粒 橙色 普通	P 173 50% 覆土
170	高脚高台坏 土 師 器	A 13.00 B 5.50 D 9.90 E 2.30	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は外傾して開く。底部には「ハ」の字状に開く高脚の高台が付き，高台は下位でさらに大きく開く。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒・石英 橙色 普通	P 167 90% 覆土上層
171	高脚高台坏 土 師 器	A 13.90 B 5.00 D 9.10 E 2.00	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は大きく外傾して開く。底部には「ハ」の字状に開く高脚の高台が付く。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 168 80% 覆土中層
172	高脚高台坏 土 師 器	A [14.30] B 5.70 D 9.00 E 2.80	平底で，体部は下位に張りを持ち，内彎気味に外上方に立ち上がる。口辺部は大きく外傾し，直線的に開く。底部には「ハ」の字状に開く高脚の高台が付き，高台は端部に向かって緩く外反気味に開く。水挽き成形。貼り付け高台。体部外面に強い水挽き成形痕。	砂粒 橙色 普通	P 169 70% 覆土上層
173	坏 須 恵 器	A [13.80] B 3.80 C [8.00]	平底で，体部は器厚を減じながら直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。体部下端回転ヘラ削り調整。	砂粒 黄灰色 良好	P 175 20% 覆土中層
174	蓋 須 恵 器	B (2.10) F 3.10 G 1.10	天井頂部は扁平で，中央に頂部がほぼ平担で断面が逆台形状となるつまみが付く。水挽き成形。天井頂部回転ヘラ削り調整。つまみは横ナデ調整。	砂粒・石英・雲母 にぶい黄橙色 普通	P 176 20% 覆土

第150号土坑出土遺物観察表（第49図）

遺物番号	器 種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備 考
175	甕 土 師 器	A 14.70 B 18.40 C 10.60	平底で，胴下半部は外傾して立ち上がり，胴中央部から頸部にかけて内彎しながら上方に立ち上がる。口辺部は「く」の字状に外反し，口縁部は上方につまみ上げられている。胴上半部縦位，下半部は横位のヘラ削り調整。口辺部内外面横ナデ調整。頸部内面に輪積み成形痕。二次焼成。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P 177 60% 覆土下層及び床面直上
176	高脚高台坏 土 師 器	A 14.40 B 5.70 D 8.10 E 2.00	平底で，体部は口縁に向かって器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がる。底部には「ハ」の字状に開く比較的高い高台が付く。水挽き成形。貼り付け高台。内面ヘラ磨き。内面は黒色処理されているが，二次焼成を受け一部変色している。	砂粒・石英・雲母 内―黒色・にぶい橙色 外―橙色 良好	P 187 95% 覆土中層
177	高脚高台坏 土 師 器	A [14.50] B 5.90 D 7.80 E 2.20	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部には内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部で僅かに外傾する。水挽き成形。貼り付け高台。底部は回転糸切り後ナデ調整。	砂粒 橙色 普通	P 178 60% 覆土中層

第151号土坑出土遺物観察表（第49図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
178	皿 土師質土器	A 11.00 B 2.80 C 6.30	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り後ヘラナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P179 80% 覆土下層
179	皿 土師質土器	A 10.40 B 2.60 C 5.30	平底で，体部は中位に張りを持ち，内彎気味に外上方に立ち上がる。口縁部は外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。体部下半回転ヘラナデ調整。	砂粒・石英 橙色 普通	P180 70% 覆土下層
180	皿 土師質土器	A [10.40] B 2.80 C [5.60]	平底で，体部は中位に張りを持ち，外上方に立ち上がる。口縁部は外傾して開き，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転ヘラナデ調整。	砂粒・石英 明赤褐色 普通	P181 60% 覆土下層
181	高台付坏 土師器	A 11.40 B 4.60 D 6.40 E 0.80	平底で，体部は器厚を一定に保ちながら内彎気味に外上方に立ち上がる。底部には「ハ」の字状に大きく開く短い高台が付く。水挽き成形。貼り付け高台。内外面丁寧なヘラ磨き。全面黒色処理。	砂粒・雲母 黒色 普通	P182 60% 覆土上層
182	高台付皿 土師器	A 12.20 B 2.80 D 7.10 E 1.60	平底で，体部は大きく直線的に外傾して開く。底部には「ハ」の字状に開く高台が付き，端部は外傾して開き，接地面は平坦となっている。水挽き成形。貼り付け高台。高台の接地面はヘラ削り調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P183 80% 覆土下層

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
183	管状土錘	9.0	4.1	3.8	13.0	140.2	100	覆土中層	DP64

第162号土坑出土遺物観察表（第50図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
184	皿 土師質土器	A 11.10 B 3.00 C 6.10	平底で底部中央が窪み，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。器形は全体に歪んでいる。内面に少量の煤が付着。	砂粒・雲母 淡橙色 普通	P186 100% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
185	球状土錘	2.6	3.0	2.9	7.0	(21.6)	95	覆土	DP66 一方向から穿孔
186	〃	1.5	1.7	1.7	6.0	3.7	100	〃	DP67 〃

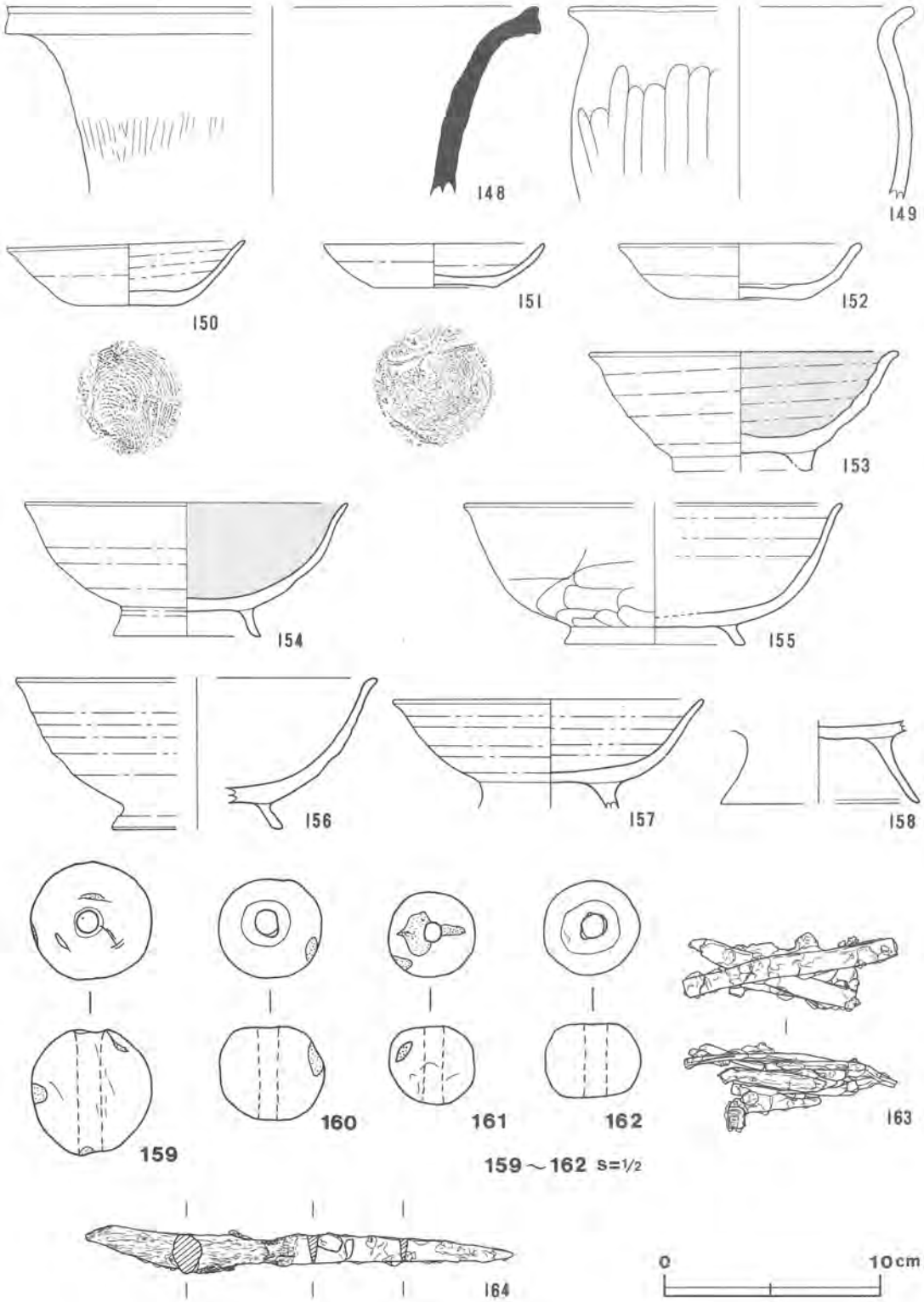
(4) その他の土坑

第5号土坑（第51図）

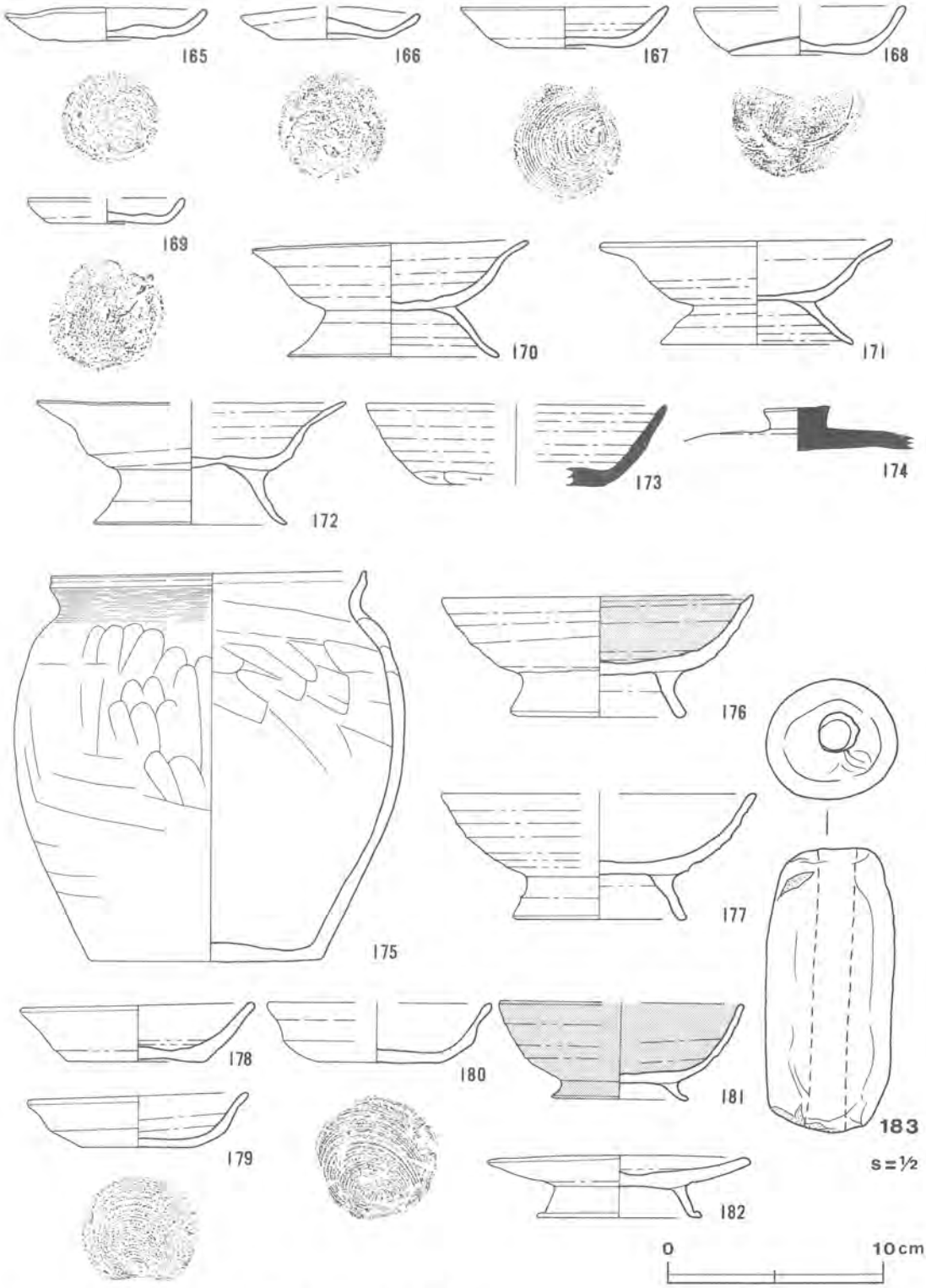
位置 調査区の南西側B5j8区から確認されたもので，墓壙群内に位置する。

重複関係 第29号土坑によって北西壁の一部が掘り込まれている。

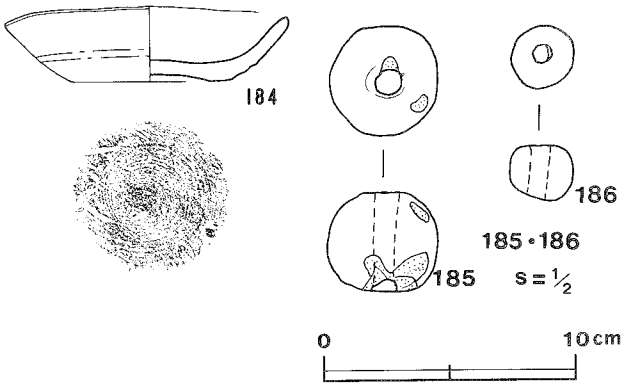
規模と形状 確認面における本跡の平面形は不定形を呈し，長軸方向は最大3.50m，短軸方向は最大2.32mを測る。底面は平坦で，1.88×1.53mの隅丸長方形状を呈し，深さは最大60cmを測る。西壁は緩やかに立ち上がるが，他は外傾して立ち上がる。断面形は概ね逆台形状を呈する。



第48図　第120号土坑出土遺物実測・拓影図



第49図　第147・150・151号土坑出土遺物実測・拓影図



第50図　第162号土坑出土遺物実測・拓影図

長軸方向　N-90°。

覆土　人為堆積。下層にローム粒子やローム小ブロック・粘土小ブロックを多量に含むにぶい褐色土，壁際にローム粒子・ローム小ブロックを含むにぶい褐色土が堆積し，その上に北方向からヤマトシジミを主体とする貝が投棄されている。さらにその上には，ローム粒子やローム小・中ブロックを含む暗褐色土，褐色土が堆積している。

遺物　中央部の覆土中・上層から，擂鉢片1点，石臼(187)1点，砥石に転用された宝篋印塔の断片(188)1点等が投棄された状態で出土している。また流れ込みと考えられる土師器や須恵器の小片も計28点出土している。

所見　本跡は墓壙群内から検出されたもので，遺物の出土状況や第8号土坑との関連から，墓壙群に伴うゴミ捨て場と考えられる。中・近世。

第8号土坑（第51図）

位置　調査区の南西側B2i9区から確認されたもので，墓壙群内に位置する。

規模と形状　1.81×1.70mの不整円形を呈する。底面は浅い皿状を呈し，北西壁は外傾して立ち上がるが，他は中段(底面から30～40cmの高さ)に幅20～30m程の平坦面を有し段状に立ち上がる。断面形は「⌣」状を呈し，深さは最大60cmを測る。

長径方向　N-35°-E。

覆土　人為堆積。底面に2～10cmの厚さで焼土や炭化物が堆積し，下層から上層にかけてローム粒子やロームブロック，焼土粒子，焼土ブロック，炭化粒子，炭化物を含む黒褐色土や褐色土，明褐色土が不整合に堆積している。覆土中・下層は締まりが弱く，上層に行くほど締まりを帯びている。

遺物　中央部の底面から覆土上層にかけて，内耳土器片8点，擂鉢片14点，土師質土器片2点，磁器片27点，石臼片7点，石皿片1点，砥石片2点等が投棄された状態で重なり合って出土している。

所見　本跡は墓壙群内から検出されたもので，覆土の状況や遺物の出土状況から，墓壙群に伴うゴミ捨て場と考えられる。中・近世。

第9号土坑（第51図）

位置　調査区の南西側C2a8区から確認されたもので，墓壙群を区画する溝(SD4)に隣接し，その外側に位置する。

規模と形状　壁及び底面には竹の根による撹乱と思われる不整形の落ち込みが多数見られ，本来の形状は既に失われており不定形を呈する。長径は最大2.31m，短径は最大1.50m程を測る。残存する壁の状況から，本来は楕円形状を呈していたものと思われる。底面は凹凸が激しいが本来は皿状に掘り込まれていたものと思われ，深さは最大22cmを測る。

方向　不明。

覆土　覆土は僅かに16cm程の厚さで残存しているにすぎないが，ローム粒子やローム小ブロックを含む黒褐色土が不整合に堆積しており，人為堆積と推定される。

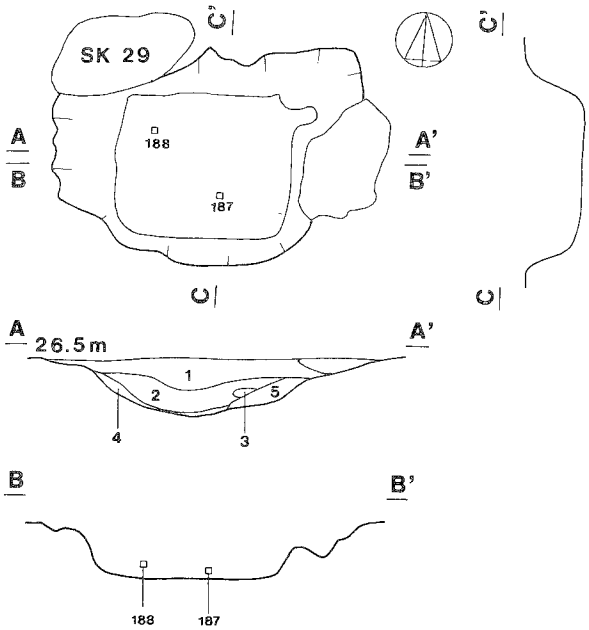
遺物　底面から内耳土器片1点，陶器片4点，砥石片11点，鎌(219)1点，煙管(220)1点が出土し，他に流れ込みと考えられる須恵器の小片が4点出土している。

所見　墓壙及び墓壙群に伴うゴミ捨て場と考えられる。中・近世。

表3　土坑一覧表(その他の土坑)（第21・52～55・73図）

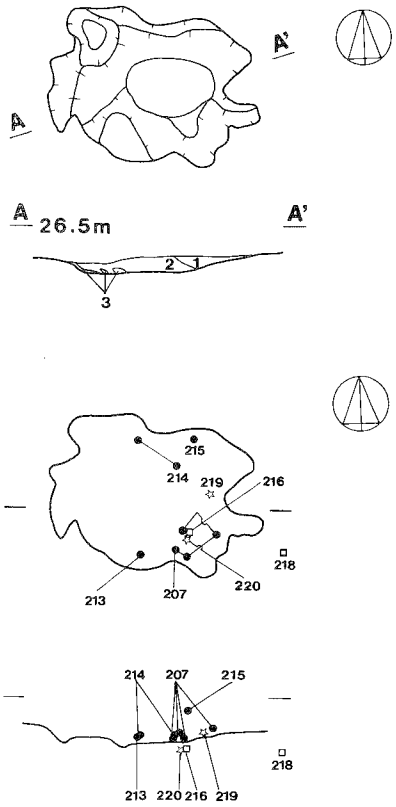
番号	位置	方向	平面形	規模 長径×短径(m)	規模 深さ(cm)	断面形	覆土	ピット数	出土遺物	備考
1	C2a3	N-61°-W	不整楕円形	1.20 × 0.86	75	(D)	自然	1		ピットは本跡より新しい。時期・性格不明。
2	C2a4	N-0°	隅丸長方形	2.02 × 0.78	110	B	人為	—	土師器片15，磁器片1	近世。
4	C2a5	N-42°-E	楕円形	1.00 × 0.75	52	C	自然	—	土師器片4	南東壁が張り出す。古墳時代後期。
6	B2j8	(N-70°-E)	不定形	(2.80)×(1.16)	20	C	不明	1(40)		時期不明。
7	B2j9	(N-54.5°-E)	不整楕円形	(1.80)×(0.96)	30～64	F	自然	—	内耳土器片4	底面凸凹。時期不明。
10	B2j9	(N-13°-E)	不定形	(1.82)×(0.70)	30～42	F	人為	—		断面W字状，SK12に伴うものか。時期不明。
11	B2j0	(N-55°-E)	不定形	(1.52)×(1.08)	45	C	人為	—		SK12に伴うものか。時期不明。
23	C2a6	—	不定形	(1.55)×(1.17)	39	C	人為	1		時期不明。
24	C2a7	(N-75.5°-W)	不定形	(0.93)×(0.42)	10	F	—	—		底面凸凹。SK23と重複。時期不明。
25	C2a6	(N-16.5°-W)	不整楕円形	(1.60)×(0.80)	32	B	—	—		時期不明。
35	B2g8	N-3°-E	楕円形	1.41 × 0.50	100	D	自然	—		SK17→本跡。時期不明。
45	C2c4	—	不定形	— × —	52	(B)	人為	—	土師器片13，須恵器片5，内耳土器片2，土師質土器片(皿)1，陶器片4，土製品1，砥石1，鎌1	1/2調査区外。時期不明。
61	B2g5	—	不定形	— × —	41	—	撹乱	—	陶器片1，砥石1(Q27)	時期不明。
62	B2g5	—	不定形	— × —	33	—	撹乱	—		時期不明。
69	B2j5	(N-56°-W)	不定形	1.09 × 0.76	58	(C)	人為	—		SD4，SK76を切る。時期不明。
76	B2j5	—	—	— × —	15	(B)	(人為)	1～2		SD4に切られている。重複激しく形状不明。(中・近世)。
77	B2j5	—	—	— × —	20	(B)	(人為)	2～3		SD4に切られている。重複激しく形状不明。(中・近世)。
78	B2j6	—	—	— × —	40	(B)	(人為)	3	土師器片2，内耳土器片10(P128・129，1点菊花陰花文)瓦片1	SD4に切られている。重複激しく形状不明。(中・近世)。

84	B2j8	—	(円　形)	1.39 ×(1.40)	36	(C)	自然	—		SK83→本跡。時期不明。
91	B3g1	N- 9° -E	(隅丸長方形)	(1.95)×(1.48)	14	C	人為	—	内耳土器片1,陶器片(擂鉢)2,管状土錘1(DP53)	底面に粘土を貼る。中・近世。
92	B3g1	—	円　形	1.38 × 1.26	30	C	人為	—		時期不明。
94	B3e5	N- 12° -W	(楕　円　形)	(2.55)×(1.88)	52	(A)	人為	—	土師器片3,陶器片1,不明 鉄塊1,管状土錘1(DP54)	SD7→本跡。時期不明。
103	B3d6	N- 67° -W	楕　円　形	1.57 × 1.40	18	F	人為	3		ピットの深さ25～63cm。時期不明。
107	B3g9	N-22.5°-E	楕　円　形	0.98 × 0.77	91	A	自然	—		SH10を掘り込む。(SH10のピットか?)
111	B2f8	N- 8° -E	不整楕円形	1.28 × 1.16	61	C	人為	—		SD→本跡。中・近世。
116	B3f5	(N-17.5°-W)	不　定　形	2.82 ×(1.48)	49	(B)	人為	1		時期不明。
118	B3g5	N-36.5°-W	不整楕円形	2.47 × 1.79	40	C	自然	4		底面凸凹。時期不明。
123	B3c6	—	不整円形	1.25 × 1.13	84	A	人為	—		時期不明。
124	B3d2	N- 21° -E	楕　円　形	1.50 × 1.17	80	A	自然	—		底面有段。時期不明。
125	B3d2	—	—	— × —	132	—	(自然)	—		大半が調査区外。地下式壙の竪坑の可能性有り。(中・近世)。
127	B4a1	N- 65° -E	(長　方　形)	— × 1.30	14	(C)	(自然)	—	弥生式土器片1,土師器片50(内,高脚高台坏1-P155),須恵器片1(蓋),土師質土器皿(P150～154),陶器片1,鉄器片1	SK128→本跡。平安時代。
128	B4b2	N- 24° -W	不整長方形	2.50 × 1.28	30	B	自然	—	土師器片54(内高台付坏片1-P156),土師質土器片(皿)1,鉄滓多数	SK160→本跡。底面に段。平安時代。
129	B4a2	(N- 40° -E)	不　定　形	(1.80)×(0.90)	21	C	(自然)	—	土師器片18,須恵器片1	古墳時代後期。
130	B4d3	N-71.5°-W	隅丸長方形	2.38 × 1.79	72	B	人為	—	土師器片11,陶器片1,鉄滓1,石1	SK131→本跡。壁際底面に多量の炭。中・近世。
131	B4d3	N- 13° -E	隅丸長方形	2.28 × 1.75	53	B	人為	—		本跡→SK130。壁際底面に粘土。(中・近世)。
132	B3f4	N- 12° -E	楕　円　形	1.84 × 0.89	85	C	(人為)	—	土師器片1(高坏脚部),土師質土器片1(皿-P157),内耳土器片3,陶器片1,管状土錘(DP60)	中・近世。
133	B3f9	—	円　形	2.06 × 1.87	73	B	人為	—	土師器片4(高脚高台坏2-P158),陶器片1	SK133→SD8。中層に焼土(厚さ20cm)。(平安時代)。
135	B4a3	—	不整円形	0.99 × 0.89	34	C	自然	—	須恵器片1,土師器片1(内黒の高台付坏-P159)	平安時代。
136	B4a3	(N- 48° -E)	不　定　形	(1.17)×(0.50)	22	F	人為	—	土師器片16(内,内黒の高台付坏3-P160,161)	平安時代。
137	B4b3	N- 52° -E	不　定　形	1.58 × —	41	(B)	人為	—	土師器片11,須恵器片1	柄鏡形。南西壁段状。(古墳時代後期～奈良・平安時代)。
139	B4c5	—	不　定　形	(1.59)×(0.75)	41	(D)	自然	—		時期不明。
140	B4d5	(N- 50° -E)	不　定　形	2.56 × —	50	F	自然	—	土師器片13(内,坏5-P163,164,165),須恵器片1	古墳時代後期。
144	B3g7	—	不　明	— × —	36	—	—	—		SD11・SB2に切られている。平安時代。
145	B4c3	—	方　形	2.44 × 2.38	45	B	自然	—	土師器片26,須恵器片5,管状土錘1(DP61)	SK172→本跡。古墳時代後期。
146	B4b4	N- 69° -E	不　定　形	(3.11)×(2.20)	38	F	自然	3	弥生式土器片1,土師器片41,須恵器片4	本跡→SK145,147。古墳時代後期。
148	B4a4	—	不整楕円形	1.68 × 1.44	41	(B)	人為	1	土師器片22,管状土錘2(DP62,63)	覆土下層・底面に灰。壁際にピット。古墳時代後期。
152	B4c3	N-7.5°-W	不整楕円形	2.75 × 1.93	37	B	人為	外2	球状土錘1(DP65),土製品1(支脚片)	外側にピット2。古墳時代後期。
160	B4b2	N-4.5°-E	不整楕円形	1.15 × 0.78	16	C	人為	—		本跡→SK128。底面に炭化物。古墳時代後期～奈良・平安時代。
161	B4c2	N- 3° -E	隅丸長方形	1.96 × 1.41	56	A	人為	1(19)		底面に炭化物・焼土。S17を切る。壁際にピット。古墳時代後期～奈良・平安時代。
166	B3f6	—	不　定　形	(1.20)×(0.70)	13	(C)	自然	—		SI1→本跡。時期不明。
170	B4e4	—	—	— × —	40	(B)	自然	—		SI5→本跡。底面に炭化材。
171	B2g8	N- 49° -E	不整楕円形	1.09 × 0.78	51	D	自然	—		本跡→SK17。
172	B4c3	N-20.5°-W	長　方　形	2.72 × 1.50	10	(B)	—	—		本跡→SK145。(古墳時代後期)。



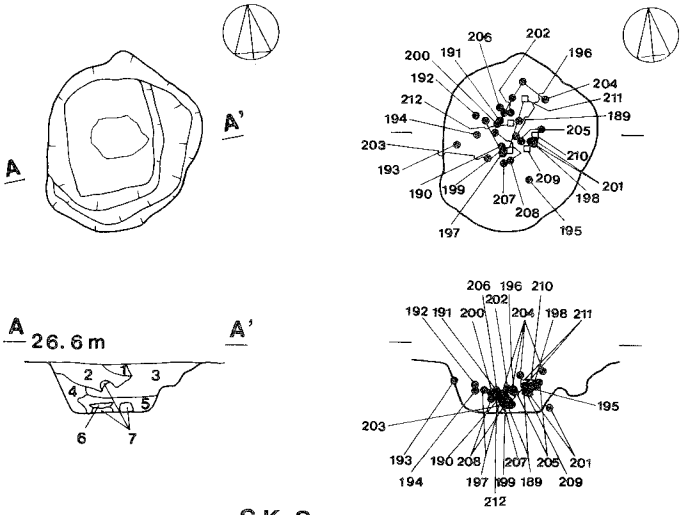
SK 5

≪ＳＫ5　土層解説≫
1　褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック多量。
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
3　暗褐色　ローム粒子・貝多量。
4　にぶい暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
5　にぶい暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。



SK 9

≪ＳＫ9　土層解説≫
1　黒褐色　ローム粒子少量。
2　黒褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量。
3　明褐色　ローム粒子少量。

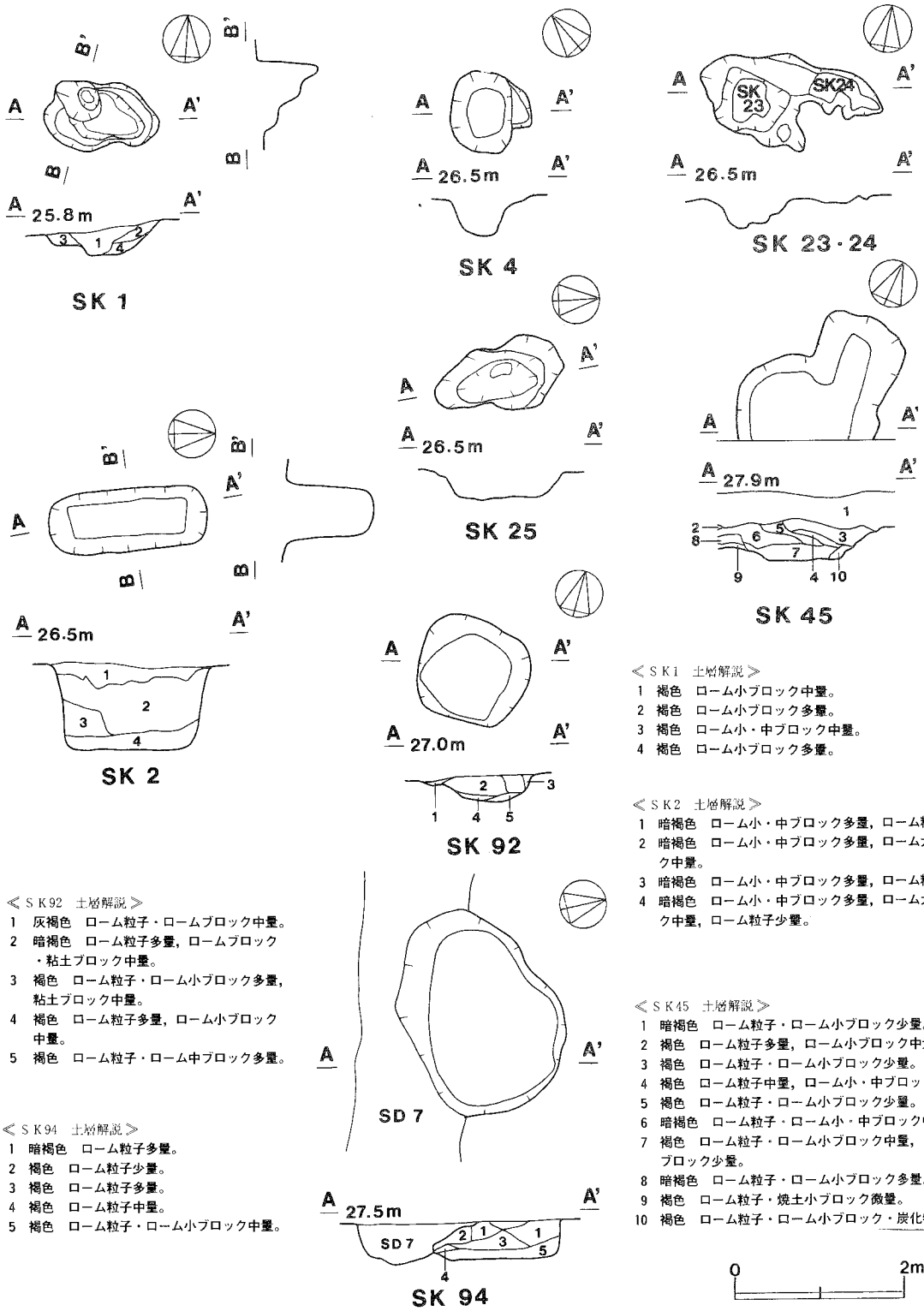


SK 8

≪ＳＫ8　土層解説≫
1　明褐色　ローム粒子多量。
2　褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量。
3　黒褐色　ローム粒子少量。
4　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
5　黒褐色　炭化粒子・炭化物多量，ローム粒子中量。
6　明褐色　ローム粒子多量，炭化物少量。
7　黒色　炭化物極めて多量，焼土粒子少量。

0　2m

第51図　土坑実測図（その他の土坑）　－4



≪ＳＫ92　土層解説≫
1　灰褐色　ローム粒子・ロームブロック中量。
2　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・粘土ブロック中量。
3　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，粘土ブロック中量。
4　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子・ローム中ブロック多量。

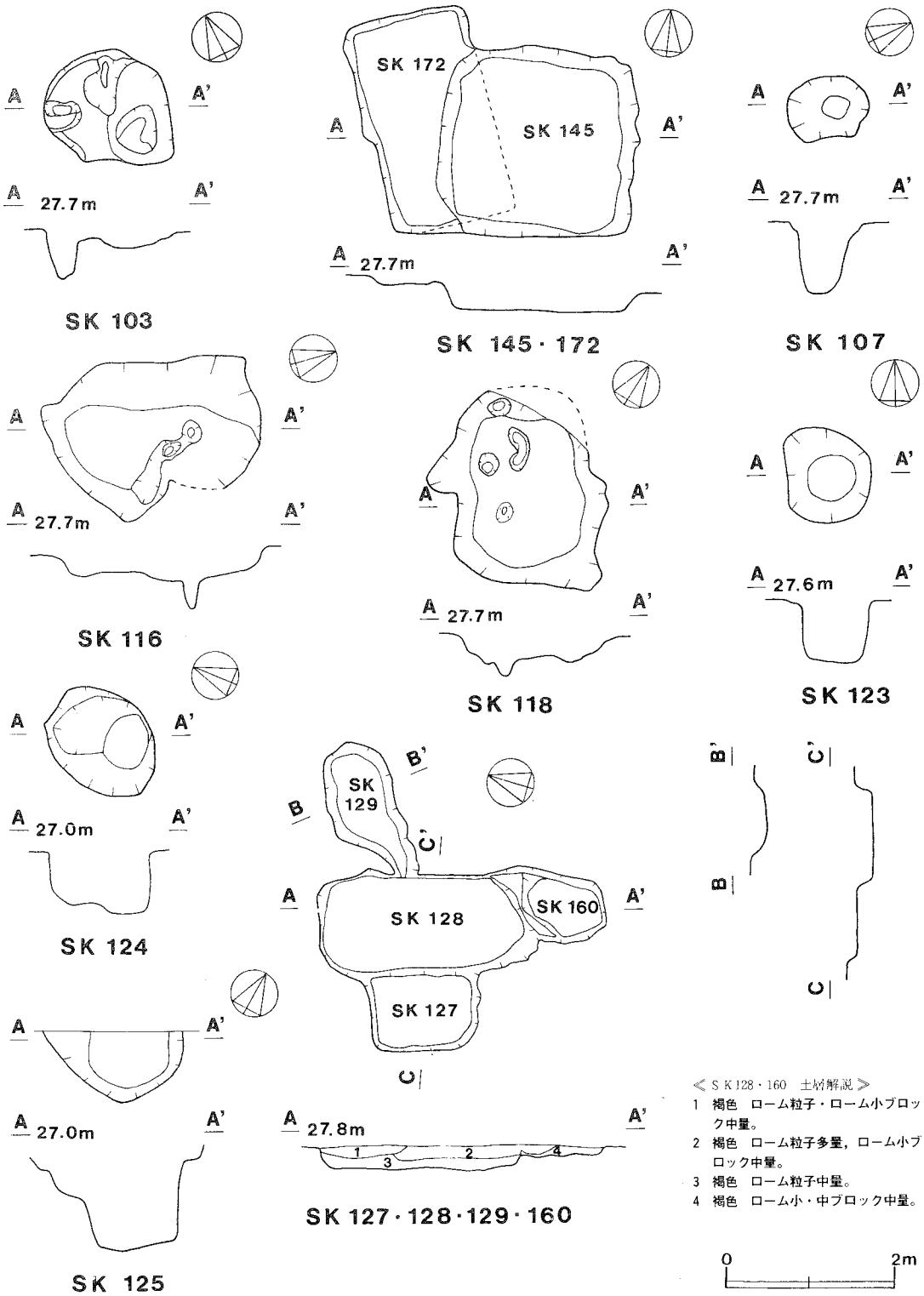
≪ＳＫ94　土層解説≫
1　暗褐色　ローム粒子多量。
2　褐色　ローム粒子少量。
3　褐色　ローム粒子多量。
4　褐色　ローム粒子中量。
5　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。

≪ＳＫ1　土層解説≫
1　褐色　ローム小ブロック中量。
2　褐色　ローム小ブロック多量。
3　褐色　ローム小・中ブロック中量。
4　褐色　ローム小ブロック多量。

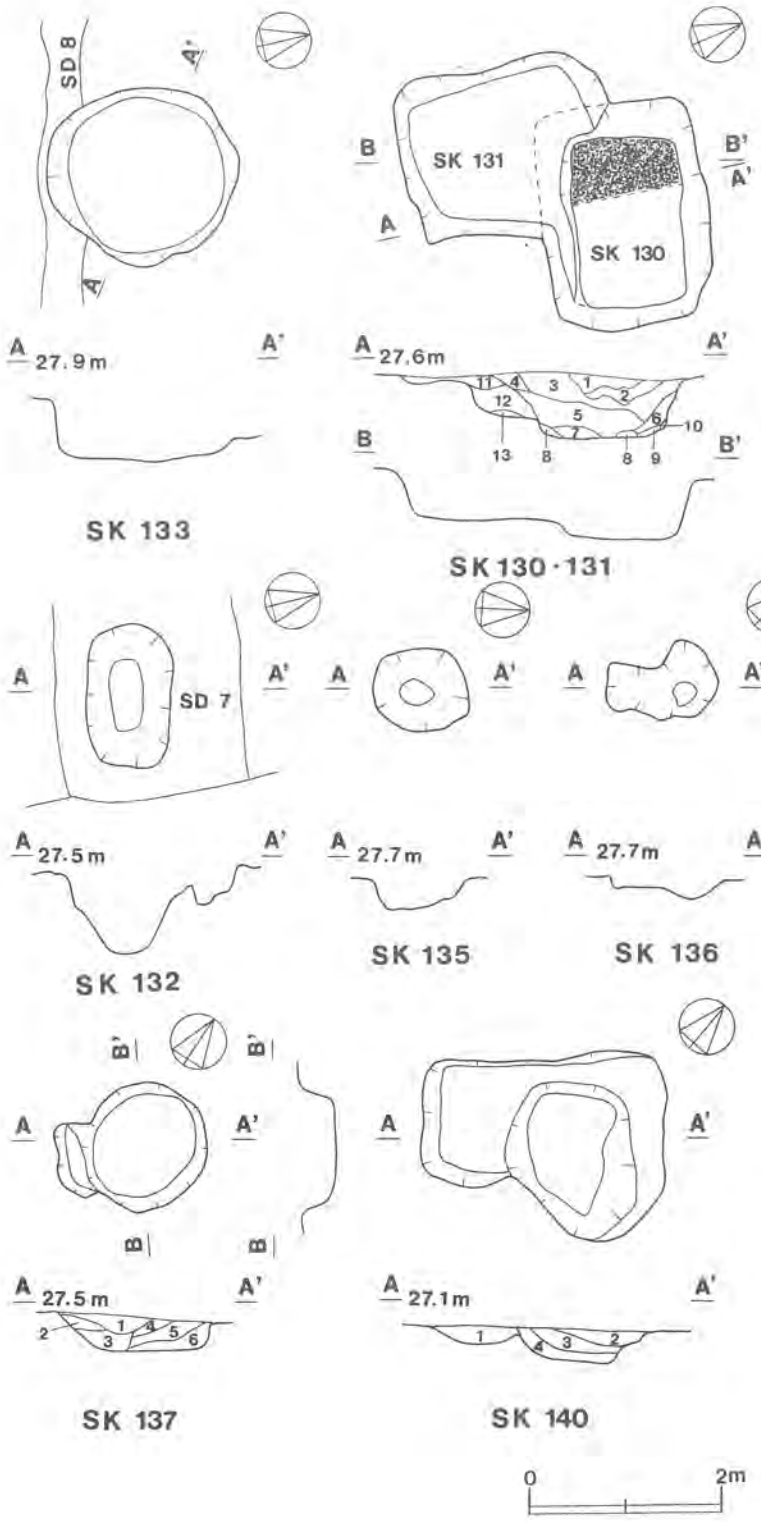
≪ＳＫ2　土層解説≫
1　暗褐色　ローム小・中ブロック多量，ローム粒子中量。
2　暗褐色　ローム小・中ブロック多量，ローム大ブロック中量。
3　暗褐色　ローム小・中ブロック多量，ローム粒子中量。
4　暗褐色　ローム小・中ブロック多量，ローム大ブロック中量，ローム粒子少量。

≪ＳＫ45　土層解説≫
1　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。
2　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
3　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。
4　褐色　ローム粒子中量，ローム小・中ブロック少量。
5　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。
6　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック中量。
7　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量，ローム中ブロック少量。
8　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
9　褐色　ローム粒子・焼土小ブロック微量。
10　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物少量。

第52図　土坑実測図（その他の土坑）　－5



第53図 土坑実測図（その他の土坑） －6



＜SK130・131　土層解説＞

1 褐色　ローム粒子中量。
2 褐色　炭化物多量，ローム粒子・ローム小ブロック中量。
3 褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
4 褐色　ローム粒子・ローム中・大ブロック中量。
5 褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
6 褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量。
7 褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
8 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物中量。
9 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物多量。
10 暗赤褐色　炭化粒子多量，ローム粒子中量。
11 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
12 褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
13 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。

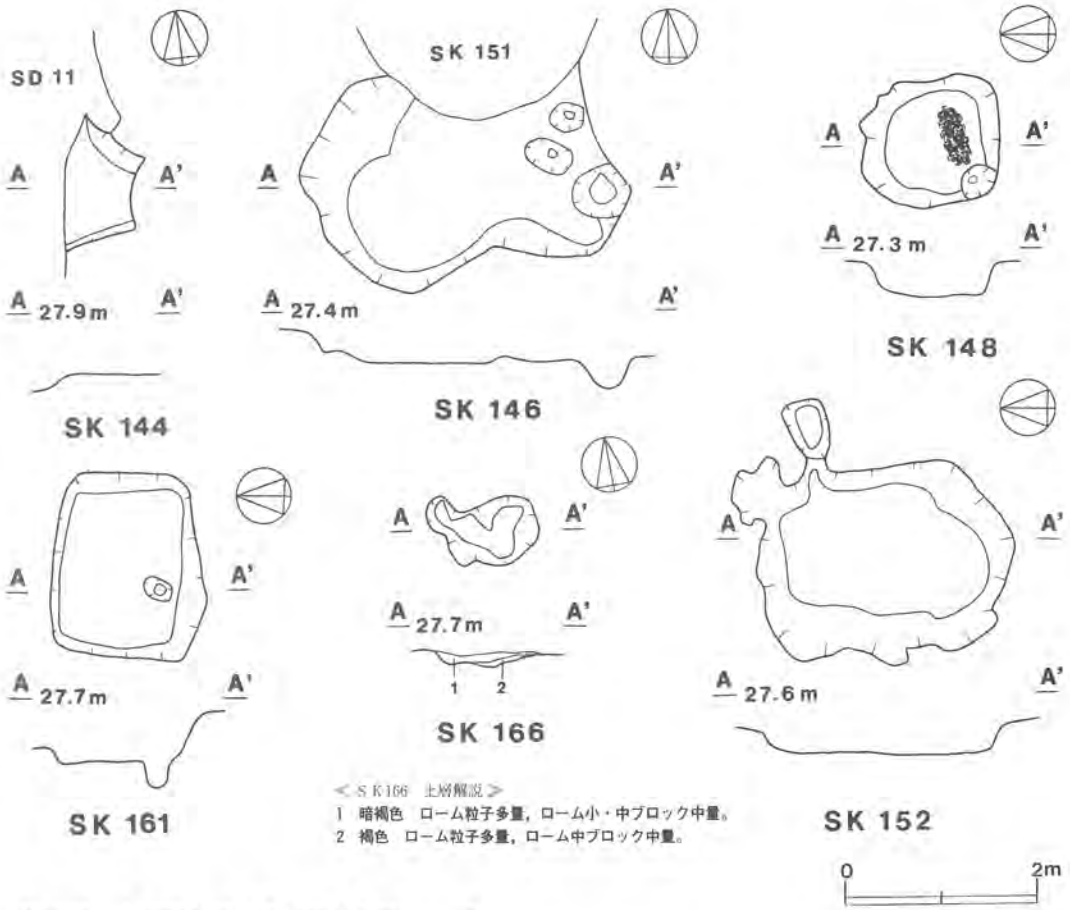
＜SK137　土層解説＞

1 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
2 褐色　ローム粒子中量。
3 褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック多量。
4 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
5 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
6 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。

＜SK140　土層解説＞

1 褐色　ローム粒子中量，ローム小ブロック少量。
2 褐色　ローム粒子少量。
3 暗褐色　ローム粒子中量。
4 暗褐色　ローム粒子中量，ローム小・中ブロック少量。

第54図　土坑実測図（その他の土坑）　－7



＜SK166　土層解説＞
1　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
2　褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量。

第55図　土坑実測図（その他の土坑）　－8

第5号土坑出土遺物観察表（第56図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
187	石臼	直径[25.2] 高さ9.6 芯穴の径…不明				(2535.4)	25	覆土下層	Q4　下臼(粉挽き臼),安山岩
188	宝篋印塔	(15.0)	(12.2)	(13.9)	—	(2650.0)	25	〃	Q5　砥石として二次利用,煤付着,砂岩

第8号土坑出土遺物観察表（第57～61図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
189	皿 土師質土器	A　5.10 B　1.10 C　3.00	平底で，底部は厚味を持ち，体部は直線的に外傾して開く。底部回転糸切り。内外面ナデ調整。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P115 90% 覆土中層
190	皿 土師質土器	A　5.20 B　1.10 C　3.00	平底で，底部外面中央が僅かに窪む。体部は直線的に外傾して開く。底部回転糸切り。内外面ナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P144 95% 覆土中層
191	甕 陶器	B　(4.90) C　[16.60]	平底で，胴下半部は直線的に外傾して立ち上がる。胴下半分外面ヘラ調整。	砂粒・石英 灰褐色	P101 5% 常滑 覆土中層

192	内耳土器	A [33.10] B 6.10 C [28.00]	平底で，体部は外傾して立ち上がる。底部は器厚が薄く，外面に煤が付着している。体部下半ヘラ削り。内外面横ナデ調整。	砂粒・雲母 褐灰色 普通	P 102 5% 覆土中層
193	花瓶 陶器	A [8.90] B 18.20 C 7.90	灰鉄釉掛分仏花瓶。肩部2か所に耳を貼り付けている。底部に回転糸切り痕が残る。外面上半部から内面にかけて灰釉。底面を除く外面下半部に鉄釉。底部回転糸切り。水挽き成形。	内―灰白色 外―灰白色，暗赤褐色	P 103 95% 瀬戸・美濃 覆土上層
194	瓶子 陶器	B (17.40)	灰釉瓶子。肩部に7条の沈線。胴上半部に目跡が見られる。水挽き成形。	内―オリーブ褐色 外―淡黄色	P 104 60% 瀬戸・美濃 覆土中層
195	瓶子 陶器	B (12.30)	灰釉瓶子。内面に強いロクロ成形痕。	内―にぶい黄色 外―オリーブ色	P 105 20% 瀬戸・美濃 覆土中層
196	瓶子 陶器	B (13.50) C 6.80	平底で，体部は内彎気味に上方に立ち上がり，肩部から次第にすぼまる。体部下半以下露胎。底部回転糸切り。水挽き成形。	内―灰白色 外―オリーブ色	P 108 30% 瀬戸・美濃 覆土中層
197	壺 陶器	B (4.20) C [8.40] E (0.20)	低い削り出し高台で，体部は内彎気味に上方に立ち上がる。体部と底部との境に段を有する。底部外面に目跡。体部下半以下露胎。内面に強いロクロ成形痕。	内―にぶい黄橙色 外―オリーブ色	P 107(B) 10% 瀬戸・美濃 覆土中層
198	瓶子 陶器	A 3.20 B (6.20)	灰釉瓶子。口縁部は折り返しによる二重口縁で，厚味を持つ。水挽き成形。	内―にぶい黄褐色 外―浅黄色	P 106 10% 瀬戸・美濃 覆土中層
199	碗 磁器	A 9.70 B 4.90 D 3.80 E 0.70	染付の碗形茶碗。高台は直立し，体部は器厚を減じながら緩く内彎して立ち上がる。体部外面に二重網目文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。水挽き成形。削り出し高台。	(胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P 110 60% 肥前系 覆土
200	碗 磁器	A 9.80 B 5.50 D 4.00 E 0.70	染付の碗形茶碗。高台は直立し，体部は器厚を減じながら緩く内彎して立ち上がる。外面に花文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。水挽き成形。削り出し高台。	(胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P 109 70% 瀬戸 覆土中層
201	碗 磁器	A [10.20] B 5.70 D 4.40 E 0.90	染付の碗形茶碗。高台は直立し，体部は器厚を減じながら緩く内彎して立ち上がる。外面に草花文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。高台裏側にも模様有り。畳付は露胎。水挽き成形。削り出し高台。	(胎土)灰白色 (釉)明緑灰色 良好	P 109 70% 瀬戸 覆土中層
202	碗 磁器	A [8.30] B 4.60 D 3.20 E 0.50	染付の碗形茶碗。高台は直立し，体部は器厚を減じながら緩く内彎して立ち上がる。口縁部外面に雨降り文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。水挽き成形。削り出し高台。	(胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P 113 30% 肥前系 覆土中層
203	碗 磁器	A [9.80] B 4.80 D [3.60] E 0.70	染付の碗形茶碗。高台は直立し，体部は器厚を一定に保ちながら緩く内彎して立ち上がる。外面に草花文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。水挽き成形。削り出し高台。	(胎土)灰白色 (釉)灰白色 良好	P 111 50% 瀬戸 覆土中層
204	擂鉢 陶器	B (10.30) C 15.60	体部は内彎気味に外傾して開く。擂目が密に施されている。擂目の1単位は6～8条。底部の内外面を除き鉄釉が掛かる。	長石を含む炻器質の胎土。 にぶい赤褐色	P 97 30% 信楽系 覆土中・上層

205	擂鉢 陶器	B (6.80) C 11.60	底部は上げ底気味で，体部は僅かに外反して開く。内面に12条1単位の擂目。底部回転糸切り。全面に鉄釉が掛かる。底部内面摩滅。	暗赤褐色	P98 20% 瀬戸・美濃系 覆土中層
206	擂鉢 陶器	B (7.90) C 12.00	底部は上げ底気味で，体部は直線的に外傾して開く。内面に18条1単位の擂目。底部回転ヘラ切り。全面に鉄釉が掛かる。	にぶい赤褐色	P99 15% 瀬戸・美濃系 覆土中層
207	擂鉢 陶器	A [32.40] B 15.20 C 12.70	体部は直線的に外傾して開き，口縁部内面に断面三角形状の凸帯が巡る。内面に16条1単位の擂目。底部回転糸切り。全面に鉄釉が掛かる。底部内面摩滅。	暗褐色	P96 55% 瀬戸・美濃系 SK8・9覆土出土の破片接合 覆土下層
208	擂鉢 陶器	B (12.30) C [13.60]	体部は器厚を保ちながら外傾して開き，上位で器厚を減じる。内面に12条1単位の擂目。底部回転糸切り。全面に鉄釉が掛かる。	にぶい赤褐色	P100 15% 瀬戸・美濃系 覆土下層

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
209	凹石	(9.6)	(9.4)	4.5		(293.4)	10	覆土中層	Q7 石皿兼用,安山岩
210	砥石	(7.6)	4.3	4.0		(145.4)	50	〃	Q8 使用面2,2面に加工痕,砂岩
211	石臼	直径28.2 高さ11.4 上縁高1.2 上縁幅3.9 供給口の径[4.7]				(7350.0)	50	〃	Q10 上臼(粉挽き臼),砂岩
212	〃	高さ11.0				(2306.3)	20	覆土下層	Q6 下臼(茶臼),裏面に加工痕,砂岩

第9号土坑出土遺物観察表(第62図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
213	椀 陶器	A 9.30 B 5.80 D 4.20 E 0.50	低い削り出し高台で，高台は直立する。体部下半は内彎しながら外上方に立ち上がり，中位から口縁部にかけてほぼ直立する。底部外面中央が窪み，体部外面に強い水挽き成形痕を残こす。口縁部から内面にかけて灰釉,それ以外には鉄釉が掛けられている。畳付は露胎。	(釉)内—灰白色 外—灰白色，にぶい赤褐色	P116 80% 瀬戸 覆土中層
214	椀 陶器	A 6.00 B 3.50 D 2.80 E 0.40	高台は直立し，体部は内彎しながら上方に立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。口縁部内面に稜。体部下半以下露胎。水挽き成形。削り出し高台。	(釉)灰白色	P117 70% 瀬戸 覆土中層
215	碗 磁器	A 7.10 B 3.70 D 2.20 E 0.60	染付の碗形茶碗。高台は直立し，体部は内彎気味に外上方に立ちがる。体部外面に草文。畳付は露胎。水挽き成形。削り出し高台。	(釉)明オリーブ灰色	P118 60% 瀬戸 覆土上層

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
216	砥石	[6.0]	4.0	1.8	—	(55.1)	40	覆土	Q16 使用面1,側面に加工痕,砂岩
217	〃	[7.5]	4.5	3.4	—	(205.6)	50	〃	Q13 〃 ,砂岩
218	〃	[8.0]	3.6	3.0	—	(152.1)	70	〃	Q14 使用面2,側面に加工痕,砂岩
219	鎌	(21.8)	(6.7)	0.4	—	—	85	〃	M2 腐蝕が著しい，茎欠損
220	煙管	火皿口径 1.72×1.72 現存長5.7			—		40	〃	M3 銅製,羅宇の一部と吸口欠損

第4号土坑出土遺物観察表(第62図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
221	坏 土師器	A 13.90 B 4.90	扁平な丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は外傾する。底部から体部にかけての内外面丁寧なヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ後ヘラ磨き。	砂粒 明赤褐色 普通	P 95 75% 覆土

第45号土坑出土遺物観察表(第62図)

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
222	不明土製品	5.2	3.6	11.0	—	23.0	95	覆土	DP46 土師器片を砥石として使用
223	砥石	(11.5)	3.0	2.9	—	(96.6)	90	〃	Q23 使用面1,使用面に強いねじれ,点紋岩質粘板岩

第78号土坑出土遺物観察表(第63図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
224	内耳土器	A [29.00] B 5.40 C [22.80]	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。口唇部は平坦であるが、外削ぎ状となっている。底部外面ヘラ調整。体部内外面横ナデ調整。耳は欠損しているため不明。	砂粒・雲母 内ーにぶい褐色 外ー黒褐色 普通	P 129 10% 覆土
225	内耳土器	A [29.20] B (5.40)	耳接合部の外面が膨らむ。口唇部は平坦。耳は1か所残存。	砂粒・雲母 内ー橙色 外ー灰褐色 普通	P 128 5% 覆土

第91号土坑出土遺物観察表(第63図)

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
226	管状土錘	7.6	4.5	4.3	16.0	(140.2)	90	覆土	DP53 上下ヘラ調整

第94号土坑出土遺物観察表(第63図)

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
227	管状土錘	9.4	4.6	4.5	20.0	(143.9)	95	覆土	DP54

第126号土坑出土遺物観察表（第63図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
228	球状土錘	2.8	3.0	3.0	8.0	(24.4)	95	覆土	DP59　一方向から穿孔

第127号土坑出土遺物観察表（第63図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
229	皿 土師質土器	A 9.50 B 2.20 C 5.10	平底で，体部は下位にやや張りを持ち，器厚を減じながら直線的に外傾して立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P 150 95% 覆土下層
230	皿 土師質土器	A 〔10.30〕 B 2.50 C 4.50	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。水挽き成形。底部回転糸切り後，周縁をヘラ調整。	砂粒 橙色 普通	P 152 50% 覆土下層
231	皿 土師質土器	A 10.30 B 2.00 C 5.20	平底で，底部内面中央にやや厚味を持つ。体部は下位にやや張りを持ち，直線的に外傾して立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。体部下端ナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 151 80% 覆土下層
232	皿 土師質土器	A 〔10.00〕 B 1.30 C 5.20	平底で，底部外面中央が窪む。体部は内彎気味に外上方に大きく開いて立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 浅黄橙色 普通	P 153 30% 覆土下層
233	皿 土師質土器	A [11.50] B 2.40 C [4.80]	平底で，体部は内彎気味に外上方に大きく開いて立ち上がり，口縁部は僅かに外反する。水挽き成形。体部下端ナデ調整。底部は回転糸切り後ヘラ調整。	砂粒 橙色 普通	P 154 40% 覆土下層
234	高脚高台坏 土師器	B (3.40) D 9.70 E 2.00	底部片。外面に稜(段)を有し，「ハ」の字状に強くふんばる高脚の高台が付く。高台の端部は外側に開いている。坏底部は回転糸切り後ナデ調整。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 155 30% 覆土下層

第128号土坑出土遺物観察表（第63図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
235	皿 土師質土器	A 6.80 B 2.30 C 4.30	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。大きさの割に全体に厚手。水挽き成形。底部回転糸切り。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア にぶい褐色 普通	P 157 95% 覆土
236	高台付坏 土師器	A [15.00] B (4.50) E (0.80)	平底で，底部は器厚が薄く，体部下端に向かって肥厚する。体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部で僅かに外反する。「ハ」の字状に開く高台が付くが，大半は欠損する。水挽き成形。貼り付け高台。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 156 40% 覆土

第132号土坑出土遺物観察表（第63図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
237	管状土錘	(8.9)	3.2	3.1	11.0	(75.0)	85	覆土	DP60　外面に指頭痕

第133号土坑出土遺物観察表（第63図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
238	高脚高台坏 土師器	B (4.00) D 8.10 E 2.50	平底で，底部に「ハ」の字状に開く高台が付く。水挽き成形。底部回転ヘラ切り後ナデ調整。貼り付け高台。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 158 45% 覆土

第135号土坑出土遺物観察表（第64図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
239	皿 土師質土器	A [10.20] B 2.00 C 6.20	平底で，底部外面中央がやや窪み，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。内面に煤状の付着物。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 162 30% 覆土
240	高台付坏 土師器	A [16.80] B 5.80 D [6.80] E 1.30	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は下位にやや張りを持ち，内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。体部下端回転ヘラ削り調整。底部回転糸切り。高台接地部ヘラ削り調整。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。貼り付け高台。	砂粒・石英・雲母 内－黒色 外－にぶい褐色 普通	P 160 35% 覆土
241	高台付坏 土師器	B 2.70 D 7.70 E 1.10	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り後ナデ調整。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。貼り付け高台。	砂粒 内－黒色 外－暗褐色 普通	P 159 30% 覆土

第136号土坑出土遺物観察表（第64図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
242	高台付坏 土師器	A [14.50] B 5.20 D 7.20 E 1.30	平底で，「ハ」の字状に開く高台が付く。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は僅かに外反し，端部に丸味を持つ。水挽き成形。体部下端ナデ調整。貼り付け高台。内面ヘラ磨き。内面黒色処理。	砂粒・雲母 内－黒色 外－にぶい橙色 普通	P 161 40% 覆土

第140号土坑出土遺物観察表（第64図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
243	坏 土師器	A 13.60 B 4.40	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は直立する。体部と口辺部との境に段を有し，明瞭な稜を持つ。体部外面ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ。内面ナデ調整。	砂粒・スコリア 黒褐色 普通	P 163 95% 覆土
244	坏 土師器	A [14.30] B 4.40	扁平な丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は内傾する。体部と口辺部との境に段を有し，明瞭な稜を持つ。体部外面ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ。内面ナデ調整。	砂粒 黒褐色 普通	P 164 40% 覆土
245	坏 土師器	A [13.40] B 4.00	扁平な丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口辺部は内傾する。体部と口辺部との境に段を有し，明瞭な稜を持つ。体部外面ヘラ磨き。口辺部内外面横ナデ。内面ナデ調整。摩滅が進行。	砂粒・雲母 黒褐色 普通	P 165 30% 覆土

第145号土坑出土遺物観察表（第64図）

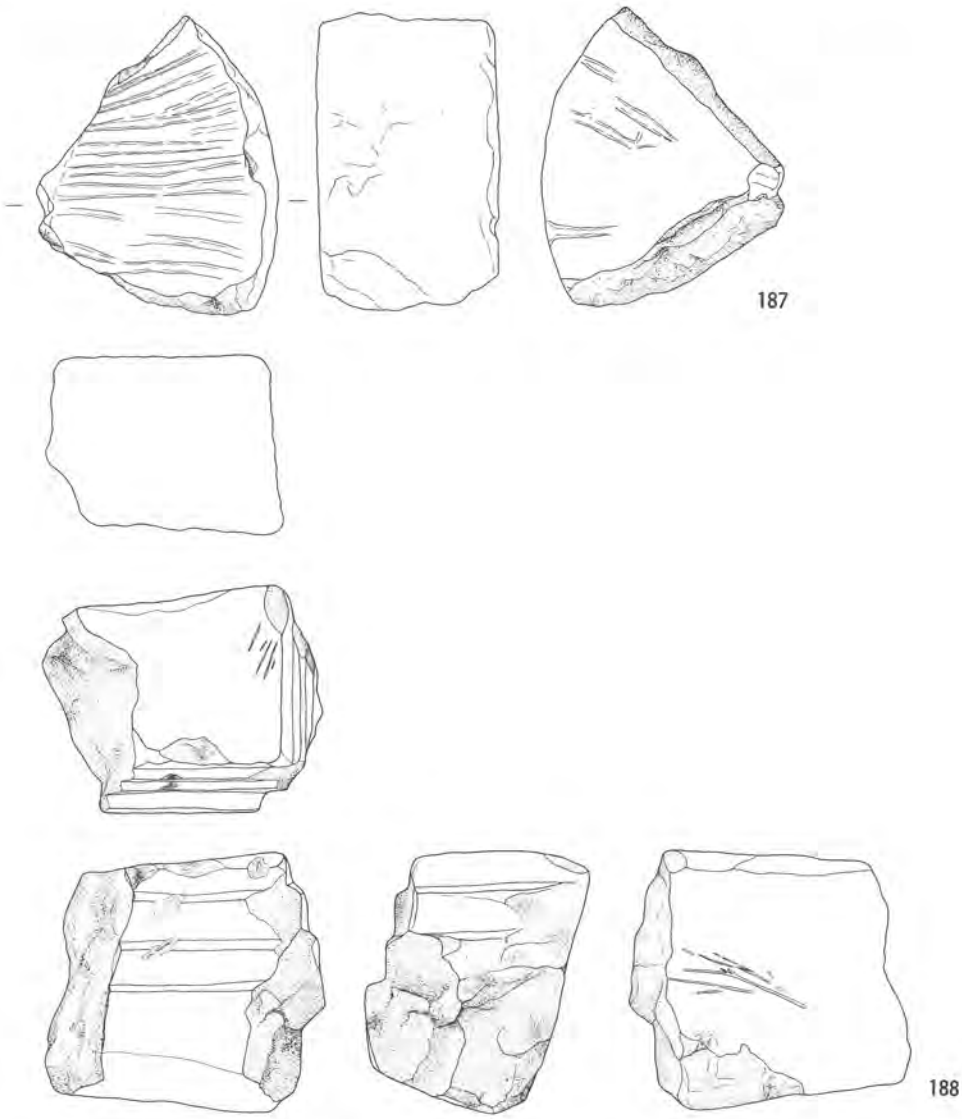
遺物番号	器　種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
246	管状土錘	(2.6)	2.2	2.1	6.0	(8.3)	45	覆土	DP61　外面ヘラナデ

第148号土坑出土遺物観察表（第64図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
247	管状土錘	4.8	1.8	1.8	5.5	13.7	100	覆土	DP62　外面ヘラナデ,上下ヘラ調整
248	〃	(4.8)	2.1	2.0	5.0	(13.9)	70	〃	DP63

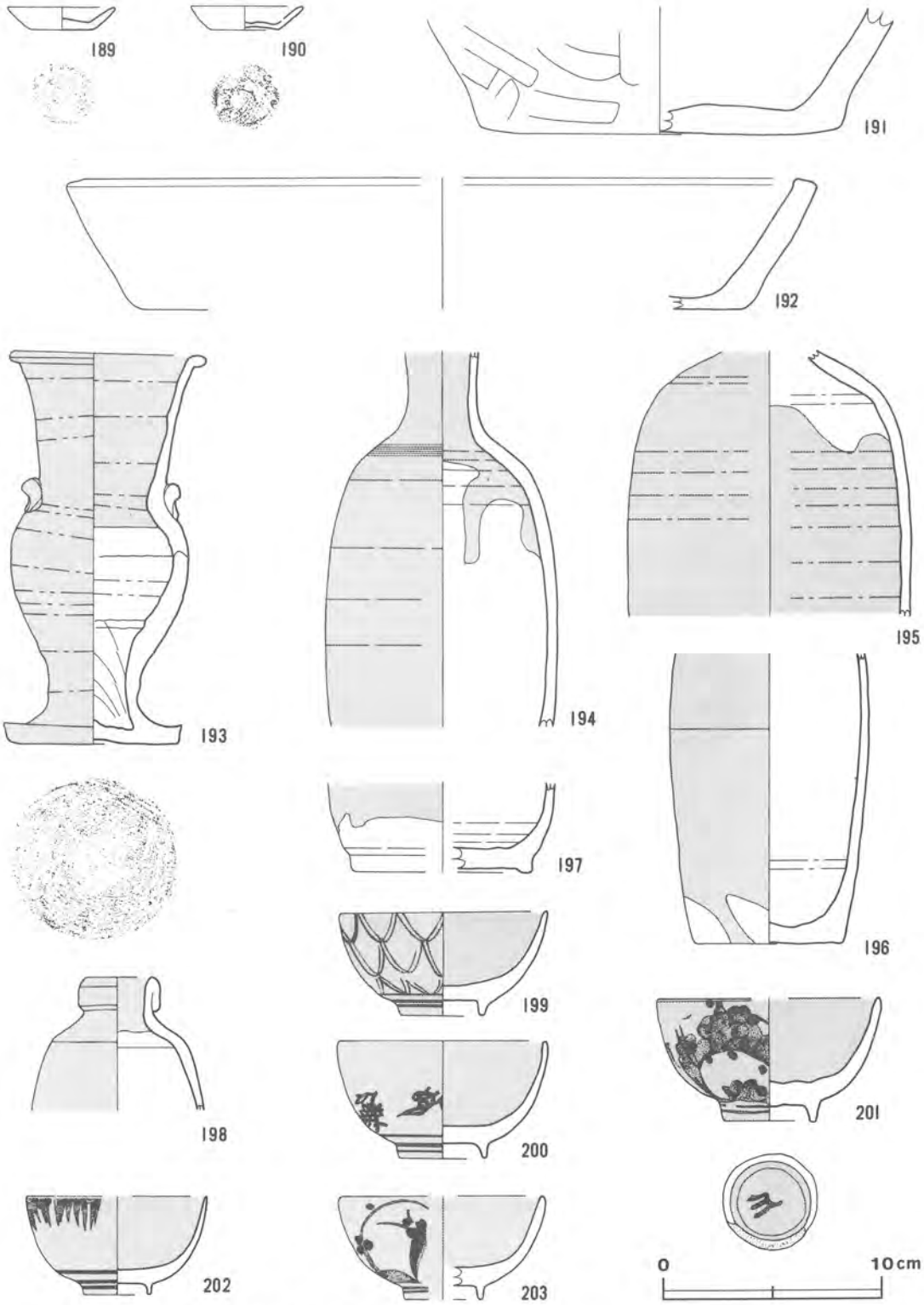
第152号土坑出土遺物観察表（第64図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
249	球状土錘	2.6	3.2	3.1	10.0	23.5	100	覆土	DP65　一方向から穿孔

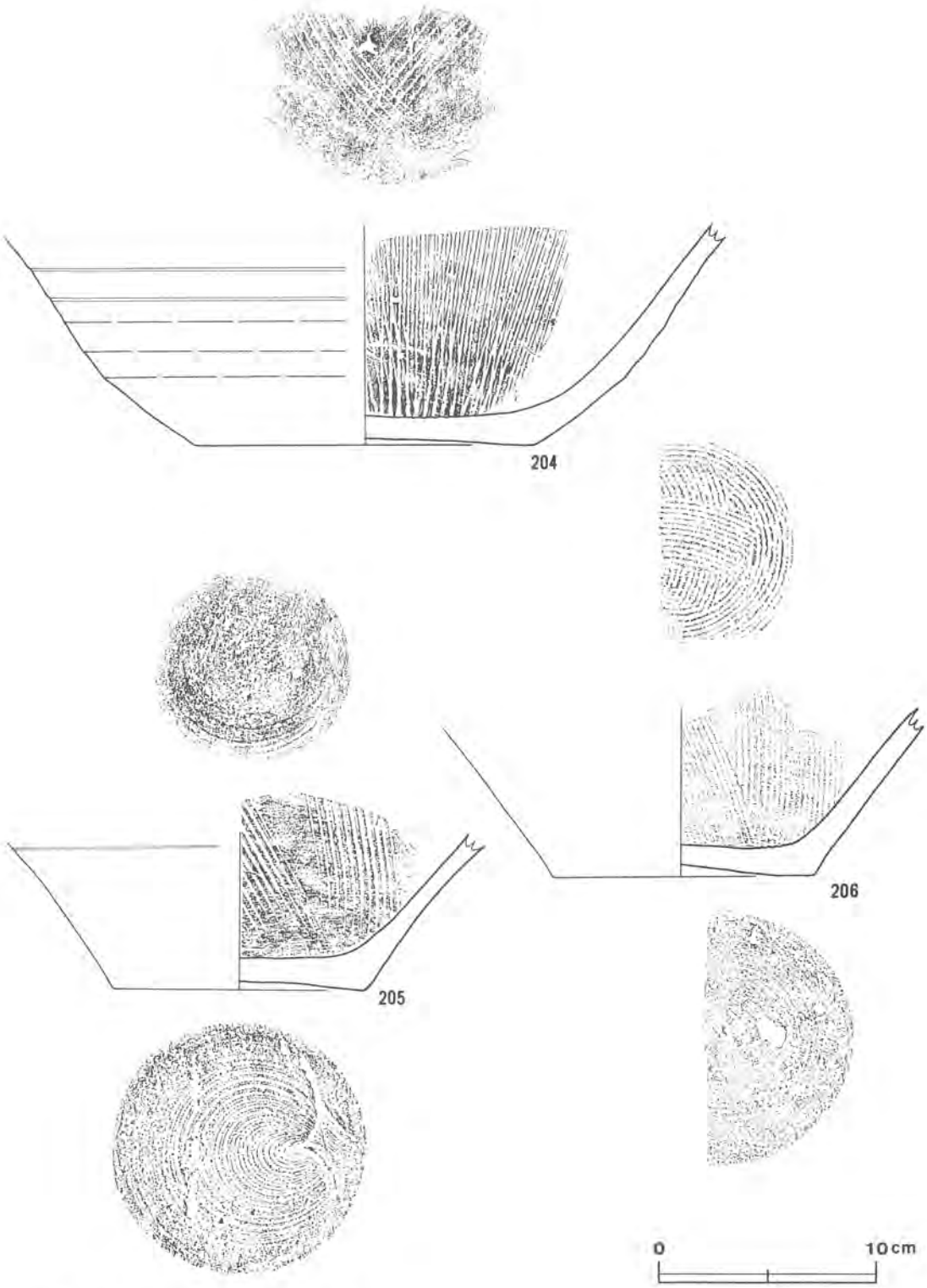


第56図　第5号土坑出土遺物実測図

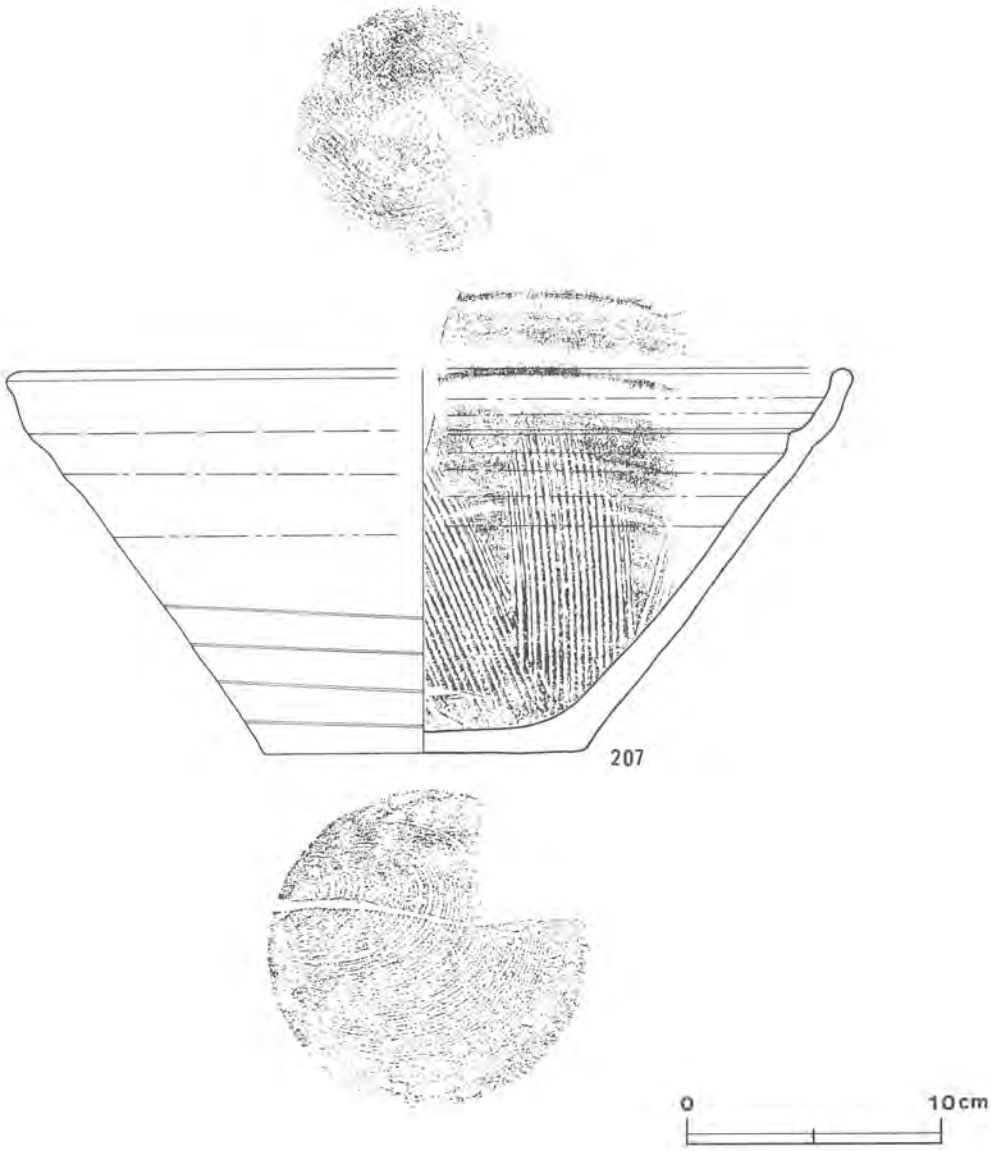
0　10cm



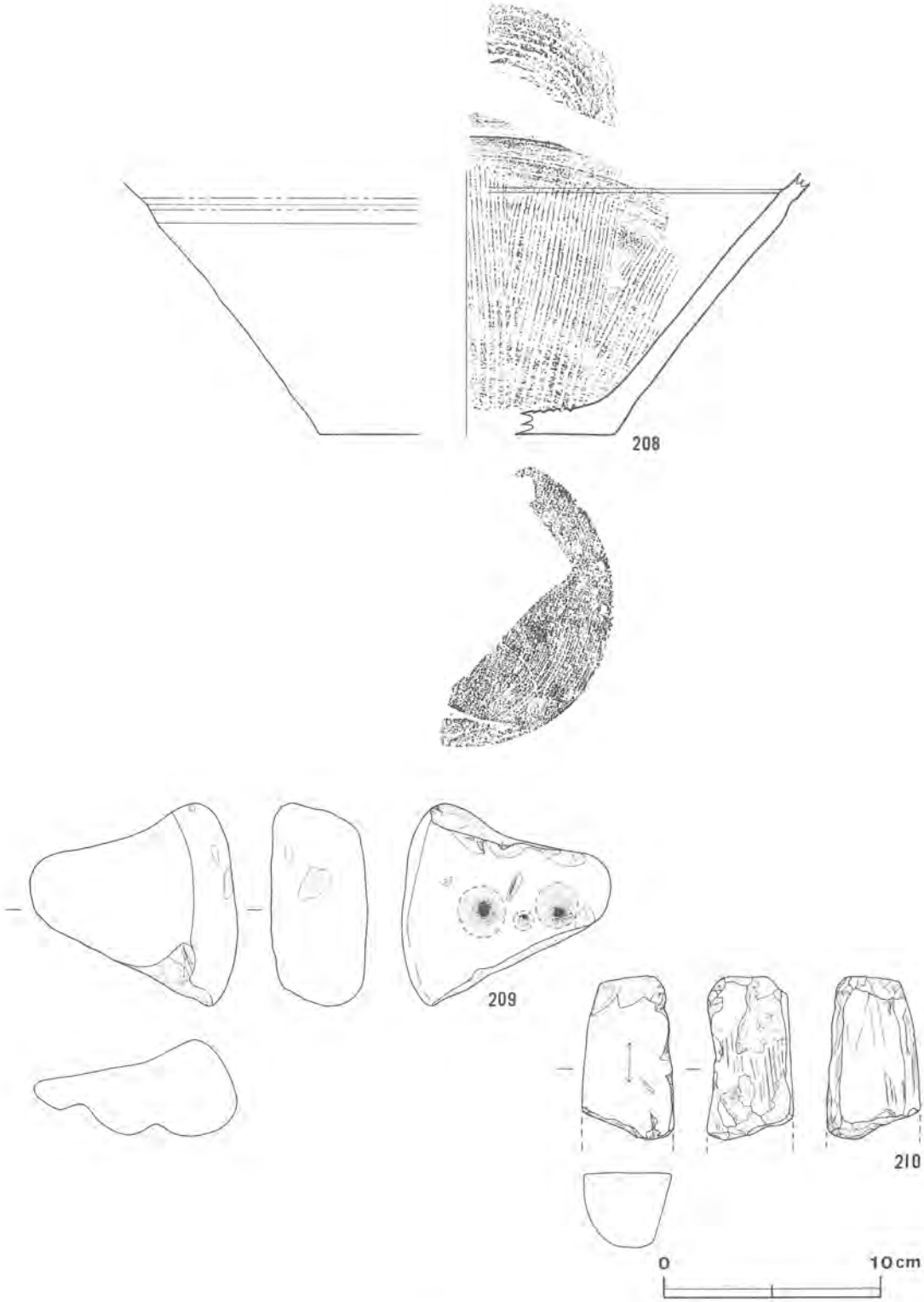
第57図　第８号土坑出土遺物実測・拓影図 (1)



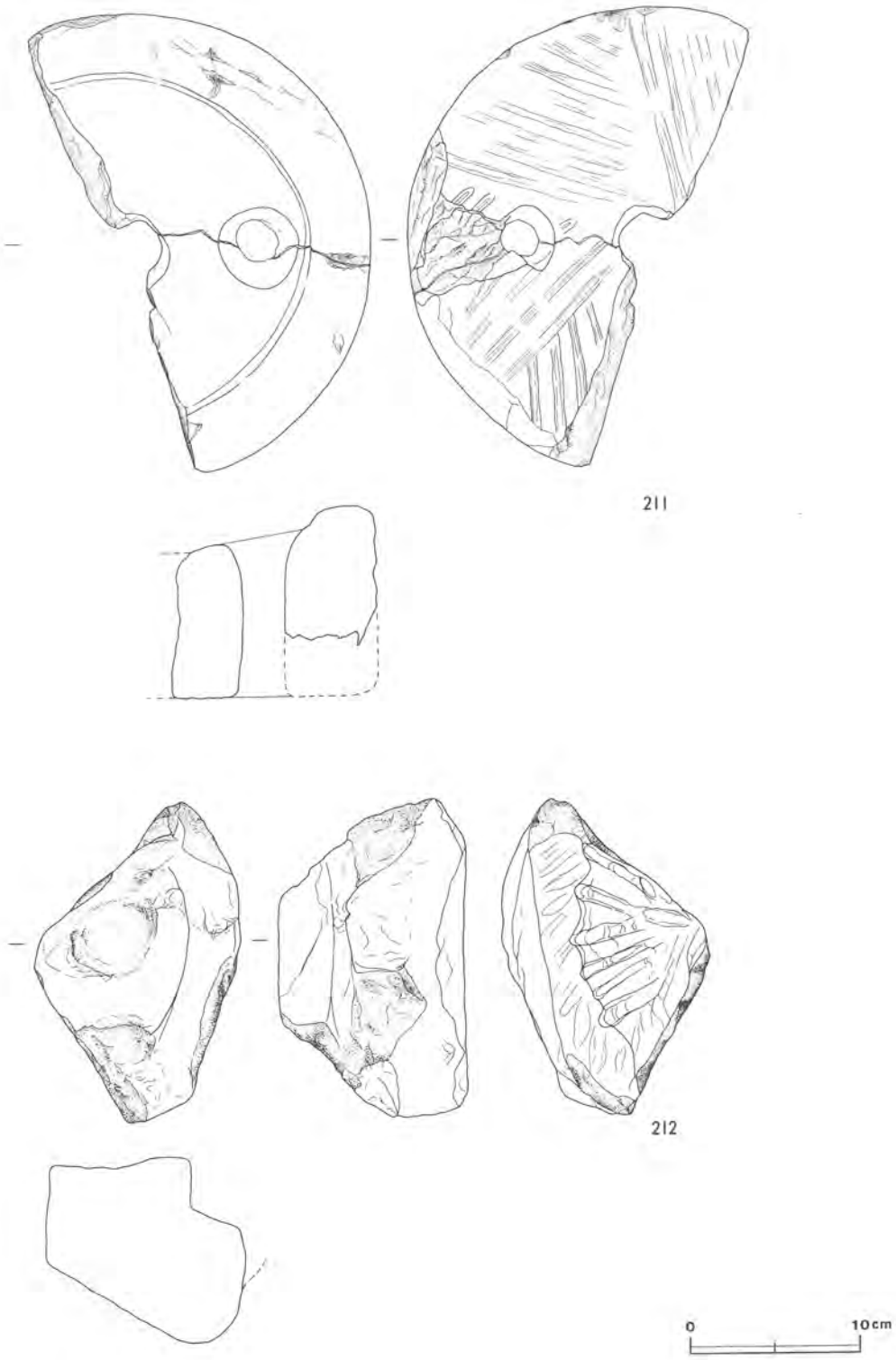
第58図　第８号土坑出土遺物実測・拓影図 (2)



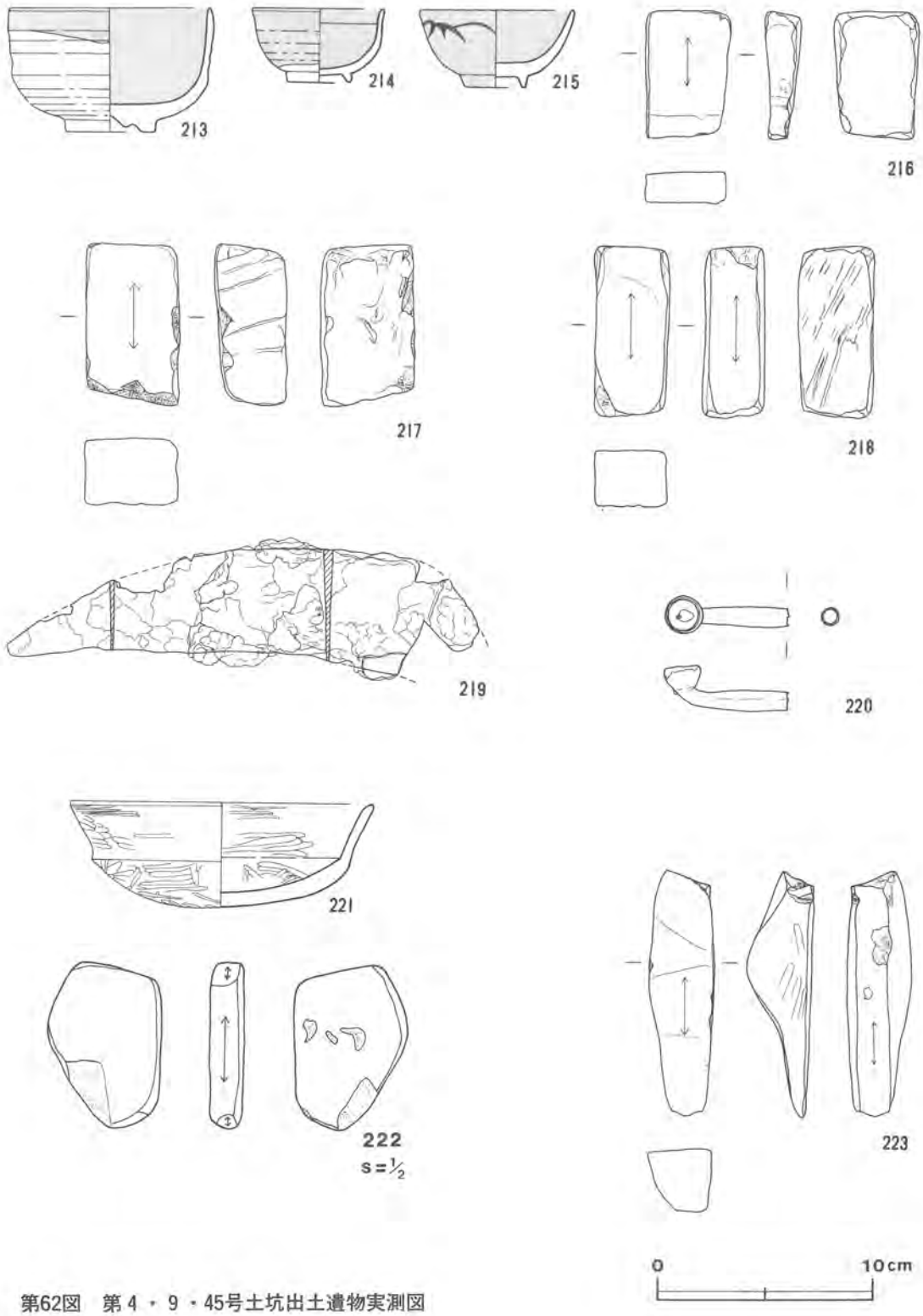
第59図　第８号土坑出土遺物実測・拓影図 (3)



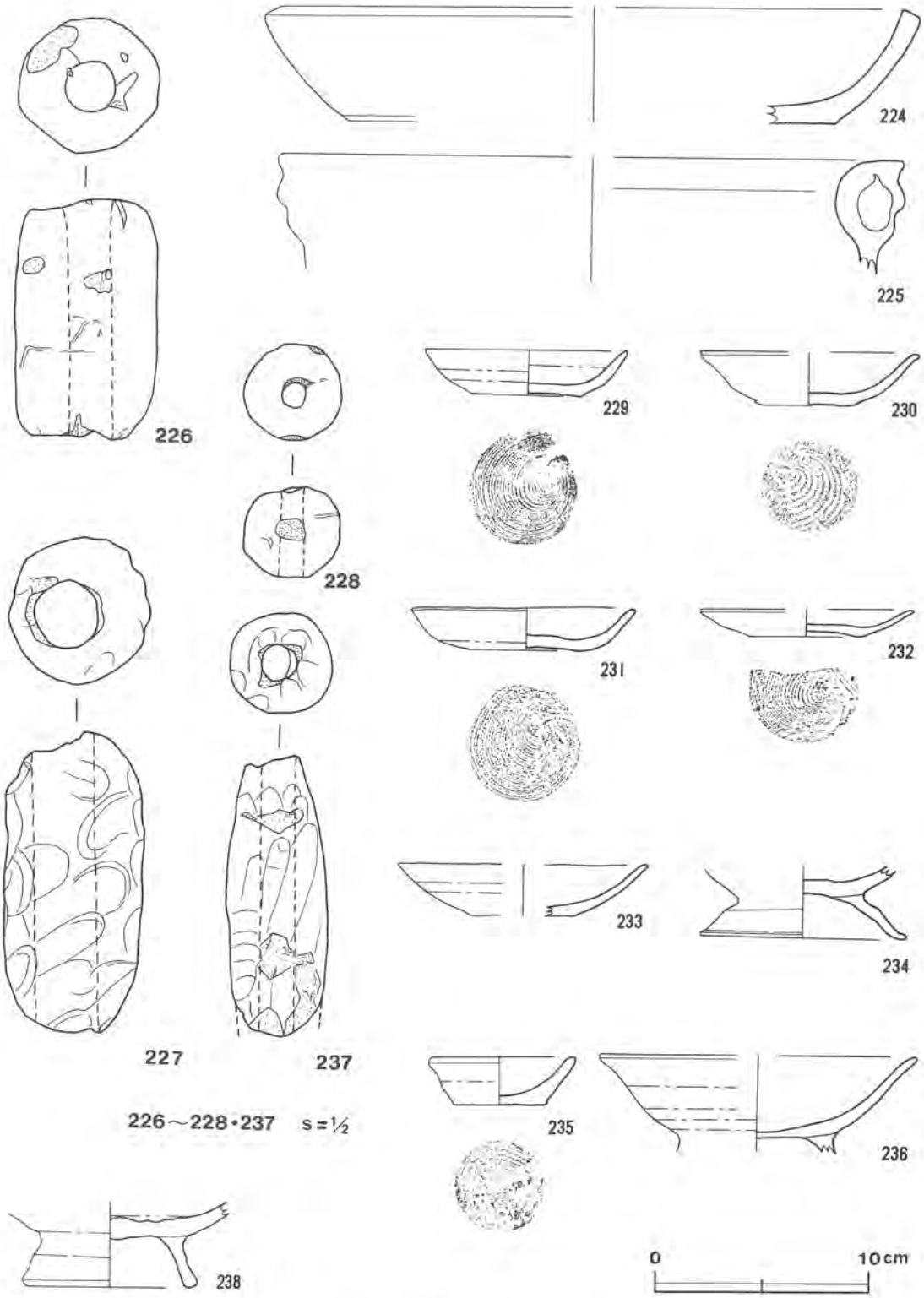
第60図　第８号土坑出土遺物実測・拓影図 (4)



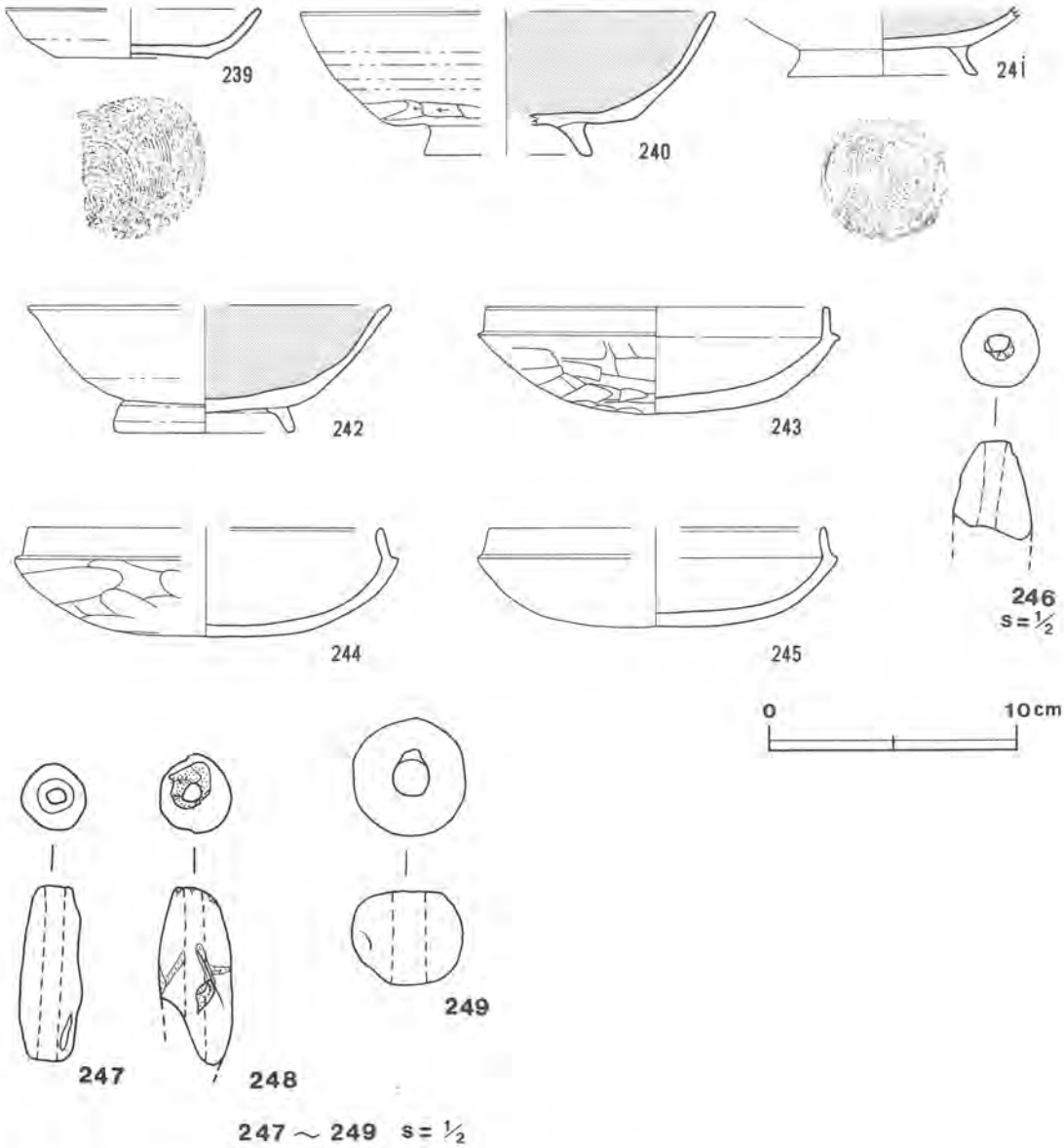
第61図　第８号土坑出土遺物実測図 (5)



第62図　第４・９・45号土坑出土遺物実測図



第63図　第78・91・94・126～128・132・133号土坑出土遺物実測・拓影図



第64図　第135・136・140・145・148・152号土坑出土遺物実測・拓影図

4　溝

溝は調査区の西端部から3条(第1～3号)，西側から2条(第4・5号)，中央部から3条(第6～8号)，東側から5条(第9～11，15・16号)の計13条(第13・14号は欠番)が確認されている。調査の過程で墓壙群を「コ」の字状に囲むように検出された第4・5号溝や，調査区の北東側から検出された第9・16号溝，第10・15号溝は方向性から見て，それぞれ調査区外で合流するものと推定され，また規模等から見ても同一の溝として捉えることが可能であることから，ここではこれらの溝を整理し，

単独の溝として扱うことにした。従って，最終的な溝の数は10条となる。

第1号溝（第65図）

位置　調査区の西端部C1区に位置する。本跡の西側には第2号溝が併走している。

規模と形状　調査区内における全長は13ｍであり，本跡はC1a_0区の北端部からさらに南側の調査区外に直線的(Ｎ-0°)に延びているものと思われる。上幅1.3～1.5ｍ，下幅0.4～0.75ｍ，深さ60～80cmを測る。溝の底面は平坦または皿状を呈し，断面形は鍋底状または逆台形状を呈する。壁は緩斜または外傾して立ち上がる。

覆土　自然堆積。

遺物　土師質土器(皿)片，内耳土器片，陶器片(250)，砥石(254)，石臼(255)，不明鉄銭や流れ込みと考えられる土師器片，須恵器片，球状土錘(251～253)等が出土している。

所見　中世または近世の溝と推定される。

第2号溝（第65図）

位置　調査区の西端部C1区に位置する。本跡の東側には第1号溝が併走している。

規模と形状　本跡の西側は急斜面，南側は調査区外となっているため，部分的な調査にとどまり，全容については不明である。調査区内における全長は約15ｍであり，C1a_0区から南側の調査区外に向かって直線的(Ｎ-0°)に延びている。底面は浅い皿状を呈するものと思われる。東壁は緩やかな傾斜で立ち上がるが，西壁の立ち上がりや断面形状については不明である。

覆土　自然堆積。

遺物　土師質土器片，内耳土器片や流れ込みと考えられる土師器片が少量出土している。

所見　本跡の上面(地表面)には，踏査の段階で溝の痕跡(幅20～30cm，深さ10cm程の浅い落ち込み)が確認されたため，地形測量を実施した。方向性が一致することから，本跡と同一の溝と考えられる。出土遺物から中世または近世の溝と推定される。

第3号溝（第65図）

位置　調査区の西端部B1・2区に位置する。

規模と形状　本跡の西側(調査区外の急斜面に続く)及び北側は調査区外となっているため全容については不明であるが，概ね「⌋」状を呈するものと思われる。B1j_1区からB2j_3区にかけてほぼ東西方向(Ｎ-86°-Ｅ)に8.5ｍ程直線的に延び，さらにB2i_3区からB2h_3区にかけて南北方向(Ｎ-0°)に4.5ｍ程直線的に延びて調査区の境界に達する。B2i_2・i_3区の溝の屈曲部については掘り込みが不明瞭である。上幅は最大3ｍであり，確認面からの深さは最大1.1ｍを測る。底面は凹凸が激しく，

ピット状の落ち込みが数か所に検出されている。壁は東側及び南側でほぼ垂直に立ち上がるが，北側及び西側は立ち上がりが不明瞭である。断面形は皿状を呈する。

覆土　中層から下層にかけては自然堆積であるが，上層にはヤマトシジミを主体とする多量の貝が投棄されている。

遺物　内耳土器片や流れ込みと考えられる土師器片，須恵器片等が出土している。

所見　本跡は方向性や規模・出土遺物等から，第1号・第2号溝と一体をなす中世または近世の溝と推定される。また，本跡と第1号・第2号溝との間には掘り残された地山が土橋状に残存し，この部分が踏み固められていることから見て，通路として使用されたものと推定される。

第4号溝｛旧SD4・5（第43図）｝

位置　調査区の西側B2区に位置する。

重複関係　第1号地下式壙の竪坑上面を掘り込んでいるが，重複する他の土坑(墓壙を含む)との新旧関係は不明である。

規模と形状　本跡は$C2a_9$区の溝東端部から西北西(N-84.5°-W)の方向に16m程直線的に延び，$B2j_5$区付近で北方向にほぼ垂直に近い角度で屈曲し，さらに北北西方向(N-5°-W)に12m程直線的に延びて調査区境界に達する。調査区外については不明であるが，方向性から推定すると溝はさらに調査区外の北側に6m程直線的に延び，$B2f_4$区で東方向にほぼ垂直に近い角度で屈曲して，$B2f_7$区で墓壙群の北側を区画する溝に接続するものと思われる。墓壙群の北側を区画する溝は，$B2f_7$区から$B2f_6$区にかけて東南東方向(N-88.5°-W)に11.5m程直線的に延びている。溝の全長は，調査区外の推定部分も含めると約58mであり，上幅0.5～2.2m，下幅0.3～1.9m，深さ25～58cmを測る。断面形はU字状または逆台形状を呈し，底面は凹凸が激しい。

覆土　人為的に埋め戻されている。

遺物　覆土から，土師質土器(皿)片1点，内耳土器片7点(256他)，陶器片4点(擂鉢片2点を含む)，砥石1点(257)及び混入したと考えられる土師器，須恵器の小片等が出土している。

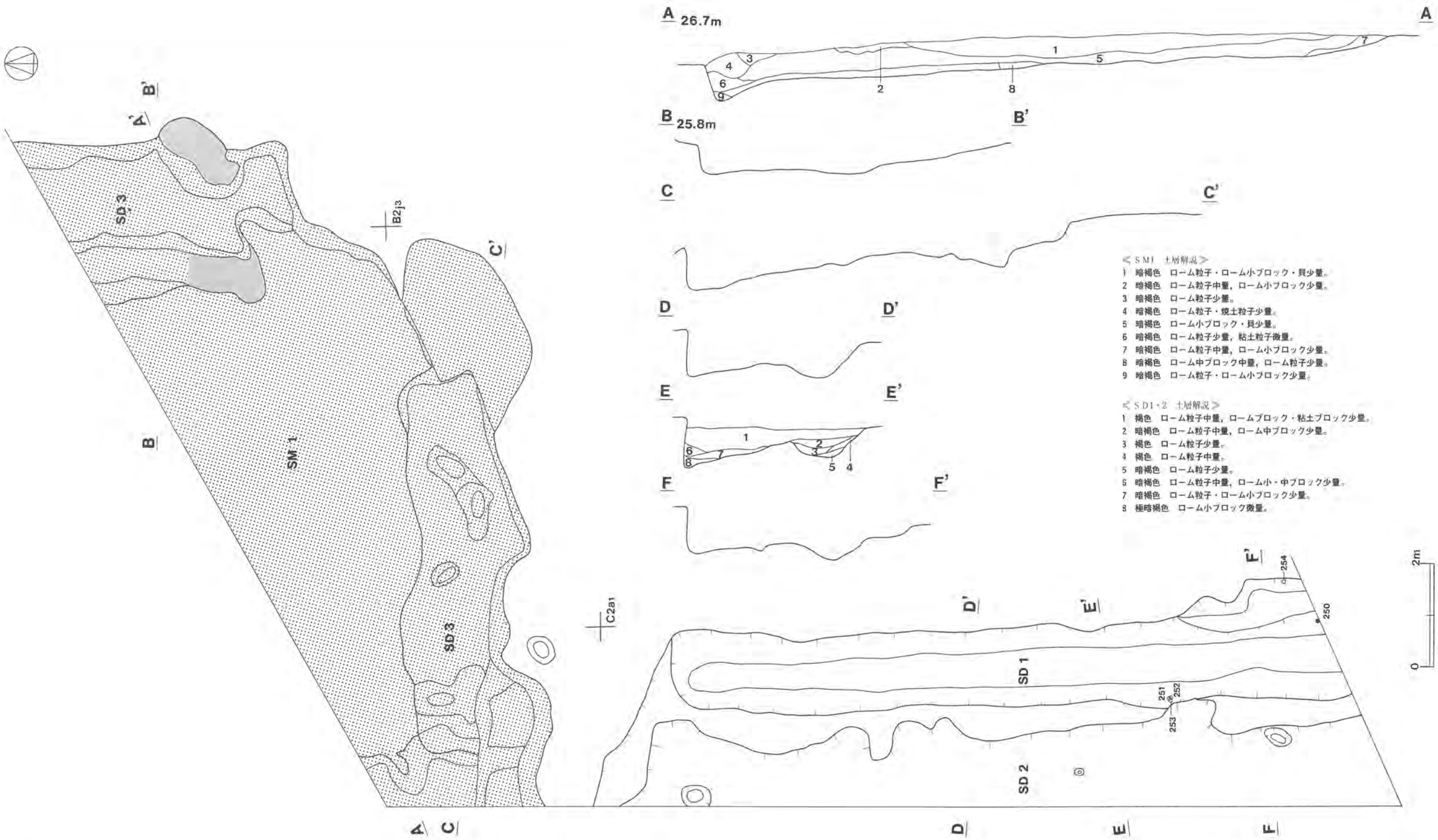
所見　本跡は墓壙群を区画する溝と考えられ，墓壙群と同時期に存在していたものと考えられる。出土遺物から，中世または近世に属する溝と推定される。

第5号溝｛旧SD6（第73図）｝

位置　調査区の中央部$B3h_1$区を中心に位置する。

重複関係　北西側で第91号土坑，南西側で第1号井戸と重複する。重複遺構は同時期のものと考えられる。

規模と形状　第91号土坑(底面粘土貼り)との接点$B3g_1$区から北西方向(N-23.5°-W)に3.20m



第65図　第1～3号溝・第1号貝塚実測図

程直線的に延び，B3h_1区で第1号井戸と接続する。上幅40～58cm，下幅9～35cm，深さ27cmを測り，断面形は底面が浅い皿状となるV字状を呈している。溝底面は僅かに第91号土坑方向に傾斜している。

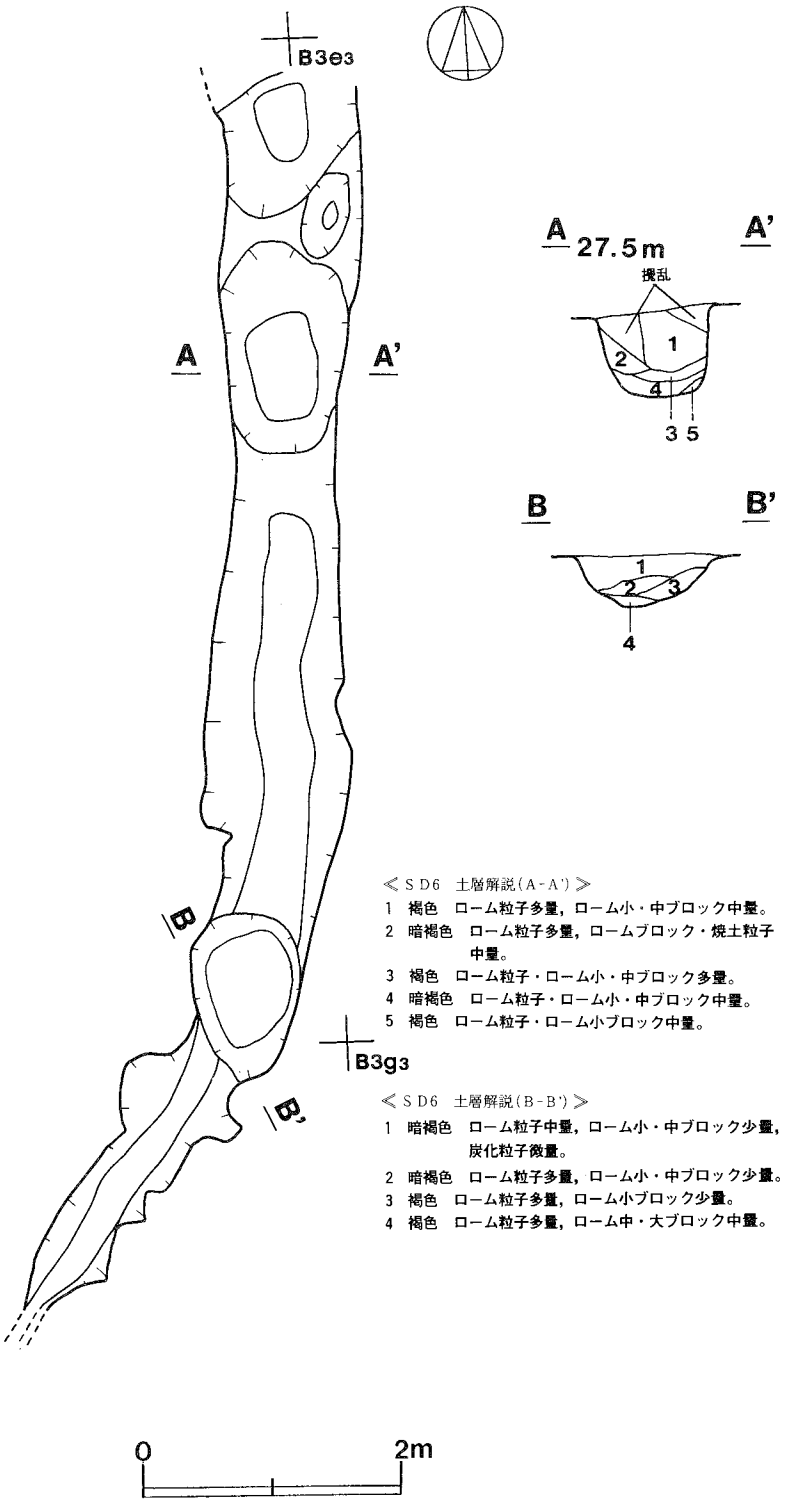
覆土　自然堆積。

所見　本跡は第91号土坑，第1号井戸と一体を成すものであり，井戸から汲み上げた水を第91号土坑(水溜め)に流すための溝と考えられる。遺物は出土していないが，第1号井戸との関連から中世または近世に属するものと推定される。

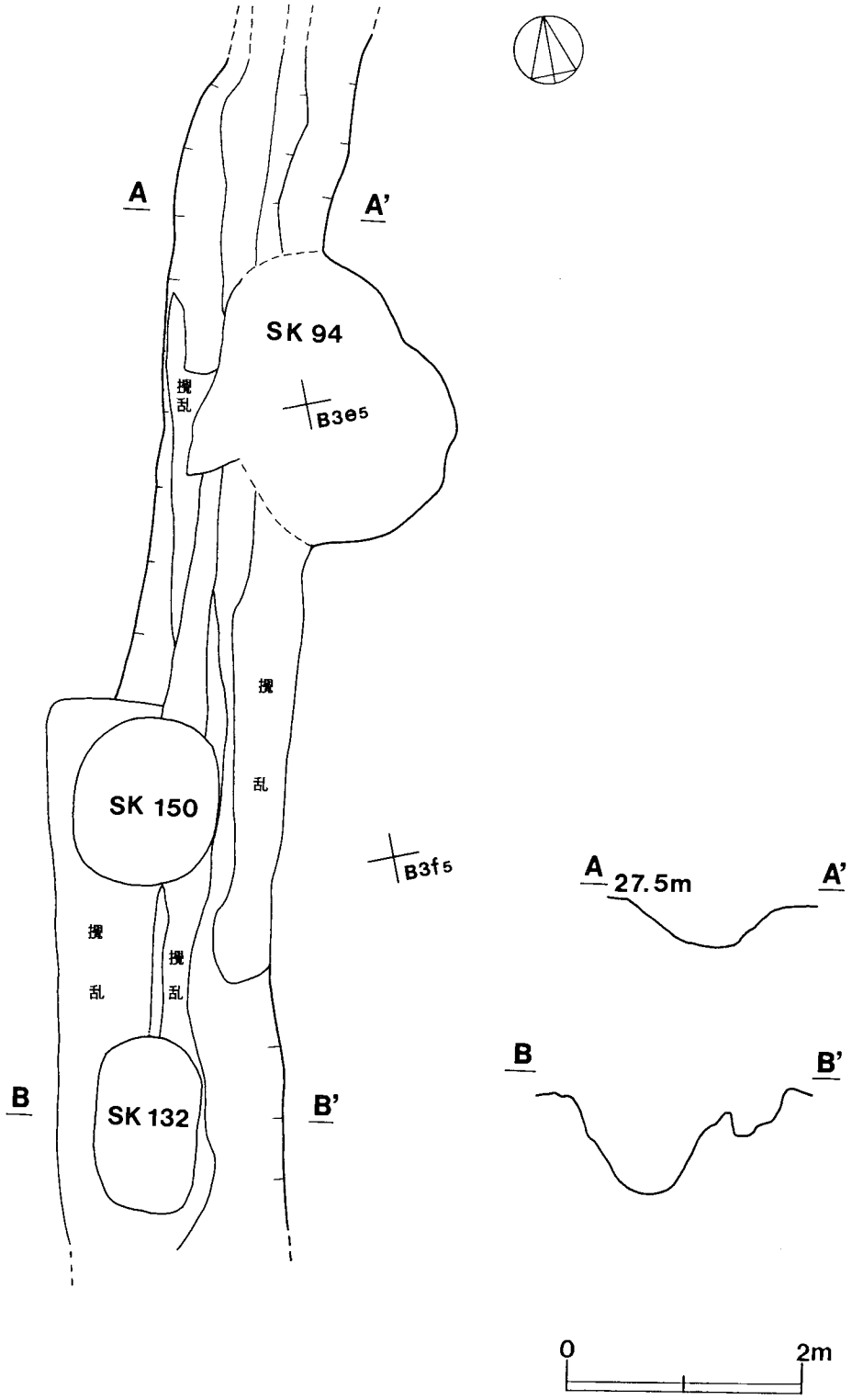
第6号溝｛旧SD7（第66図)｝

位置　調査区の中央部B3区に位置する。

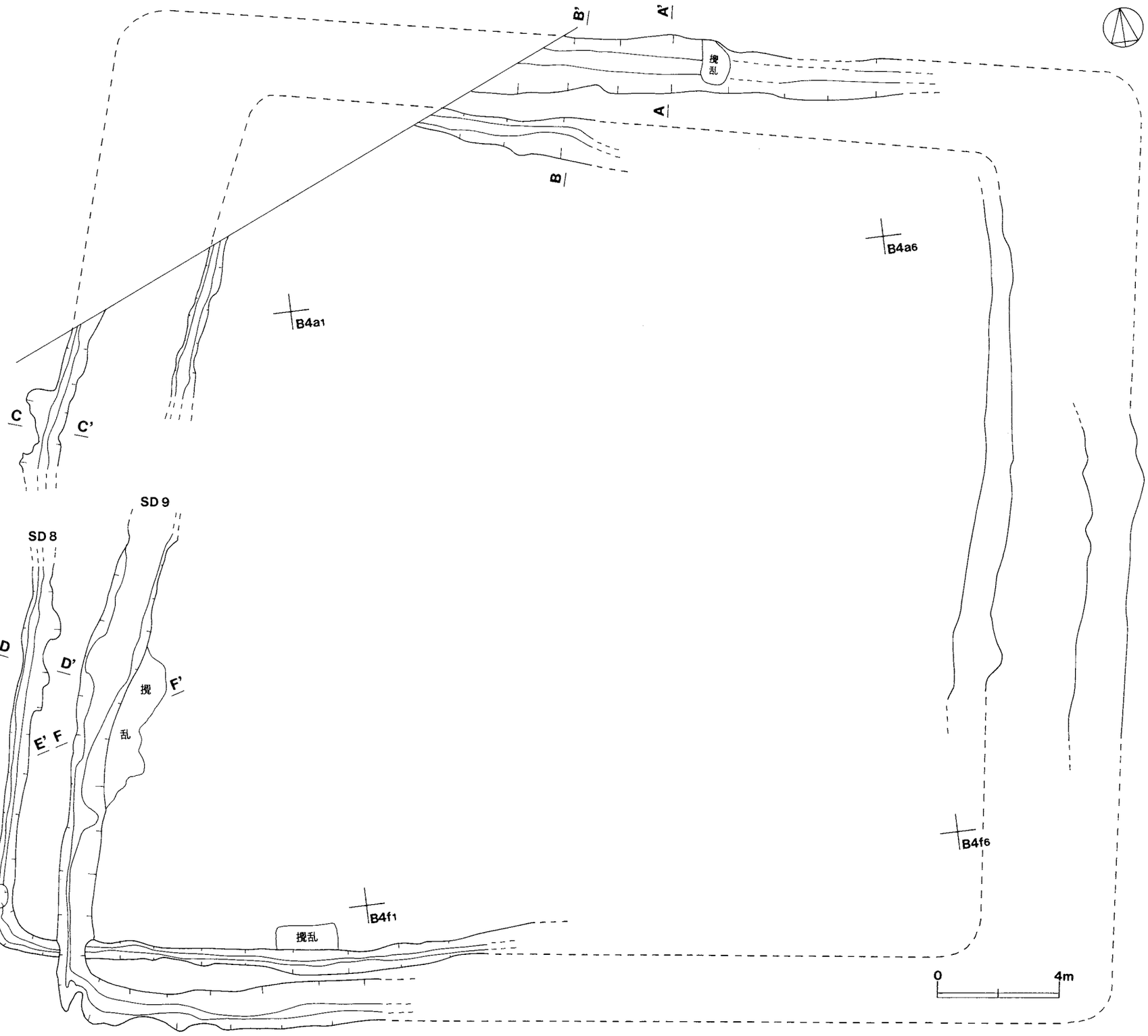
規模と形状　B3e_2区からB3f_2区にかけて直線的(N-2.5°-E)に7m程延び，B3f_1区で西方向(N-33.5°-W)に緩く湾曲しながら3m程延びている。溝の両端は不明瞭である。

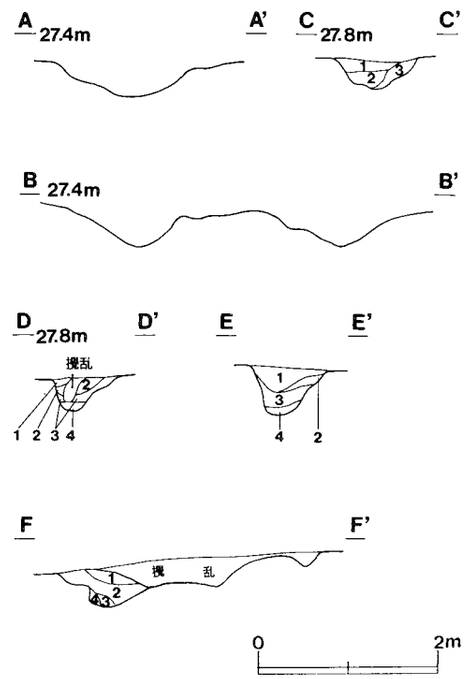


第66図　第6号溝実測図



第67図　第７号溝実測図





≪ＳＤ8　土層解説(C-C')≫
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
2　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
3　褐色　ローム粒子中量。

≪ＳＤ8　土層解説(D-D')≫
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
2　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
3　暗褐色　ローム粒子・ローム中ブロック多量。
4　褐色　ローム小ブロック中量。

≪ＳＤ8　土層解説(E-E')≫
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
2　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
3　褐色　ローム粒子中量。
4　褐色　ローム粒子中量。

≪ＳＤ9　土層解説(F-F')≫
1　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
2　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
3　褐色　ローム粒子中量。
4　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。

第68図　第８・９号溝実測図

全長約10m，上幅0.5～1.2m，下幅0.2～0.5m，深さ70cm前後を測る。底面は皿状を呈し，3か所にピット状の落ち込みが見られ，壁は外傾して立ち上がる。断面形は鍋底状を呈する。

覆土　人為堆積。上層は耕作による撹乱を受けている。

遺物　土師質土器片，内耳土器片，陶器片，磁器片及び流れ込みと考えられる土師器片，須恵器片等が出土している。

所見　出土遺物から中世または近世に属する溝と考えられるが，性格については不明である。

第7号溝｛旧SD8（第67図）｝

位置　調査区の中央部B3区に位置する。

重複関係　第13・94・150号土坑を掘り込んでいる。

規模と形状　B3d_5区からB3f_4区にかけてほぼ直線的(N-16.5°-E)に10.5m程延びている。溝の両端はさらに北東側及び南西側に延びているものと推定される。溝の上面はトレンチャーによる撹乱を受け不明であるが，上幅1.3m，下幅0.3m，深さ70cm程の規模を有するものと思われる。底面は皿状を呈し，壁は外傾して立ち上がる。断面形は概ね逆台形状を呈する。

覆土　自然堆積。

遺物　墨書の見られる土師質土器の皿(258)や内耳土器片，陶器片や流れ込みと思われる土師器片，須恵器片，球状土錘(260)等が出土している。

所見　中世または近世に属する溝と考えられるが，性格については不明である。

第8号溝｛旧SD9・16（第68図）｝

位置　調査区の北東側A4区，B3・B4区に位置する。

重複関係　第2・4・6号住居跡及び第1号掘立柱建物跡を掘り込み，B3f_8区で第9号溝によってその一部を掘り込まれている。

規模と形状　北西側，南東側の一部及び東側が調査区外となっているため，全容は不明であるが，一辺が28～32m程の方形状または長方形状を呈する溝と推定され，上幅0.4～1.8m，下幅0.1～0.6m，深さ34～51cmを測る。壁は緩い傾斜で立ち上がり，底面は平坦または皿状を呈し，断面形は概ね鍋底状または逆台形状を呈する。溝の方向は，北東－南西方向がN-13.5°-E，北西－南東方向がN-84.5°-W前後を測る。

覆土　自然堆積。

遺物　土師質土器の皿(261)や陶器片が覆土から出土している。また，重複遺構及び周囲からの流れ込みと考えられる弥生式土器片や土師器片，須恵器片，球状土錘(262・263)，管状土錘(264～266)等が出土している。

所見　中世または近世に属する溝と推定される。

第９号溝　｛旧SD10・15（第68図）｝

位置　調査区の北東側A4区，B3・B4区に位置する。

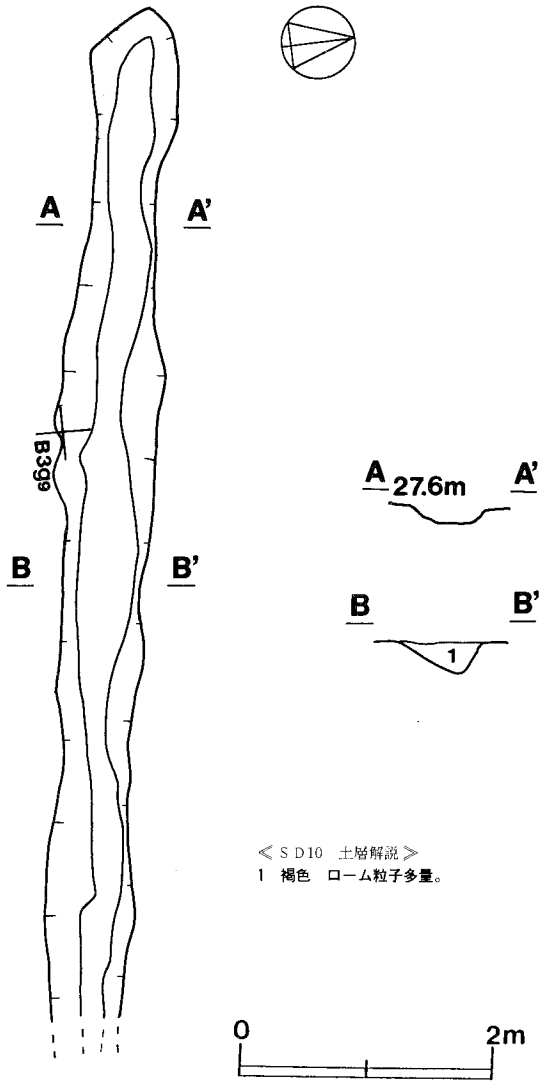
重複関係　第４・６号住居跡，第１・２号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。

規模と形状　第8号溝と同様に北西側，南東側の一部及び東側が調査区外となっているため，全容は不明であるが，一辺が30～32ｍの方形状または長方形状を呈する溝と推定され，上幅1～2ｍ，下幅0.1～1ｍ，深さ40～48cmを測る。壁は緩い傾斜または外傾して立ち上がり，底面は皿状，平坦，Ｖ字状と様々で一定していないが，断面形状は概ね鍋底状または逆台形状を呈する。溝の方向は，北東－南西方向がＮ-16.5°-Ｅ，北西－南東方向がＮ-77°-Ｗを測り，第8号溝の方向性とほぼ一致している。

覆土　自然堆積。

遺物　内耳土器片，不明鉄製品，鉄滓等の他に，重複遺構や周辺からの流れ込みと考えられる土師器片，須恵器片，球状土錘(267・268)等が出土している。

所見　本跡は第8号溝と方向性や規模が類似し，B3f8区からB3f6区にかけて東西方向に延びる溝の一部は現在の地割りと一致する。出土遺物や地割りとの関連から中世または近世の溝と推定される。



第69図　第10号溝実測図

第10号溝　｛旧SD11（第69図）｝

位置　調査区の南東側B3区に位置する。

重複関係　第10号住居跡及び第2号掘立柱建物跡の柱掘方上面を掘り込んでいる。

規模と形状　全長8.5ｍ，上幅0.5～0.7ｍ，下幅0.15～0.4ｍ，深さ32cmを測り，北西から南東方向（Ｎ-79.5-Ｗ）

に直線的に延びている。底面は凸凹状を呈しており，壁は緩い傾斜で立ち上がる。断面形状は概ね皿状を呈する。

方向　N-81°-W。

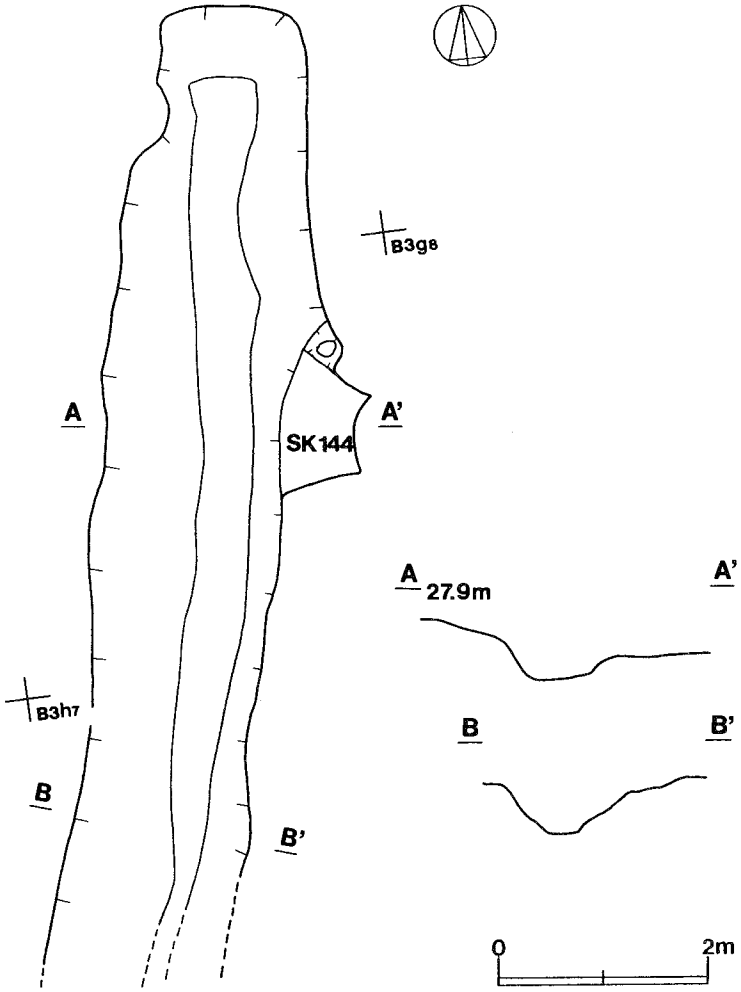
覆土　自然堆積。

所見　遺物は出土しておらず，時期や性格等については不明である。

第11号溝　{旧SD12（第70図）}

位置　調査区の南東側B3区に位置する。

規模と形状　B3f7区から直線的（N-6°-E）に8.5m程延びて調査区の境界に達する。本跡はさ



第70図　第11号溝実測図

らに南西側の調査区外に延びている。上幅1.5～2.0m，下幅0.2～0.5m，深さ50～60cmを測る。底面は西側に向かってやや傾斜しており，壁は緩斜または外傾して立ち上がる。断面形は概ね鍋底状，逆台形状を呈する。

方向　N-12°-E。

覆土　自然堆積。

遺物　陶器片(鉢，擂鉢)，磁器片(碗)，砥石及び流れ込みと考えられる土師器片，須恵器片，球状土錘等が出土している。

所見　中世または近世に属する溝と推定されるが，性格については不明である。

第1号溝出土遺物観察表(第71図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
250	皿 陶器	A [10.00] B 2.10 D [6.00] E 0.20	平底で，下方に延びる短い高台が付く。体部は内彎気味に外上方に大きく開いて立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。削り出し高台。全面に釉が掛かるが，口縁部は釉が剝がれている。細かい貫入が見られる。	(釉)灰白色	P 189 40% 瀬戸 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
251	球状土錘	3.2	3.4	3.3	7.0	(32.5)	98	覆土	DP68 一方向から穿孔,片面ヘラ調整
252	〃	3.1	3.2	3.1	7.0	(28.1)	95	〃	DP69 〃
253	〃	2.4	3.5	3.1	10.5	(21.2)	95	〃	DP70 〃
254	砥石	[10.2]	4.4	3.5	—	(183.3)	70	〃	Q30 使用面2,側面に加工痕,流紋岩質凝灰岩
255	石臼	A [28.0] B 9.0 C 1.4 D 2.5				(851.7)	10	〃	Q31 上臼(粉挽き臼),安山岩

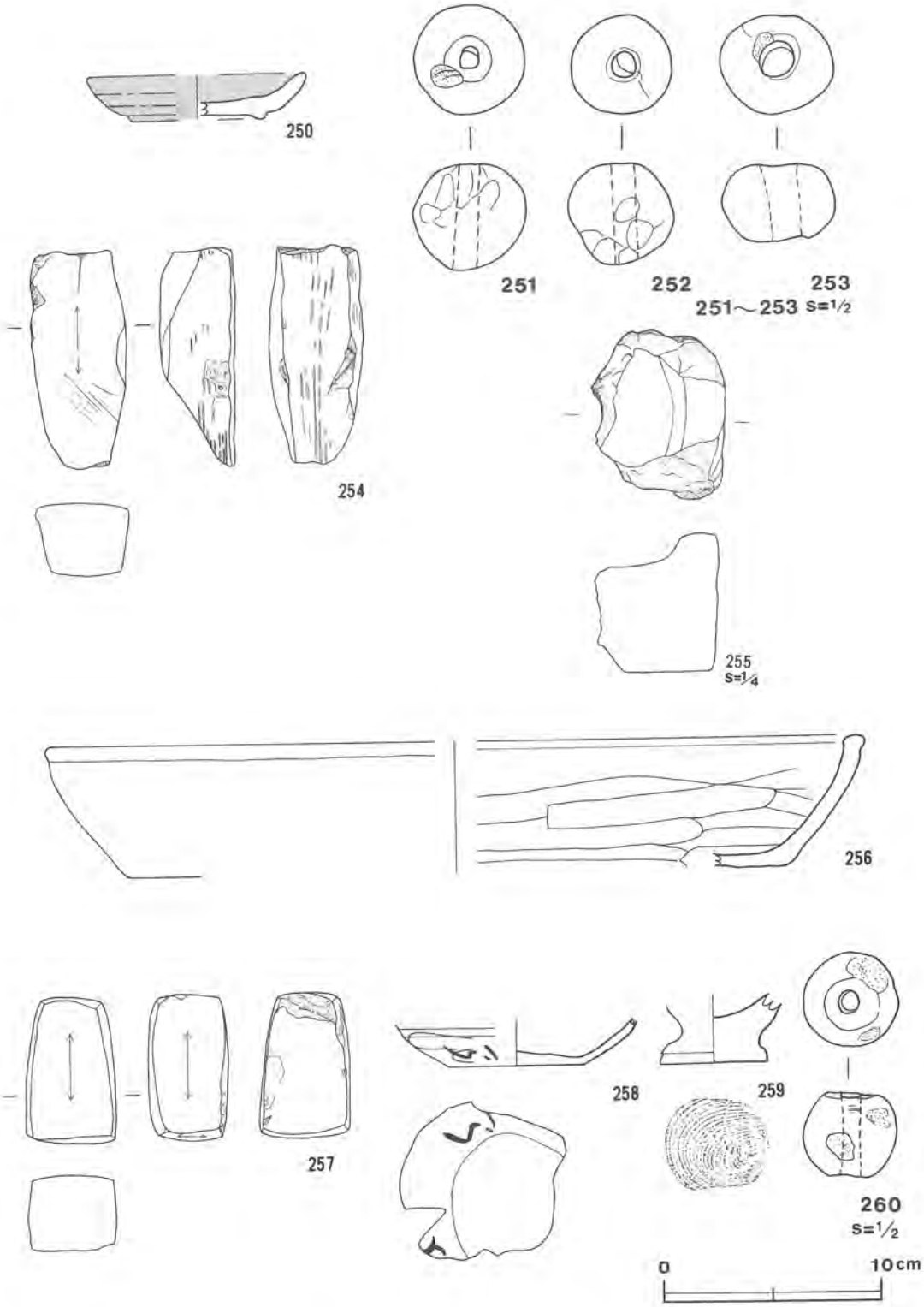
第4号溝出土遺物観察表(第71図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
256	内耳土器	A [37.50] B 6.10 C [30.30]	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，端部は内削ぎ状となっている。底部外面ヘラ調整。体部内外面横ナデ調整。外面に煤付着。	砂粒・石英・雲母 内－にぶい褐色 外－黒色 普通	P 190 10% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
257	砥石	6.8	4.2	3.6	—	186.0	100	覆土	Q32 使用面5,溝状の擦痕,安山岩

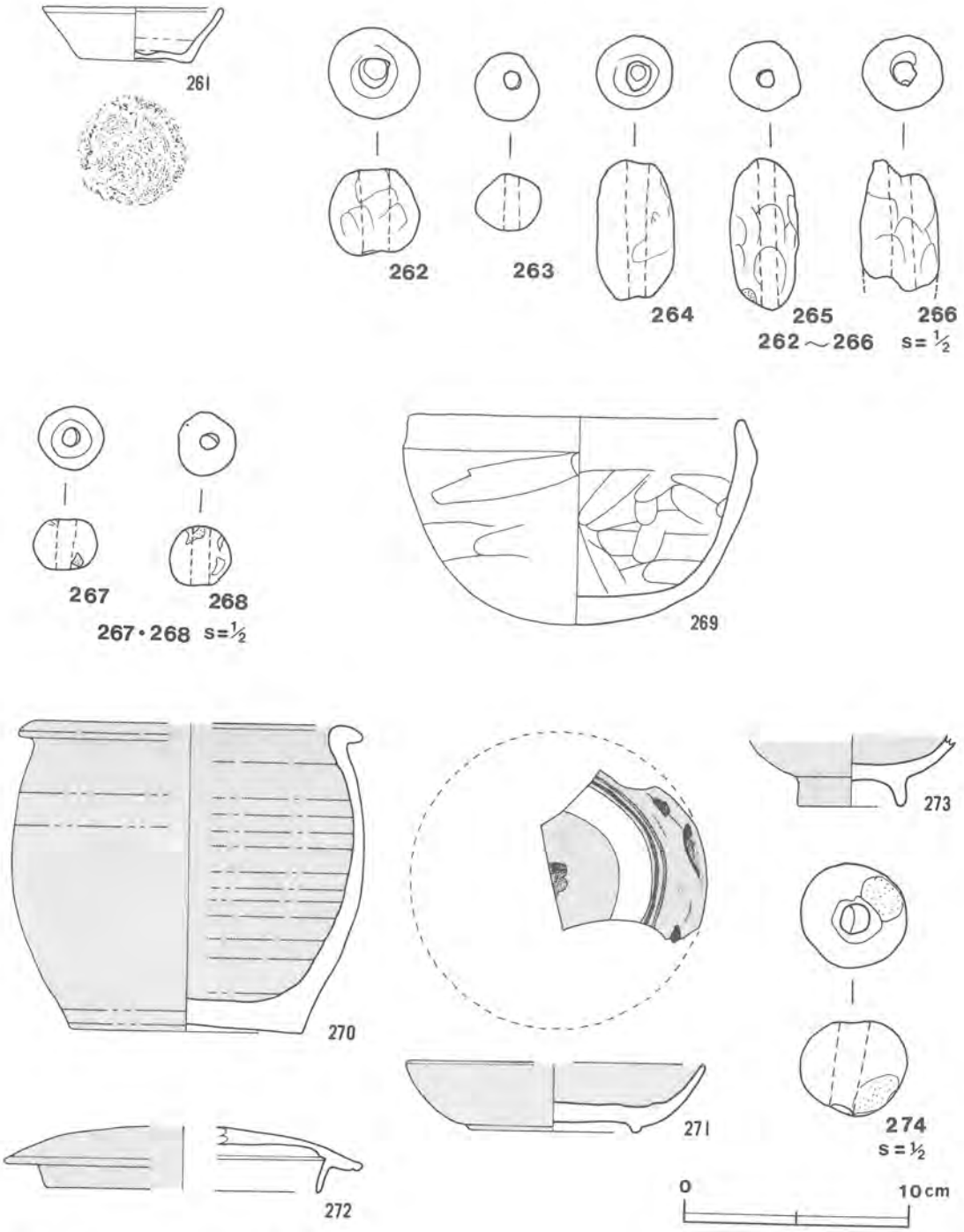
第7号溝出土遺物観察表(第71図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
258	皿 土師質土器	B (1.60) C 6.20	平底で，底部内面中央に膨らみを持つ。体部は直線的に外傾して開き，上位で僅かに内傾する。水挽き成形。底部外面ヘラ調整。体部下半回転ヘラ削り調整。体部外面に墨書。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 191 20% 覆土



第71図　第１・４・７号溝出土遺物実測・拓影図

259	円柱高台 土　　器 土 師 器	B（3.20） D　5.00	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，底部に「ハ」の字状に開く円柱状の高台が付く。水挽き成形。高台と体部は一体であり，高台は回転糸切り。高台外面横ナデ調整。体部内面ナデ調整。	砂粒 浅黄橙色 普通	P 192 10% 覆土



第72図　第8・9・11号溝出土遺物実測・拓影図

第7号溝出土遺物観察表（第71図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
260	球状土錘	2.6	3.0	2.9	7.0	(21.3)	90	覆土	DP71 一方向から穿孔,上下ヘラ調整

第8号溝出土遺物観察表（第72図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
261	皿 土師質土器	A 8.10 B 2.50 C 5.00	平底で，底部内面中央が窪む。体部は直線的に外傾して開き，端部に丸味を持つ。水挽き整形。底部回転糸切り。体部外面ナデ調整。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 193 80% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
262	球状土錘	2.6	2.8	2.7	9.5	17.1	100	覆土	DP72 一方向から穿孔,上下ヘラ調整
263	〃	1.7	2.1	2.0	5.0	(4.6)	65	〃	DP73
264	管状土錘	4.2	2.3	2.3	6.5	19.6	100	〃	DP75 一方向から穿孔
265	〃	4.5	2.2	1.7	5.5	(12.3)	80	〃	DP76
266	〃	(4.0)	2.5	2.2	9.5	(15.6)	50	〃	DP77

第9号溝出土遺物観察表（第72図）

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
267	球状土錘	1.5	2.0	1.9	6.0	4.3	100	覆土	DP78 一方向から穿孔,上下ヘラ調整
268	〃	1.7	2.0	1.8	6.0	(4.8)	99	〃	DP79 〃

第11号溝出土遺物観察表（第72図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
269	椀 土師器	A 14.90 B 9.30	丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口辺部は僅かに内傾する。口辺部内外面横ナデ調整。体部内外面ナデ調整。外面は摩滅している。	砂粒・雲母 赤色 普通	P 198 80% 覆土
270	甕 陶器	A [15.40] B 13.80 C 10.40	平底で，体部は内彎しながら上方に立ち上がり，口縁部は折り返され強く外反する。口唇部は丸味を持ち外傾する。水挽き成形。内面にロクロ成形痕。底部外面と口唇部を除く内外面に光沢のある釉が掛けられている。	(釉)内－黒色 外－極暗赤 褐色 良好	P 194 50% 覆土
271	皿 陶器	A [13.40] B 3.10 D [7.50] E 0.30	染付の延形皿。高台は低く直立し，断面三角形状を呈する。体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がる。内面や底部周縁に二重の圏線。水挽き成形。削り出し高台。内面に花卉文。内面の底部周縁（幅1.5cm）を除く全面に釉が掛けられている。	(釉)灰白色 良好	P 196 25% 覆土
272	蓋 陶器	A [12.20] B (2.90) E 1.20	青緑釉の土瓶蓋。水挽き成形。天井部に光沢のある青緑色の釉が掛けられており，2か所に目跡が残る。最大径16.0cm。	(釉)青緑色 内－浅黄色 良好	P 195 30% 覆土
273	椀 陶器	B (3.20) D 4.60 E 1.20	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，直立する高台が付く。水挽き成形。削り出し高台。畳付を除く全面に釉が掛けられている。細い貫入が見られる。	(釉)浅黄色 良好	P 197 20% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
274	球状土錘	2.8	3.2	3.1	9.0	(25.0)	85	覆土	DP80 一方向から穿孔,上下ヘラ調整

5 井戸

当遺跡からは，中世から近世にかけて墓域が形成され，また，近世には屋敷が存在していたとの伝承がある調査区の西側の台地上から，6基の井戸が検出されている。6基の井戸については，当初，土坑や堀等を想定してそれぞれ調査を進めたが，調査の過程で第1～3号井戸から出水がみられたこと，第4～6号井戸は2m以上の深さをもち，いずれも多量の山砂によって人為的に埋め戻されていること，台地の西側の低地に「井戸久保」という小字名が残ること等から，最終的にこれらの遺構を井戸として判断したものである。しかし，いずれも最後まで掘り切ることが不可能であったため，詳細については不明瞭な点を残している。

第1号井戸 {旧第1号堀，SX4（第73図）}

位置 調査区の中央部B3h2区を中心に位置する。

重複関係 北西側で第5号溝と重複するが，同時期のものと思われる。

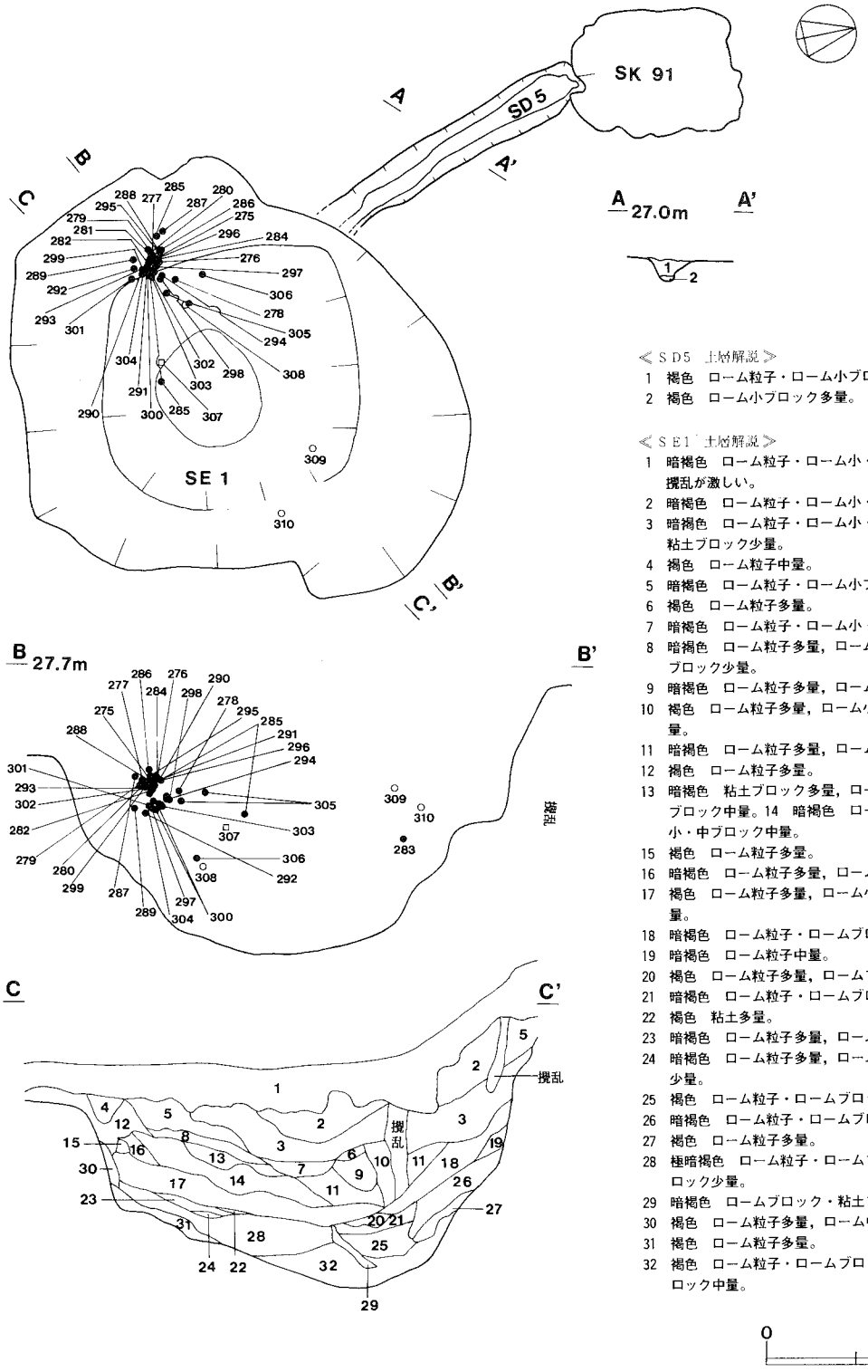
規模と形状 壁の一部が既に崩落し，本来の形状が失われているため，確認面における平面形は5.89×4.67mの不整楕円形を呈する。本来は径4.5～4.6mの円形状を呈していたものと思われる。断面形は鍋底状を呈し，深さは2.32mを測る。掘り込みは粘土層に達している。

長径方向 N-41°-E。

覆土 最下層にローム粒子，ローム小～大ブロックを多量に含む褐色土，下層に粘土大ブロックやローム粒子，ローム小～大ブロックを少～中量含む極暗褐色土・暗褐色土，中～上層にローム粒子を多量に含む褐色土，ローム粒子やローム小・中ブロックを中～多量含む暗褐色土がレンズ状に自然堆積している。覆土は全体に締まりを帯びている。

遺物 覆土中・上層からほぼ完形に近い土師質土器の皿が約30点出土している。また，これらの土師質土器の皿の他に覆土から内耳土器片26点，擂鉢片1点，陶器片12点，磁器片2点や五輪塔の水輪等が出土している。土師質土器の皿を除く他の遺物は投棄された状況を示しているが，土師質土器の皿については，限られた場所からまとまって出土しており，また正位の状態で重なり合って出土しているものも見られることから，人為的に埋められた可能性が高い。

所見 本跡についてはその東側に土塁状の遺構が存在することや，トレンチ調査の結果等から当



≪ＳＤ5　土層解説≫

1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
2　褐色　ローム小ブロック多量。

≪ＳＥ1　土層解説≫

1　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック少量。撹乱が激しい。
2　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック中量。
3　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック中量，粘土ブロック少量。
4　褐色　ローム粒子中量。
5　暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
6　褐色　ローム粒子多量。
7　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック中量。
8　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック・粘土ブロック少量。
9　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量。
10　褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
11　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
12　褐色　ローム粒子多量。
13　暗褐色　粘土ブロック多量，ローム粒子・ロームブロック中量。14　暗褐色　ローム粒子・ローム小・中ブロック中量。
15　褐色　ローム粒子多量。
16　暗褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
17　褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
18　暗褐色　ローム粒子・ロームブロック少量。
19　暗褐色　ローム粒子中量。
20　褐色　ローム粒子多量，ロームブロック中量。
21　暗褐色　ローム粒子・ロームブロック少量。
22　褐色　粘土多量。
23　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
24　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック少量。
25　褐色　ローム粒子・ロームブロック多量。
26　暗褐色　ローム粒子・ロームブロック中量。
27　褐色　ローム粒子多量。
28　極暗褐色　ローム粒子・ロームブロック・粘土ブロック少量。
29　暗褐色　ロームブロック・粘土ブロック少量。
30　褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量。
31　褐色　ローム粒子多量。
32　褐色　ローム粒子・ロームブロック多量，粘土ブロック中量。

0　2m

第73図　第１号井戸・第５号溝・第91号土坑実測図

初は堀を想定して調査を進めた。しかし，調査の進展につれて堀とは形状が異なり，湧き水が見られることや本跡の北側に1.95×1.48mの隅丸長方形の粘土貼り土坑が検出され，本跡とこの粘土貼り土坑が溝(SD5)によって接続されていること等から，井戸(宙水井戸)と判断したものである。出土した遺物の年代から，中世末(16世紀後半)から近世初頭(17世紀前半)頃に位置付けられるものと考えられる。

第2号井戸 ｛旧SK13（第74図）｝

位置　調査区の中央部B3i_1区に位置する。

規模と形状　確認面における平面形は2.78×2.05mの楕円形状を呈し，確認面から20cm前後の深さまでなだらかに落ち込んだ後，円筒状に落ち込む。壁は途中で大きく崩落しており，形状は既に崩れているが，本来は円筒状に掘り込まれていたものと推定される。確認面から1.8mの深さまで掘り込んだ時点で出水が見られたため，掘り切ることができなかった。

長径方向　N-13°-E。

覆土　ローム粒子やローム小・中ブロックを中量または多量に含む褐色土・灰褐色土が人為堆積し，確認面から30～80cmの付近にはヤマトシジミを主体とする貝が投棄されていた。

所見　形状や出水の状況から井戸と考えられる。中・近世。

第3号井戸 ｛旧SK14（第74図）｝

位置　調査区の中央部B2h_0区を中心に位置する。

規模と形状　平面形は径1.30～1.40m程の円形状を呈し，円筒状に掘り込まれているが，確認面下1.40～1.75m付近で壁が大きく崩れており，出水が見られたため，掘り切ることができなかった。

方向　不明。

覆土　ローム粒子やローム小・中ブロックを多量に含む褐色土や暗褐色土が人為堆積している。

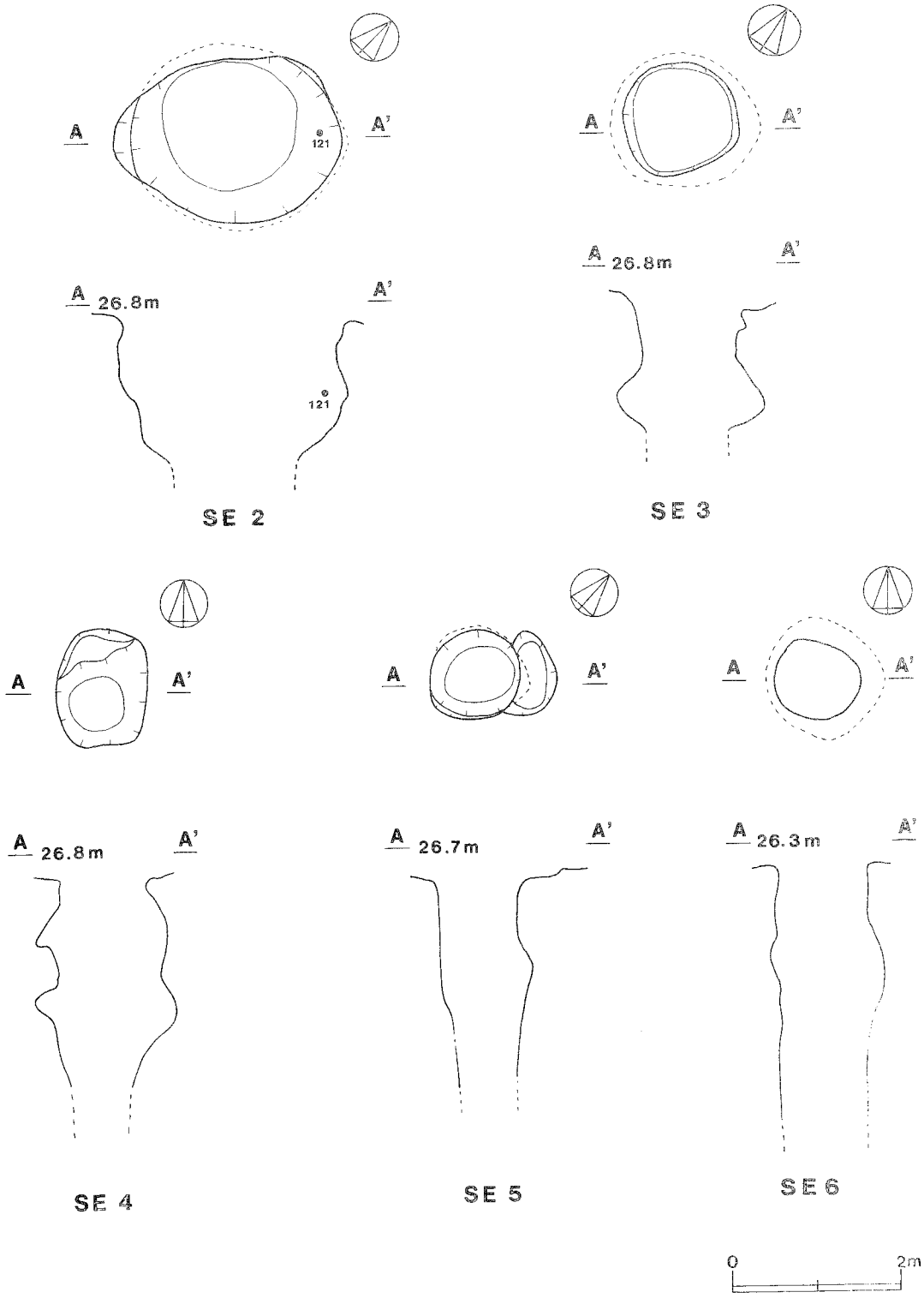
遺物　土師器片5点，須恵器片2点，土師質土器片2点が出土している。

所見　形状や出水の状況から井戸と考えられる。中・近世。

第4号井戸 ｛旧SK90（第74図）｝

位置　調査区の中央部B2j_0区を中心に位置する。

規模と形状　1.43×1.13mの隅丸長方形状を呈し，北西側に浅い皿状の掘り込みを有する。中央部は径1.0～1.1m前後の円筒状に掘り込まれ，下方に向かって緩やかにすぼまっている。確認面下0.3～0.8m，1.2～2.0m付近に壁の崩落が見られたため，掘り切ることができず，深さ2.6m



第74図　第２～６号井戸実測図

付近で掘り込みを中断する。

長軸方向　N-4°-E。

覆土　ローム小・中ブロック，粘土小～大ブロック，砂を中量または多量に含む褐色土が人為堆積している。

所見　出水は認められなかったが，形状から井戸と考えられる。中・近世。

第5号井戸｛旧SK26（第74図）｝

位置　調査区の西側C2b6区を中心に位置する。

規模と形状　平面形は径1.1m程の円形状を呈し，円筒状に掘り込まれている。その北東側には本跡に伴う1.1×0.5mの楕円形状を呈する深さ10cmの皿状の掘り込みが認められる。壁は確認面下0.9m付近で大きく崩落しており，2.45m程掘り込んだ時点で掘り切ることを断念した。

方向　不明。

覆土　多量の砂で埋め戻されており，砂にはローム粒子やローム小・中ブロックを含む暗褐色土や褐色土，粘土が混入している。

所見　出水は見られなかったが，形状から井戸と考えられる。中・近世。

第6号井戸｛旧SK3（第74図）｝

位置　調査区の南西側C2b5区に位置する。

規模と形状　平面形は径1m程の円形状を呈し，円筒状に掘り込まれている。壁は確認面下1.0～1.9m付近で崩落している。危険を伴ったため，確認面下3.2m付近まで掘り進めた時点で掘り切ることを断念した。

方向　不明。

覆土　深さ1m以下は多量の砂で埋め戻されており，その上位は確認面まで暗褐色土，褐色土で埋め戻されている。覆土には多量のローム粒子やロームブロックが含まれている。

遺物　覆土から土師器片5点，須恵器片1点，内耳土器片1点，陶器片1点，磁器片3点，砥石1点，石臼1点が出土している。

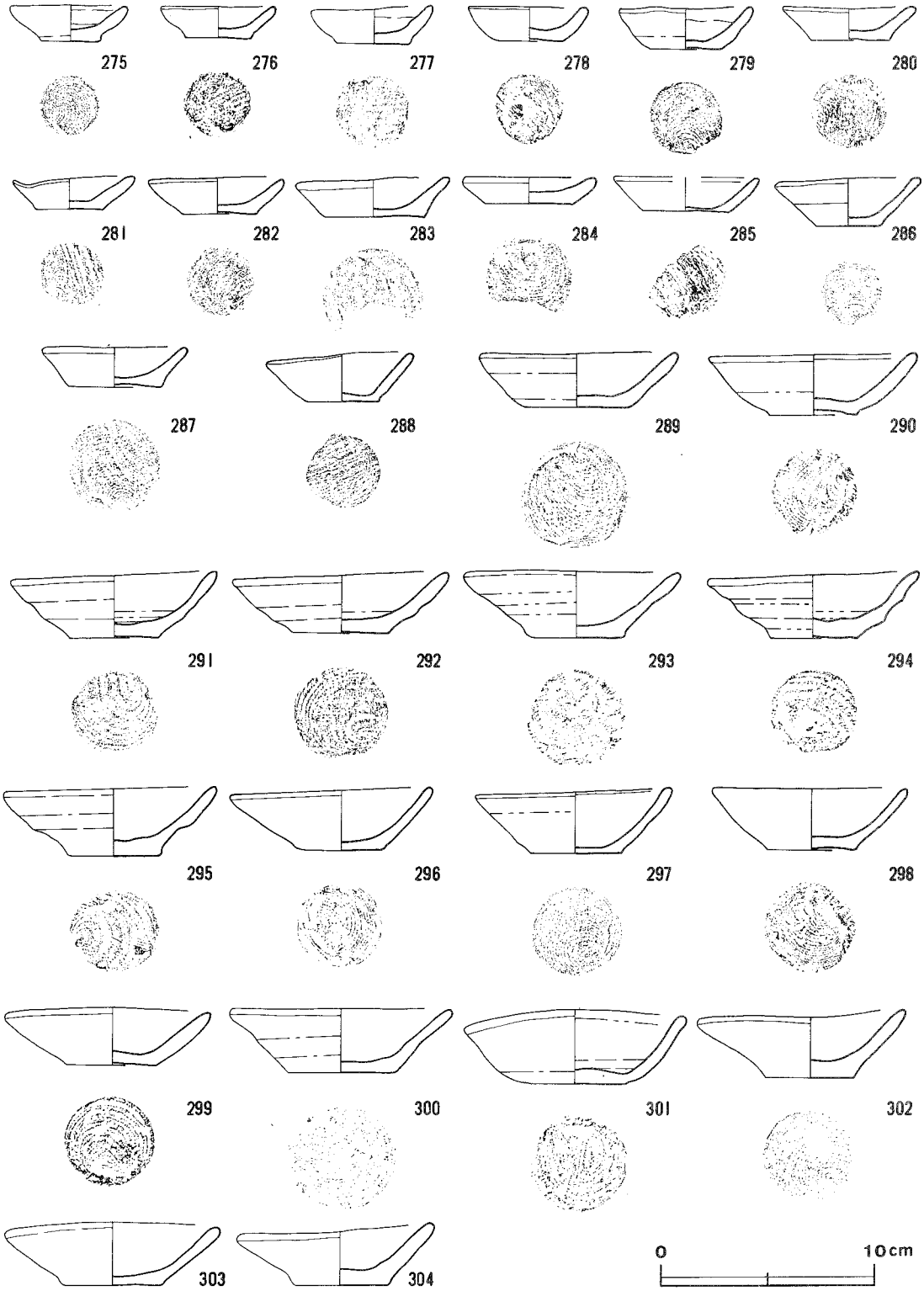
所見　出水は見られなかったが，形状から井戸と考えられる。中・近世。

第1号井戸出土遺物観察表（第75～77図）

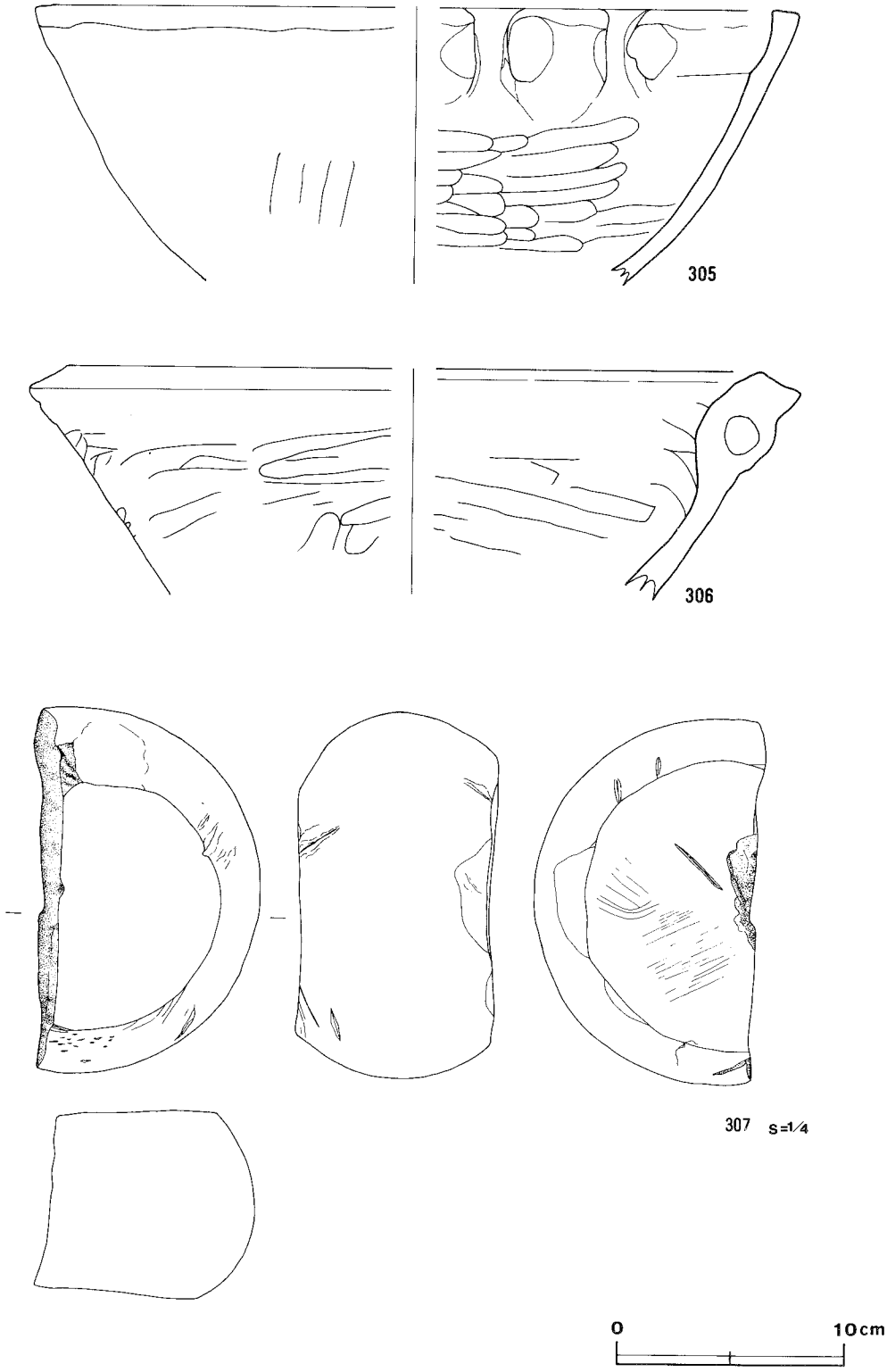
遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
275	皿 土師質土器	A　5.40 B　1.70 C　2.80	平底で，底部は円柱状に僅かに下方に突出する。体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 赤色 普通	P 238 95% 覆土上層

276	皿 土師質土器	A 5.40 B 1.50 C 3.00	平底で，底部は円柱状に僅かに下方に突出する。体部は外傾して開き，口縁部でほぼ直立する。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P 240 70% 覆土上層
277	皿 土師質土器	A 5.60 B 1.90 C 3.50	不安定な平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。内外面に煤付着。全体に器形が歪んでいる。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 234 100% 覆土上層
278	皿 土師質土器	A 5.60 B 1.60 C 3.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・石英 にぶい褐色 普通	P 235 95% 覆土上層
279	皿 土師質土器	A 6.30 B 2.00 C 3.40	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 明赤褐色 普通	P 232 95% 覆土上層
280	皿 土師質土器	A 6.30 B 1.60 C 3.70	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。全体に器形が歪む。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 233 100% 覆土上層
281	皿 土師質土器	A 5.60 B 1.60 C 3.20	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。底部外面に木目状の圧痕。全体に器形が歪んでいる。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 237 90% 覆土上層
282	皿 土師質土器	A 6.30 B 1.70 C 3.40	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 236 90% 覆土上層
283	皿 土師質土器	A 7.00 B 1.90 C 4.80	平底で，体部は緩く外反気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 201 70% 覆土中層
284	皿 土師質土器	A 6.00 B 1.30 C 4.00	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。扁平である。	砂粒・雲母 にぶい褐色 普通	P 239 70% 覆土上層
285	皿 土師質土器	A 〔6.80〕 B 1.60 C 4.00	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。体部内外面丁寧なナデ調整。底部回転糸切り後ヘラナデ調整。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P 241 40% 覆土上層
286	皿 土師質土器	A 6.50 B 2.30 C 2.40	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。体部内外面丁寧なナデ調整。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P 231 100% 覆土上層
287	皿 土師質土器	A 6.80 B 1.90 C 4.40	平底で，体部は緩く外反気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 赤褐色 普通	P 200 100% 覆土上層
288	皿 土師質土器	A 6.60 B 3.40 C 3.50	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り後ヘラ調整。体部内外面丁寧なナデ調整。	砂粒・スコリア 赤色 普通	P 230 100% 覆土上層
289	皿 土師質土器	A 9.00 B 2.60 C 4.90	平底で，体部は直線的に外傾して開く。体部外面に弱いロクロ成形痕。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい褐色 普通	P 218 100% 覆土上層
290	皿 土師質土器	A 9.80 B 2.90 C 4.20	平底で，体部は腰にやや張りを持ち，直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 221 95% 覆土上層
291	皿 土師質土器	A 9.70 B 3.10 C 4.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。体部外面に強いロクロ成形痕が残る。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア にぶい赤褐色 普通	P 222 95% 覆土上層
292	皿 土師質土器	A 10.30 B 2.90 C 4.50	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。体部外面に強いロクロ成形痕。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 217 100% 覆土上層

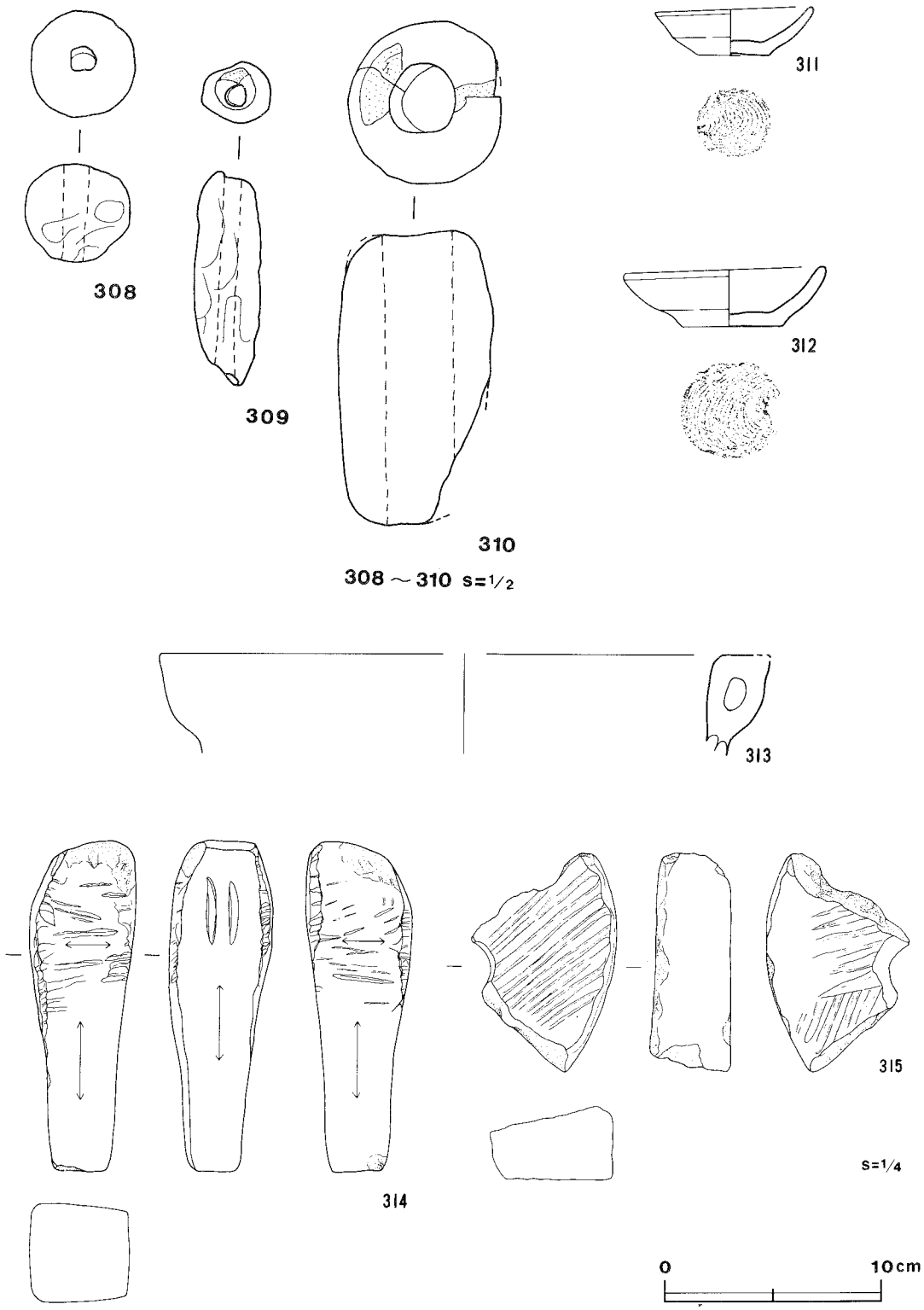
293	皿 土師質土器	A 9.90 B 3.20 C 4.60	平底で，体部は直線的に外傾して大きく開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 225 80% 覆土上層
294	皿 土師質土器	A 8.00 B 3.10 C 4.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。体部外面に強いロクロ成形痕を残す。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 226 80% 覆土上層
295	皿 土師質土器	A 9.80 B 3.30 C 4.30	平底で，体部下半は外反気味に，中位から口縁部にかけては直線的に外傾して立ち上がる。体部外面中央に稜を持つ。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母・スコリア 橙色 普通	P 223 90% 覆土上層
296	皿 土師質土器	A 9.40 B 3.00 C 4.10	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き整形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 227 75% 覆土上層
297	皿 土師質土器	A 9.20 B 3.20 C 4.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 229 50% 覆土上層
298	皿 土師質土器	A 9.00 B 2.90 C 4.20	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア にぶい橙色 普通	P 224 90% 覆土上層
299	皿 土師質土器	A 9.40 B 2.50 C 4.20	平底で，底部内面中央に膨らみを持ち，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 220 95% 覆土上層
300	皿 土師質土器	A 10.20 B 3.00 C 5.00	平底で，体部は外傾して立ち上がり，中位から口縁部にかけてさらに外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 赤褐色 普通	P 228 70% 覆土上層
301	皿 土師質土器	A 10.50 B 3.50 C 4.40	平底で，底部内面中央に厚味を持ち，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転糸切り。器形が全体に歪んでいる。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 214 100% 覆土上層
302	皿 土師質土器	A 9.60 B 3.20 C 4.20	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア・雲母 にぶい赤褐色 普通	P 215 100% 覆土上層
303	皿 土師質土器	A 9.70 B 3.00 C 4.60	平底で，体部は直線的に外傾して開き，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部回転糸切り。全体に器形が歪んでいる。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 219 100% 覆土上層
304	皿 土師質土器	A 9.10 B 3.00 C 4.50	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。体部内外面に煤付着。灯明皿として使用。	砂粒・石英・雲母 にぶい橙色 普通	P 216 100% 覆土上層
305	内耳土器	A [33.80] B (12.30)	体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部内面が浅く窪む。口唇部は平坦であるが，中央部が僅かに窪む。口縁部内外面横ナデ。体部内面ヘラナデ調整。耳接合（2か所残存）。	砂粒・石英・雲母 内－明赤褐色 外－黒褐色 普通	P 213 20% 覆土上層
306	内耳土器	A [30.60] B (10.20)	体部は外傾して立ち上がり，口唇部は幅が広く平坦で，外削ぎ状を呈している。体部内外面ヘラナデ調整。口唇部ヘラナデ後横ナデ調整。外面に煤付着。耳接合。	砂粒・雲母 内－にぶい褐色 外－黒褐色 普通	P 199 20% 覆土中層



第75図　第１号井戸出土遺物実測・拓影図 (1)



第76図　第１号井戸出土遺物実測図 (2)



第77図　第１・２・６号井戸出土遺物実測・拓影図 (3)

第1号井戸出土遺物観察表(第76・77図)

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
307	五輪塔	21.9	13.6	11.9	—	(4839.7)	55	覆土中層	Q47 水輪を砥石に転用
308	球状土錘	3.0	3.3	3.2	8.0	29.4	100	〃	DP90 一方向から穿孔
309	管状土錘	6.8	2.3	2.0	7.0	(24.7)	95	覆土上層	DP89
310	〃	9.3	5.1	4.8	22.0	(183.6)	70	〃	DP88

第2号井戸出土遺物観察表(第77図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
311	皿 土師質土器	A 7.30 B 2.20 C 3.40	平底で，体部は中央に僅かに膨らみを持つが，ほぼ直線的に外傾して開く。口縁部に煤付着。灯明皿として使用。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P121 100% 覆土
312	皿 土師質土器	A 9.30 B 2.80 C 4.80	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。口縁部内面に煤付着。灯明皿として使用。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P120 80% 覆土

第6号井戸出土遺物観察表(第77図)

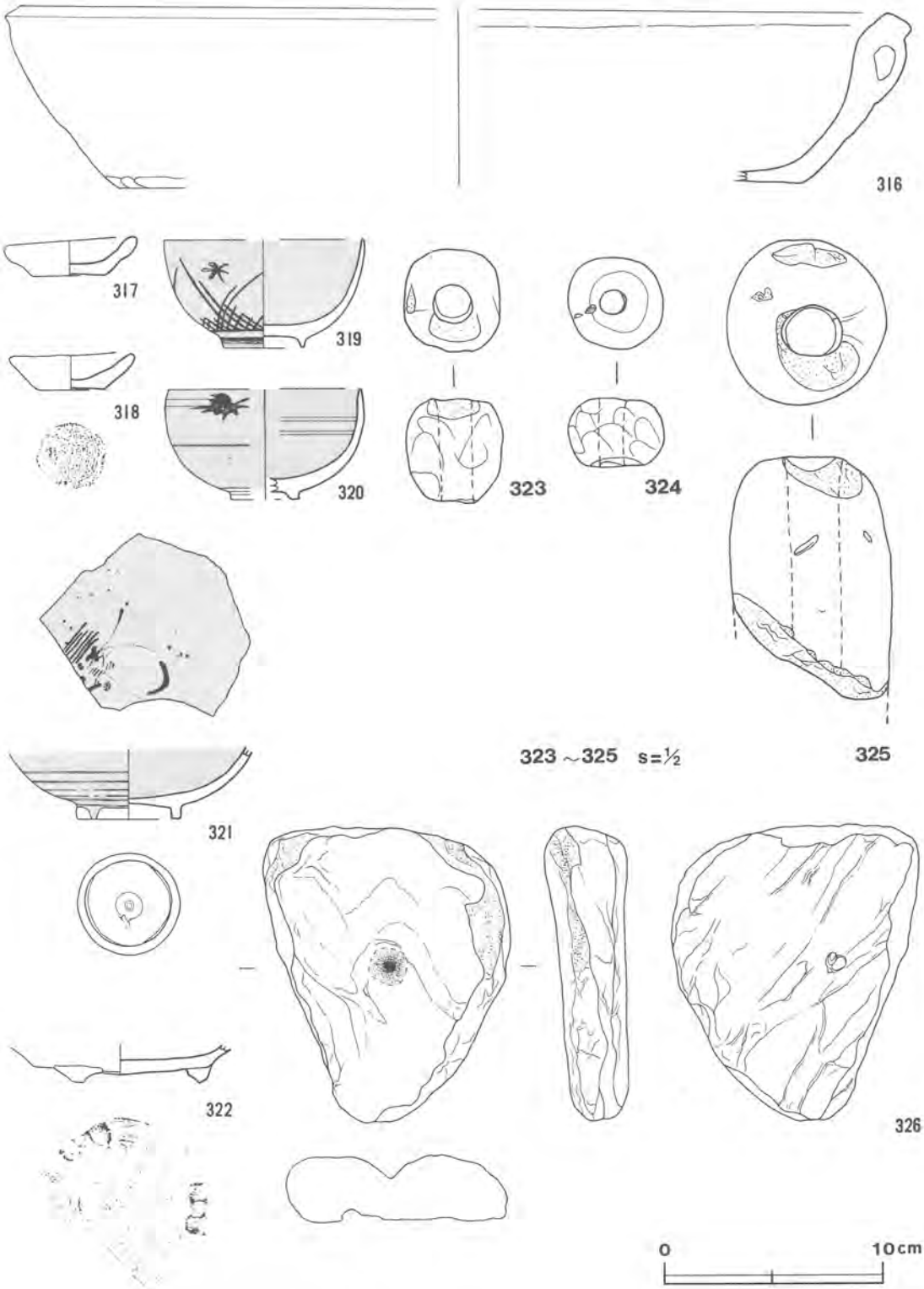
遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
313	内耳土器	A [28.00] B (4.60)	頸部は外傾し，内側に幅の広い浅い凹線が周回する。内外面横ナデ調整。耳接合。外面に鍋墨付着。	砂粒・石英・雲母 黒褐色 普通	P94 5% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
314	砥石	15.3	4.9	4.7	—	(445.3)	95	覆土	Q2 使用面3，溝状の擦痕，砂岩
315	石臼	直径[24.4] 高さ4.6 芯穴の径[4.4~5.4]				(617.9)	20	〃	Q3 下臼(粉挽き臼)，安山岩

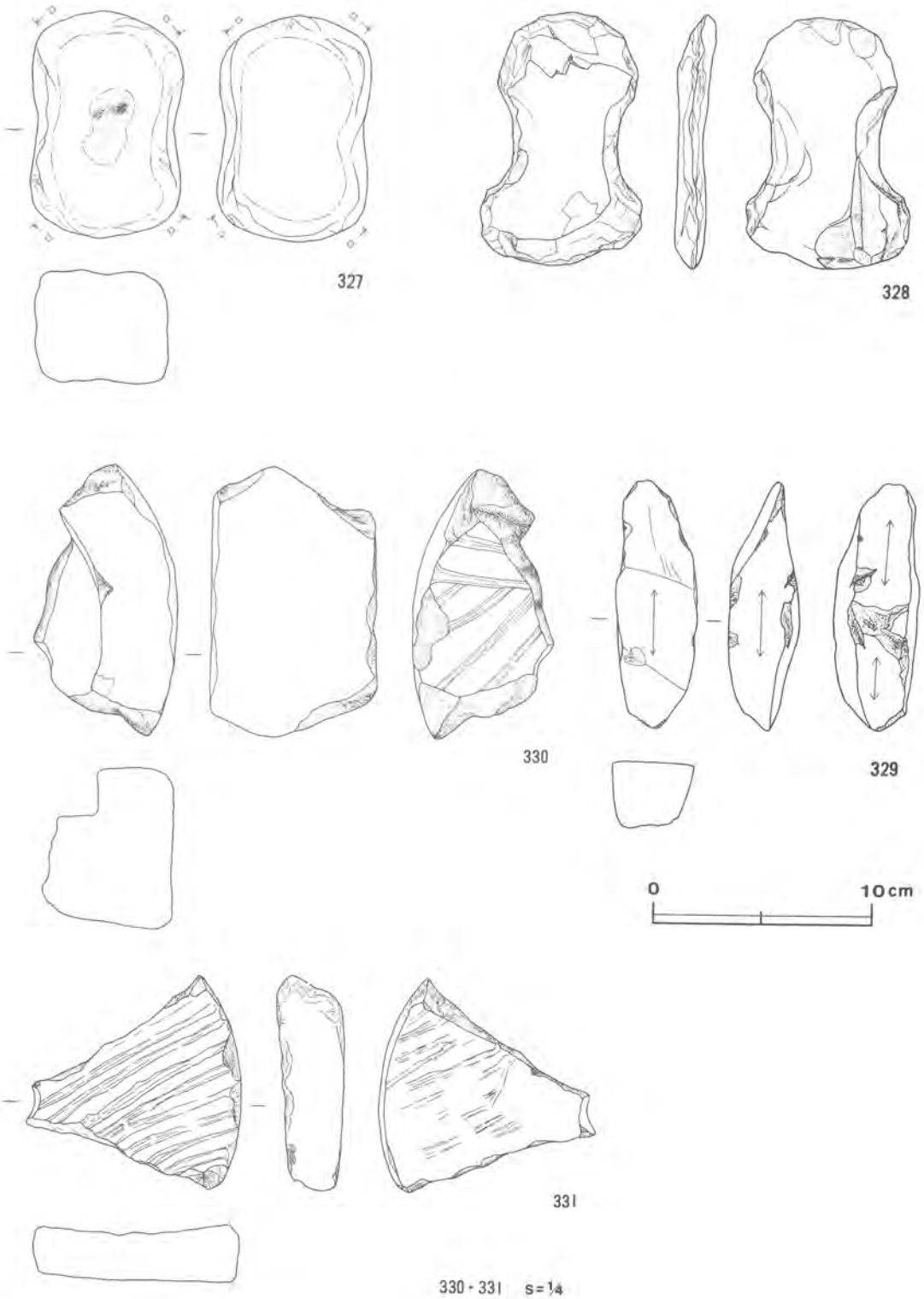
第3節 その他の遺構・遺物

1 地点貝塚(第65図)

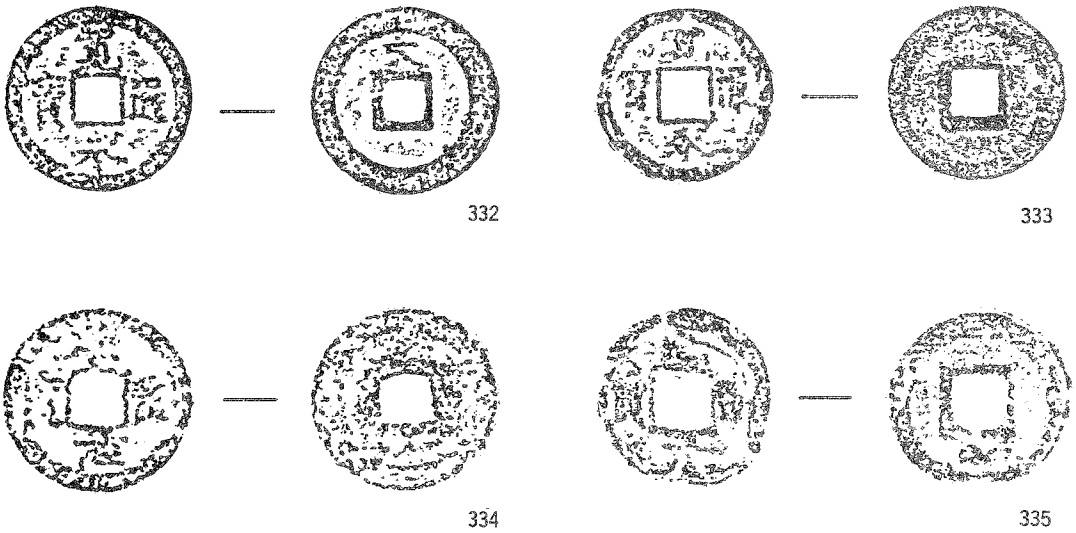
当遺跡からは，調査区西端のB2i_2区を中心とする台地の緩斜面(SM1)，調査区西側のB2h_4区を中心に位置する第1号地下式壙及びB2g_6区に位置する第39号土坑の上面(SM2・3)から，ヤマトシジミを主体とする大小の地点貝塚が検出されている。第1号地点貝塚(SM1)は，3か所の貝塚の中で最大規模を有し，中世または近世に属する第1号溝の上面及びその北側に形成されており，調査区内における貝の分布範囲は，東西27m，南北11mに及ぶが，さらに貝塚は北側の調査区外にも広がりを見せている。貝層は40～50cmの厚さで堆積しており，第1号溝が僅かに埋まった時点で，東側から西側の斜面に向かって長期間に亙り投棄された状況を示している。貝層からは，貝に混じって縄文式土器片4点，弥生式土器片3点，土師器片119点，須恵器片15点，土師質土器片8



第78図　第１号貝塚出土遺物実測・拓影図 (1)



第79図　第１号貝塚出土遺物実測図　(2)



第80図　第1号貝塚出土古銭拓影図　(3)

0　2cm

点(317・318等)，内耳土器片94点(316等)，陶器片56点(内，擂鉢片3点)，磁器片12点(碗-319・320，香炉-322)，土製品4点(球状土錘-323・340，管状土錘-325等)，石器1点(打製石斧-328)，石製品10点(磨石・凹石・石臼各1点，砥石4点等)，古銭4枚(寛永通寶2枚，不明2枚)，不明鉄製品1点が出土している。第2号地点貝塚(SM2)は，第1号地下式壙の竪坑の開口部を利用して形成されたもので，竪坑から土砂が流れ込み地下式壙が中程まで埋まった時点で，竪坑の開口部から主室方向に向かって数度に亙りヤマトシジミを主体とする貝が投棄され，竪坑の上面にまで堆積したものである。第3号地点貝塚(SM3)は，第39号土坑(墓壙)の西側の覆土を30cm程皿状に掘り込んで形成されたもので，ヤマトシジミを主体とする貝が第39号土坑の中層からその上面にかけて投棄されている。第2号・第3号土坑の貝層からは遺物は出土していない。

上記の3か所の地点貝塚は，出土遺物や重複遺構との新旧関係から，いずれも中世または近世にかけて形成されたものと考えられる。

出土遺物観察表(第78～80図)

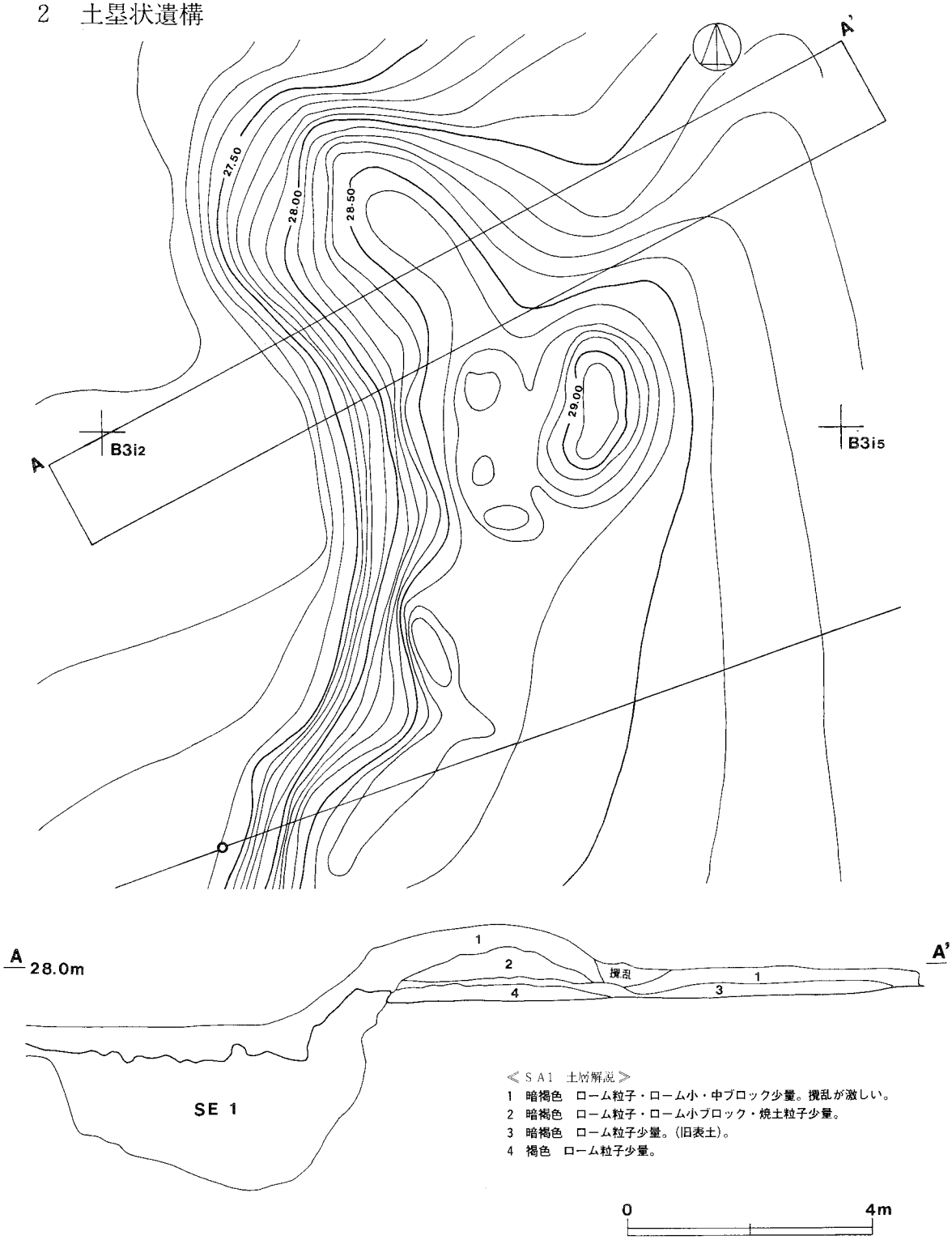
遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
316	内耳土器	A 〔40.20〕 B 8.70 C 〔31.80〕	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口唇部は外削ぎ状を呈する。底部外面ヘラ調整。体部下端ヘラ削り。体部内外面ナデ調整。口唇部ヘラナデ後横ナデ調整。耳接合。	砂粒・雲母 灰褐色 普通	P 206 20% 覆土
317	皿 土師質土器	A 6.30 B 1.80 C 3.40	平底で，体部は緩く外反気味に外上方に立ち上がり，端部に丸味を持つ。水挽き成形。底部糸切り後ヘラ調整。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 207 95% 覆土
318	皿 土師質土器	A 5.90 B 1.70 C 3.20	平底で，体部は直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 208 60% 覆土

319	碗 磁器	A [9.20] B 5.10 D 3.80 E 0.50	染付の碗形茶碗。平底で，底部には直下に延びる短い高台が付く。体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。削り出し高台。体部外面に昆虫と草文。体部下半から高台外面にかけて三重の圏線。内外面に明緑灰色の釉。畳付は露台。	(釉)明緑灰色 良好	P 209 60% 覆土
320	碗 磁器	A [9.00] B 5.20 D [3.20] E 0.30	染付の碗形茶碗。平底に「ハ」の字状に開く短い高台が付く。体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で直立する。水挽き成形。削り出し高台。花卉文。内外面に灰色の光沢のある釉が掛けられている。体部下端以下露台。	(釉)灰白色 良好	P 210 40% 覆土
321	皿 陶器	B (3.40) D 4.80 E 0.90	染付の延形皿。平底で，底部に直立する短い高台が付く。体部は内彎気味に外上方に開いて立ち上がる。水挽き成形。削り出し高台。見込みに花卉文。高台内面に落款。体部内外面に灰白色の釉が掛けられている。高台内外面及び畳付は露台。	(釉)灰白色 良好	P 212 20% 覆土
322	香炉 陶器	B (1.80) C 8.10 E 0.90	平底で，体部下端に明瞭な稜を有し，体部下半は外傾して立ち上がる。底部には，3か所(内1か所欠損)に短い粘土紐を貼り付けた高台が付く。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。高台の外面に指頭痕。	砂粒 浅黄色 普通	P 211 5% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
323	球状土錘	3.3	3.3	3.0	12.0	(30.8)	98	覆土	DP84 一方向から穿孔
324	〃	2.2	3.0	3.0	9.0	20.7	100	〃	DP85 〃 ，上下ヘラ調整
325	管状土錘	(7.6)	5.2	5.0	18.0	(185.1)	50	〃	DP83 外面ナデ調整
326	凹石	14.0	11.5	4.0	—	804.7	100	〃	Q 43 片麻岩
327	磨石	10.6	7.0	5.5	—	621.9	100	〃	Q 42 敲石兼用，安山岩
328	打製石斧	11.8	7.4	1.8	—	152.8	100	B 2i2 区	Q 44 分銅形，流紋岩質凝灰岩
329	砥石	11.6	3.8	3.2	—	150.8	100	覆土	Q 38 使用面3，使用面に強いねじれ，流紋岩質凝灰岩
330	石臼	A [30.0] B 10.1 C 3.0 D 4.9				(1713.7)	10	〃	Q 35 上臼(粉挽き臼)，安山岩
331	〃	A [28.7] B 3.6 G [3.6]				(668.3)	15	〃	Q 37 下臼(〃)， 〃

遺物番号	銭名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	外縁径(mm)	内郭長(mm)	重量(g)	出土地点	備考
332	寛永通寶	寛文8年(1668)	日本	25.2	5.6	3.4	覆土	M 12 新寛永（裏面に「文」の文字）
333	〃	寛文8年(1668)	日本	23.5	6.2	2.0	〃	M 15 新寛永
334	□□元寶	— (—)	—	24.7	6.4	3.3	〃	M 13 □元□寛か，判読困難
335	□□□□	— (—)	—	23.1	7.1	2.6	〃	M 14 銅銭，判読困難

2　土塁状遺構



第81図　第１号土塁状遺構実測図

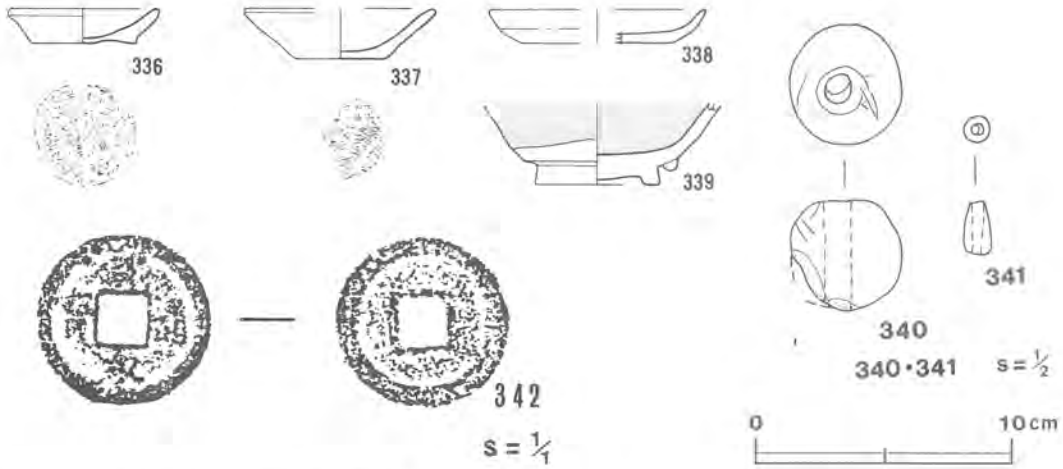
調査区中央部のB3i3区を中心に位置するもので，南北に長い馬の背状に構築されている。主軸方向はN-14°-E前後であり，踏査の結果，本跡はさらに南西側の調査区外(竹林)に延びていることが確認されている。調査区内における規模は，基底面が最大長11.5m，最大幅8m，頂上部が最大長9.8m，最大幅4.4mであり，頂上部と本跡の東側の地表面との比高は0.85m，西側では1.90mを測る。斜度は東側で26°，西側で58°であり，東側に比べ西側が急な勾配となっている。本跡は，ソフトローム層の上位に堆積する暗褐色の旧表土を基底面とし，その上に周囲の旧表土を削平し，馬の背状に盛土したものと思われ，盛土が全体に締まりを帯びていることから，簡単な版築が行われたものと考えられる。旧表土と盛土は基本的に同じ土質であり，1・2層には少量のローム小・中ブロックが含まれている。1層は全体に木の根等による撹乱が激しい。調査前の地形測量によれば，本跡を境とする調査区の西側の台地には，緩斜面を人工的に削平し，上下2段(段差約30cm)となる平坦面が形成されていた痕跡が認められている。これは墓域が形成された時期よりも後の段階と考えられ，近世にこの地に屋敷が営まれ，本跡の先端部に二の宮様(現在は北東に45m程離れた畑に移築されている)が祀られていたとの伝承があることから，本跡はこの近世に存在していたと伝えられる屋敷に伴う土塁と考えられる。

出土遺物観察表(第82図)

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
336	皿 土師質土器	A 6.00 B 1.40 C 4.20	平底で，体部は直線的に外傾して開く。扁平である。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 にぶい赤褐色 普通	P202 70% 覆土
337	皿 土師質土器	A [7.40] B 2.00 C [3.40]	平底で，体部は器厚を一定に保ちながら直線的に外傾して開く。水挽き成形。底部回転糸切り。丁寧な作りである。	砂粒・スコリア 明赤褐色 普通	P203 30%
338	皿 土師質土器	A [8.40] B 1.30 C [6.00]	平底で，体部は器厚を減じながら内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。体部内外面ナデ調整。	砂粒・砂礫・雲母 橙色 普通	P204 40% 覆土
339	椀 陶器	B (3.20) D 4.90 E 0.70	底部には僅かに「ハ」の字状に開く短い高台が付き，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。削り出し高台。内外面に黒色の釉が掛かる。外面の体部下半以下は露台。	(釉)黒色 良好	P205 30% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
340	球状土錘	2.9	3.2	2.9	7.0	(24.2)	90	盛土中	DP86 片面ヘラ調整
341	管状土錘	(1.4)	0.7	0.7	3.0	(0.5)	50	〃	DP87

遺物番号	銭名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	外縁径(mm)	内郭長(mm)	重量(g)	出土地点	備考
342	寛永通寶	寛文8年(1668)	日本	23.0	7.0	2.2	盛土中	M10 新寛永



第82図　第1号土塁状遺構出土遺物実測・拓影図

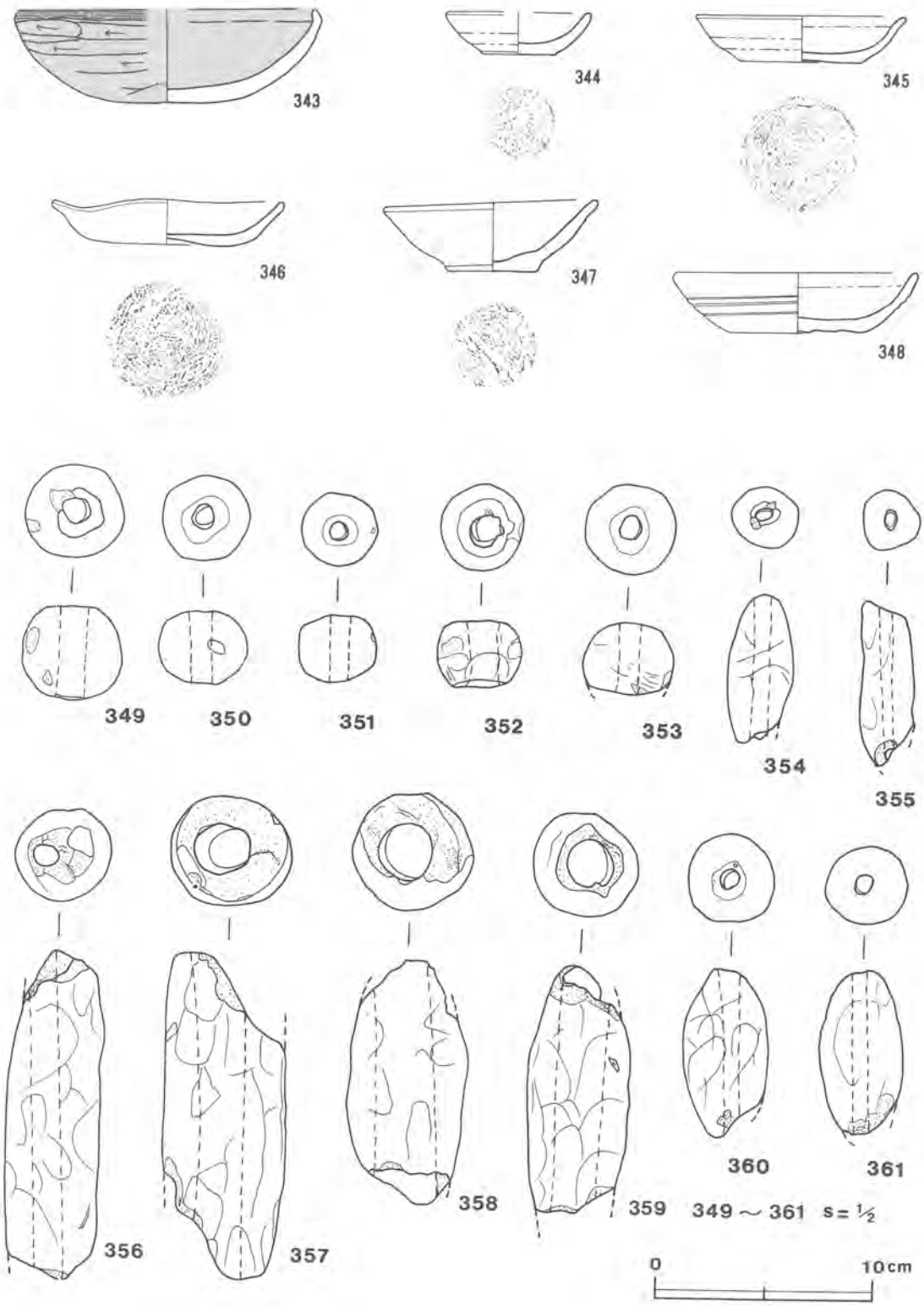
3　遺構外出土遺物

表採及びグリッドから出土した遺物の内，実測可能なものを取り上げ，以下に掲載した。

出土遺物観察表(第83・84図)

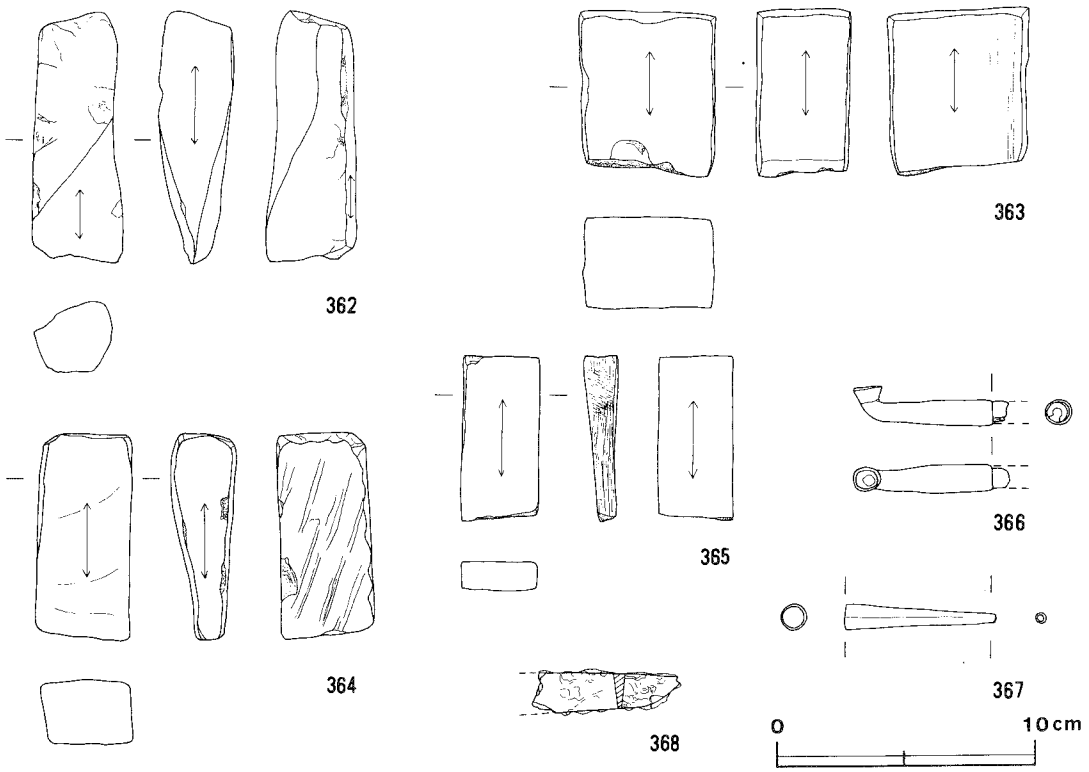
遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
343	坏 土師器	A [13.80] B 4.40	丸底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部は内傾する。体部外面ヘラ削り。口縁部外面横ナデ。内面ナデ調整。内外面黒色処理。	砂粒・雲母 黒色 普通	P246 40% 表採
344	皿 土師質土器	A [6.60] B 2.00 C 3.40	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転糸切り。口縁部の2か所に煤付着。灯明皿として使用。	砂粒 橙色 普通	P242 55% NO.12グリッド
345	皿 土師質土器	A 9.80 B 2.20 C 5.60	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・スコリア 橙色 普通	P244 95% 表採
346	皿 土師質土器	A 10.70 B 2.20 C 5.40	平底で，底部外面中央が窪む。体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で僅かに外傾する。水挽き成形。底部回転糸切り。器形は全体に歪んでいる。	砂粒・雲母 橙色 普通	P188 100% グリッド
347	皿 土師質土器	A 9.80 B 3.40 C 4.00	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で僅かに外反する。水挽き成形。底部回転糸切り。	砂粒・雲母 橙色 普通	P245 50% 表採
348	坏 土師器	A 11.10 B 2.90 C 6.10	平底で，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部回転ヘラ切り。内面ナデ調整。体部外面に弱いロクロ成形痕。	砂粒・石英・スコリア にぶい橙色 普通	P243 100% 表採

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
349	球状土錘	2.9	3.1	3.0	9.0	(24.1)	99	No.3グリッド	DP95　上下ヘラ調整，摩滅進行
350	〃	2.8	2.8	2.7	7.0	16.2	100	B2is　区	DP82　一方向から穿孔，上下ヘラ調整



第83図　遺構外出土遺物実測・拓影図 (1)

351	球状土錘	2.1	2.4	2.3	6.0	10.5	100	表採	DP102 一方向から穿孔
352	〃	2.1	2.8	2.7	11.0	(15.2)	95	〃	DP101 〃
353	〃	(2.3)	2.9	2.9	7.0	(17.3)	75	No.12グリッド	DP97
354	管状土錘	(4.7)	2.0	1.9	5.0	(16.6)	95	No.1グリッド	DP92 摩滅進行
355	〃	(5.2)	1.9	1.8	5.0	(12.0)	80	No.13グリッド	DP98
356	〃	(10.4)	3.0	3.0	9.0	(86.1)	90	No.6グリッド	DP96
357	〃	10.2	3.9	3.4	17.0	(96.5)	60	B2i8区	DP81 外面ヘラ削り
358	〃	7.7	3.8	3.7	20.0	(64.8)	70	No.3グリッド	DP94
359	〃	(7.8)	3.3	3.3	15.0	(57.6)	75	表採	DP100
360	〃	(5.2)	2.7	2.6	6.0	(28.6)	90	No.1グリッド	DP91 外面ナデ調整
361	〃	(5.2)	2.6	2.5	5.0	(26.8)	95	No.14グリッド	DP99
362	砥石	(10.0)	3.6	3.0	—	(114.1)	80	表採	Q49 使用面2,使用面に強いねじれ,流紋岩質凝灰岩
363	〃	(6.6)	5.5	3.8	—	(254.8)	30	〃	Q48 使用面4, 流紋岩
364	〃	[8.2]	3.9	2.7	—	(111.3)	50	C2a8区	Q15 使用面2, 裏面・側面に加工痕, 砂岩
365	〃	[6.6]	3.1	1.4	—	(40.1)	50	No.2グリッド	Q45 〃 , 側面に加工痕, 流紋岩
366	煙管	火皿口径 1.1×0.9 現存長6.0				—	50	No.14グリッド	M16 鉄製, 羅宇と吸口を木管で接続
367	〃	現存長5.9 最大径1.1				—	50	B2i8区	M9 銅製・火皿・雁首欠損
368	刀子	現存長5.8 刀身幅1.6 刀身重ね0.5				(11.1)	50	B2h6区	M17 刀身の一部と茎欠損



第84図 遺構外出土遺物実測図 (2)

第4節　小結

当遺跡からは，先にも述べたように古墳時代後期及び平安時代後期の集落の一部や，中世に形成されたと考えられる墓壙群(地下式壙を含む)や，中・近世に位置付けられるものと思われる土塁状遺構・掘立柱建物跡・井戸・小規模な貝塚等が検出されている。検出されたこれらの遺構や遺物について時代毎に概観して行くことにする。

縄文時代

調査区内からは縄文時代や弥生時代に属する遺構は検出されていないが，縄文時代中期及び弥生時代後期に属する土器片や石器・石製品が少量出土している状況から，既にこの時代に於いても当遺跡を含む周辺の台地上が，当時の人々の何らかの生活の場(生活圏)として機能していたことが窺われる。

古墳時代

古墳時代前期から中期にかけての遺構・遺物は調査区内からは検出されていないが，後期になると東側の支谷に面した台地上に集落が営まれるようになる。当遺跡から検出された古墳時代後期の住居跡は5軒(第2～4・6・7号住居跡)であり，住居跡の主軸方向が様々であることや出土遺物の時期に若干の時間差は認められるが，いずれも6世紀の前半代頃に位置付けられるものと思われる。調査区の北東側から検出された第3号住居跡は，出土した須恵器の蓋坏(17・18)が，陶邑のⅡ型式1段階の須恵器に類似することから，6世紀の第1四半期頃に位置付けることが可能である。5軒の住居跡の内，第2号・第7号住居跡は，調査区の南東側に7.5m程の間隔をおいて隣接する当遺跡の中で最大規模を有する住居跡であり，一辺8m前後の方形を呈し，いずれも主軸方向を南西(N-115°-W前後)に持ち，竈を南西壁の中央部よりも南東側に偏った位置に付設している。また，竈の左側(南東側)に当たるコーナー部に貯蔵穴を有し，4本の主柱穴を一辺4.7m前後の方形状に配置するなど，多くの共通点がみられ，出土遺物から見ても同時期に存在していたことは明らかであり，同一集団により意識的に，かつ規格性をもって構築されたものと考えられる。また，第4号住居跡からは，竈付近及び貯蔵穴を中心として土師器の甕9点，小形甕4点，甑4点(把手付甑，須恵器の甑各々1点を含む)，坩1点，坏5点，高坏1点等多数の遺物が出土しており，坏5点のうち3点には赤彩が施されている。第6号住居跡は，その二分の一程が調査区外に存在することや重複遺構によって掘り込まれているため詳細については不明である。また，古墳時代後期に属するものと考えられる土坑が，これらの住居跡の東側を中心にまとまりを持って検出されているが，その性格については明らかでない。

平安時代

平安時代になると，再び古墳時代後期の集落が営まれていた台地の東側に集落が営まれるよう

になる。この時代の住居跡は3軒(第1・8・9号住居跡)検出されているが，第9号住居跡については出土遺物が少ないことや，その二分の一程が調査区外に存在すること等から不明な点が多い。第1号住居跡は，北東方向に主軸を持つ一辺4.14m程の方形の住居跡であり，内黒の高台付坏(2点)や，やや高脚の高台を有する坏(または埦)，平底で体部が外反して開く土師質土器の皿(4点；いずれも底部回転糸切り)が出土している。第8号住居跡は，古墳時代後期に位置付けられる第7号住居跡の一部を掘り込み，貼床をして構築された住居跡であり，竈は北東側に付設されているが第1号住居跡に比べ主軸方向が大きく東側に傾いている。当住居跡からは，高台付坏(5点；内黒1点を含む)や体部が内彎気味に開く土師質土器の皿(9点；底部回転糸切り2点，回転ヘラ切り7点)が出土している。第1・2号住居跡は，出土遺物から平安時代後期(10世紀の第4四半期～11世紀の初頭頃)に位置付けられるものと思われる。また，平安時代の住居跡が検出された東側の台地上からは，3棟(第1～3号)の掘立柱建物跡が検出されている。第1号掘立柱建物跡(南北5間×東西3間の南北棟の建物）は第8号住居跡を，第2号掘立柱建物跡(南北3間×東西2間の南北棟の建物と推定される)は第9号住居跡を，第3号掘立柱建物跡（南北3間×東西2間の南北棟の総柱建物)は第1号住居跡をそれぞれ掘り込んで構築されている。第1号掘立柱建物跡の柱掘方の覆土上層からは，土師器の坏(墨書土器)や高台付坏等と共に，重複する第8号住居跡出土の遺物よりも古い様相を呈する遺物が出土しているが，遺構の重複関係から見ると，掘立柱建物跡が住居跡を掘り込んでいることは明らかであり，また，これと棟通りを同じくする第3号掘立柱建物跡が第1号住居跡の竈中央部を掘り込んでいることから，これらの遺物は何らかの理由で混入したものと思われる。3棟の掘立柱建物跡は，重複遺構との関連からいずれも平安時代後期（もしくはそれ以降)に属するものと考えられる。平安時代に属する遺構としては，上記の遺構の他に，フラスコ状を呈する5基の土坑(第120・147・150・151・162号)が検出されている。これらの土坑からは灰釉陶器や高台付坏，高脚高台付坏(埦)，高台付皿，土師質土器の皿等が出土しており，出土遺物から，フラスコ状を呈するこれらの土坑は，いずれも住居跡よりも新しい11世紀前半頃のものと思われる。

中・近世

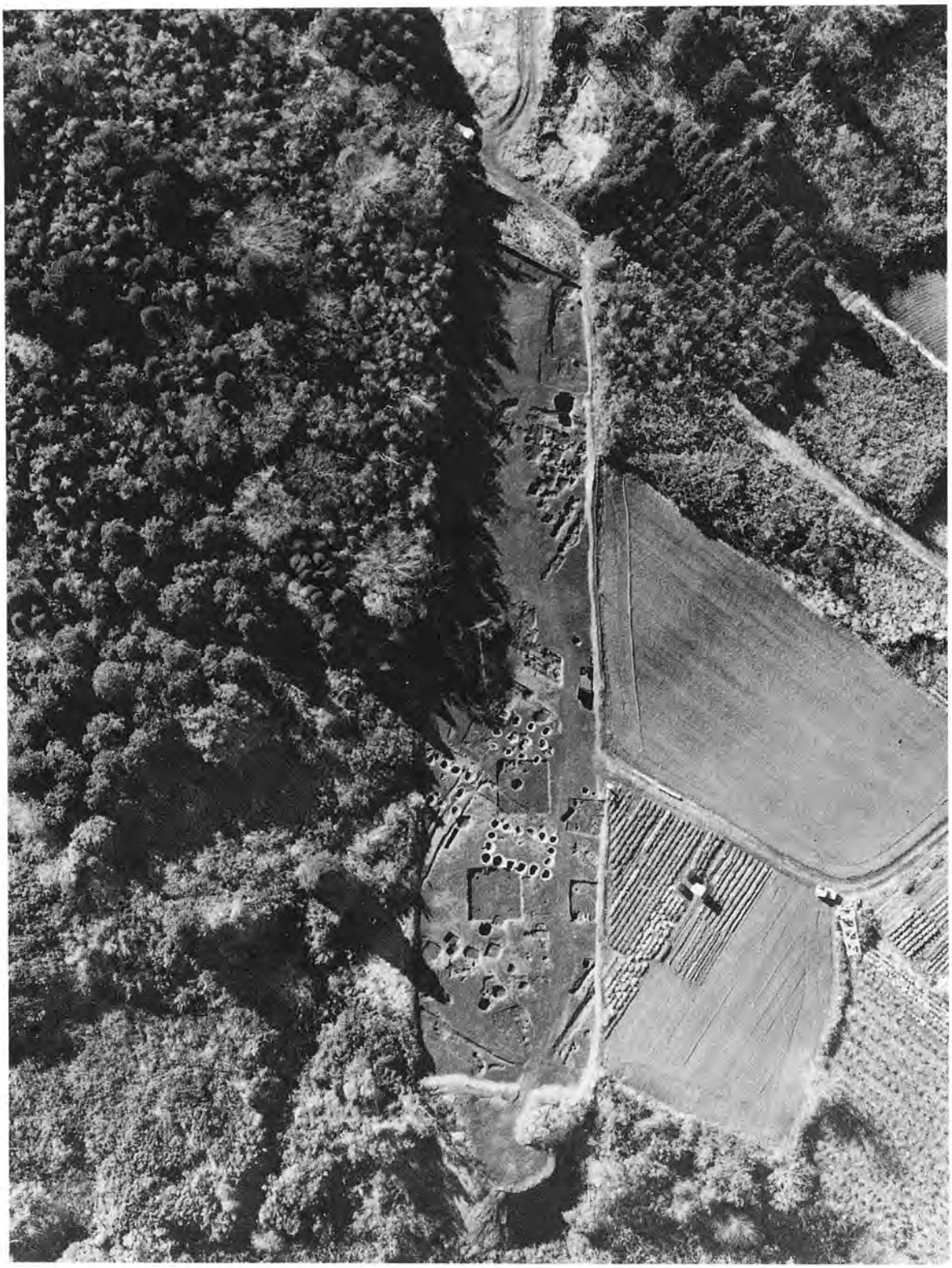
この時代には，調査区の西側の台地上に墓域が形成される。墓域は，第4号溝によって「コ」の字状に区画されており，その内側から隅丸長方形や隅丸方形状等を呈する多数の墓壙及び墓壙と思われる土坑が検出されている。これらの墓壙は幾世代かに亙って形成されたものと思われ，重複が激しく，単一の墓壙の形状や規模，重複遺構との新旧関係を明確に促えることは困難な状況であった。墓壙の中には，底面に灰や焼土・炭化物が堆積する例が見られ，壁際や底面にピットを有する例が多い。中には粘土貼り(壁際や底面)の墓壙も存在する。墓壙からの出土遺物は少ないが，土師質土器の皿(かわらけ)や内耳土器片，中・近世の陶磁器片(花瓶・瓶子・茶碗・擂鉢等)，砥石等が出土している。地下式壙は2基検出されている。そのうちの1基(第1号地下式壙）は，

墓域の区画溝(第4号溝)の下から検出されており，墓壙群に先行するものである。第2号地下式壙も同様と思われる。西側の台地上からは，墓壙群の他に土塁状遺構や井戸，溝(第1～3号)，小規模な地点貝塚，掘立柱建物跡(第4号)が検出されている。これらの遺構からは墓壙群と同様に土師質土器の皿や内耳土器，陶磁器，砥石等が出土している。第1号井戸の覆土中層からは五輪塔の水輪が投げ込まれた状態で出土しており，上層からは16世紀後半から17世紀初頭頃に位置付けられる30点余りの土師質土器の皿が出土している。また，墓域内から検出された第5号土坑覆土からは砥石に転用された宝篋印塔の笠の部分が出土していること等から，墓は第1号井戸から出土した土師質土器の皿の帰属年代を上限とする16世紀末から17世紀初頭頃には，既に廃棄されたものと思われる。第1号井戸は，遺物の出土状況から墓が廃棄された時期には既に存在していた可能性もあるが，少なくとも16世紀末から17世紀初頭頃にはほとんど埋まっていたものと思われる。他の井戸についてもほぼ同様であったと推定される。貝塚が形成された時期については，貝が地下式壙や墓壙，井戸，溝(第3号)に投棄されている状況から，これらよりも新しい時代(江戸時代)のものであることは明らかである。墓域が形成された西側の台地には整形された痕跡が認められる。この台地上には江戸時代に屋敷が存在していたとの伝承があり，台地の整形は屋敷を構える時に行われたものと思われる。土塁状遺構や西側の台地縁辺部から検出された溝(第1～3号)はこの屋敷に伴うものと推定され，貝塚はこの時代に形成されたものと思われる。屋敷が構えられていたと想定される西側の台地からは，18世紀代後半の磁器が出土していることから，屋敷はこの時代には存続していたものと思われる。また，西側の台地の縁辺部から検出された掘立柱建物跡については，中・近世に属するものと思われるが詳細については不明である。台地の東側から検出された2条の溝(第8・9号)は，調査区内から検出された溝の形状や調査区外の踏査の状況から，一辺が28～32m程の方形状に区画されているものと思われ，方向性や規模が類似する。第8号溝は第9号溝によって掘り込まれているが，覆土の状況などからあまり時間差は認められず，ぼぼ同じ場所に時を移さずに作り替えられたものと思われる。第9号溝の方向性が現在の地割りと一致することや，重複遺構及び出土遺物等との関連から中世または近世の溝と考えられるが，性格については明らかでない。

以上，調査の結果に基づき二の宮貝塚から検出された遺構や遺物について概観してきたが，道路幅という限定された範囲内の調査であり，調査区内から検出された遺構の分布状況から，遺跡がさらに周辺の台地上に広がりを見せていることは明らかであり，集落の変遷を含めた遺跡の全容の解明については，将来の調査成果を待たなければならない。

写真図版

二の宮貝塚



二の宮貝塚全景（調査後）

調査前全景〔南西から〕(1)

調査前全景〔北東から〕(2)

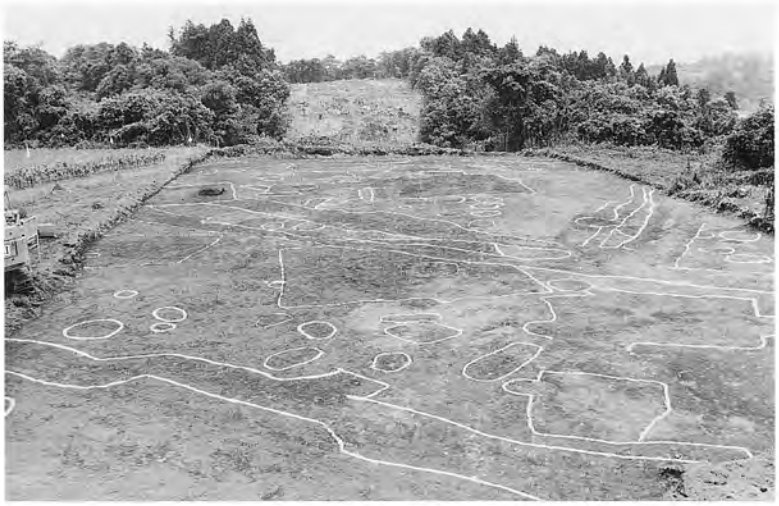
遺跡周辺風景

鍬入れ式 (1)

鍬入れ式 (2)

試掘風景

遺構確認状況〔南西部〕(1)

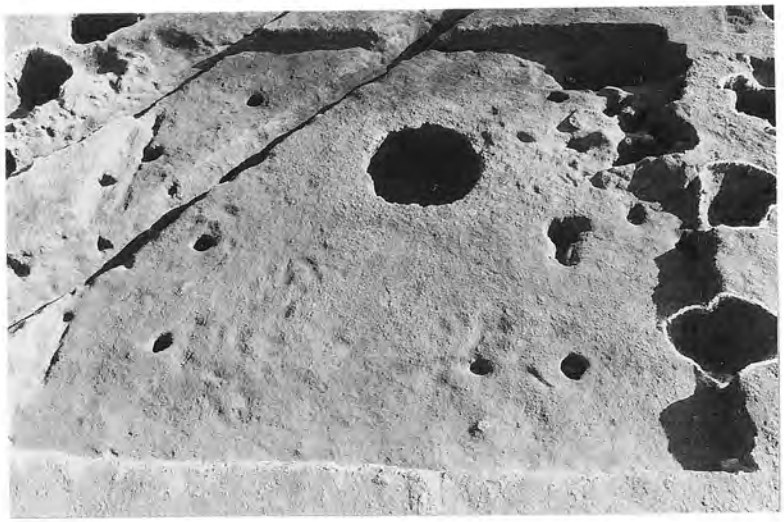


遺構確認状況〔北東部〕(2)

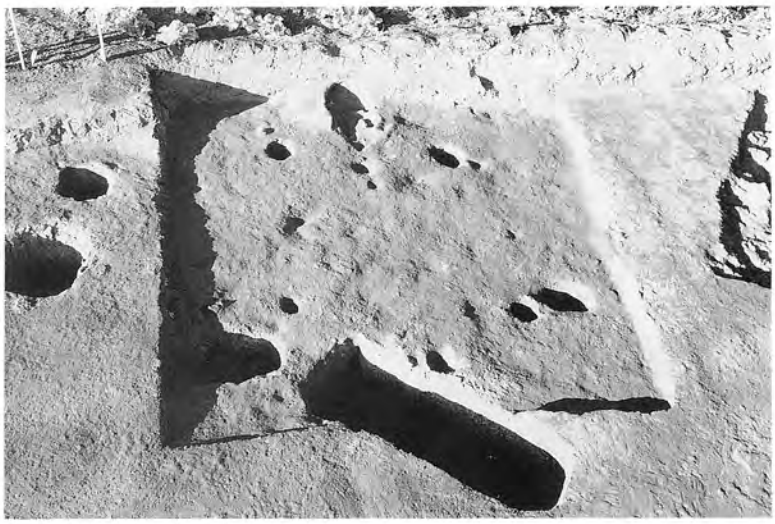
第1号住居跡確認状況

第１号住居跡

第２号住居跡遺物出土状況



第２号住居跡



第 3 号住居跡

第 4 号住居跡遺物出土状況 (1)

同 (2)

同 (3)

同 (4)

同 (5)

第 4 号住居跡竈

第 4 号住居跡

第 5 号住居跡

第 6 号住居跡遺物出土状況
〔貯蔵穴〕

第 7 号住居跡遺物出土状況

第 7 号住居跡

第7号住居跡竈

第7号住居跡，第8号住居跡
遺物出土状況

第1号掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡
遺物出土状況

第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡

調査区西端部の状況

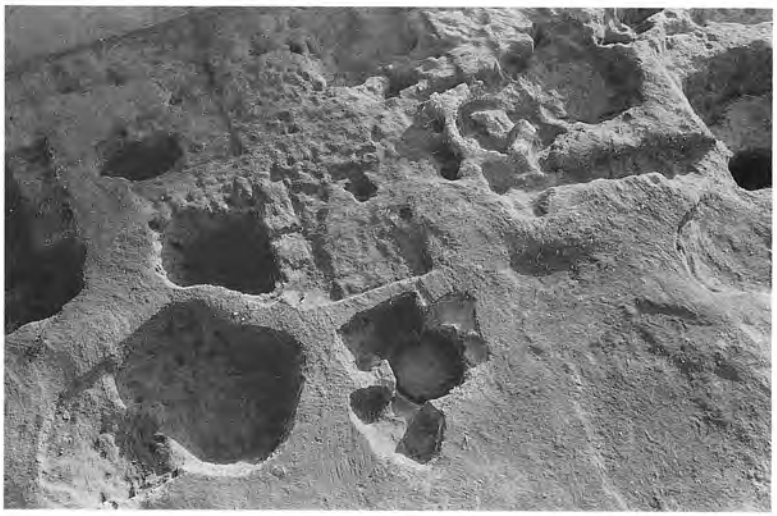
第4号掘立柱建物跡（1）

同（2）

〈上〉墓壙群全景 〈下〉墓壙群 (1)

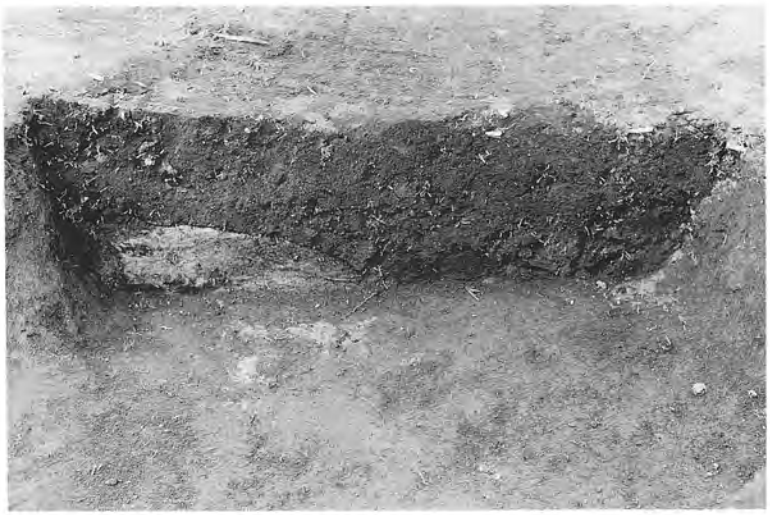
墓壙群 (2)

墓壙群 (3)



墓壙群 (4)

墓壙群 (5)



墓壙(SK32)土層セクション

墓壙(SK86)土層セクション

第１号地下式壙掘削風景

第１号地下式壙土層セクション
実測風景

第１号地下式壙土層セクション

第１号地下式壙 (1)

同 (2)

同 (3)

第１号地下式壙 (4)

第１号土坑

第４号土坑

第5号土坑土層セクション

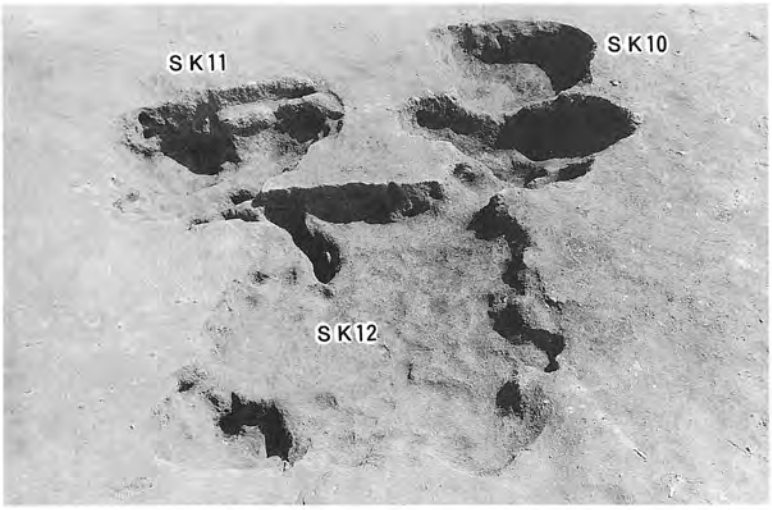
第5号土坑遺物出土状況

第7号土坑

第 8 号土坑遺物出土状況 (1)

同 (2)

第 9 号土坑遺物出土状況

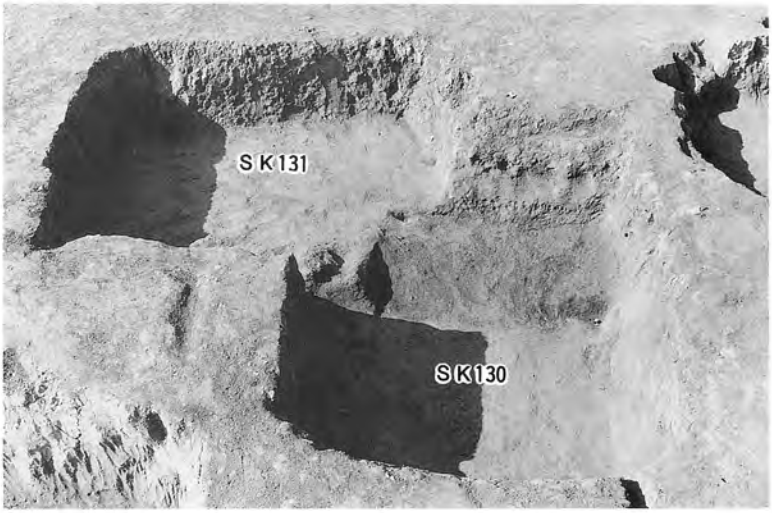


第10～12号土坑

第13号土坑土層セクション

第25号土坑

第99号土坑



第130・131号土坑

第145号土坑

第152号土坑

第120号土坑遺物出土状況 (1)

同 (2)

第129号土坑遺物出土状況（1）

同（2）

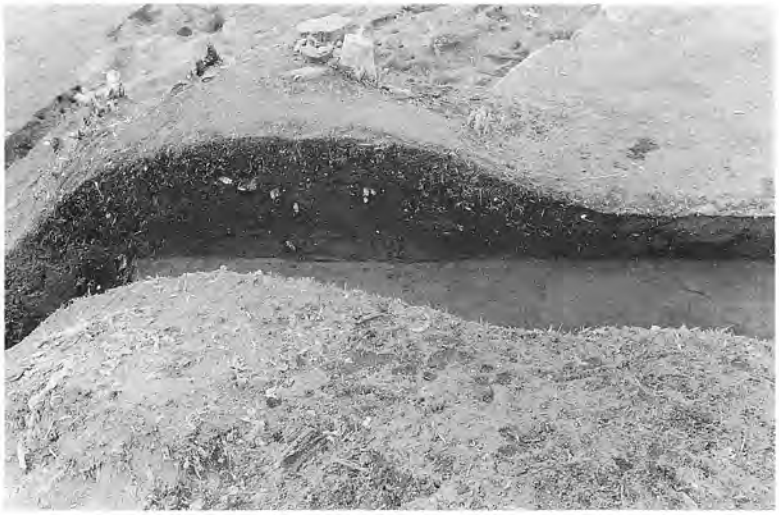
第147号土坑遺物出土状況

第150号土坑遺物出土状況

第151号土坑遺物出土状況

第151号土坑土層セクション

第１号土塁状遺構調査風景



第１号土塁状遺構土層
セクション

第１号井戸土層セクション

第１号井戸，第１号井戸
遺物出土状況

第 2 号井戸

第 4 号井戸

第 5 号井戸

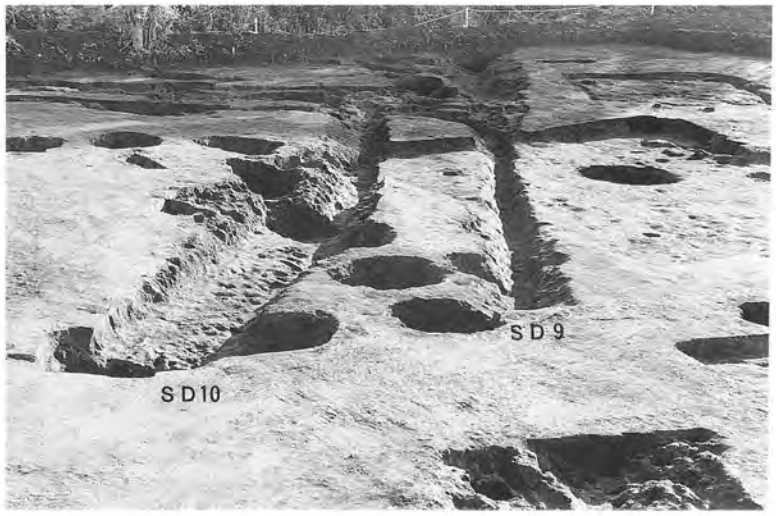
第６号井戸

第１号土塁状遺構周辺の
遺構検出状況（1）

同（2）

第92号土坑

第 3 号溝



第 9 ・10号溝，第 2 号住居跡

第９・10号溝 (1)

同 (2)

1

4

5

10

13

17

18

17・18

27

28

29

30

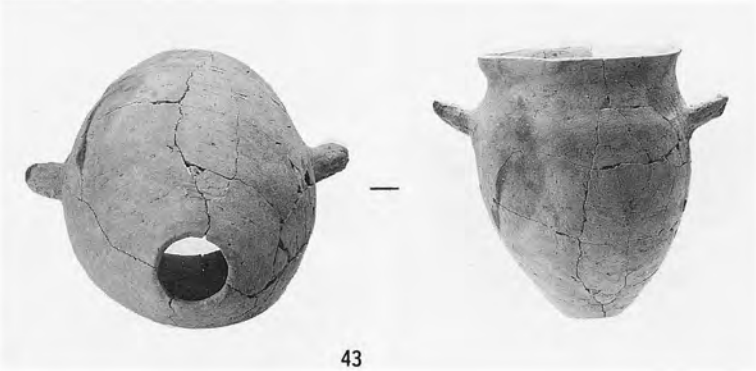
第１・２・４号住居跡出土遺物

32

34

35

41


43

44

47

61

63

71

第４・６・７号住居跡出土遺物

72

74

77

82

86

78

80

130

111

112

190

第７・８号住居跡，掘立柱建物跡，第８号土坑出土遺物

119

121

122

120

128

193

126

127

194

221

196

198

第８号住居跡，掘立柱建物跡，第４・８号土坑出土遺物

201

203

204

200

199

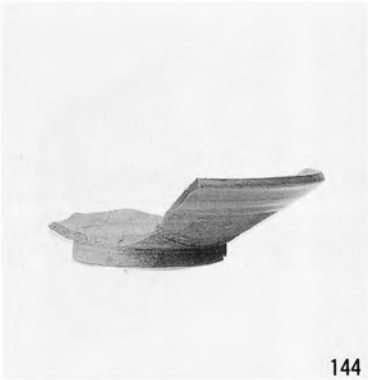
214

207

141

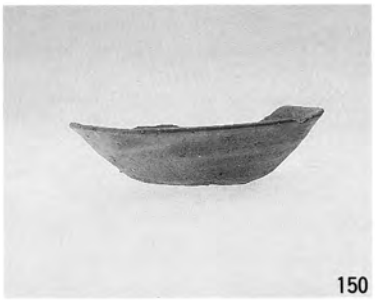
132

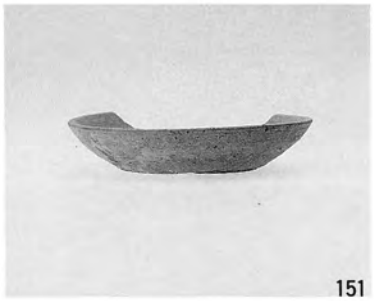
142

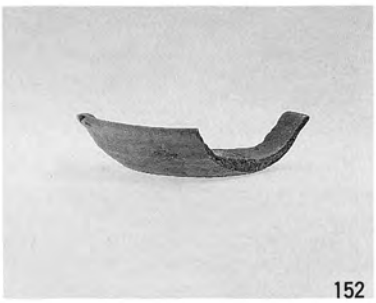

144

146

第8・9・19・21・22・81号土坑出土遺物


150


151


152

153

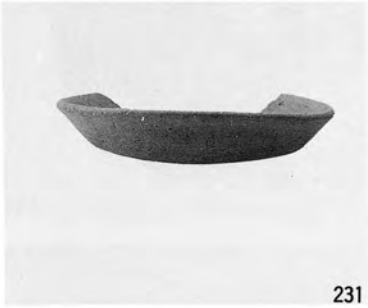
154

157

148

229

230


231

235

240

242

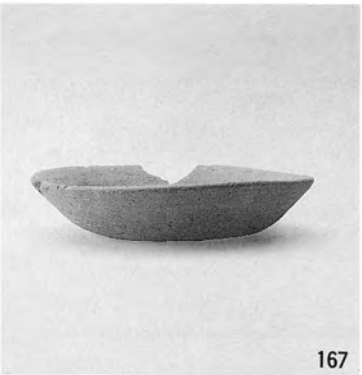
243

第120・127・128・135・136・140号土坑出土遺物

244

165

166


167

170

171

172

175

176

177

179

181

第140・147・150・151号土坑出土遺物

178

259

261

182

269

270

184

第１号井戸出土遺物（一括）

第151号土坑，第７・８・11号溝，第１号井戸出土遺物（一括）

277

278

279

280

282

286

287

288

289

290

291

292

293

295

298

299

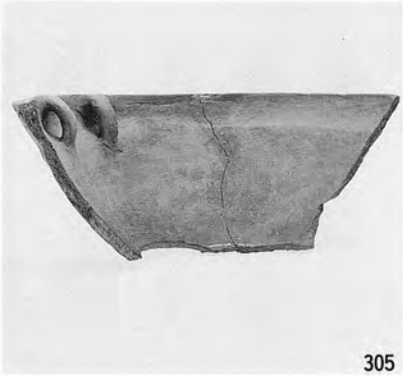
301

302

第１号井戸出土遺物

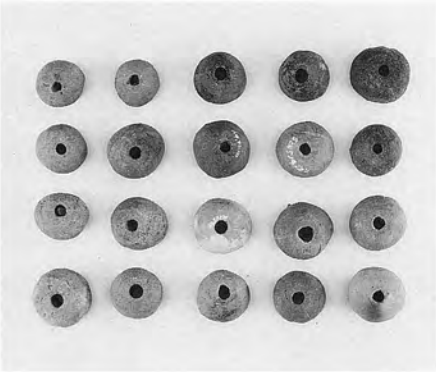
303

306


305

304

320

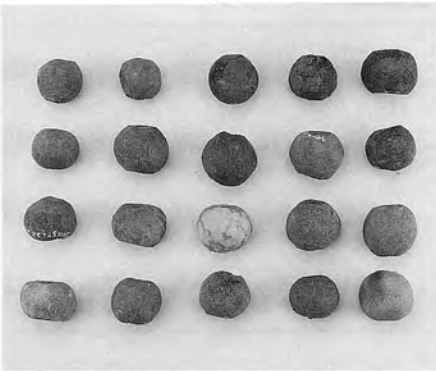


311

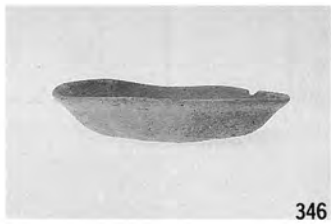
322

312

345



317

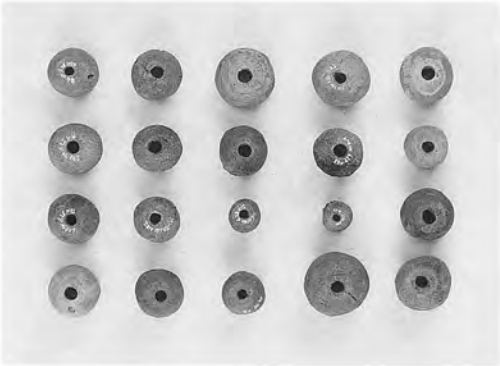

346

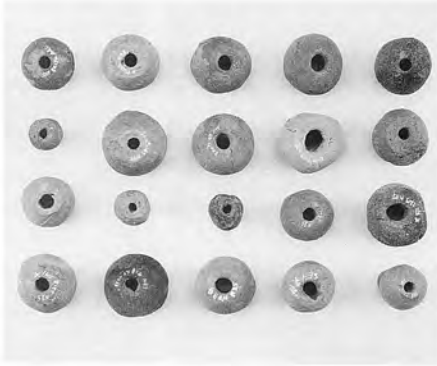
319

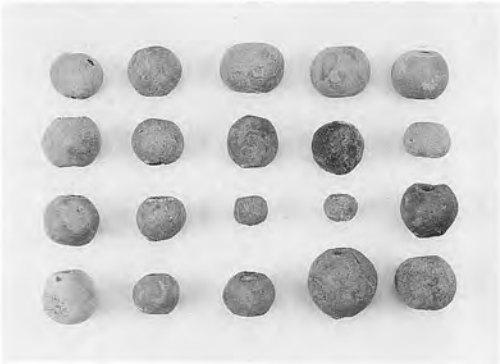
348

20	21	22	19	51
52	53	54	55	56
57	58	64	97	88
89	90	91	92	93

第２・４・６・７号住居跡，第１・２号井戸，第１号貝塚，遺構外出土遺物

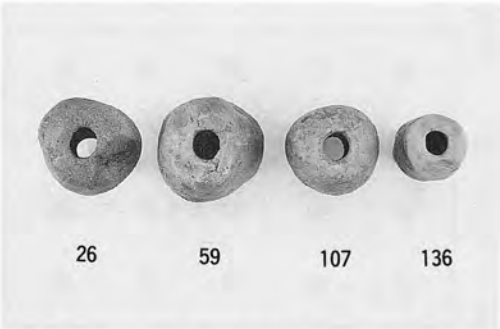




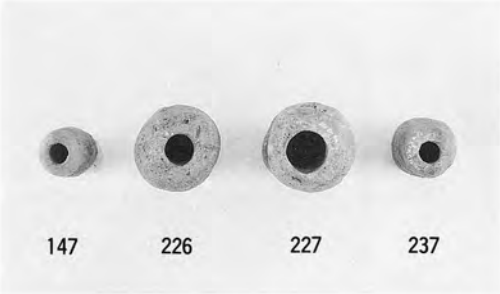


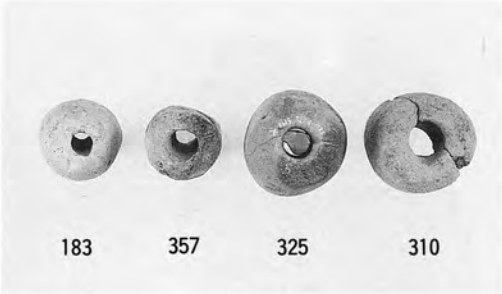
161	162	228	249	185
186	251	252	253	260
262	267	268	350	323
324	308	349	352	351

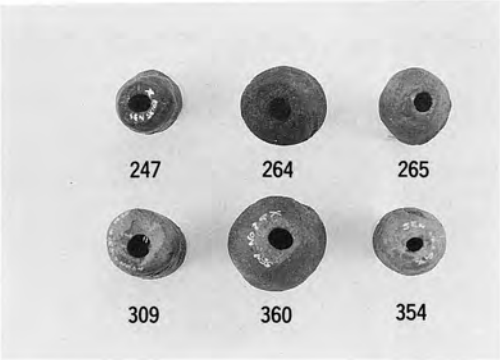
94	95	96	97	98
99	100	101	102	103
104	105	106	124	143
133	134	135	159	160



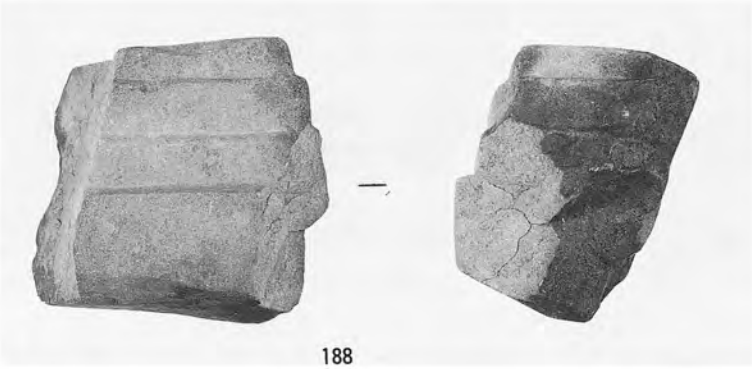
第3・4・7・8号住居跡，第21・63・70・94・120・152・162号土坑，第1・7・8・9号溝，遺構外出土遺物







第81・91・94・132・148・151号土坑，第8号溝，第1号井戸，第1号貝塚，遺構外出土遺物


188

211

212

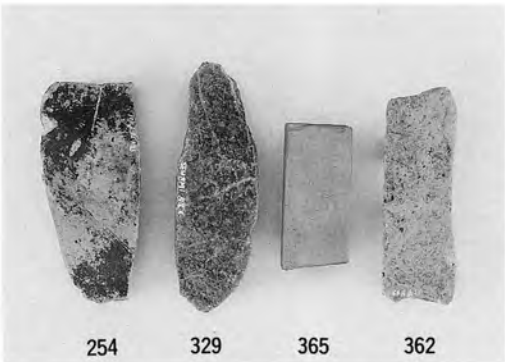
307

330

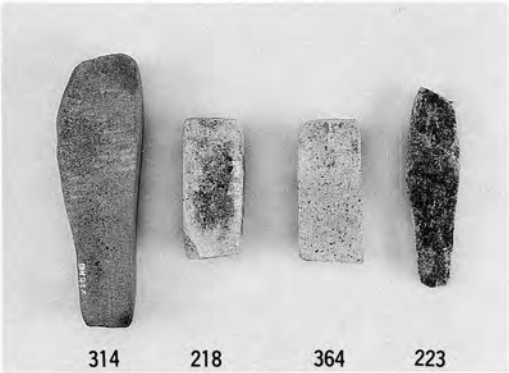
326

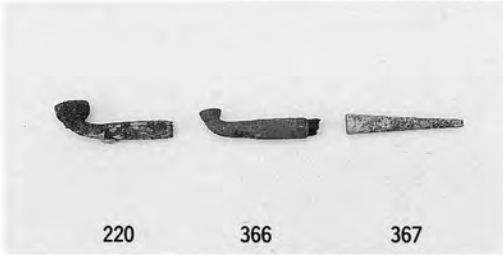
327

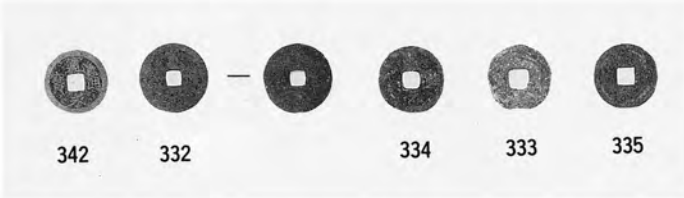
328


254 329 365 362

第5・8号土坑，第1号井戸，第1号溝，第1号貝塚，遺構外出土遺物







第７号住居跡，第９・45・120号土坑，第１号井戸，第１号貝塚，第１号土塁状遺構，
遺構外出土遺物

第6章　大日山古墳群

第1節　遺跡の概要

大日山古墳群は，江戸崎町の市街地の北東2.8km程に位置する「大日山」と呼ばれる標高15～20m程の舌状台地の縁辺部に所在している。遺跡の所在する台地は，北西から南東方向に向かって舌状に張り出す台地であり，北西側を除く三方が沖積低地や支谷によって囲まれ，台地の縁は急崖をなしている。台地上からは北東に霞ケ浦，南東に古渡の集落を一望することができ，また遺跡の北東0.4kmには国道125号が北西から南東方向に走っている。現況は山林であり，調査は東西に細長く延びる87×34mの道路幅について実施した。調査面積は2,856.60m²である。

大日山古墳群は，「古墳群」として県の遺跡台帳（県番号5650，市町村番号51）に登録されている周知の遺跡であり，調査区内にその存在が確認された3基のマウンドについては，当初古墳を想定して調査をすすめた。しかし，調査の結果，周溝・主体部とも検出されず，盛土の状況や形状，出土遺物等からいずれも近世の塚であることが明らかとなった。また，当遺跡からはこれら3基の塚のほかに，縄文時代から古墳時代にかけての遺構や遺物等も検出されている。

調査の結果，当遺跡から検出された遺構・遺物については，下記に記載した通りである。

〔遺　構〕　竪穴住居跡　18軒（弥生時代8軒，古墳時代8軒，時期不明2軒）
　　土　　坑　3基（時期不明）
　　塚　　3基（近世）
　　溝　　4条（時期不明）

〔遺　物〕　土　　器　縄文式土器・弥生式土器・土師器・須恵器・手捏土器
　　土　製　品　球状土錘・管状土錘・紡錘車・支脚
　　石　製　品　勾玉・有孔円板・剣形模造品・磨石・敲石・砥石・石臼・板碑・宝篋印塔
　　石　　器　磨製石斧
　　古　　銭　元豊通寶・政和通寶・寛永通寶

第2節　遺構と遺物

1　竪穴住居跡

当遺跡からは，18軒の竪穴住居跡（弥生時代中期後半1軒，弥生時代後期7軒，古墳時代中期4軒，古墳時代後期2軒，時期不明4軒）が検出されている。検出された住居跡の中には，第18

号住居跡や第２号住居跡，第17号住居跡のように良好な状態で検出されたものもあるが，時代の異なる住居跡が上下に重なり合っているものや，竈だけが検出されたもの，既に床面が露呈しているもの等も存在していた。以下，検出された住居跡の特徴や主な出土遺物について記載していくことにする。

第１号住居跡（第1･2図）

位置　調査区の西側A1h_8区を中心に位置する。

重複関係　南側コーナー付近で第2住居跡(弥生時代後期と重複し，第２号住居跡の北西壁や床の一部を掘り込んでいる。

規模と平面形　北西コーナー部が調査区外となっており，一部不明瞭であるが，一辺7.30ｍ程の隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　N-59°-W。

壁　壁高29～42cmを測り，垂直に近い立ち上がりを示す。

壁溝　北東壁下及び北東・南東コーナー部付近は明瞭であるが，他は不明瞭である。本来は壁下を全周していたものと推定され，上幅26～34cm，深さ6～34cmを測る。壁柱穴が13か所に検出されている。

床　平坦であり，竈周辺・床中央部・P_5周辺が特に良く踏み固められ堅緻である。

竈　北西壁中央部を壁外に38cm程掘り込み，砂・粘土・ロームで構築されており，2.78×2.40ｍの規模を有する。燃焼部は壁際にあり，火床は床面を僅かに掘り窪めた程度である。火床下のロームはレンガ状に赤変硬化している。煙道は緩い傾斜で立ち上がり，屋外に40cm程張り出している。天井部は既に崩落している。

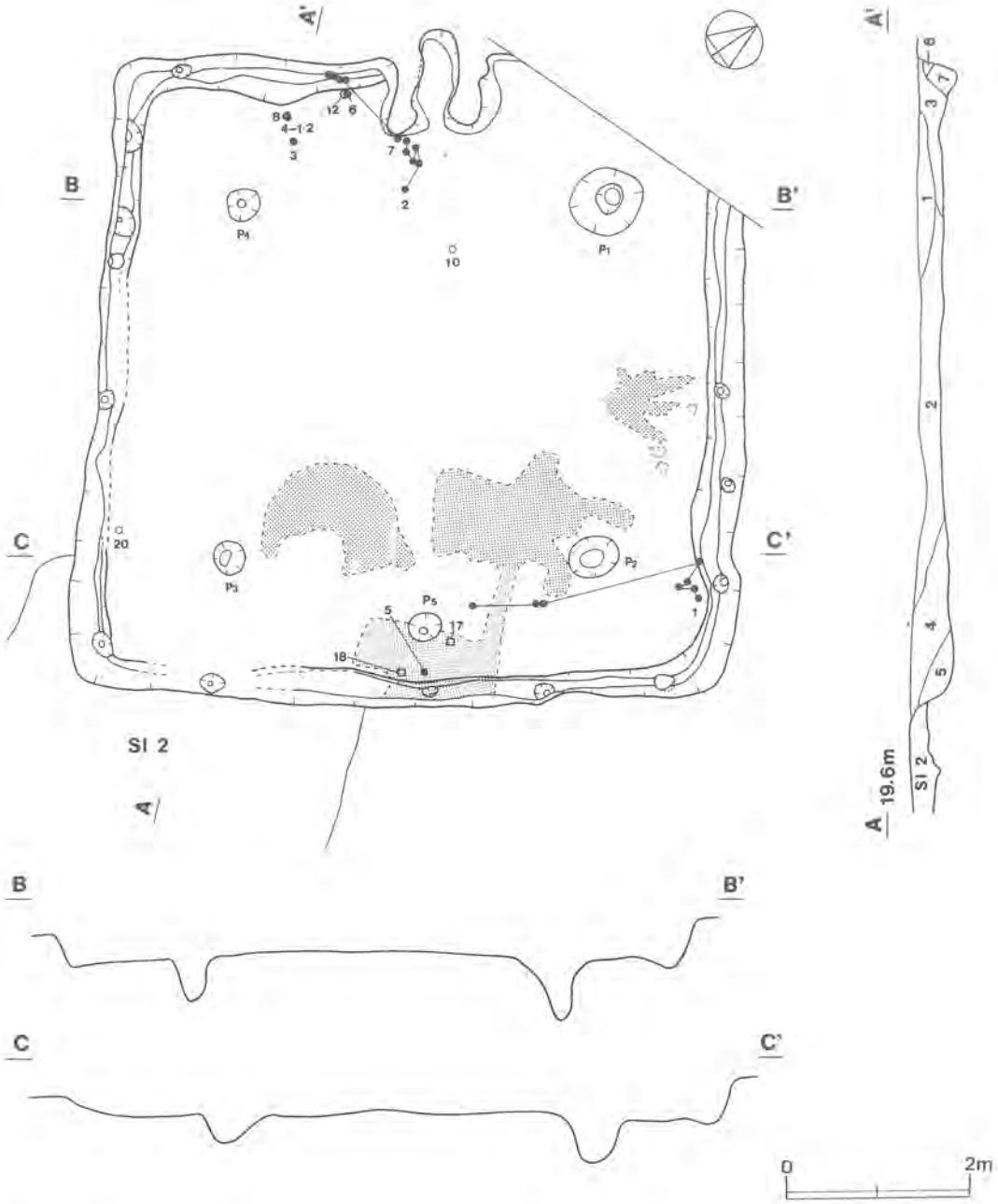
ピット　5か所。P_1～P_4(32～77×38～88×35～70cm)が主柱穴，P_5(32×38×120cm)は入口に伴う支柱，または梯子ピットと考えられる。P_1は漏斗状に掘り込まれている。主柱穴は，一辺4ｍの方形状に規則的に配置されている。

覆土　自然堆積。

遺物　南西側を除くほぼ全域から，土師器片を中心とする多量の土器片が出土している。主な出土遺物には，土師器の甕・甑・坏・高坏，球状土錘(8点)，支脚(1点)，勾玉(1点)，有孔円板(1点)，磨製石斧(1点)があり，他に，不明鉄製品や縄文式土器・弥生式土器・須恵器等の破片が少量出土している。

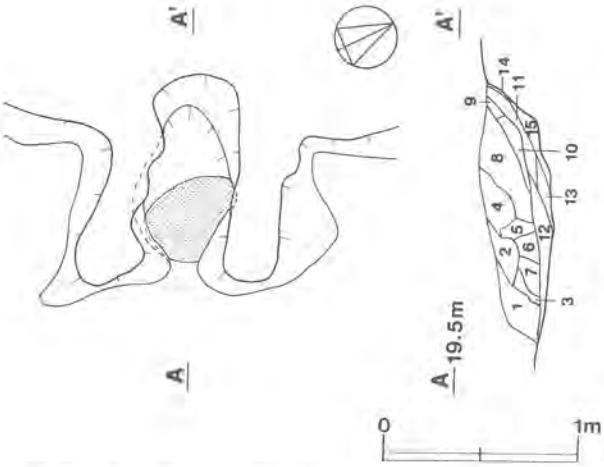
所見　南東壁下及び床面から，多量の焼土(厚さ10cm)・炭化物が検出されており，焼失家屋と考えられる。古墳時代後期。

※　ピットの規模については，長径(最小～最大)×短径(最小～最大)×深さ(最浅～最深)の順に記載し，単位はcmで表した。以下同じ。



＜SI1　土層解説＞
1　褐色　ローム小ブロック・焼土粒子中量。
2　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量。
3　褐色　焼土小ブロック多量。
4　褐色　ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
6　黄褐色　ローム粒子多量。
7　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック少量。

第１図　第１号住居跡実測図



<S11 竈土層解説>

1 にぶい褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
2 褐色　ローム粒子・焼土粒子・白色粘土粒子中量。
3 にぶい褐色　焼土粒子中量。
4 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・白色粘土粒子少量。
5 にぶい褐色　焼土粒子・白色粘土粒子中量。
6 にぶい褐色　焼土粒子・白色粘土粒子多量。
7 にぶい赤褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量。
8 にぶい黄燈色　焼土粒子中量。
9 にぶい褐色　白色粘土粒子多量，焼土粒子中量。
10 褐色　白色粘土粒子中量。
11 にぶい赤褐色　焼土粒子・白色粘土粒子中量。
12 褐色　焼土粒子・焼土小ブロック多量，白色粘土粒子中量。
13 灰褐色　焼土小ブロック多量，焼土粒子中量。
14 褐色　白色粘土粒子多量，焼土粒子少量。
15 赤褐色　焼土粒子・焼土小ブロック・白色粘土粒子極めて多量。

第2図　第1号住居跡竈実測図

出土遺物観察表（第3・4図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
1	甕 土師器	A [1.68] B [19.70]	胴部は中位に最大径を有し，丸みを持つ。頸部と胴部，口縁部との境に稜を有し，口縁部は上方につまみ上げられている。胴部には輪積み成形痕が見られ，口縁部から頸部にかけて横ナデ，胴部外面に斜め方向のヘラ削り。胴部内面に横位のヘラナデが施されている。	砂粒・雲母・長石 明褐色 普通	P1 35% 覆土中・上層
2	甕 土師器	A [24.80] B (24.10)	口辺部は大きく外反し，外上方に立ち上がる。口辺部内外面横ナデ。胴部下半縦位のヘラ磨き。内外面とも剥離が著しい。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P2 20% 覆土中・上層，竈覆土
3	小形甕 土師器	B (7.30) C 7.80	平底で，胴部下半は内彎気味に外上方に立ち上がる。胴部下半，縦位のヘラ削りの後斜め方向のヘラナデ。器表面は，全体にざらざらしている。	砂粒・長石・石英 赤色 普通	P7 15% 覆土中層
4-1	小形甕 土師器	A [15.30] B (8.40)	胴部はなだらかに内彎して立ち上がり，頸部で外反し，口縁部で直立する。口縁部内外面横ナデ。胴部外面粗いヘラナデ。内外面に煤付着。	砂粒 にぶい橙色 普通	P3-A 15% 床面
4-2	小形甕 土師器	B (7.00) C 9.20	平底で，底部外面一方向のヘラ削り。胴部下半縦位・斜位のヘラ削り。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P3-B 10% 床面直上 P3-Aの底部片と考えられる。
5	高坏 土師器	B (6.05) D 10.20 G 4.60	坏部は大きく外傾して立ち上がり，脚部はラッパ状に開く。脚部外面縦位のヘラナデ。内面縦位及び横位のヘラナデ。裾部内外面横ナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 良好	P8 40% 覆土下層
6	坏 土師器	A 11.30 B 4.00	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。口縁部内外面横位のナデ。体部外面横位のヘラ削りの後ヘラナデ。底部外面一定方向のヘラナデ。口縁部と体部との境に弱い稜が見られる。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P4 口縁部一部欠損 95%

7	坏 土師器	A [11.70] B (3.80)	丸底で体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は内傾気味に直立する。体部と口縁部との境に弱い稜が見られる。口縁部内外面横ナデ，体部内面ナデ。体部外面横位のヘラ削り。底部外面ナデ。二次焼成を受けている。	砂粒・長石・石英・雲母 にぶい赤褐色 普通	P5 60% 床面
8	坏 土師器	A [11.00] B 3.40	丸底で，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部で直立する。体部と口縁部との境に弱い稜が見られる。口縁部内外面横ナデ。体部外面横位のヘラ削りの後ヘラナデ。底部外面ヘラ削りの後ヘラナデ。内面に放射状のヘラ磨き。	砂粒・砂礫・雲母 明褐色 良好	P6 40% 覆土中層

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
9	球状土錘	2.7	2.5	2.1	6.0	13.1	100	床面	DP1 上下ヘラ調整
10	〃	2.6	2.5	2.2	6.0	13.1	100	覆土下層	DP2
11	〃	2.7	2.6	2.2	6.0	14.8	100	覆土	DP3 上下ヘラ調整
12	〃	2.5	2.4	2.0	6.0	12.3	100	〃	DP4
13	〃	2.8	2.6	2.4	6.0	16.3	100	〃	DP5
14	〃	2.7	2.6	2.1	6.0	13.7	100	〃	DP6
15	〃	3.4	3.3	2.9	8.0	28.6	100	〃	DP7
16	〃	3.3	3.2	2.6	7.0	(19.2)	60	〃	DP8
17	有孔円板	3.2	3.1	3.0	1.5	(7.0)	95	覆土中層	Q2 滑石
18	勾玉	3.3	1.5	0.8	4×2	5.7	100	床面	Q3 チャート
19	磨製石斧	(5.2)	4.2	2.1		(70.1)	50	覆土	Q1 再加工，流紋岩
20	支脚	(16.6)	8.3	7.5		(861.5)	80	床面	DP9 表面に螺施状の成形痕

第2号住居跡（第5図）

位置　調査区の西側A1i8区を中心に位置する。

重複関係　北西側の五分の一程を，第1号住居跡(古墳時代後期)によって掘り込まれている。

規模と平面形　北西側が重複遺構によって掘り込まれているため不明であるが，4.66×4.15m程の隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

長軸方向　N-44.5°-W。

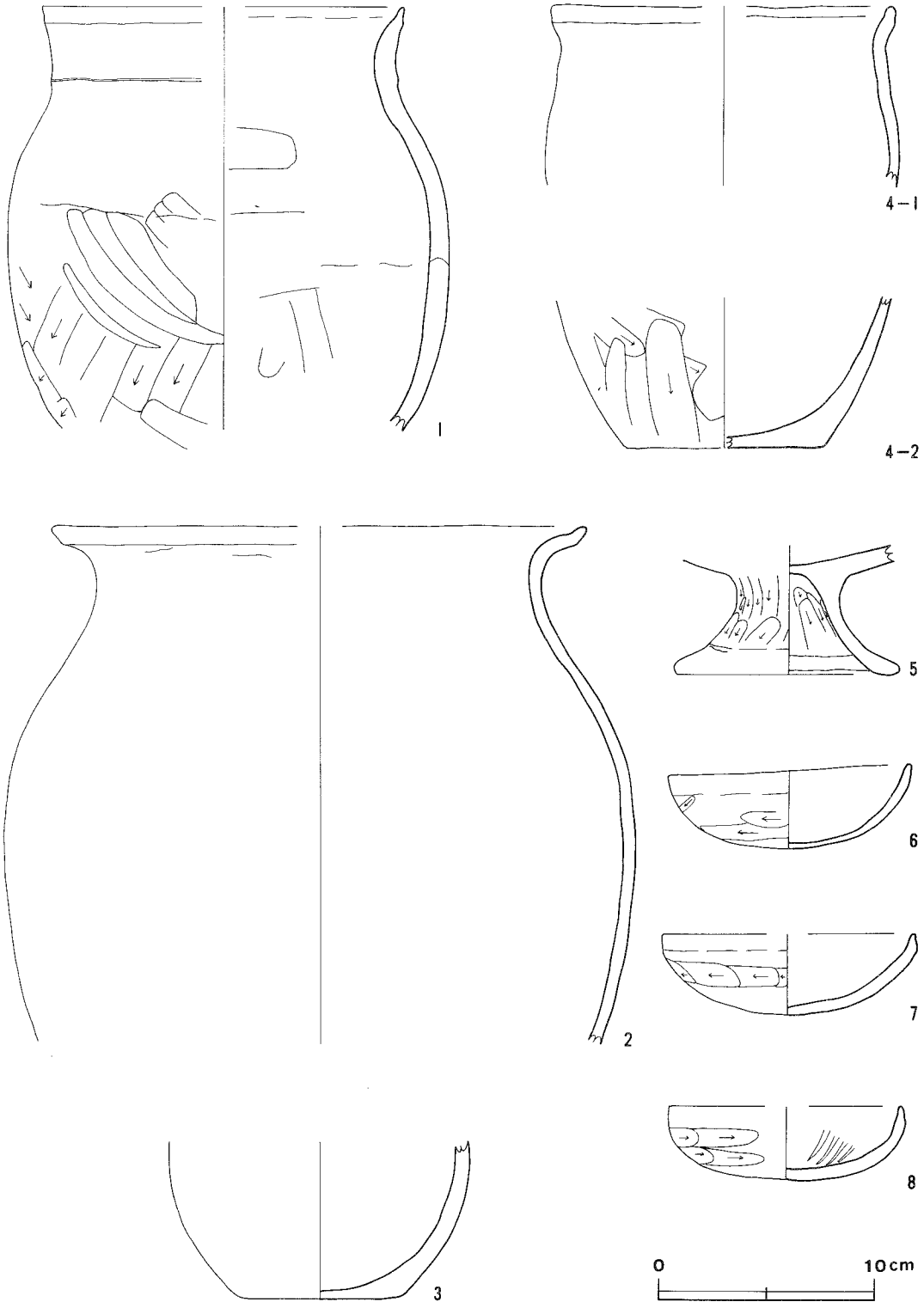
壁　壁高18～20cmを測り，緩い傾斜で立ち上がる。北西壁は，重複遺構によって掘り込まれているため遺存していない。

床　平坦であり，炉の周囲が特に良く踏み固められている。

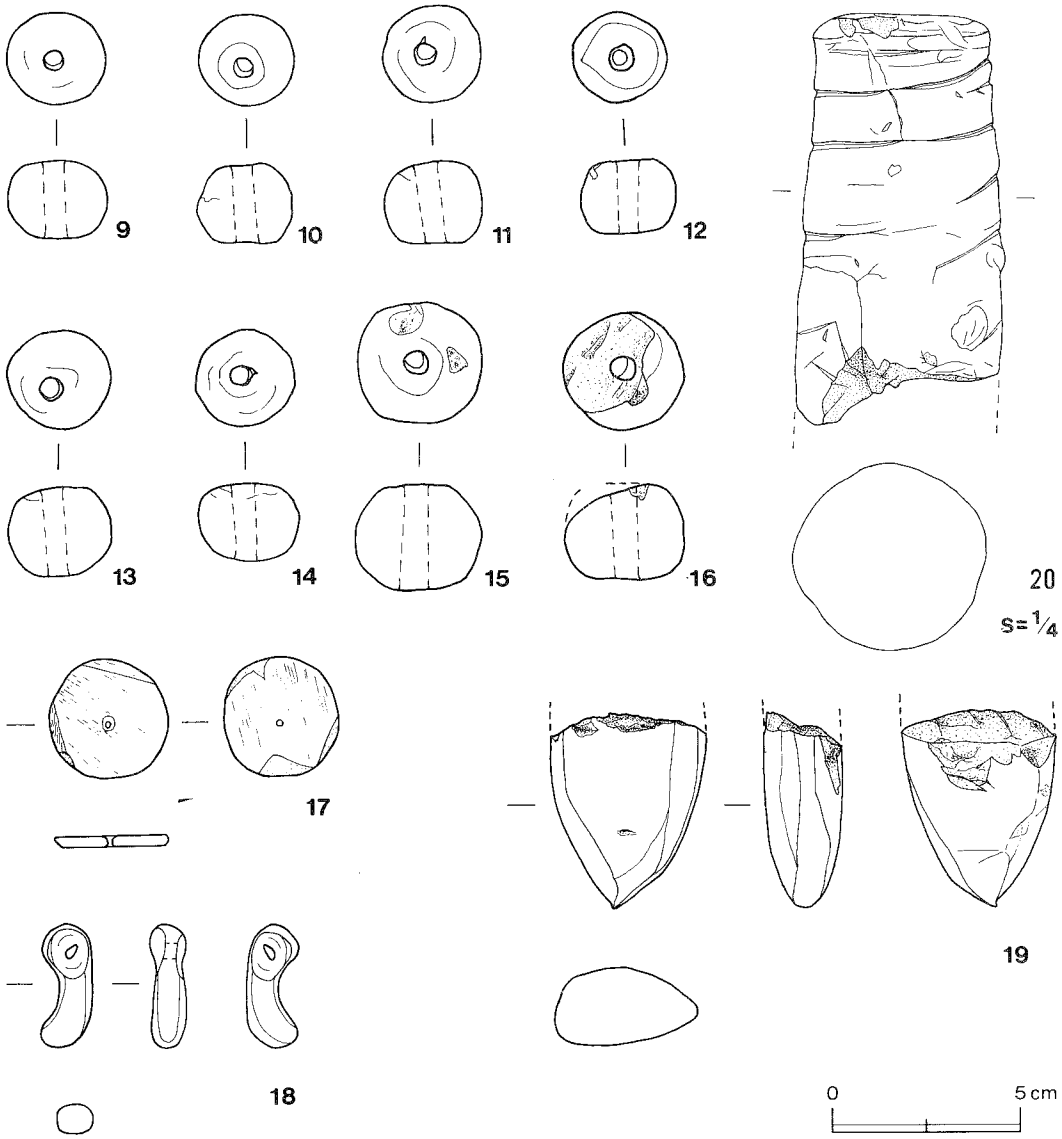
炉　長軸線上の中央部よりもやや北西側に偏在し，47×43×10cmの規模を有する。床面を10cm程皿状に掘り窪めた地床炉であり，炉床は熱を受け赤変硬化している。

ピット　7か所。P_1～P_4(P_2・P_3；24～46×23～38×60～64cm，P_1・P_4；22～35×18～23×54cm)が主柱穴，P_5(35×32×60cm)は入口に伴う支柱または梯子ピットと考えられる。

覆土　自然堆積。



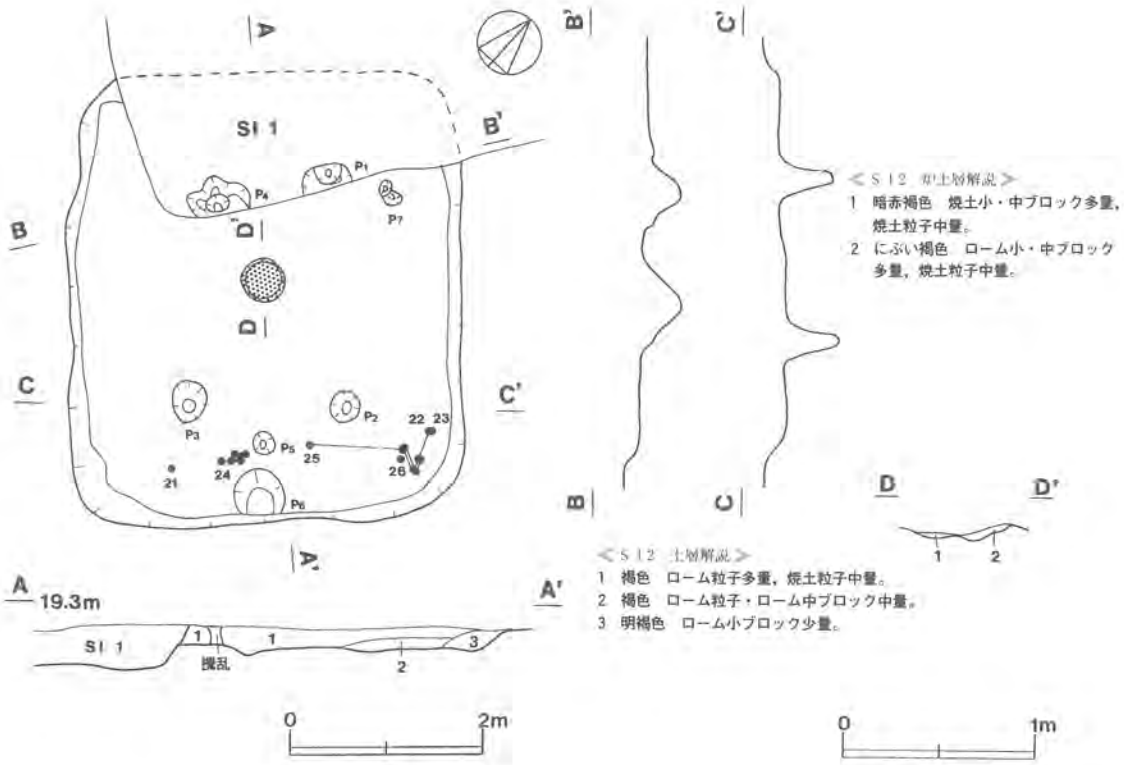
第３図　第１号住居跡出土遺物実測図　(1)



第4図　第1号住居跡出土遺物実測図　(2)

遺物　南東コーナー部及び南東壁際の覆土上層から，弥生式土器片が集中して出土している。また，覆土から球状土錘(28)・敲石(29)が各1点出土している。22の小形壺・23の壺・25の小形甕は南東コーナー，21の甕・24の手捏の小形甕は，いずれも南東壁際の覆土中・上層から出土した破片が接合したものである。21・22は横位，24はほぼ直立した状態で出土しているが，いずれも投棄された状況を示している。

所見　弥生時代後期。



第5図 第2号住居跡実測図

出土遺物観察表(第6・7図)

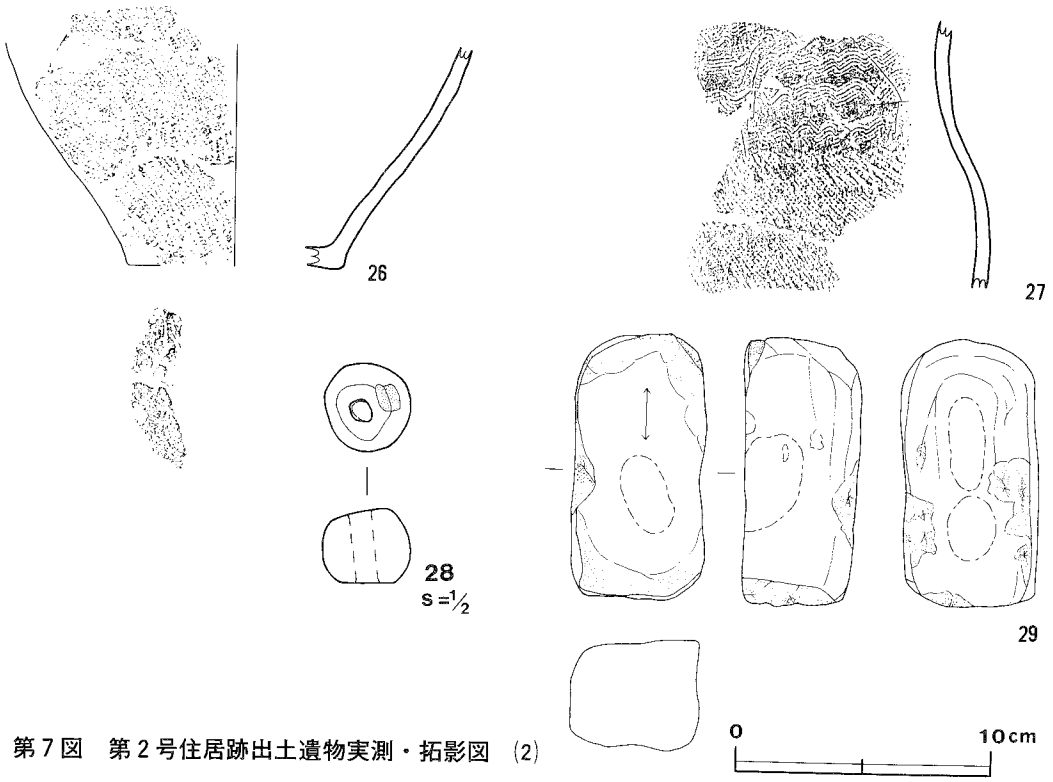
遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
21	甕 弥生式土器	A 18.60 B (25.40) C [8.70]	平底で，胴部は内彎して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて大きく外反する。複合口縁を呈し，口唇部に縄文原体の回転圧痕，口縁部及び胴部に付加条1種の縄文(RL＋Lr)を施し，頸部には4本1条の櫛描波状文を巡らせている。底部外面に木葉痕が見られる。内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P12 50% 覆土中層
22	小形壺 弥生式土器	A [8.50] B 18.30 C 7.00 E 11.00	複合口縁を呈する小形の壺であり，平底を呈し，底部から胴部にかけて内彎して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。胴部上位に張りを持ち，底部がやや外側に張り出している。口唇部に縄文原体の圧痕，口縁部に付加条1種の縄文(RL＋2Lr)，胴部には付加条1種の縄文が羽状(上帯RL＋2Lr，下帯LR＋2R1)に施されている。頸部は無文帯となっている。底部外面には木葉痕が見られる。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P10 70% 覆土中・上層
23	壺 弥生式土器	A [10.10] B (20.80)	胴部は内彎して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。胴部中位に最大径を有する。口縁部から頸部上半にかけて付加状1種の縄文(RL＋Lr)を施し，頸部下半に幅1.5cm程の無文帯を有する。口縁部と頸部は縄文原体の末端を押圧した一列の刺突文によって，頸部と胴部は6本1条の櫛描横線文によって区画されている。胴部には，口縁部と同じ原体による付加条の縄文が施されている。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P11 40% 覆土中・上層

第6図　第2号住居跡出土遺物実測・拓影図（1）

24	小形甕 弥生式土器	A 7.80 B 9.80 C 4.70 E 5.90	複合口縁を呈するミニチュアの甕。平底で，胴部は内彎しながら立ち上がり，頸部から口縁部にかけて大きく外傾する。口縁部に最大径を有する。口唇部及び複合口縁下端部に棒状工具による刺突が加えられ，頸部から胴部下半にかけて付加条1種の縄文が羽状(頸部から胴部上半→LR＋Rl，胴部中位から下半→RL＋Lr)に施されている。底部外面に網代痕が見られる。	砂粒 にぶい橙色 普通	P9 90% 覆土上層
25	小形甕 弥生式土器	B (11.10) C 7.30 E [12.30]	平底で，胴部は内彎しながら立ち上がり，胴部に付加条1種の縄文(RL＋Lr)を施している。底部外面に木葉痕が見られる。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P13 25% 覆土上層
26	甕 弥生式土器	B (8.90) C [8.70]	平底で胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，胴部に付加条1種の縄文(RL＋2Lr と思われる)を施している。底部には木葉痕が見られる。	砂粒・長石・雲母 にぶい褐色 普通	P14 5% 覆土上層

27は，甕形土器の頸部から胴上半部にかけての破片14片が接合したもので、頸部には5本1条の櫛描波状文が数段に巡らされ，胴部には付加条の縄文（付加条1種付加2条）が施されている。東側コーナー部覆土から出土したものである。

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
28	球状土錘	2.5	2.4	2.1	7.0	11.1	100	覆土	DP10 上下ヘラ調整
29	敲石	10.7	5.4	4.4		476.5	100	〃	Q4 磨石としても使用，砂岩



第7図　第2号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2)

第3号住居跡（第8図）

位置　調査区の北西側A1f9区を中心に位置する。

規模と平面形　北西側三分の一程が調査区外となっているため，全容は明らかでないが，6.70×6.05m前後の隅丸長方形を呈する住居跡と推定される。

長軸方向　N-30°-W前後と推定される。

壁　壁高14～22cmを測り，緩い傾斜で立ち上がる。

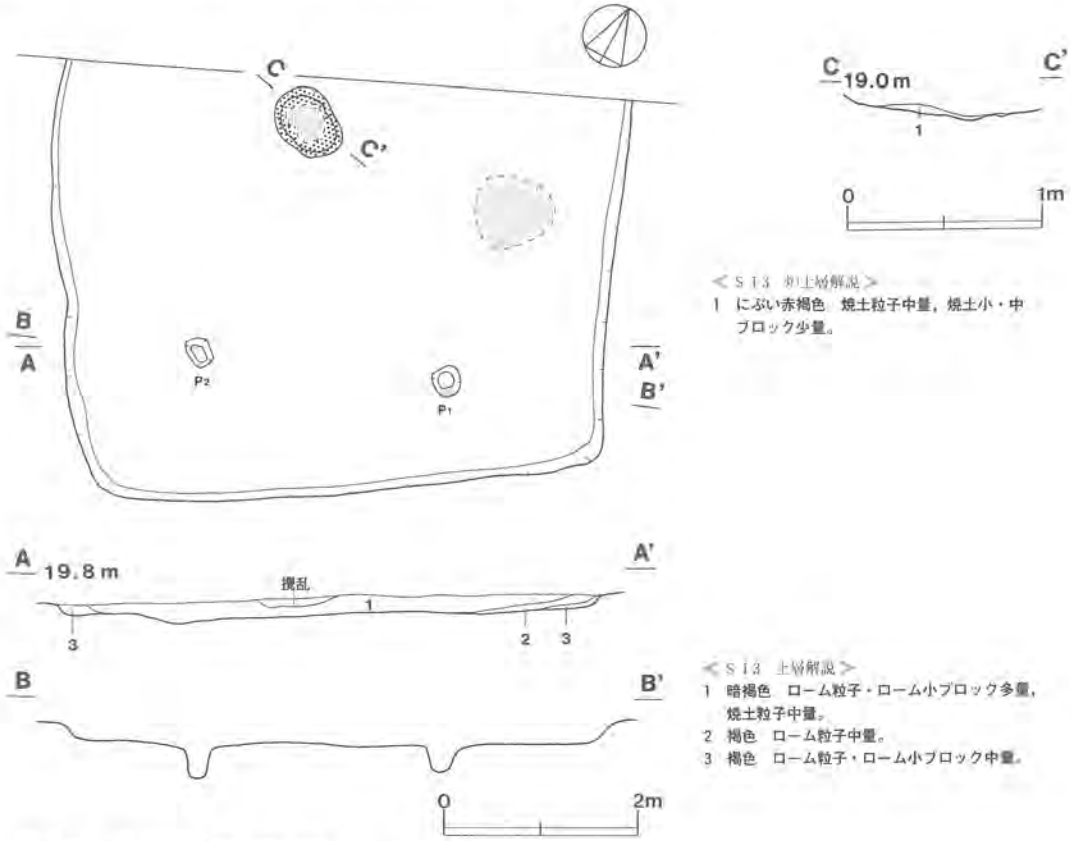
床　凸凹状を呈し，全体に硬く締まっている。北東壁際の床面には，84×80cmの範囲で焼土が堆積する。

炉　長軸線上のやや北西側に偏在し，81×61×20cmの規模を有する。床面を20cm程皿状に掘り窪めた地床炉であり，炉床は熱を受け，レンガ状に赤変硬化している。

ピット　2か所。検出されたP1・P2（27～32×22～30×30～43cm）の2か所は，規模・配置等からいずれも主柱穴と考えられる。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土下層から弥生式土器片が出土し，覆土から流れ込みと思われる縄文式土器・土師器・



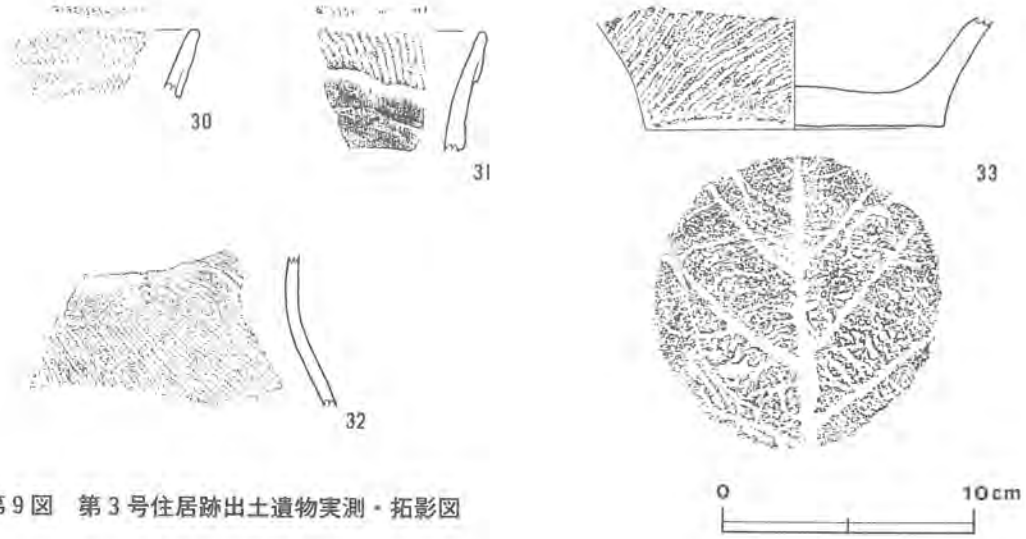
第8図　第3号住居跡実測図

須恵器の破片が少量出土している。

所見　遺物は極少量出土しているにすぎないが，住居跡の形態等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。また，北西側の一部が不明瞭であるが，他の当該期の住居跡の形態から見て，本来は隅丸長方形を呈する4本主柱の住居跡と推定される。

出土遺物（第９図）

30・31は複合口縁を呈する弥生式土器（甕形土器）の口縁部片であり，いずれも口唇部に縄文の回転押圧が施されている。30は口縁部に付加条一種の縄文（RL＋２Lr）が，31は単節RLの縄文が施されている。32は頸部に無文帯を有し，胴部には付加条１種の縄文（RL＋２Lr）が施されている。33は甕形土器の底部片であり，胴部には付加条１種の縄文（RL＋２Lr）が施され，底部には木葉痕が見られる。



第９図　第３号住居跡出土遺物実測・拓影図

第４号住居跡（第28図）

位置　調査区の東端A3g5区を中心に位置する。

重複関係　弥生時代後期に位置付けられる，第13号住居跡の中央部を掘り込んでいる。

長軸方向　北西方向と推定される。

覆土　自然堆積。

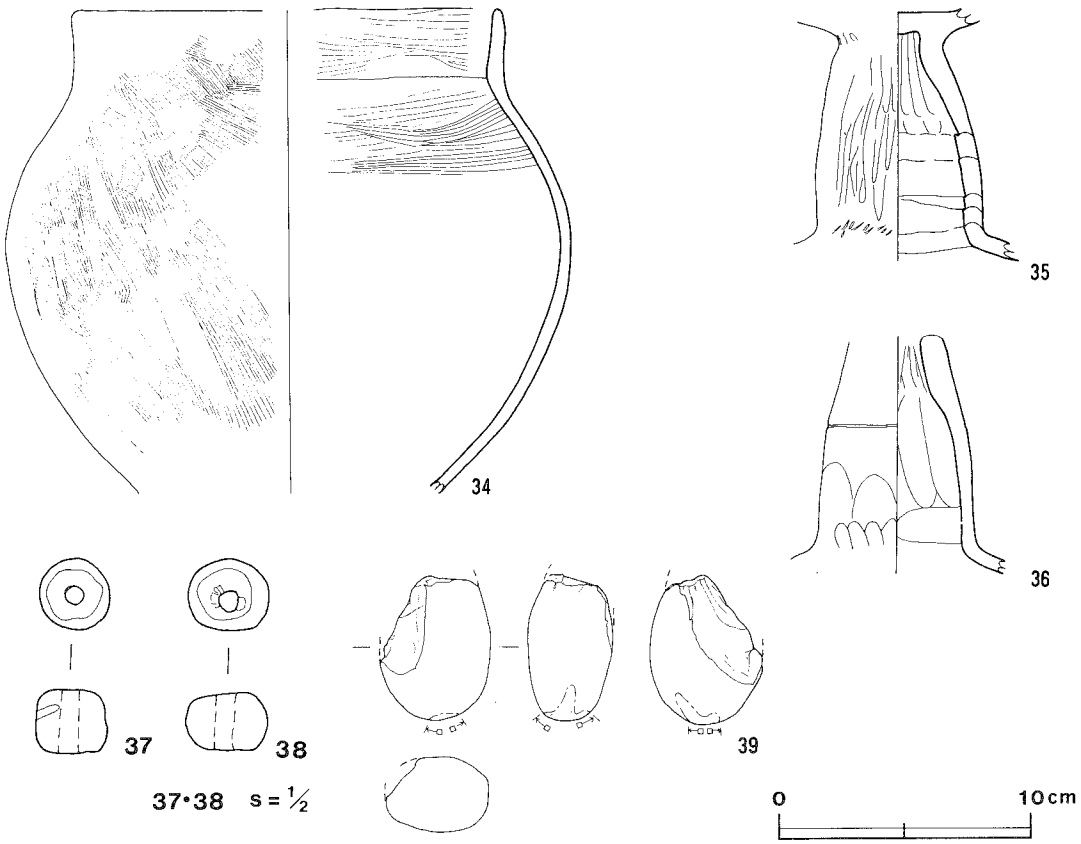
遺物　第13号住居跡の掘り込みの南西側の中央部付近から，集中して出土している。覆土中層出土の遺物が大半を占める。34の土師器の甕及び36の高坏は，覆土下層から中層にかけて出土した破片がそれぞれ接合したものである。37・38の球状土錘は覆土下層，39の敲石は覆土から出土したものである。

所見　本跡は，第13号住居跡の土層及び出土遺物等からその存在を確認したものである。第13号

住居跡の壁及び床面には，本跡の掘り込みの痕跡が認められないことから，第13号住居跡よりも小規模な住居跡と言える。土層で見る限り，本跡の床面は，第13号住居跡とほぼ同一レベルであったものと推定され，出土遺物から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第10図）

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
34	甕 土師器	A [17.00] B (19.30)	胴部は球状を呈し，口縁部は直立する。最大径を胴部上半に有する。口縁部下半から胴部にかけてハケ目を施し，口縁部及び胴部上半内面にはハケ目整形痕が見られる。	砂粒・雲母 橙色 普通	P 16 20% 覆土中層
35	高　坏 土師器	E (10.10)	脚部は受部の細いエンタシス状を呈し，中空である。外面にはヘラ削りの後丁寧なヘラ磨き，内面には縦位のヘラナデ調整が施されている。輪積み成形痕が残る。	砂粒・長石・雲母 橙色 良好	P 17 40% 覆土中層
36	高　坏 土師器	B (9.50)	脚部は受部の細いエンタシス状を呈し，中空であり，脚部中位には１条の沈線が巡らされている。外面にはヘラ削りの後ヘラナデ調整が施され，内面には絞り目やヘラナデ整形痕が見られる。	砂粒 橙色 普通	P 18 40% 覆土中層



第10図　第４号住居跡出土遺物実測図

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
37	球状土錘	2.0	1.9	1.8	6.0	6.7	100	覆土下層	DP11 上下ヘラ調整
38	〃	2.1	2.0	1.6	5.0	6.6	100	〃	DP12 〃
39	敲石	(5.8)	4.4	3.0		(106.2)	50	覆土	Q5 石英

第5号住居跡（第11図）

位置　調査区の北東側A2c8区を中心に位置する。

規模と平面形　北東側の三分の一程が調査区外となっているため全容については明らかでないが，5.00×4.00m前後の隅丸長方形を呈する住居跡と推定される。

長軸方向　N-11°-E。

壁　壁高40～50cmを測り，緩い傾斜で立ち上がるが，南東壁の一部は，緩い段状を呈している。

床　東側に向かって緩く傾斜している。炉の周囲がやや踏み固められているものの，全体に締まりが弱い。中央部から北東側にかけての床面は，大きく撹乱されている。

炉　推定プランの中央部より南西側に偏在し，47×36×10cmの規模を有する。床面を10cm程掘り窪めた地床炉であり，北西側が特に熱を受け，レンガ状に赤変硬化している。

ピット　4か所。配置や規模から，P_1・P_2(26～38×24～34×79～88cm)が主柱穴と考えられる。本跡は他の当該期の住居跡との比較から，本来は4本の主柱を有する住居跡と考えられ，他の2本の主柱穴については調査区外に存在するものと推定される。P_3・P_4はいずれも小規模で掘り込みも浅く，支柱や梯子ピットとは考えにくい。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土下層から弥生式土器片，上層から古墳時代前期の高坏脚部片(40)，後期の坏片(41・42)，覆土中から縄文式土器片が数点出土している。縄文時代及び古墳時代の遺物は，いずれも混入したものである。

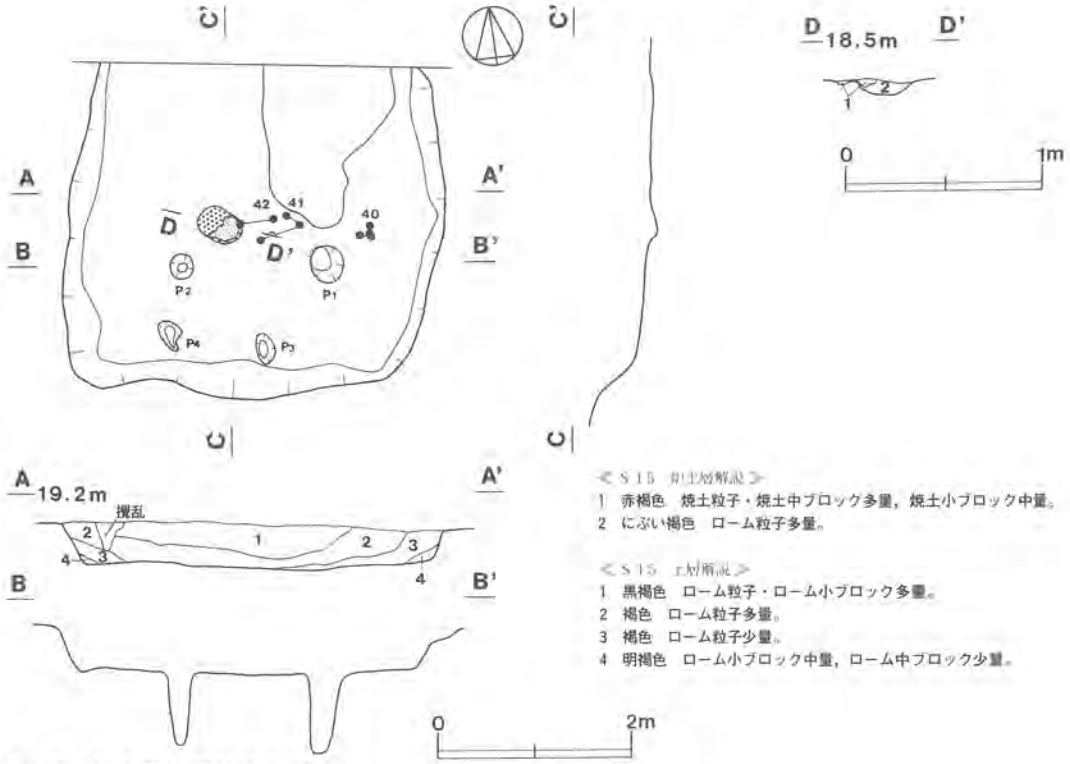
所見　本跡は台地が傾斜面に移行する位置に構築されており，時代の異なる遺物が混在して出土しているが，遺物の出土状況や住居跡の形態等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。混在する後世の遺物は出土状況や出土地点から見て，いずれも投棄されたものと考えられる。

出土遺物観察表（第12図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
40	高坏 土師器	D 19.20 E 8.60	脚部は大きくラッパ状に開き，等間隔に穿孔された円形の透し孔4個が上下交互に2段に穿たれている。脚部外面ヘラ磨き，内面ヘラナデ調整。	砂粒 にぶい橙色 普通	P20 50% 覆土上層

41	坏 土師器	A 12.40 B (4.40)	半球状を呈する丸底の坏で，口縁部は直立し，体部と口縁部との境に弱い稜を有する。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削りの後ヘラナデ調整。体部内面ナデ。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P21 70% 覆土上層
42	坏 土師器	A [14.00] B (3.00)	浅い丸底を呈し，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口縁部と体部との境に弱い稜を有する。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削りの後ヘラナデ調整。内面ナデ。	砂粒 浅黄橙色 普通	P22 40% 覆土上層

43は弥生式土器（甕形土器）の口縁部片，44～46は頸部から胴上半部片，47は胴部片である。43は複合口縁を呈し，口唇部に縄文の回転押圧，口縁部に直前段反撚りと思われる縄文が施され，頸部には櫛描懸垂文，櫛描横線文または波状文が施されている。44は頸部に４本１条の櫛描波状文が数段に巡らされ，胴部に付加条の縄文が施されている。46は頸部に結節縄文を巡らせ，胴部に縄文（摩滅しているため原体不明）が施されている。裏面は剥離が著しい。47は原体の異なる付加条の縄文（LR＋２RlとRL＋２Lr）を上下に施し，羽状に構成している。



第11図　第５号住居跡実側図

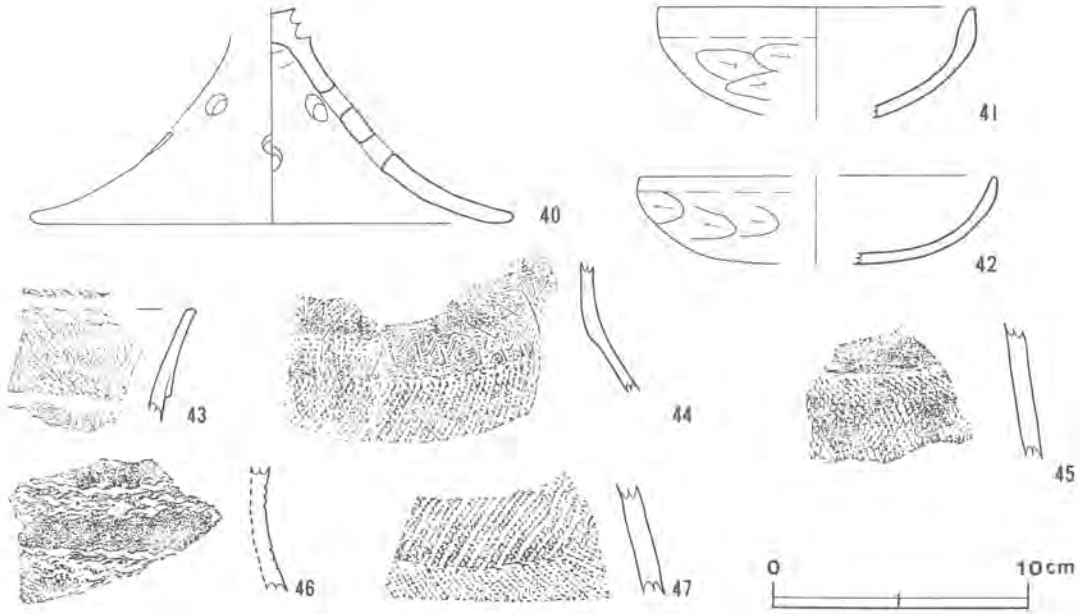
第６号住居跡（第13図）

位置　調査区の中央部よりもやや北東側に片寄った，A2f7区を中心に位置する。

規模と平面形　5.73×4.83ｍの隅丸長方形を呈する。

長軸方向　N-77.5°-W。

壁　壁高8～24cmを測り緩い傾斜で立ち上がるが，南西壁は他の壁に比べ遺存状態が悪い。



第12図　第５号住居跡出土遺物実測・拓影図

床　僅かに南東側に傾斜するが，概ね平坦である。主柱穴の内側の床面は全体に硬く締まっており，特に炉の前面(南東側)及びP_5周辺(北西側)が堅緻である。炉の南西側及びP_3の南側の床面に，5cm前後の厚さで焼土(炭化粒子・灰を含む)が堆積しており，この焼土は検出状況や位置から見て，炉から掻き出されたものと思われる。

炉　長軸線上のやや北西側に偏在し，100×76×8cmの規模を有する。床面を皿状に8cm程掘り窪めた地床炉であり，炉床は熱を受け赤変硬化し，全体に凸凹状を呈している。

ピット　5か所。P_1～P_4(28～37×26～32×70～93cm)が主柱穴，P_5（29×26×47cm）が支柱または梯子ピットと考えられる。

覆土　自然堆積。

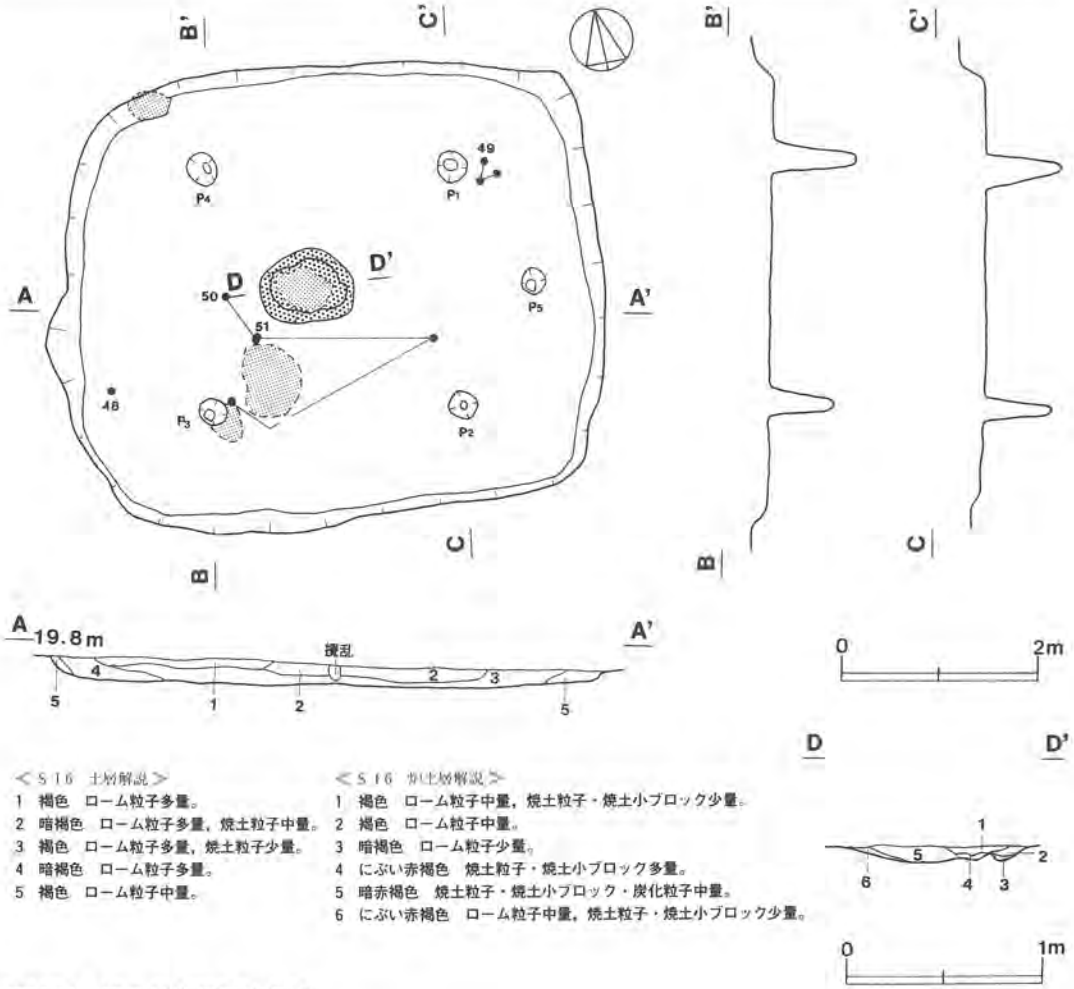
遺物　中・下層から弥生式土器片，上層から土師器片が出土している。48の甕は西壁際の覆土中層，49の甕は東側の覆土中・下層，50の小形甕は西側の床面直上及び覆土中層出土の破片が接合したものである。また，混入したものと考えられる63の剣形模造品は，南東側の覆土から出土したものである。

所見　出土遺物や住居跡の形態から，弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表(第14･15図)

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土･色調･焼成	備　考
	甕 弥生式土器	A　17.40 B　(8.70)	複合する口縁を呈し，頸部から口縁部にかけて大きく外反する。口縁部に付加条１種の縄文（LR＋Rl）	砂粒・長石・雲母	P32 20%

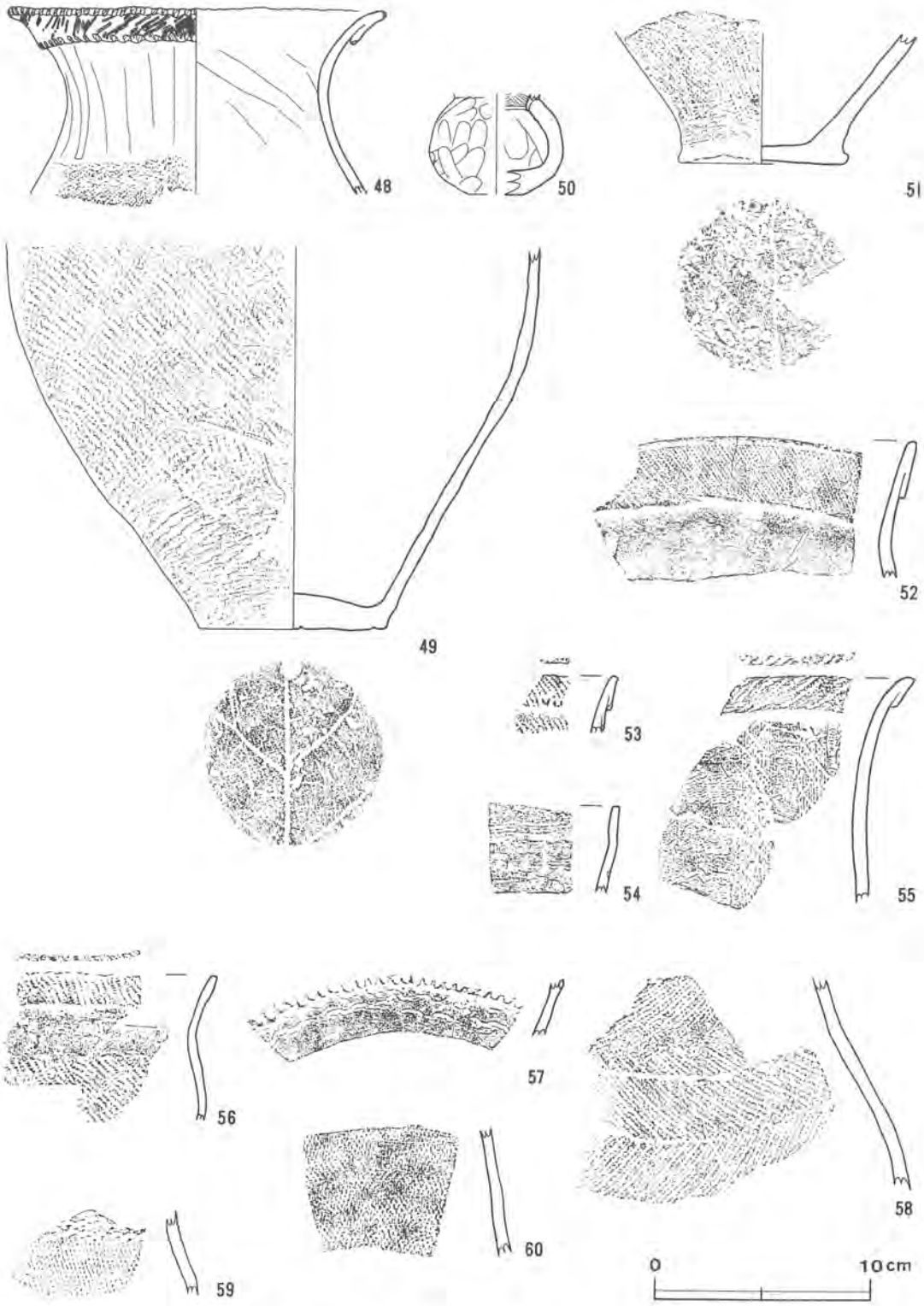
48			を施し，口唇部及び口縁部下端に縄文原体による押圧及び刺突を加えている。頸部は無文で，胴部には末端を結節した付加条の縄文（口縁部と同じ原体）を施している。口縁部内面ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ。内面ヘラナデ。	にぶい橙色 普通	覆土中層
49	甕 弥生式土器	B (17.90) C 8.80	平底で，胴部下半は外傾し，胴部中位は内彎しながら立ち上がる。胴部中位に単節 RL の縄文，下位に反撚の縄文（R $\left|^{R1}_{Rl}\right|$）を縦位に施している。底部外面には木葉痕が見られる。	砂粒・長石 にぶい橙色 普通	P 33 60% 覆土中・下層
50	小形坩 土師器	A [4.40] B (4.70) C [2.40]	平底を呈する手捏の小形坩であり，胴部は下位に最大径を有し内彎して立ち上がる。口辺部は大きく外傾しながら立ち上がるものと思われる。胴部外面粗いヘラ削り。内面指ナデ後ヘラナデ。口辺部内面にハケ目痕。	砂粒 明赤褐色 普通	P 35 30% 覆土上層 流れ込み
51	小形甕(壺) 弥生式土器	B (6.10) C 7.60	平底で，胴部下位は直線的に外傾して立ち上がる。胴部には付加条1種の縄文（RL＋2Lr）を施し，底部外面には木葉痕が見られる。胴部下端横ナデ，内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P 34 15% 床面直上～覆土



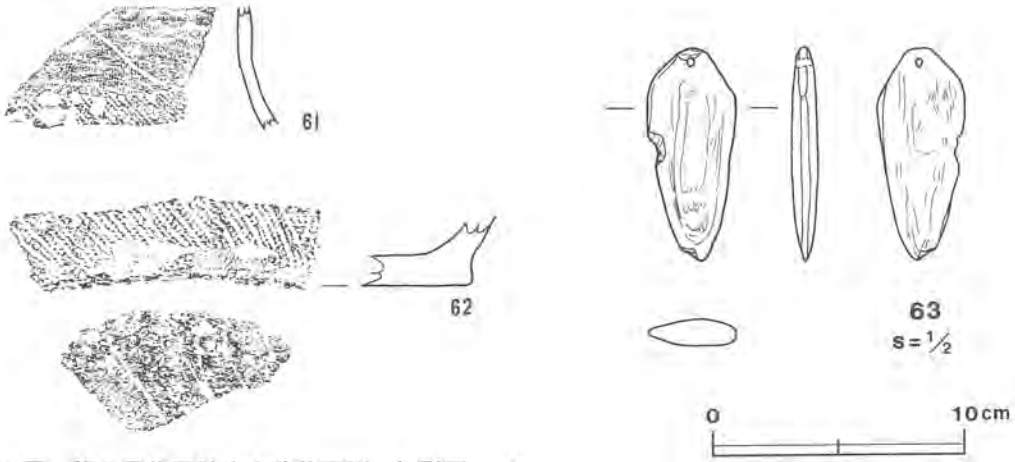
＜S16 土層解説＞
1 褐色 ローム粒子多量。
2 暗褐色 ローム粒子多量，焼土粒子中量。
3 褐色 ローム粒子多量，焼土粒子少量。
4 暗褐色 ローム粒子多量。
5 褐色 ローム粒子中量。

＜S16 カマド土層解説＞
1 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・焼土小ブロック少量。
2 褐色 ローム粒子中量。
3 暗褐色 ローム粒子少量。
4 にぶい赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック多量。
5 暗赤褐色 焼土粒子・焼土小ブロック・炭化粒子中量。
6 にぶい赤褐色 ローム粒子中量，焼土粒子・焼土小ブロック少量。

第13図 第6号住居跡実測図



第14図　第６号住居跡出土遺物実測・拓影図　(1)



第15図　第６号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

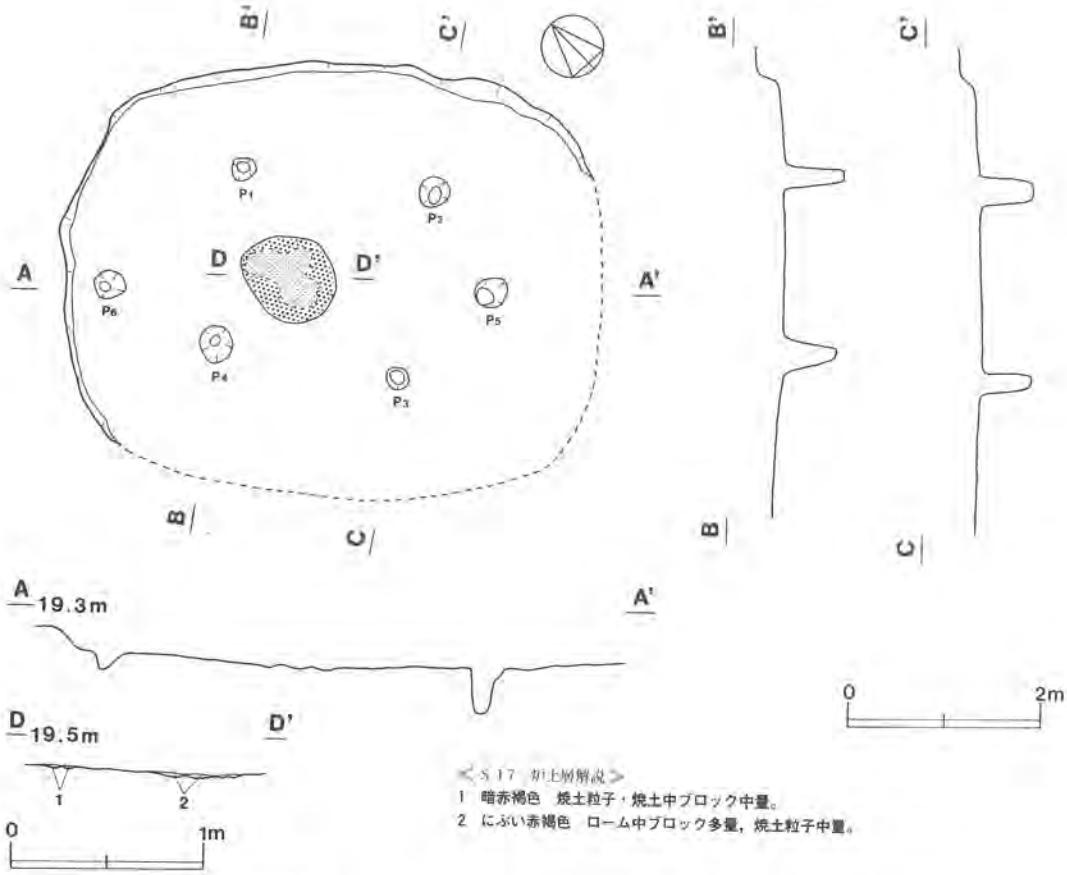
52～56は弥生式土器の口縁部片であり，52・55・56は複合口縁，53は２段作出の複合口縁，54は単口縁である。52は口縁部に末端処理の施された付加条１種の縄文（RL＋２Lr），口唇部に同じ原体による回転押圧が施されている。頸部は無文である。53は二段作出の口縁端部にそれぞれ棒状工具による押圧が加えられている。54は口縁部内外面に横ナデ調整が施され，口縁部下端に棒状工具による刺突が加えられている。55は口唇部に縄文原体の回転押圧，口縁部に縄文が施されているが，口唇部・口縁部は全体に摩滅している。頸部は上面にヘラ状工具による斜格子文の施された11本１条の櫛描懸垂文によって区画され，区画内に同じ櫛歯状工具による櫛描波状文を数段に充塡している。56は口唇部に付加条の縄文による回転押圧，口縁部及び胴部に付加条１種の縄文（RL＋２Lr）が施されている。57は折り返し（貼り付け）部が欠損する口縁部片で，口縁下端部に棒状工具による押圧が加えられ，頸部には（Ｓ字状の）結節縄文が施されている。58は原体の異なる付加条１種の縄文（LR＋２Rlと RL＋２Lr）を交互に施し，羽状に構成している。59は57と同様に結節縄文が見られる。60は末端処理された付加条１種の縄文が施された胴部片である。61は胴部に付加条１種の縄文を施している。62は甕形土器の底部片であり，底面に木葉痕が見られる。

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
63	剣形模造品	5.7	2.3	0.7	1.5	(12.2)	95	覆土	Q6　滑石片岩

第７号住居跡（第16図）

位置　調査区の中央部よりやや東側に片寄った，A2i_7区を中心に位置する。

規模と平面形　南西及び南東壁が遺存していないため，規模や形状につては残存部から推定したものであるが，本跡は5.70×4.70ｍ前後の楕円形，または隅丸長方形を呈する住居跡と考えられる。



第16図　第7号住居跡実測図

長軸方向　N-45°-W前後と推定される。

壁　壁高0～24cmを測り，北西壁は緩い傾斜，北東壁は緩い傾斜またはほぼ垂直に立ち上がる。南西壁は遺存していない。

床　ほぼ平坦であるが，炉の前面(南東側)が僅かに窪んでいる。床面は，僅かに北東側の二分の一程が残存するだけであるが，残存部は硬く踏み固められている。

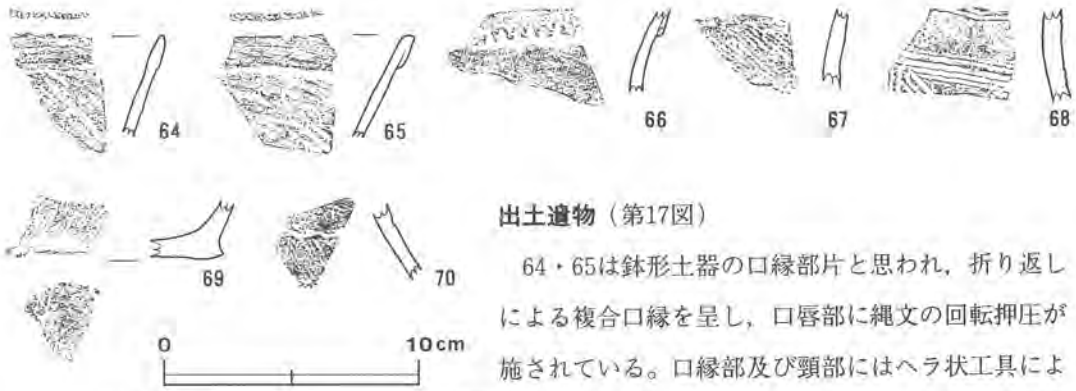
炉　長軸線上のやや北西側に偏在し，103×90×4cmの規模を有する。床面を皿状に掘り窪めた地床炉であり，赤変硬化した炉床が僅かに残存する。

ピット　6か所。P_1～P_4(28～40×24～32×55～64cm)が主柱穴，P_5・P_6(33×31×52cm)は支柱穴と考えられる。P_5については，入口に伴う梯子ピットとも考えられる。

覆土　自然堆積。

遺物　床面直上及び覆土下層から，数点の弥生式土器片が出土している。

所見　遺物は少量出土しているにすぎないが，出土遺物や住居跡の形態等から弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第17図　第７号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土遺物（第17図）

64・65は鉢形土器の口縁部片と思われ，折り返しによる複合口縁を呈し，口唇部に縄文の回転押圧が施されている。口縁部及び頸部にはヘラ状工具によるナデ調整が施されている。66・67は口唇部を欠損する甕形土器の口縁部片であり，複合口縁を呈し口縁部に付加条１種の縄文が施され，66は口縁下端に棒状工具による刺突が加えられている。68は頸部片，70は頸部から胴上半部にかけての破片であり，70には結節のある付加条１種の縄文が施されている。69は底部片であり，木葉痕が見られる。

第８号住居跡（第18・19図）

位置　調査区の東側A2i9区を中心に位置する。

規模と平面形　6.50×6.20ｍの整った隅丸方形を呈する。

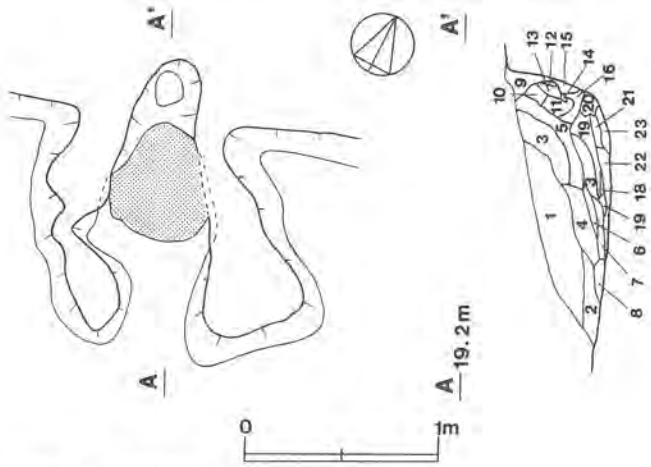
主軸方向　N-19.5°-W。

壁　垂直に近い傾斜で立ち上がり，壁高30～58cmを測る。

壁溝　壁下を全周する。上幅14～32cm，深さ4～14cmを測る。

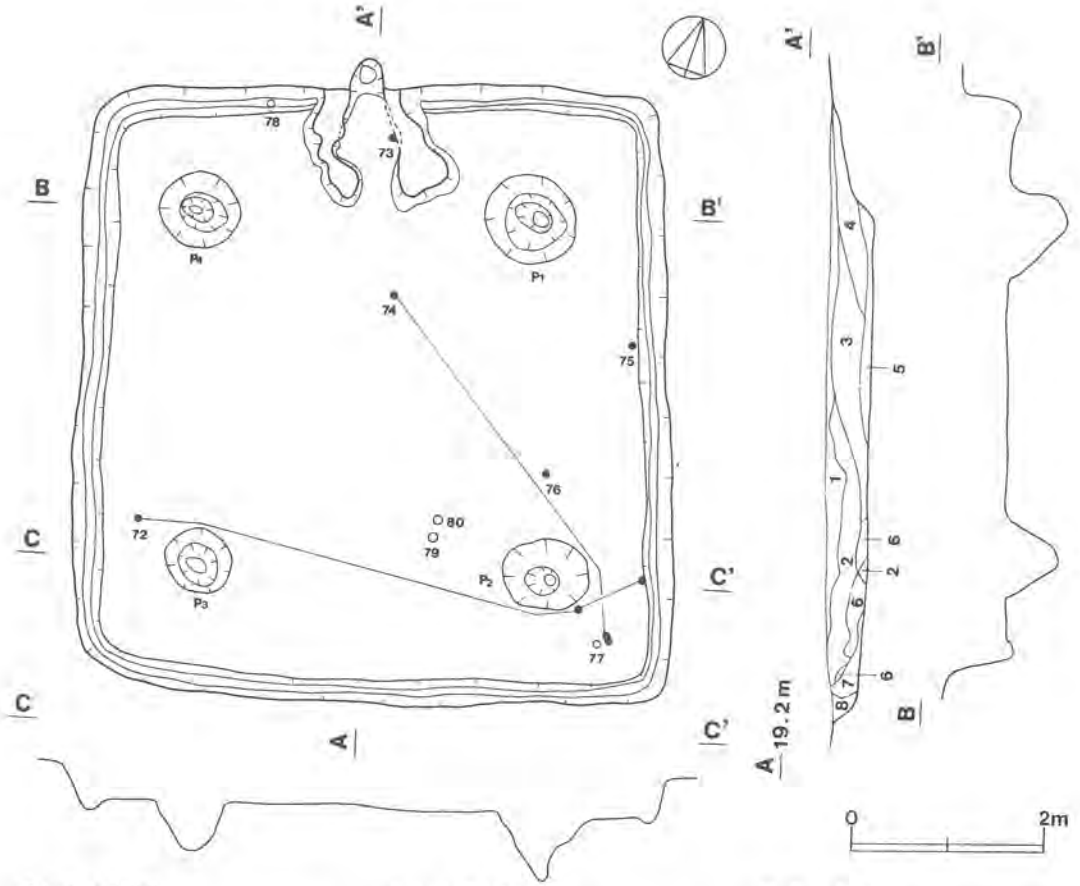
床　平坦で全体に良く踏み固められており，特に竈前面及び床中央部付近が堅緻である。

竈　北西壁中央部に付設されており，北西壁を壁外に32cm程掘り込み，砂・ロームで構築されている。天井部は既に崩落し，両袖部のみが残存している。燃焼部は壁際にあり，火床は床面を8cmほど皿状に掘り込み，熱を受けレンガ状に赤変硬化している。煙道は急傾斜で立ち上がり，屋外に50cm程張り出している。竈内の覆土には，多量の灰・焼土・焼土ブロックが含まれている。



第18図　第８号住居跡竈実測図

ピット　ピットは4か所に検出され，規則的に配置されており，いずれも主柱穴である。P_1～P_4はほぼ同規模・同深度を有



＜S18　土層解説＞
1　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
2　褐色　ローム粒子多量。
3　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
4　褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック・砂中量。
6　暗褐色　ローム粒子中量。
7　褐色　ローム粒子中量。
8　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック少量。

＜S18　竈土層解説＞
1　褐色　ローム粒子多量，ローム中ブロック中量。
2　褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
3　にぶい黄橙色　砂多量。
4　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
5　褐色　ローム粒子中量。
6　褐色　ローム粒子多量，砂中量。
7　暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
8　暗褐色　ローム粒子中量。
9　褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
10　褐色　砂多量。
11　褐色　砂多量，焼土小ブロック少量。
12　明赤褐色　焼土粒子・焼土大ブロック多量。
13　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子中量。
14　にぶい赤褐色　焼土粒子・砂中量。
15　にぶい赤褐色　焼土粒子中量。
16　褐色　ローム粒子・砂中量。
17　にぶい黄橙色　砂多量。
18　にぶい赤褐色　砂多量，焼土粒子中量。
19　赤褐色　焼土粒子多量，砂・灰中量。
20　にぶい赤褐色　焼土粒子・焼土中ブロック中量。
21　褐色　灰多量，焼土粒子中量。
22　黒褐色　焼土粒子・砂・灰中量。
23　にぶい赤褐色　焼土粒子多量，ローム粒子・灰中量。

第19図　第8号住居跡実測図

し，主柱穴は一辺3.8mの方形状に配置されている。主柱穴の規模は，72～100×66～92×56～93cmを測り，いずれも漏斗状に掘り込まれている。

覆土　自然堆積。

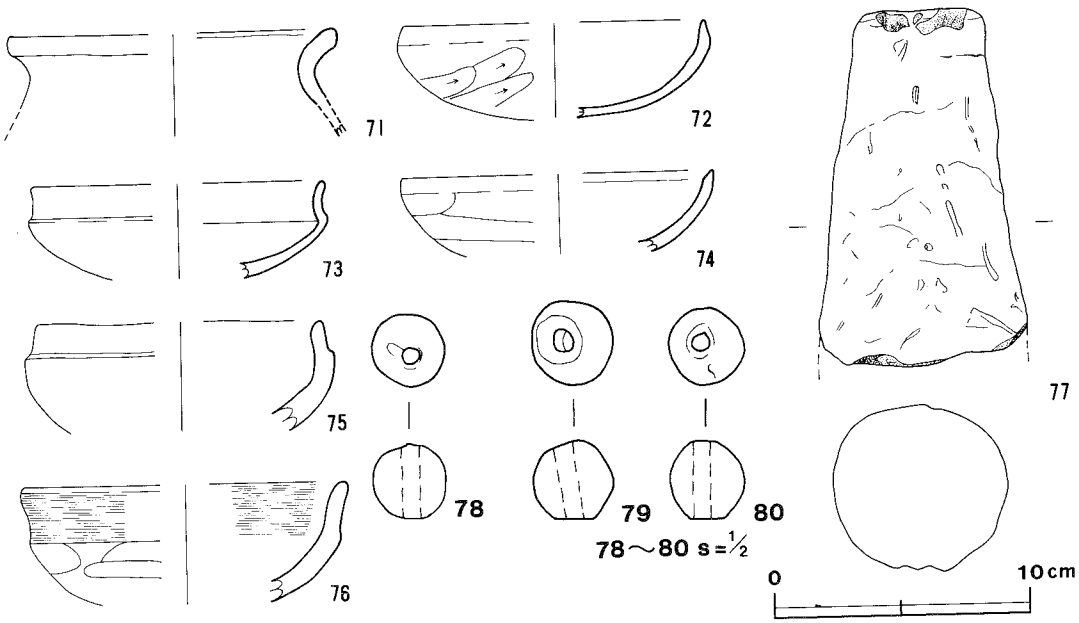
遺物　土師器の甕片(71)・坏片(72～76)，球状土錘(78～80)，支脚(77)等が出土している。73の坏は竈前面の床面，76の坏は北東側の覆土下層から出土したものであり，74の坏は床面及び覆土下層出土の破片が接合したものである。また，77の支脚は北東コーナー付近の床面から出土した

ものである。

所見　出土遺物から，古墳時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第20図）

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
71	甕 土師器	A [13.00] B (4.00)	口辺部は「く」の字状に外反し，口縁端部は直立する。口辺部内外面横ナデ。二次焼成を受けている。	砂粒・長石 橙色 普通	P 31 5% 覆土
72	坏 土師器	A [12.00] B (3.80)	丸底で，体部は扁平な半球状を呈し，口縁部は僅かに内傾する。口縁部と体部との境に浅い稜を有する。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削りの後ヘラナデ。内面ナデ。内面に煤付着。	砂粒・雲母 橙色 良好	P 23 40% 覆土中・上層
73	坏 土師器	A [11.60] B (3.80)	体部は浅く内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は外反気味に直立する。体部と口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削りの後ナデ。	砂粒・スコリア 橙色 良好	P 24 20% 床面直上
74	坏 土師器	A [12.40] B (3.20)	体部は浅く内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部で直立する。口唇部は内削ぎ状となっている。口縁部外面及び内面ヘラ磨き。体部外面ヘラ削り。	砂粒・雲母 橙色 良好	P 25 20% 床面直上～覆土下層
75	坏 土師器	A [11.30] B (4.00)	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。体部と口縁部との境に明瞭な稜を有する。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P 26 15% 覆土中層
76	坏 土師器	A [13.00] B (4.70)	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は僅かに外反気味に直立する。口縁部内外面横ナデ。体部外面上半部ヘラ削り。以下は未調整。体部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 浅黄色 普通	P 27 20% 覆土下層



第20図　第8号住居跡出土遺物実測図

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
77	支脚	(14.4)	8.2	6.7		(615.4)	80	床面	DP13
78	球状土錘	2.0	2.0	2.1	6.0	6.4	100	〃	DP14
79	〃	2.2	2.4	2.2	6.0	9.7	100	〃	DP15 上下ヘラ調整
80	〃	2.2	2.1	2.2	6.0	8.4	100	覆土下層	DP16

第9号住居跡（第21図）

位置　調査区の北側A2d_6区を中心に位置する。

重複関係　本跡は弥生時代後期に比定される第14号住居跡の上面に構築されており，中央部を第1号溝によって南北に掘り込まれている。

規模と平面形　北壁及び南壁が南東側に向かってやや広がる，5.30×4.45mの隅丸長方形状を呈する。遺存状態が悪く，全体に不明瞭である。

長軸方向　N-105.5°-W。

壁　緩い傾斜で立ち上がり，壁高2～10cmを測る。遺存状態が悪い。

床　平坦であるが軟弱であり，貼床は認められない。

炉　長軸線上の南東側に偏在する。掘り込みが浅く，炉床は一部赤変硬化しているが，僅かに残存するだけである。

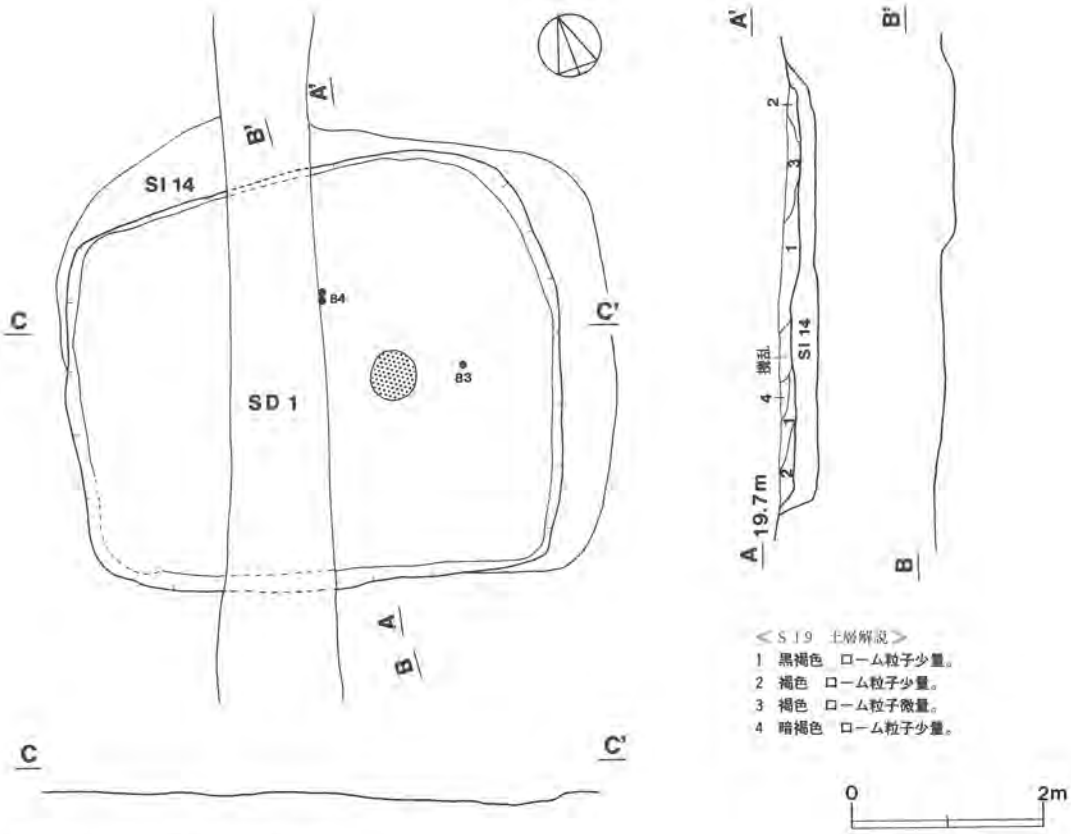
覆土　自然堆積。

遺物　南東側の覆土下層から，土師器片が散在して出土している。83の高坏は東側，84の小形坩は北側のいずれも床面から，81・82の高坏は覆土から出土したものである。

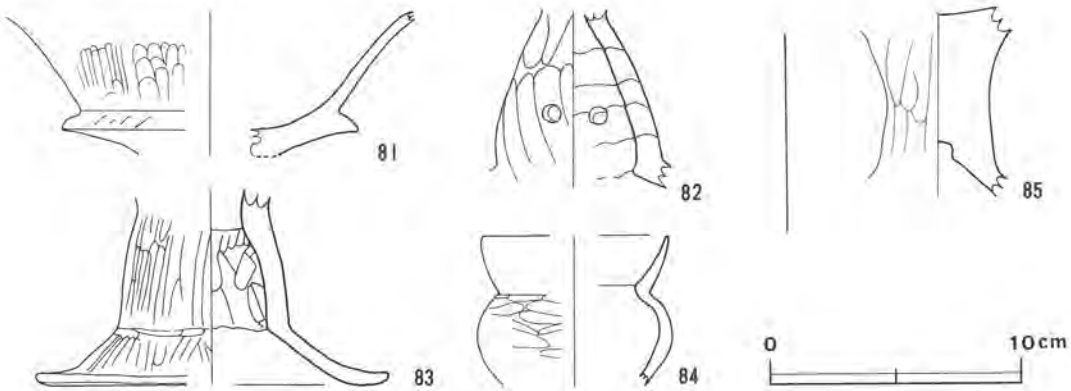
所見　出土遺物から，古墳時代中期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第22図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
81	高坏 土師器	B (5.70)	坏部下位は鍔状に突出し，坏部は外傾しながら立ち上がり上位で外反する。坏部外面縦位のヘラナデ(ハケ目状の擦痕が見られる)。内面ナデ。	砂粒・雲母 橙色 良好	P38 20% 覆土
82	高坏 土師器	E (7.10)	脚部は器受部が細く，膨らみを持ちながら裾部に向かって大きく開く。脚部の中位よりやや下がった位置に円形の孔が，表裏の直線上に2孔穿たれている。脚部外面ヘラナデ整形。内面に輪積み成形痕が残る。	砂粒・雲母 橙色 普通	P36 40% 覆土
83	高坏 土師器	D [14.10] E (7.80)	脚部は裾部に向かって膨らみを持ちながら広がり，裾部はラッパ状に大きく開く。裾端部の接地面は平坦である。脚部及び裾部外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P36 40% 床面
84	小形坩 土師器	A (7.40) B (6.00)	口辺部は僅かに内彎して開き，胴部は中位が張り，接合部内面に明瞭な稜を持つ。口辺部内面及び胴部外面ヘラ削りの後ナデ。精成された作りである。	砂粒 赤褐色 良好	P39 25% 床面



第21図 第9号住居跡実測図



第22図 第9・11号住居跡出土遺物実測図

第10号住居跡（第23図）

位置 調査区西端の斜面部，B1a6区を中心に位置する。

重複関係 北側に位置する第11号住居跡と重複するものと思われるが，2軒の住居跡は既に壁・床とも遺存しておらず不明瞭であり，新旧関係については不明である。

規模と平面形 一辺4.7m前後の方形，または隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　竈の方向や検出された柱穴の配置等から，N-49°-E前後に主軸を持つ住居跡と推定される。

竈　推定プランの北東壁の東コーナー寄りに付設されている。天井部・袖部は既に遺存しておらず，僅かに火床部が検出されただけである。火床はローム面を18cm程掘り込んでおり，レンガ状に赤変硬化している。僅かに残存する覆土には，焼土や焼土ブロックと共に，天井部や袖部を形成していたと思われる粘土が混入している。

ピット　7か所。竈の南西側に規則的に配置されており，P_1～P_6(34～48×31～44×25～60cm)が主柱穴，P_7(45×41×39cm)が支柱または入口の施設に伴うピットと考えられる。

所見　本跡は，北東(竈方向)から南西(P_7方向)に傾斜する緩斜面に位置しているため，遺構の大半は長い間に流出してしまったものと考えられる。遺物が出土していないため，時期については不明である。

第11号住居跡（第23図）

位置　調査区西端の斜面部，$A1j_6$区を中心に位置する。

重複関係　南東側に位置する第10号住居跡と重複するものと思われるが，新旧関係については不明である。

規模と平面形　主柱穴・壁とも検出されておらず不明瞭であるが，竈や貯蔵穴の位置等から，一辺7m前後の方形または隅丸方形を呈する住居跡と推定される。

主軸方向　貯蔵穴や竈の位置等から，第10号住居跡とほぼ同一方向(北東方向)に主軸をもつ住居跡と推定される。

床　不明瞭であるが，竈前面に僅かに硬化面が認められる。

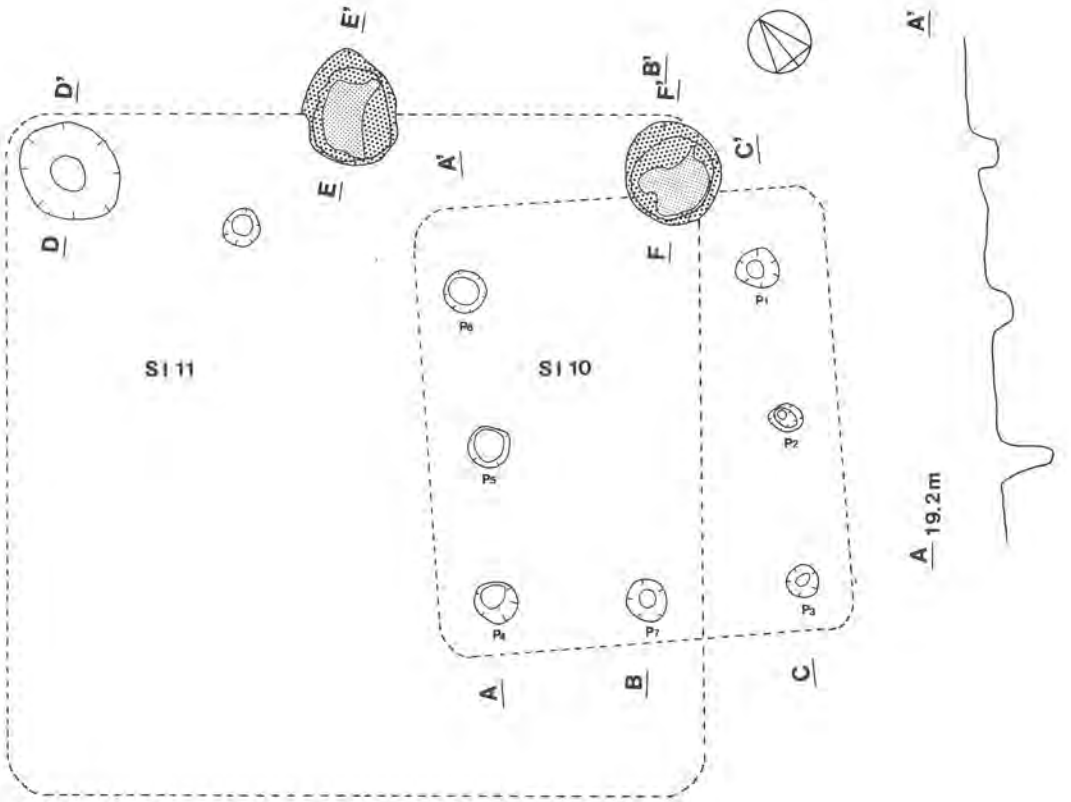
竈　推定プランの北東壁中央付近に位置する。天井部・袖部は既に遺存しておらず，竈の火床部が僅かに残存しているにすぎない。火床はローム面を8cm程皿状に掘り込んでおり，レンガ状に赤変硬化している。

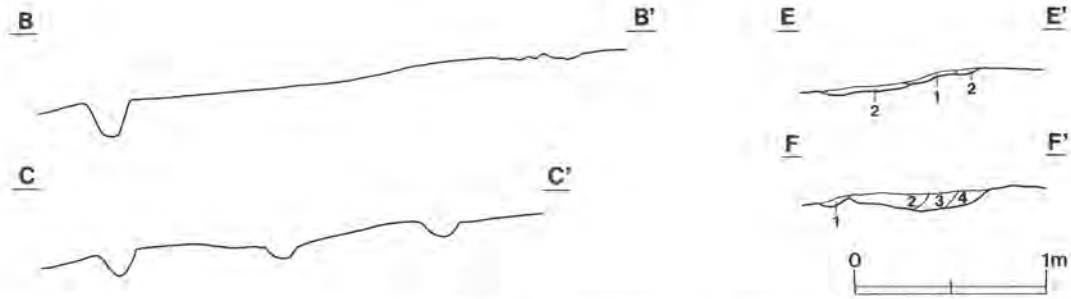
ピット　1か所。主柱穴不明。

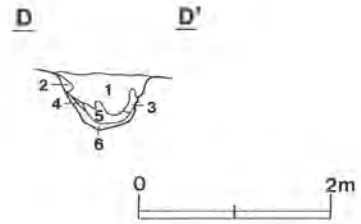
貯蔵穴　推定プランの北コーナー部付近から検出されている。110×98cmの円形を呈し，鍋底状に64cm程掘り込まれている。底面中央部には，焼土がレンズ状に8～20cmの厚さで堆積している。

遺物　貯蔵穴の底面に堆積する焼土の上面から，高坏の脚部片(85)が出土している。

所見　本跡は第10号住居跡と同様に，南西方向に傾斜する緩斜面に位置しているため，壁・床及び竈の大半は流出してしまったものと考えられる。貯蔵穴内から高坏の脚部片が1点出土しているが，細片のため時期は不明である。







＜SI 10　竈土層解説(F－F')＞
1　褐色　焼土粒子中量。
2　赤褐色　焼土粒子多量。
3　褐色　焼土粒子・白色粘土粒子中量。
4　褐色　白色粘土粒子多量。

＜SI 11　竈土層解説(E－E')＞
1　赤褐色　焼土粒子多量。
2　明褐色　ローム粒子・焼土粒子中量。

＜SI 11　貯蔵穴土層解説＞
1　褐色　ローム粒子多量，焼土粒子・炭化粒子少量。
2　明褐色　ローム粒子多量。
3　にぶい赤褐色　焼土粒子中量。
4　暗赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量。
5　赤褐色　焼土粒子多量。
6　暗赤褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子少量。

第23図　第10・11号住居跡実測図

出土遺物観察表（第22図）

遺物番号	器　種	法 量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
85	高　坏 土 師 器	E　(7.50)	円柱状を呈する脚部片。外面ヘラ削りの後ヘラナデ。	砂粒 黒褐色 普通	P91 20% 貯蔵穴覆土下層

第12号住居跡（第24図）

位置　調査区の北側A2e4区を中心に位置する。

重複関係　第2号塚の下から検出されたもので，本跡の南東側は，第1号溝によって東西に細長く掘り込まれている。

規模と平面形　8.78×8.38mの方形を呈する。長軸方向(北西－南東方向)に主軸を持つ。

長軸方向　N-31°-W。

壁　垂直に近い傾斜で立ち上がり，壁高32～53cmを測る。

壁溝　南東壁下中央部を除き，全周している。上幅16～34cm，深さ4～14cmを測り，U字状に掘り込まれている。

床　僅かな窪みは見られるが概ね平坦であり，硬く踏み固められ堅緻である。

炉　北西壁寄りのP_1とP_4を結ぶ線上の中央部に位置する。123×66cmの長楕円形を呈する地床炉で，床面を14cm程皿状に掘り込んで構築されている。炉床は熱を受け，レンガ状に赤変硬化している。炉の長径方向はN-6°-Wであり，主軸方向より25°程北側に傾いている。

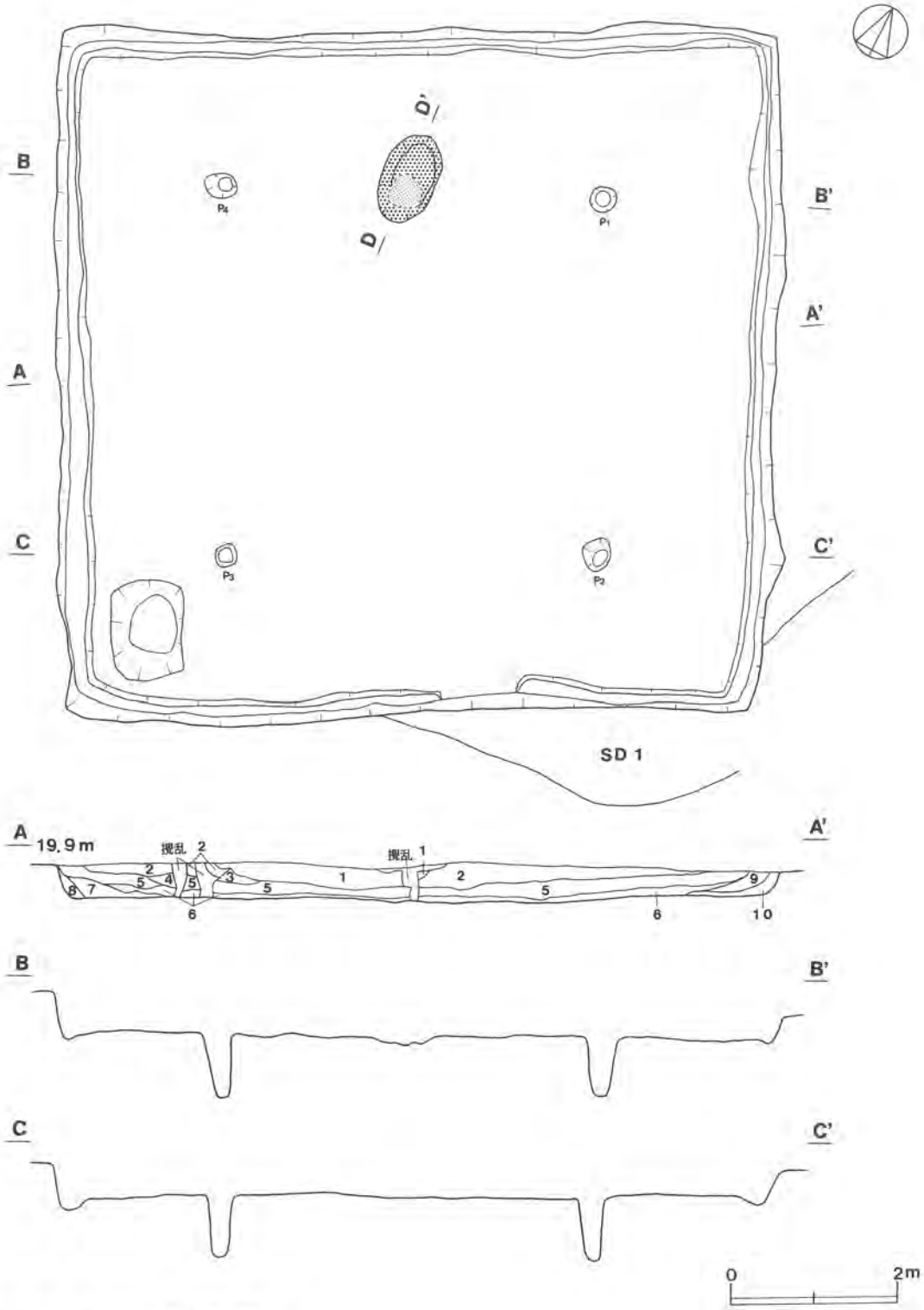
ピット　4か所に検出されており，いずれも主柱穴である。主柱穴は，一辺4.5m程の方形状に規則的に配置されている。P_1～P_4は30～44×31～38×74～85cmの規模を有し，いずれもほぼ同規模・同深度に掘り込まれている。

貯蔵穴　炉と反対方向の南西コーナーに付設されている。120×83cmの隅丸長方形状を呈し，床面を37cm程U字状に掘り込んで構築されている。

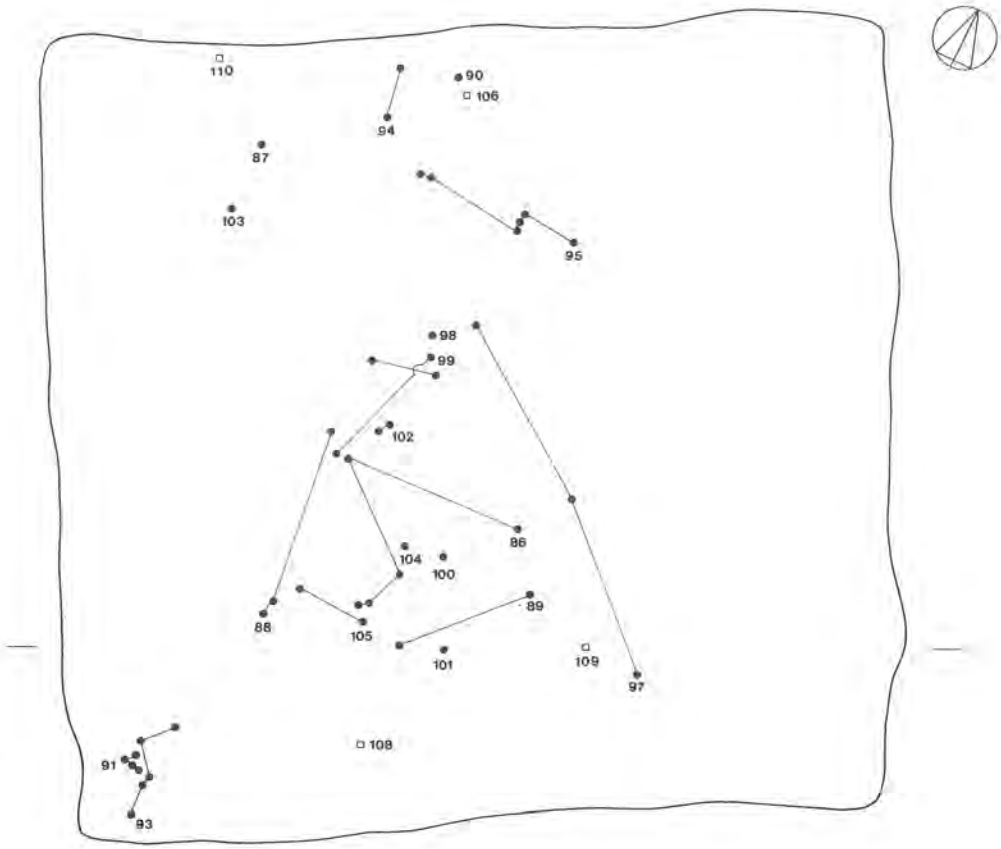
覆土　自然堆積。一部木の根による撹乱が見られる。

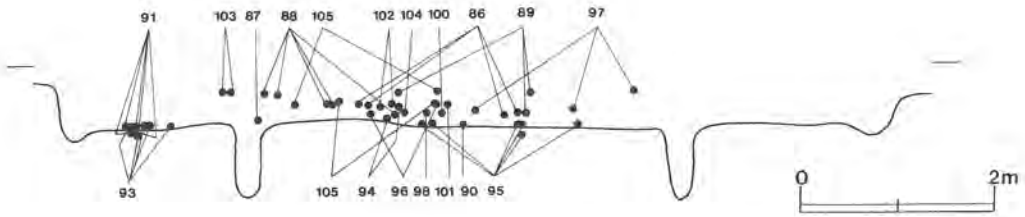
遺物　住居跡全域から多数の土師器片が出土しており，特に北東部に集中している。90の小形壺・91の坩は床面または床面直上から，93・95の高坏は床面または覆土下層から出土した破片がそれぞれ接合したものである。102・103・104などの須恵器の坏は覆土上層から出土したもので，後世の混入または流れ込みと考えられる。また土器の他に球状土錘2点(106・107)，勾玉1点(108)，砥石2点(109・110)が出土している。

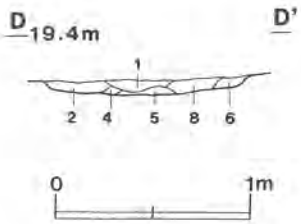
所見　床面または床面直上から出土した高坏の時期や住居跡の形態等から，本跡は古墳時代中期に比定されるものと考えられる。



第24図　第12号住居跡実測図







＜SI12　土層解説＞
1　褐色　焼土粒子多量，焼土小ブロック中量。
2　褐色　ローム粒子・焼土粒子少量。
3　褐色　ローム粒子少量。
4　暗褐色　ローム粒子多量。
5　褐色　ローム粒子中量。
6　褐色　ローム粒子中量，焼土粒子・炭化粒子少量。
7　褐色　ローム粒子多量。
8　褐色　ローム粒子中量。
9　褐色　ローム粒子少量。
10　褐色　ローム粒子極少量。

＜SI12　かまど解説＞
1　褐色　焼土粒子多量。
2　赤褐色　ローム小ブロック・焼土粒子多量。
3　褐色　ローム粒子中量、焼土粒子・炭化粒子少量。
4　明褐色　ローム小ブロック少量。
5　にぶい赤褐色　焼土粒子中量。
6　明褐色　ローム粒子少量。

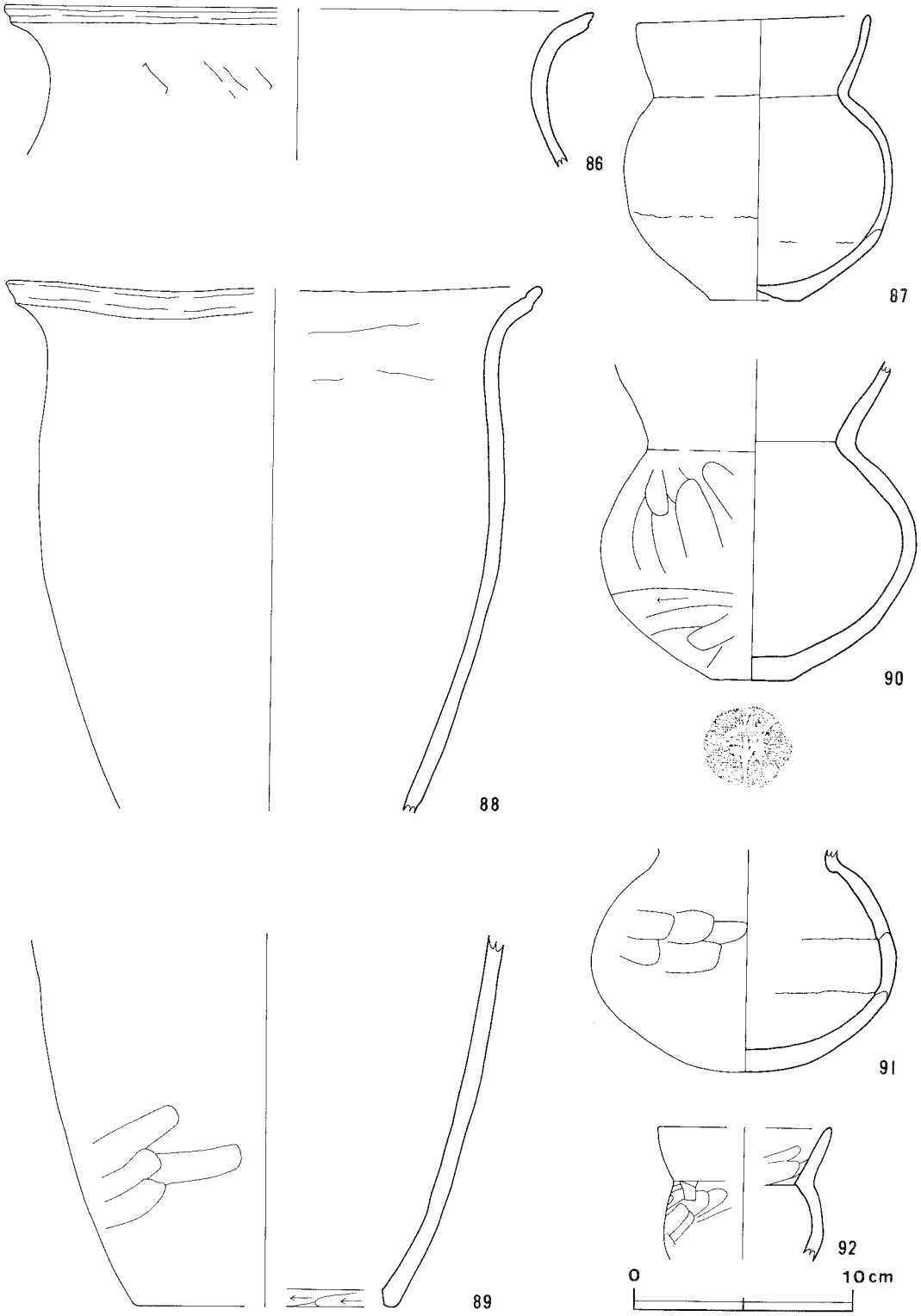
第25図　第12号住居跡遺物出土位置図

出土遺物観察表（第26・27図）

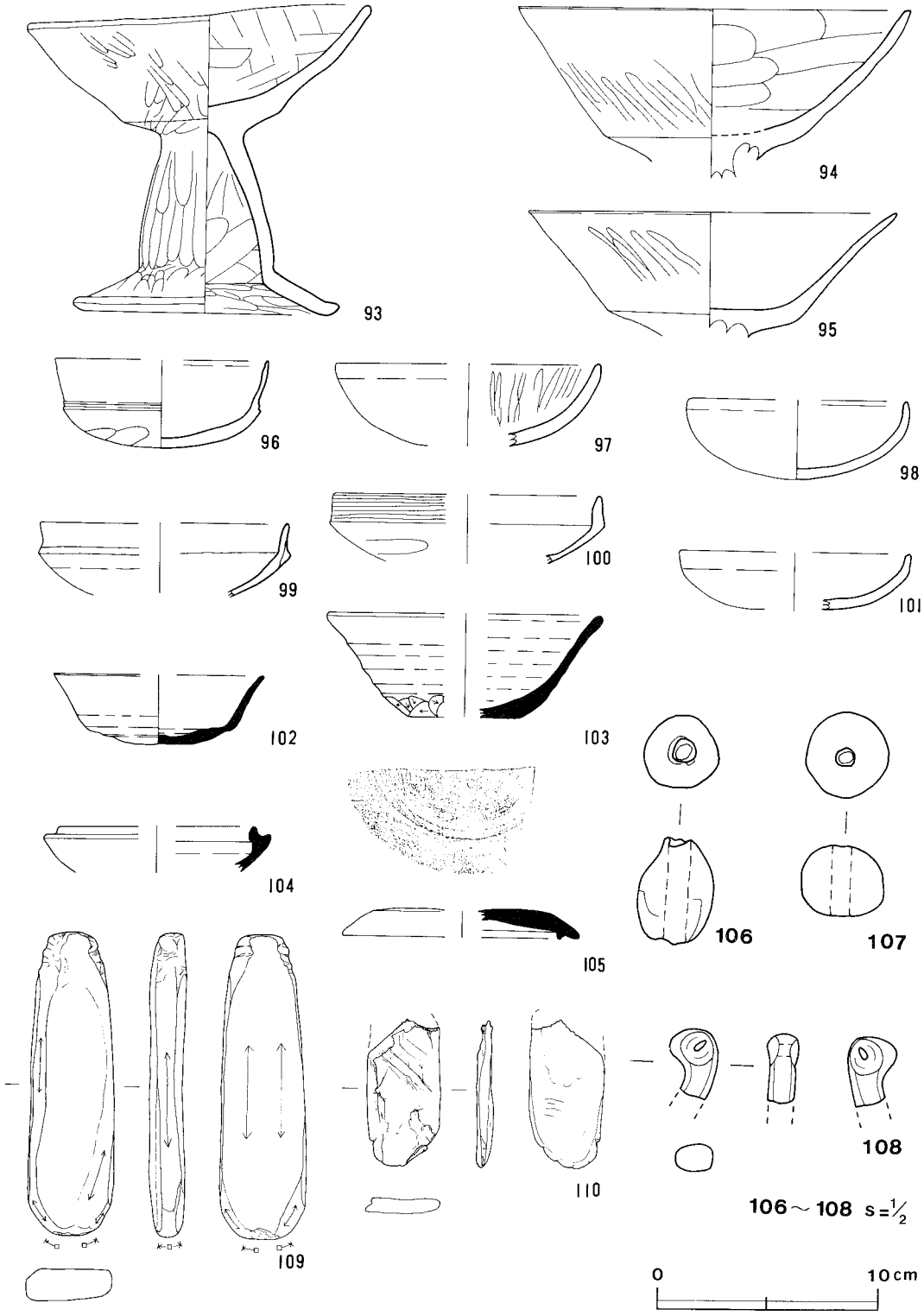
遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
86	甕 土師器	A [27.20] B (7.30)	頸部は「く」の字状に外反し，口縁端部で直立する。口縁部に沈線状の段を有する。口縁部内外面横ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P58 5% 覆土中層
87	小形壺 土師器	A 10.60 B 13.30 C 4.30	底部外面中央が凹む小さな平底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は内彎気味に外上方に立ち上がる。口縁部外面横ナデ後縦位のヘラナデ。口縁部内面横ナデ。胴部外面ヘラナデ。胴部内面に輪積み成形痕が残る。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P41 100% 覆土下層
88	甑 土師器	A [24.50] B (24.50)	胴部は上位に最大径を有し，頸部で外反し，口縁部は外傾気味に外上方に立ち上がる。口縁部と頸部との境に稜を持つ。口辺部内外面横ナデ。胴部上半縦位のヘラ削り，下半横位のヘラ削り。器面は剥離が著しい。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P59 15% 覆土中・上層
89	甑 土師器	A [12.20] B (3.20)	無底式の甑片で，胴部は緩く内彎しながら外上方に立ち上がる。底部内外面ヘラ削り。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P60 15% 覆土 P59と同一個体と思われる。
90	小形壺 土師器	B (14.90) C 3.80	平底を呈し，胴部は内彎しながら立ち上がり，中位に最大径を持つ。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部内外面ヘラナデ。胴部外面ヘラ削りの後ヘラナデ。底部外面に木葉痕が見られる。	砂粒・雲母 明赤褐色 普通	P42 90% 床面直上
91	坩 土師器	B (10.30) C 2.00	丸底で，胴部は扁平な球状を呈し，中位よりやや下に最大径を持つ。胴部外面ヘラナデ。内面に輪積み成形痕が残る。	砂粒・雲母 にぶい黄橙色 普通	P43 70% 床面・貯蔵穴 覆土
92	坩 土師器	A [8.00] B (6.20)	体部は球状を呈するものと思われ，口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部内外面ヘラデナの後横ナデ。体部外面粗いヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P53 20% 覆土
93	高坏 土師器	A [15.60] B 16.40 D 12.30 E 8.30	坏部は下位に稜を持ち，中位でやや内彎しながら外上方に立ち上がる。脚部は膨らみを持ちながら裾部に向かって広がり，裾部は大きく「ハ」の字状に開き，裾端部が外方する。外面丁寧なヘラ磨き。坏部・裾部内面ヘラナデ。坏部内面剥離。	砂粒 赤色 普通	P44 75% 床面・貯蔵穴 覆土・覆土下層
94	高坏 土師器	A 18.20 B (7.80)	坏部は下位に明瞭な稜を持ち，直線的に外上方に立ち上がる。坏部底面中央にほぞを有している。坏部外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。外面に煤付着。	砂粒 明赤褐色 普通	P45 40% 覆土中・下層
95	高坏 土師器	A 17.00 B (5.80)	坏部は下位に稜を持ち，僅かに外反しながら外上方に立ち上がる。外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P46 40% 床面～覆土下層
96	坏 土師器	A [10.00] B 4.10 C 3.00	丸底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がり，口辺部は僅かに内彎しながら外上方に立ち上がる。体部と口辺部との境に明瞭な稜を持つ。口辺部内外面横ナデ。体部外面多方向のヘラ削り。	砂粒 橙色 普通	P47 60% 覆土中層
97	坏 土師器	A [12.20] B (3.80)	丸底を呈し，体部は内彎しながら外上方に立ち上がる。口辺部外面横ナデ。内面ナデの後粗いヘラ磨き。体部外面ヘラ削りの後ナデ。	砂粒 橙色 普通	P48 20% 覆土中・上層

98	坏 土師器	A [10.00] B 3.70 C [1.40]	丸底を呈し，体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は僅かに内傾する。口縁部外面横ナデ。内面黒色処理。	砂粒・雲母 明黄褐色 普通	P49 40% 覆土中層
99	坏 土師器	A [11.80] B (3.40)	体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は僅かに外傾しながら立ち上がる。口縁部と体部との境に粘土帯を貼り付け稜を作り出している。(体部上位に貼り付け痕を残す。)口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラナデ。内面ナデ。	砂粒・雲母 にぶい橙色 普通	P50 15% 覆土中層
100	坏 土師器	A [12.20] B (3.20)	体部は僅かに内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部と体部との境に稜を有している。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ナデ。	砂粒 にぶい橙色 普通	P51 10% 覆土中層
101	坏 土師器	A [10.60] B (2.70)	体部は内彎しながら立ち上がり，口縁部は直立する。口縁部と体部との境に弱い稜が見られる。口縁部内外面横ナデ。体部外面ヘラ削り。内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P52 20% 覆土中層
102	坏 須恵器	A [9.80] B 3.20 C 4.60	底部外面中央に膨らみを持ち，底部内面は凹み，中央が僅かに高まる。体部は直線的に外上方に立ち上がる。水挽き成形。底部ヘラ切りの後ヘラナデ調整。	砂粒 明褐灰色 普通	P54 40% 覆土中・上層
103	坏 須恵器	A [12.70] B 4.80 C [5.20]	平底を呈し，体部は内彎気味に外上方に立ち上がり，口縁部で外反する。口唇部は丸味を持つ。器面には水挽き成形痕が残り，凸凹している。底部多方向の静止ヘラナデ。体部下端部は手持ちヘラ削り調整。	砂粒・雲母 灰白色 普通	P55 10% 覆土上層
104	坏 須恵器	A [9.00] B (2.15)	体部から受部にかけて僅かに内彎しながら立ち上がり，立ち上がり部は内傾した後直立する。水挽き成形。立ち上がり部は貼り付け後横ナデ。	砂粒・長石 灰白色 良好	P57 10% 覆土中層
105	蓋 須恵器	A [8.20] B (1.30)	天井部は扁平でやや歪み，中央部が僅かに凹んでいる。口縁部には弱い稜が見られ，口縁端部に丸味を持つ。天井部内面にかえりが見られる。水挽き成形の後，天井部回転ヘラ削り。	砂粒 褐灰色 普通	P56 15% 覆土中・上層

遺物番号	器種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
106	球状土錘	3.2	2.3	2.3	7.0	14.2	100	覆土	DP18 一方向から穿孔
107	〃	2.6	2.5	2.2	6.0	13.5	100	〃	DP19 上下ヘラ調整
108	勾玉	(2.2)	1.5	0.9	5×2	(3.3)	50	〃	Q7 チャート
109	砥石	14.1	4.0	1.4		180.9	100	覆土	Q8 先端に敲き痕，基部に抉り，角閃片岩
110	〃	(6.9)	3.4	0.7		(24.6)	95	〃	Q9 表裏に擦痕，粘板岩



第26図　第12号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)



第27図　第12号住居跡出土遺物実測・拓影図 (2)

第13号住居跡（第28図）

位置　調査区の東端A3g_5区を中心に位置する。

重複関係　中央部上面に第4号住居跡(古墳時代中期)が構築されている。

規模と平面形　6.27×4.98mの隅丸長方形を呈するが，北西壁に比べ南東壁が1m程長く，南東側に向かって広がる隅丸台形状の住居跡とも捉えられる。

長軸方向　N-58°-W。

壁　北東及び南西壁は緩い傾斜，北西壁は外傾，南東壁はほぼ垂直に近い傾斜で立ち上がり，壁高29～61cmを測る。

床　南東側に緩く傾斜しており，床中央部及びP_5周辺が堅緻である。

炉　長軸線上のやや北西側に偏在し，165×100×10cmの規模を有する。床面を10cm程皿状に掘り窪めた地床炉であるが，火床はあまり熱を受けていない。

ピット　6か所。P_1～P_4(29～40×25～42×57～74cm)が主柱穴，P_5(77×58×12～42cm)は入口に伴う支柱または梯子ピットと考えられる。

覆土　自然堆積。南東壁際は一部撹乱を受けている。

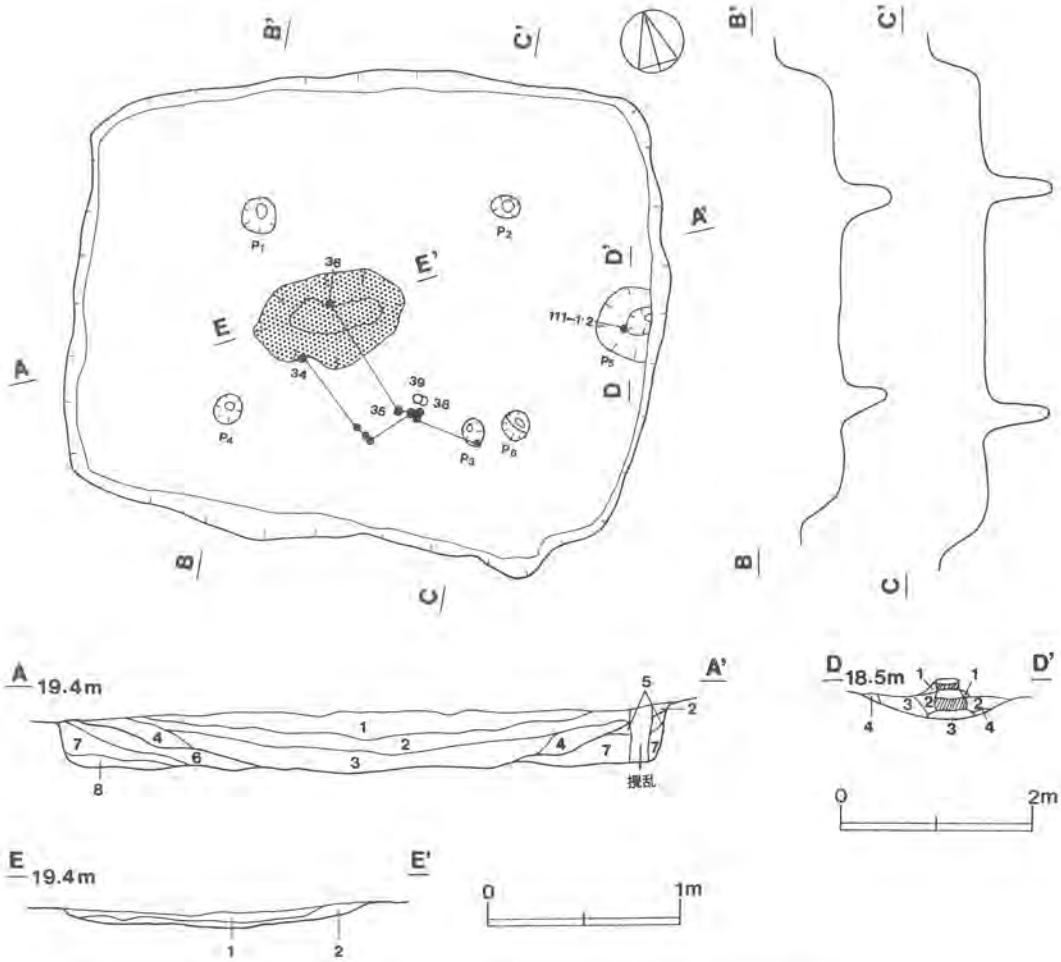
遺物　床面及び覆土下層から弥生式土器片，覆土中層から土師器片が出土している。南東壁下から検出されたP_5の覆土から，ほぼ直立の状態で出土した111-1の甕(口縁部～胴上半部)と，111-2の甕(胴下半部から底部)の破片は，接合不可能であったが同一個体と考えらる。出土位置や出土状況から埋設土器の可能性が高い。

所見　出土遺物から，弥生時代後期の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第29図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
111-1	甕 弥生式土器	A　18.50 B　(26.60)	複合口縁を呈する甕形土器。胴部は内彎して立ち上がり，頸部から口縁部にかけて外反する。口唇部に縄文原体の回転圧痕，口縁部及び胴部には付加条の縄文(RL＋2Lr)が施されている。複合口縁下端には棒状工具による刺突が加えられており，頸部は無文帯となっている。口縁部内面横ナデ。頸部内面横位のヘラナデ。	砂粒・雲母・長石 橙色 良好	P15-A 45% 床面
111-2	甕 弥生式土器	B　(10.40) C　7.30	平底で，胴部は内彎気味に外上方に立ち上がり，胴部に付加条1種の縄文(RL＋2Lr)を施す。底部外面に木葉痕が見られる。胴部下半と底部との境に幅1cm程の横ナデを施す。111－1の底部と考えられる。	砂粒・雲母・長石 橙色 良好	P15-B 30% 床面

112～116は，複合口縁を呈する弥生式土器の甕または壺形土器の口縁部片であり，口唇部に縄文の回転押圧が施され，116を除きいずれも口縁部に付加条の縄文が施されている。また114・116は複合口縁下端部に棒状またはヘラ状工具による刺突が施されている。121は複合口縁の折返し部が剥離した口縁部片で，頸部には112と同様に結節縄文の回転圧痕が見られる。117は頸部片



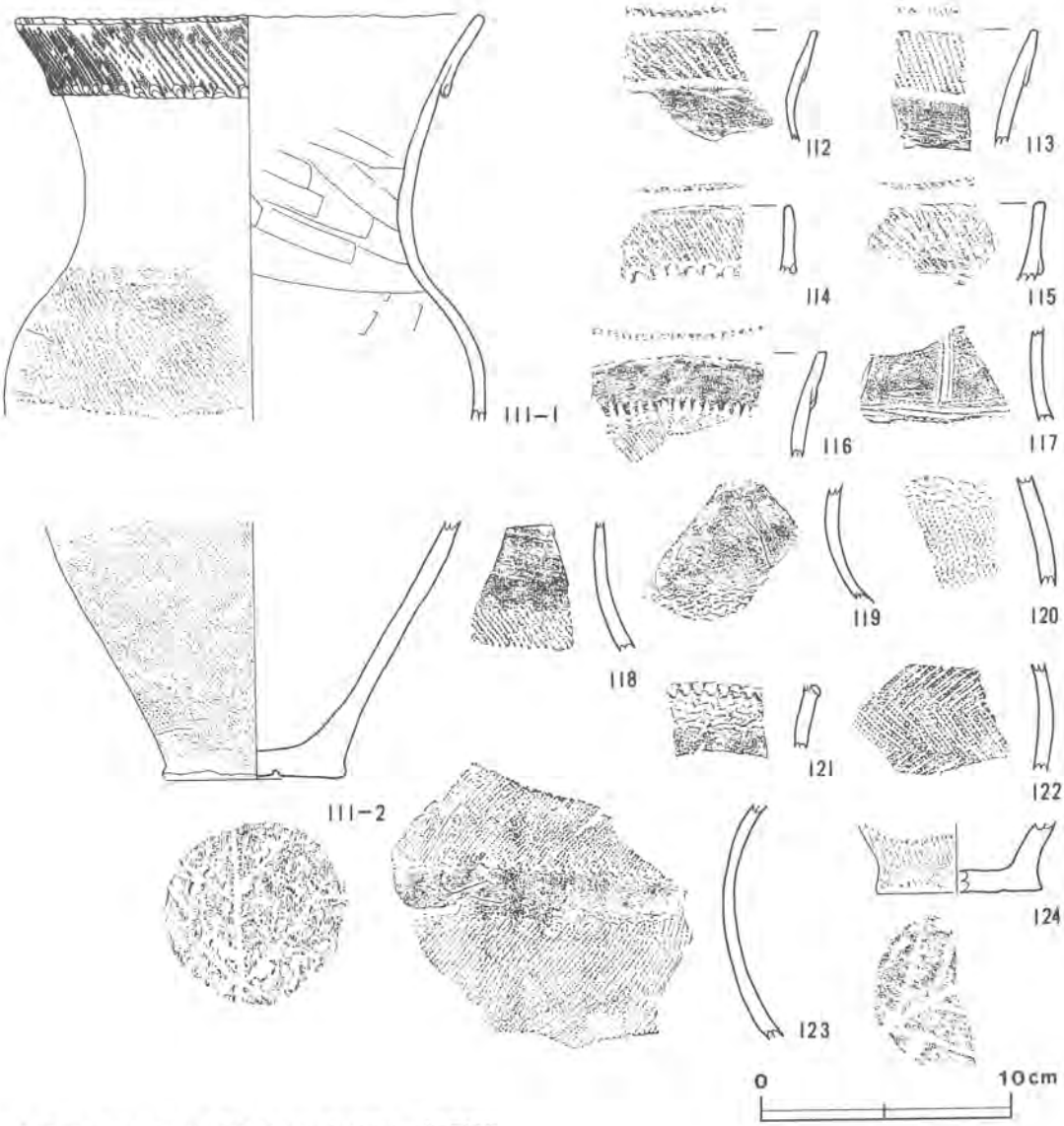
＜S113 土層解説＞
1 褐色 ローム粒子中量。
2 黒褐色 ローム粒子多量，焼土粒子中量。
3 暗褐色 ローム粒子多量。
4 褐色 ローム粒子多量。粘性が弱い。
5 明褐色 ローム粒子多量。
6 褐色 ローム粒子多量。
7 褐色 ローム粒子・ローム小ブロック中量。
8 褐色 ローム粒子少量。

＜S113 炉土層解説＞
1 褐色 ローム粒子中量。
2 褐色 ローム粒子少量。

＜S113 P5土層解説＞
1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量。
2 暗褐色 ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
3 褐色 ローム粒子中量。
4 褐色 ローム粒子・ローム小・中ブロック中量。

第28図　第13号住居跡実測図

であり，櫛描横線文が施されている。118・119・120・122は頸部から胴上半部にかけての破片であり，118は頸部が無文で胴部には付加条１種の縄文（RL＋２Lr）が，119・120は頸部と胴部との境に結節縄文が施されている。119は第15号住居跡出土の137と同一個体であり，接合している。122は付加条の縄文が羽状に施された胴部片である。123は頸部と胴部に同じ原体による付加条１種の縄文（LR＋２Rl）を施し，その間に幅２㎝程の無文帯を有している。124は小形壺または甕形土器の底部片であり，底部に木葉痕がある。



第29図　第13号住居跡出土遺物実測・拓影図

第14号住居跡（第30図）

位置　調査区の北側A2d6区に位置する。

重複関係　本跡の覆土上層を掘り込んで第9号住居跡(古墳時代中期)が，さらにその上面には第1号溝が南北に構築されている。

規模と平面形　5.88×4.74ｍの隅丸長方形を呈する。北西コーナー部は調査区外となっている。

長軸方向　N-65°-W。

壁　ほぼ垂直に立ち上がり，壁高22～24cmを測る。

床　平坦。全体に良く踏み固められており，特に炉の前面を中心とする床中央部は堅緻である。

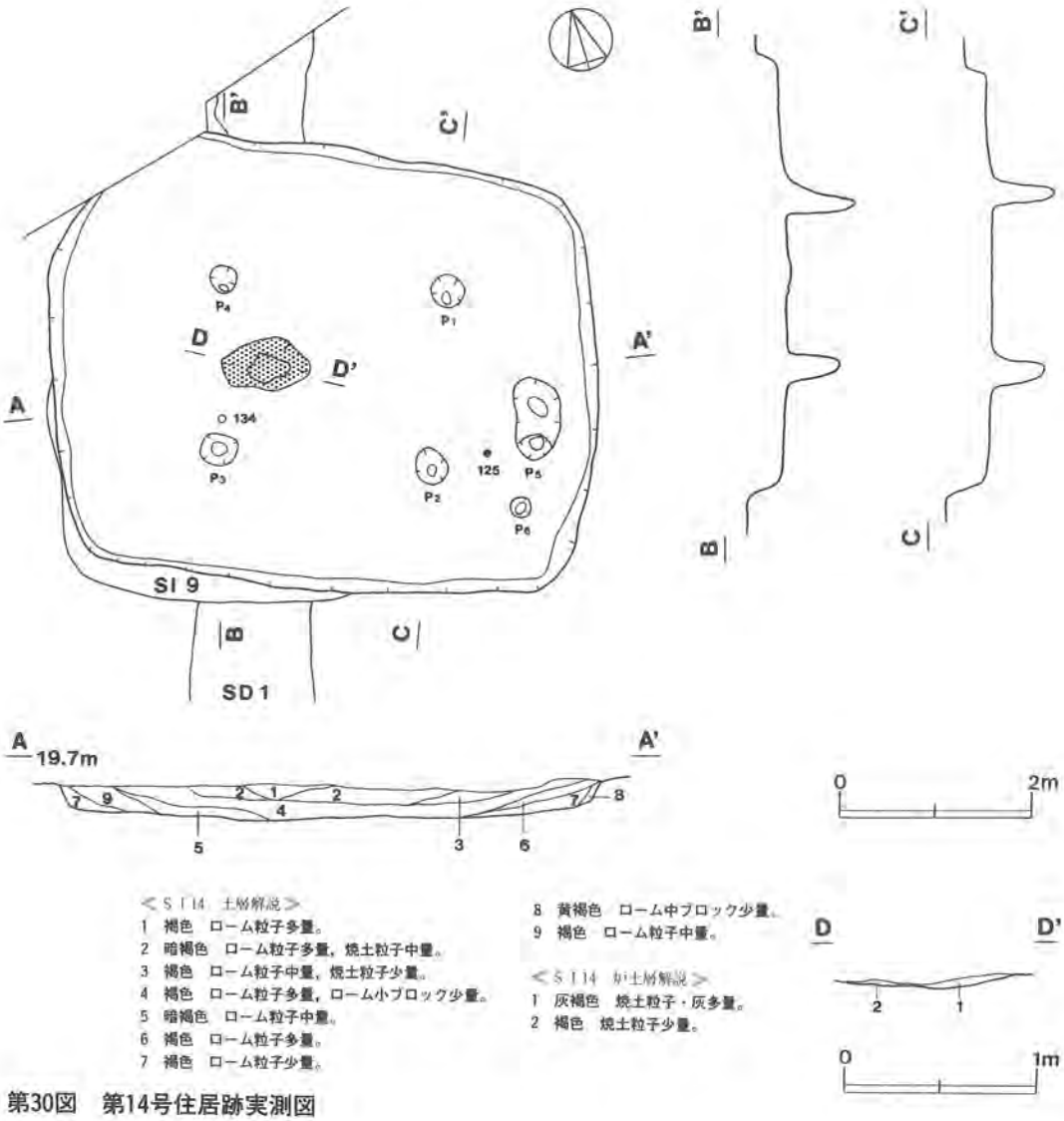
炉　北西壁寄りの主柱穴P_3・P_4を結ぶ線上の中央部付近に偏在し，97×54×8cmの規模を有する。床を8cm程皿状に掘り窪めた地床炉で，炉床は熱を受けレンガ状に赤変硬化している。

ピット　6か所。P_1～P_4(31～40×28～34×57～77cm)が主柱穴，P_5およびP_6（23～36×22～28×39～43cm)は支柱穴または入口に伴う梯子ピットと考えられる。

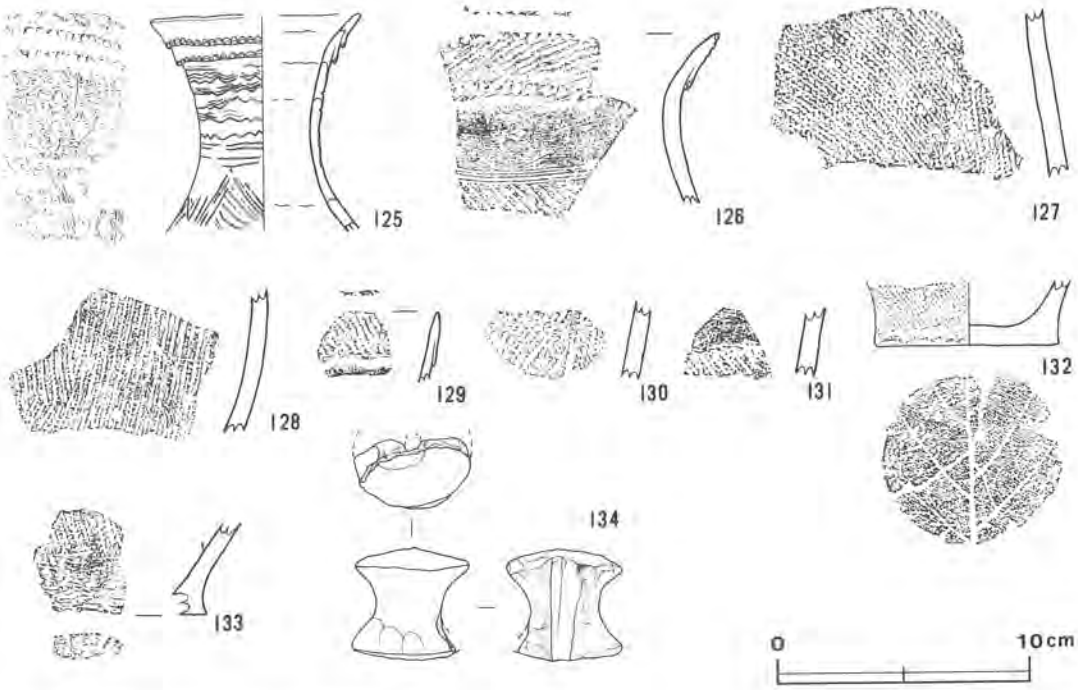
覆土　自然堆積。

遺物　南東部及び南西コーナー付近の覆土中・下層から弥生式土器片が，覆土からは紡錘車(134)が1点出土している。125の小形壺は南東部，134の紡錘車は北西部の覆土中層から出土したものである。

所見　出土遺物から，弥生時代後期の住居跡と考えられる。



第30図　第14号住居跡実測図



第31図　第14号住居跡出土遺物実測・拓影図

出土遺物観察表（第31図）

遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
125	小形壺 弥生式土器	A [8.10] B (8.80)	細頸の小形壺で，二段作出の複合口縁を呈し，口縁部下端にはそれぞれ棒状工具による押圧が加えられている。頸部上半には3本1条の櫛描波状文を5段に，下半には櫛描による連続山形文を巡らせ，上下を2段に巡らせた3本1条の櫛描横線文によって区画している。内面に輪積み成形痕が見られる。	砂粒・長石 橙色 普通	P40 30% 覆土

126・129は複合口縁を呈する甕形土器の口縁部片，131は頸部から胴上半部にかけての破片，127・128は胴部片である。126は口縁部に付加条1種の縄文（LR＋2Rl）を施し，口唇部に縄文原体を押圧し，口縁下端部に縄文原体の末端による押圧を加えている。胴部には口縁部と異なる付加条1種の縄文（RL＋2Lr）を施し，その上端に4本1条の櫛描横線文を巡らせ，胴部と頸部を区画している。129は口縁部に付加条1種の縄文，口唇部に縄文原体の回転押圧を，127・128・130・131はいずれも胴部に付加条1種の縄文を施している。132・133はいずれも底部片で，木葉痕がみられる。

遺物番号	器　種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
134	紡錘車	4.6	(4.6)	—	6.0	(33.4)	50	覆土中層	DP17　土製，一方向から穿孔

第15号住居跡（第32図）

位置　調査区の南側B2a₄区を中心に位置する。

重複関係　本跡の南側三分の一程は，第1号塚のマウンドの下から検出されている。

規模と平面形　4.57×3.84ｍの隅丸長方形を呈する。

長軸方向　N-60°-W。

壁　緩い傾斜で立ち上がり，壁高15～23cmを測る。

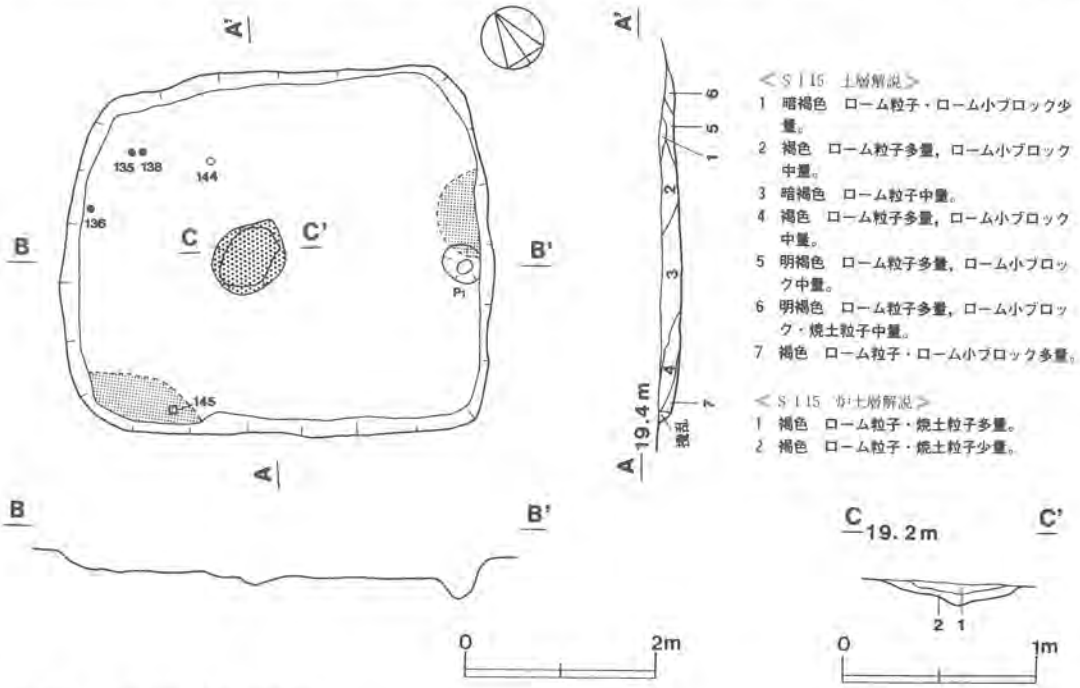
床　平坦であるが全体に軟弱であり，炉の前面(南東側)及び南東壁下のP_1周辺に僅かに硬化面が認められるにすぎない。南東壁下及び南西コーナー付近の床面に焼土(炭化物)が堆積している。

炉　長軸線上のやや北西側に偏在し，87×68×14cmの規模を有する。床面を14cm程皿状に掘り窪めた地床炉であり，覆土には多量の焼土粒子を含んでいるが，火床はあまり熱を受けていない。

ピット　1か所。P_1(径約40cm，深さ25cm)は，入口部と想定される南東壁下に検出されており，支柱または入口に伴う梯子ピットと考えられる。主柱は屋外に配置されていたものと考えられるが，掘り込みがローム層に達していなかったためか主柱穴は検出されていない。

覆土　自然堆積。

遺物　弥生式土器の壺(135・136)・甕(137・138)や球状土錘(144)，砥石(145)等が出土している。136の壺は北西壁直下の床面から直立の状態で出土したもので，その口頸部片(135)が50cm程離れた北西コーナー部の覆土下層から押し潰された状態で出土している。138の甕は135の壺の上面



第32図　第15号住居跡実測図

から出土し，137の小形甕は覆土から出土した20片余の破片が接合したものである。また，144の球状土錘は覆土上層，145の石製品は覆土中層から出土したものである。

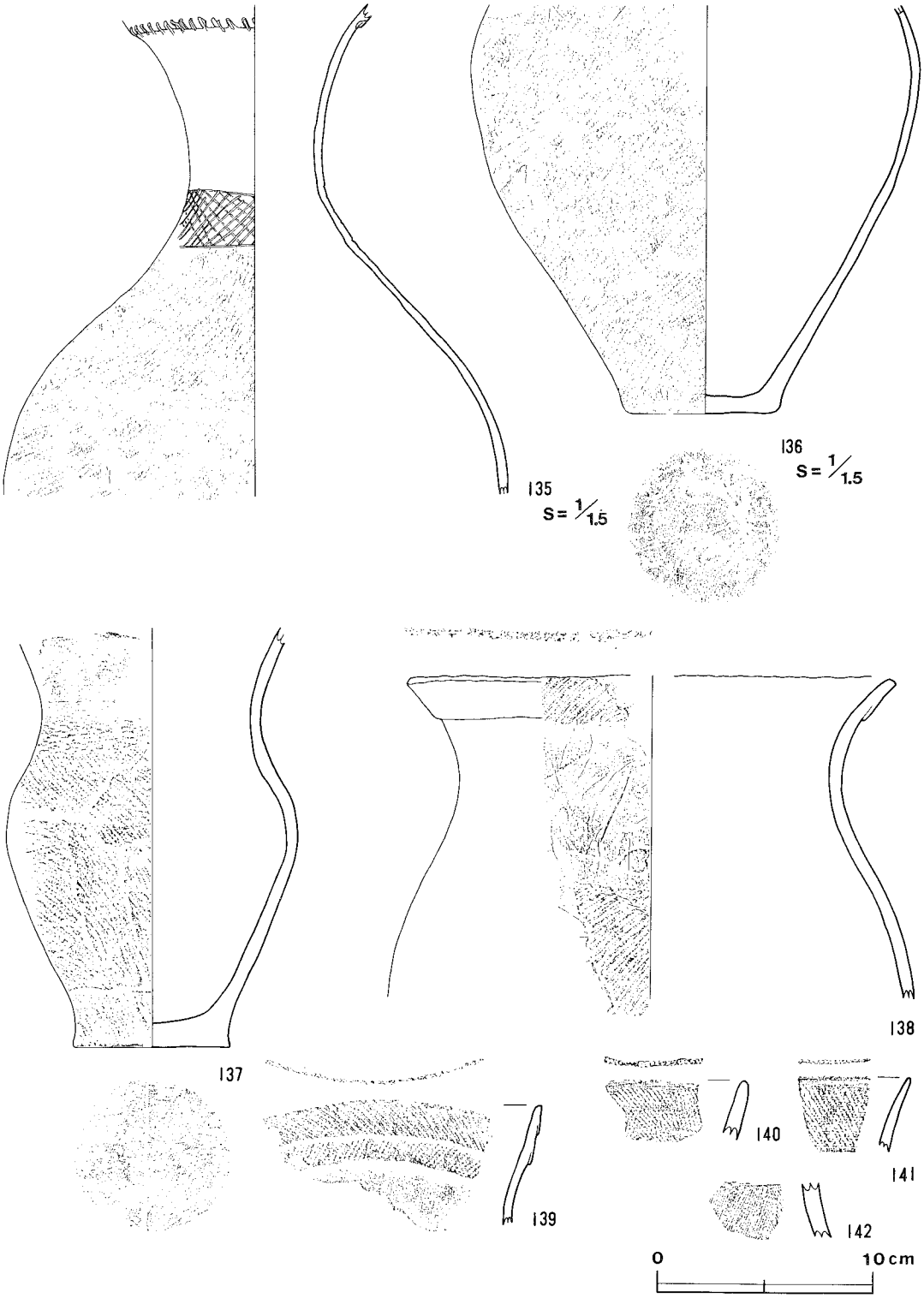
所見　焼土や炭化物の検出状況から焼失家屋と考えられ，また，炉や床の状態から短期間で廃絶した可能性が高い。本跡は，床面から出土した壺(135)の時期から，弥生時代中期後半頃の住居跡と考えられる。

出土遺物観察表（第33・34図）

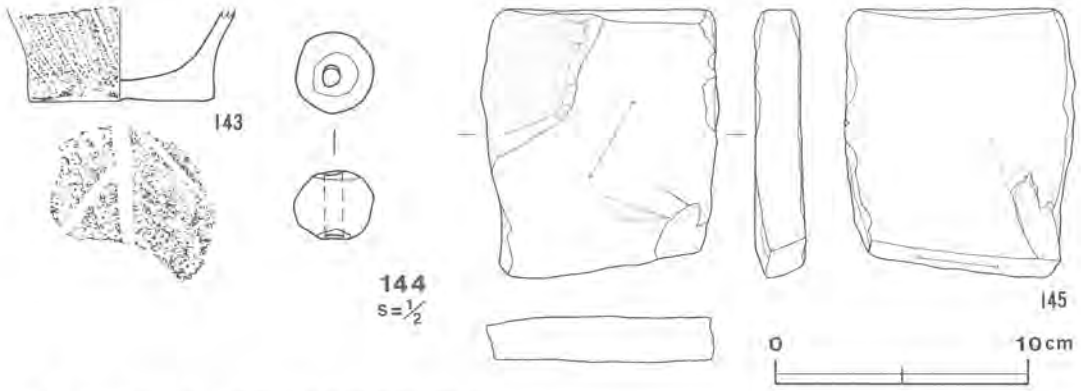
遺物番号	器　種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備　考
135	壺 弥生式土器	B (34.75)	肩部から頸部にかけて急激に窄まり，頸部から口縁部にかけて大きく外反する細頸の壺形土器。複合口縁を呈し，口縁部下端に棒状工具による刺突が加えられている。頸部下位には上下に2本の沈線を巡らせ，区画内にヘラ状工具による斜格子文を充填している。肩部から胴部にかけては付加条1種の縄文(LR＋2Rl)が施されている。頸部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 にぶい橙色 普通	P61 45% 覆土中層(一括)
136	壺 弥生式土器	B (28.80) C 11.00	平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がり，上位で強く内彎する。胴部上位に最大径を有する。胴部には135と同じ原本による付加条1種の縄文が施され，底部には木葉痕が見られる。	砂粒・長石・雲母 明褐色 普通	P62 40% 北西壁下床面 P61と同一個体と考えられる。
137	小形甕 弥生式土器	B (19.60) C 7.20	胴部は上位に最大径を有し，底部に向かって窄まり，底部はやや外方に突き出す。頸部は外反しながら外上方に立ち上がる。頸部は無文で胴部には付加条1種の縄文(RL＋2Lr)を施し，頸部と胴部とを5段に巡らせた結節縄文によって区画している。底部には木葉痕が見られる。	砂粒 橙色 普通	P63 70% 覆土 SI13及びSI17覆土出土の土器片と接合。
138	甕 弥生式土器	A [22.00] B (15.10)	複合口縁を呈し，口唇部・口縁部・胴部には同じ原体による付加条1種の縄文(LR＋2Rl)が施されている。頸部には無文である。口縁部内面横ナデ。頸部外面縦位のヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 褐灰色 普通	P64 10% 覆土中層

139～141はいずれも複合口縁を呈する甕形土器の口縁部片である。139は貼り付けによる二段作出の口縁部片で，上下に原体の異なる付加条1種の縄文（上段はRL＋2Lr，下段はLR＋2Rl）を施し，羽状に構成している。口唇部には付加条1種の縄文の回転押圧が見られる。140・141はいずれも口唇部に（付加条）縄文の回転押圧が，口縁部には付加条の縄文が施されている。142は頸部片，143は底部片である。143は底部に木葉痕が見られる。

遺物番号	器　種	法量(cm)			孔径	重量	現存率	出土地点	備　考
		最大長	最大幅	最大厚	(mm)	(g)	(%)		
144	球状土錘	2.1	2.1	1.9	5.0	7.4	100	覆土上層	DP20　上下ヘラ調整
145	不明石製品	10.7	(9.3)	1.9		(319.3)	90	覆土中層	Q10　表面・側面に加工痕，砂岩



第33図　第15号住居跡出土遺物実測・拓影図 (1)



第34図　第15号住居跡出土遺物実測・拓影図（2）

第16号住居跡（第35図）

位置　調査区の南端B2c4区を中心に位置する。

重複関係　西側上面に，第1号塚が構築されている。

規模と平面形　二分の一程が南側の調査区外に存在するため，推定の域を出ないが，径4ｍ前後の円形または楕円形状を呈するものと思われる。

主軸方向　不明。

壁　南東側の壁は傾斜地のため流出している。北西壁は緩い傾斜で立ち上がり，壁高20cmを測る。

床　一部硬化面も認められるが，全体に軟弱である。

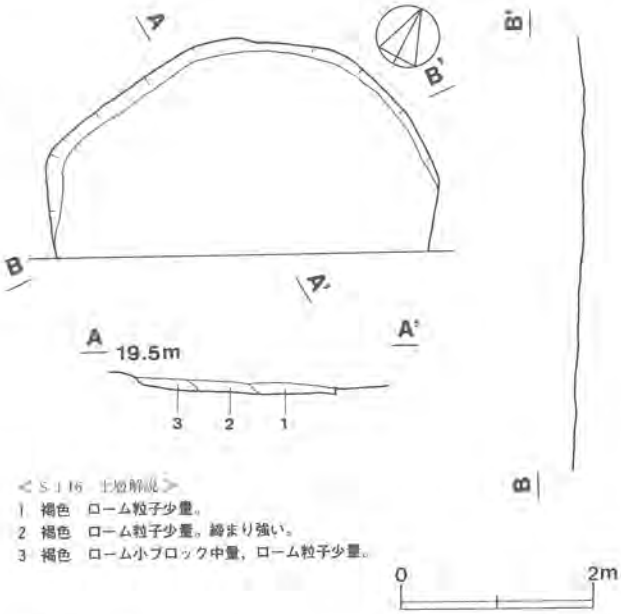
炉　不明。

ピット　検出されていない。

覆土　自然堆積。

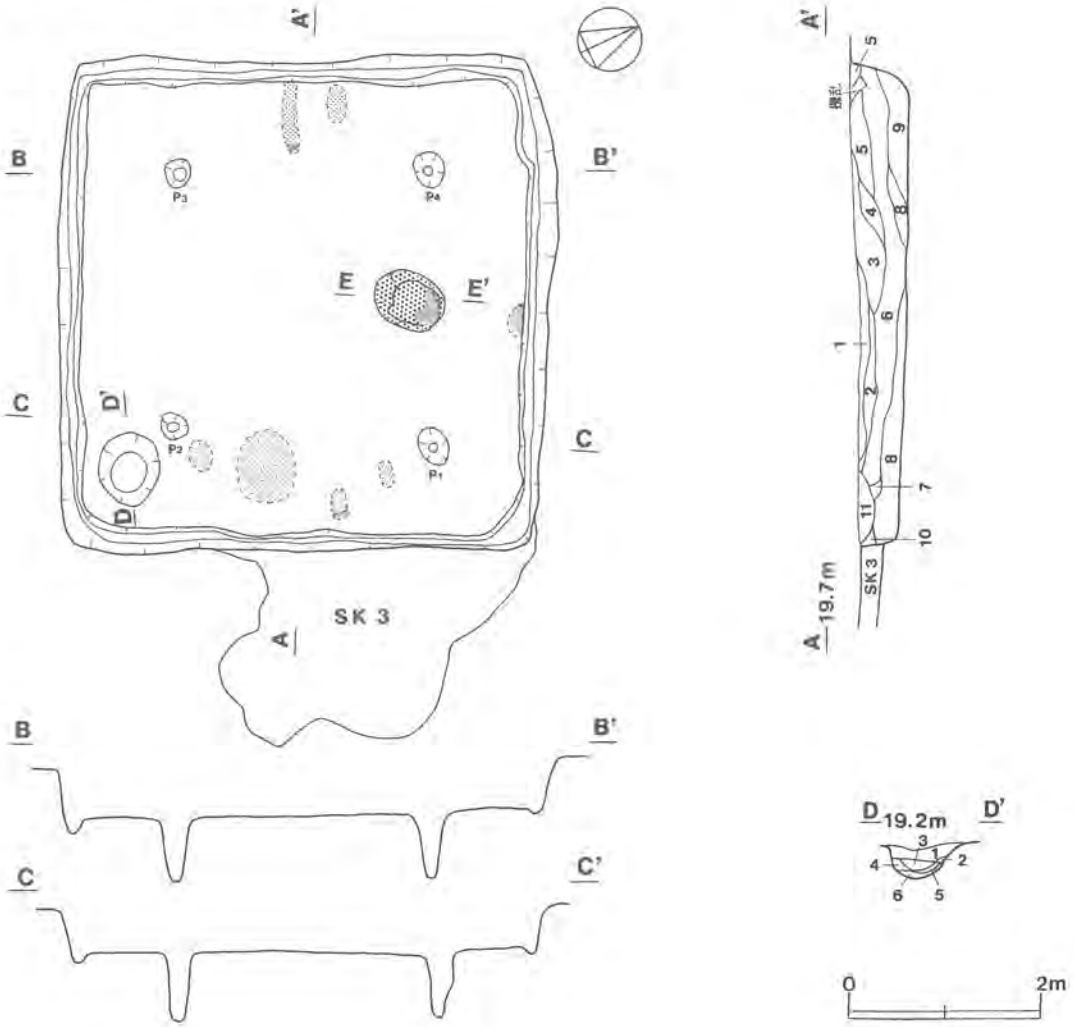
遺物　覆土下層から，縄文土器片が僅かに3片出土しているだけである。

所見　規模や覆土の状態，遺物の出土状況等から住居跡と想定したが，全体の二分の一を調査したにすぎず，規模や形状等についても不明瞭な点が多い。時期については不明である。



第35図　第16号住居跡実測図

第17号住居跡（第36図）



＜SI17 土層解説＞

1 褐色　ローム粒子多量。
2 黒暗褐色　ローム粒子中量。
3 褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック少量。
4 褐色　ローム粒子中量。
5 極暗褐色　ローム粒子多量。
6 黒褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
7 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。
8 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量，ローム中ブロック中量。
9 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック多量。
10 明褐色　ローム粒子多量。
11 暗褐色　ローム粒子・ローム小ブロック中量。

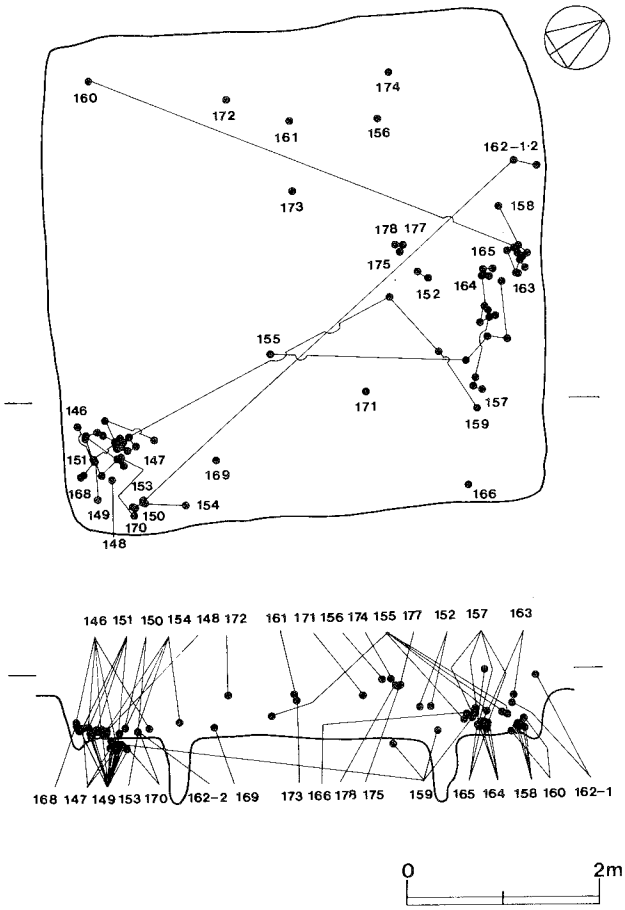
＜SI17 貯蔵穴土層解説＞

1 暗褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
2 黒褐色　炭化粒子多量。
3 にぶい赤褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。
4 にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
5 にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小ブロック中量。
6 にぶい褐色　ローム粒子多量，ローム小・中ブロック中量。

＜SI17 炉土層解説＞

1 褐色　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子中量。
2 暗褐色　ローム粒子・焼土粒子・炭化粒子中量。
3 褐色　ローム粒子中量。
4 にぶい赤褐色　ローム粒子・焼土粒子中量，炭化粒子少量。
5 褐色　ローム粒子多量。

第36図　第17号住居跡実測図



第37図　第17号住居跡遺物出土位置図

位置　調査区の南西側B2a₁区を中心に位置する。

重複関係　第1号塚のトレンチ調査の際にその存在が確認されたもので，本跡の真上に第1号塚が構築されている。また，本跡は南東側で第3号土坑を掘り込んでいる。

規模と平面形　一辺5.1ｍの整った隅丸方形を呈する。

長軸方向　N-21°-E。

壁　ほぼ垂直に立ち上がり，遺存状態は良好である。壁高43～58cmを測る。

壁溝　壁下を全周し，上幅14～25cm，深さ5～17cmを測る。U字状に掘り込まれている。

床　床中央部がやや窪み，全体に凸凹状を呈している。全体に良く踏み固められており，南西壁下及び炉の前面(北西側)は，特に堅緻である。

炉　北東壁寄りの，P_1とP_4を結ぶ線上の中央部付近に位置し，76×60cmの規模を有する。床を10cm程皿状に掘り窪めた地床炉であり，炉床は良く熱を受け，レンガ状に赤変硬化している。

ピット　4か所。いずれも主柱穴であり，P_1～P_4は径30cm・深さ70～75cm前後のほぼ同規模・同深度を有している。これらの主柱穴は，柱間隔が東西3ｍ・南北2.6ｍ程の方形状に配置されているが，P_2はその外側に貯蔵穴が付設されているためか，やや北西側のP_3方向に片寄っている。

貯蔵穴　南東コーナーに付設されている。77×66cmの円形状を呈し，床面を逆台形状に40cm程掘り込んでいる。底面は平坦である。

覆土　自然堆積。

遺物　住居跡の中央部を除くほぼ全域から，覆土中層を中心に多量の土師器片が出土している。特に貯蔵穴が検出された南東コーナー壁下の覆土下層及び床面直上からは，土師器の甕(146・147・149・151)や小形甕(148)・甑(156)・坩(168)等が横位または押し潰された状態で出土している。

所見　壁際から多量の焼土や炭・灰が検出されており，焼失家屋と考えられる。本跡は，出土遺物から古墳時代中期の住居跡と考えられる。

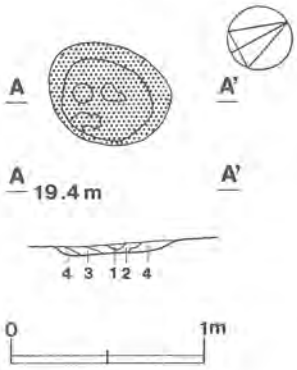
出土遺物観察表（第39～42図）

遺物番号	器種	法量(cm)	器形及び整形の特徴	胎土・色調・焼成	備考
146	甕 土師器	A 18.20 B 24.50 C 6.80	平底で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を持つ。頸部は直線的に外傾し，口縁部は外反する。頸部内面に明瞭な稜が認められる。口辺部内外面ヘラナデ後横ナデ。胴部外面ヘラナデ。輪積み成形。器表面に煤付着。	砂粒・長石 にぶい赤褐色 普通	P65 85% 貯蔵穴覆土，覆土中・下層
147	甕 土師器	A 16.00 B 22.90 C 6.40	平底で，胴部は球状を呈し，中位に最大径を持つ。頸部は外傾し，口縁部で大きく外反する。頸部内面に稜が認められる。口縁部外面ヘラナデの後横ナデ，内面ヘラナデ。胴部外面丁寧なヘラナデ。口辺部と胴部との境に接合痕が見られる。輪積み成形。	砂粒 橙色 普通	P66 85% 覆土下層
148	小形甕 土師器	A 12.90 B 14.45 C 6.10	平底で，胴部は下位がやや膨らむ球形を呈し，口辺部は直線的に外傾する。口辺部内外面ヘラナデ後横ナデ。胴部外面丁寧なヘラナデ。輪積み成形。口辺部と胴部との境に接合痕。器表面に煤付着。	砂粒 橙色 普通	P70 98% 覆土下層
149	甕 土師器	A 15.00 B 18.40 C 6.00	平底で，胴部は扁平な球形を呈し，中位に最大径を持つ。口辺部は「く」の字状に外傾する。口辺部外面ヘラナデ後横ナデ，内面ヘラナデ。胴部外面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P67 90% 貯蔵穴覆土，覆土下層
150	甕 土師器	A 13.90 B 18.40 C 6.40	不安定な平底で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を持つ。口辺部は直立気味に立ち上がり，上位で外反する。口辺部外面横ナデ，内面ヘラナデ。胴部外面ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P68 70% 覆土下層
151	甕 土師器	A 15.50 B 26.60 C 6.60	底部外面中央が僅かに窪む平底で，胴部は球形を呈し，中位に最大径を持つ。口縁部は複合口縁を呈し，口辺部は外反しながら外上方に立ち上がる。口辺部内外面及び胴部外面丁寧なヘラナデ。底部に木葉痕が見られる。器表面に煤付着。	砂粒 橙色 普通	P69 95% 貯蔵穴・覆土下層
152	小形甕 土師器	A [12.00] B (8.20)	胴部上半は内彎し，口辺部は外反して立ち上がる。口辺部内外面ヘラナデの後横ナデ。胴部外面ヘラナデ。	砂粒・雲母 橙色 普通	P86 20% 覆土上層
153	小形甕 土師器	A [10.10] B (6.20)	胴部は内彎し，口辺部は直線的に外傾して立ち上がる。口辺部内外面ヘラナデの後横ナデ。胴部外面ヘラナデ。	砂粒・長石 橙色 普通	P84 20% 覆土下層
154	甕 土師器	B (5.40) C 6.40	平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。胴部下半ヘラナデ。底部ヘラ削り後ナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P78 20% 貯蔵穴覆土・覆土中下層
155	甕 土師器	A 14.80 B (9.40)	胴部上位は内彎して立ち上がり，口辺部は外反気味に外上方に立ち上がる。複合口縁を呈する。頸部及び口縁部内面ヘラナデ。口縁部外面横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P79 20% 覆土
156	甑 土師器	A [31.20] B (12.60)	胴部は緩く内彎しながら上方に立ち上がり，口辺部で大きく外反し，口縁部は外傾しながら立ち上がる。口辺部内外面横ナデ。胴部内外面ヘラナデ。	砂粒・長石・雲母 黄橙色 普通	P80 10% 覆土上層
157	高坏 土師器	A [18.00] B 13.40 D (12.20) E 7.90	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，坏底部との境に弱い稜を持ち，坏底部中央にほぞを有する。脚部は中央に膨らみを持ち，裾部に至る。裾部は「ハ」の字状に開き，端部でほぼ平坦となる。外面丁寧なヘラナデ。坏部内面ヘラナデ後上位は横ナデ。裾部内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P71 60% 覆土中・下層

158	高　坏 土　師　器	A [17.80] B 12.80 D [11.80] E 6.50	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，底部との境に弱い稜を持つ。脚部は基部から膨らみを持ちながら「ハ」の字状に開いて裾部に至り，裾部でさらに大きく開く。坏部から裾部にかけての内外面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P 73 75% 覆土中・下層
159	高　坏 土　師　器	A 16.50 B 13.60 D [12.00] E 8.50 ～8.80	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，坏底部中央にほぞを有する。脚部は中央に膨らみを持ち裾部に至る。裾部は「ハ」の字状に開き，端部でほぼ平坦となる。外面及び坏部・裾部内面ヘラナデ。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	P 72 70% 貯蔵穴覆土・ 床面・覆土中層
160	高　坏 土　師　器	B (3.90) D [8.20] E 3.00	脚部から裾部にかけて，大きく「ハ」の字状に開き，脚部と裾部との境に接合痕が残る。脚部外面ヘラ削り，内面ヘラナデ。裾部内外面ヘラナデの後横ナデ。	砂粒 橙色 普通	P 87 10% 覆土上層
161	高　坏 土　師　器	A [18.70] B (13.20) E (8.80)	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，底部との境に明瞭な稜を持つ。坏底部は中央にほぞを有する。脚部は中位に膨らみを持つエンタシス状を呈する。坏部内外面ヘラナデの後，上位を横ナデ。脚部外面丁寧なヘラナデ，内面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P 74 50% 床面直上・覆土 中層
162-1	高　坏 土　師　器	A [17.20] B (6.30)	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部で僅かに外反し，底部との境に稜を持つ。坏底部中央には脚部と接合するための円錐状の凹みが見られる。坏部内外面ヘラナデ。坏口縁部は横ナデ後ヘラナデ。	砂粒・長石 明褐色 普通	P 77-A 15% 覆土上層
162-2	高　坏 土　師　器	D 12.80 E (8.30)	脚部は基部から「ハ」の字状に開いて裾部に至り，裾部にてさらに大きく開き，裾端部は平坦となる。脚部・裾部内外面ヘラナデ。脚部内面上位に絞り目がみられる。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P 77-B 40% 覆土下層
163	高　坏 土　師　器	B (11.40) D [12.00] E 8.70	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，底部との境に弱い稜を持つ。脚部は中位に膨らみを持ち，裾部はラッパ状に開き，裾端部は外反する。坏底部中央にほぞを有する。坏部から裾部にかけての外面ヘラナデ。裾部内面ヘラナデ。	砂粒・雲母 明褐色 普通	P 76 45% 覆土中・上層
164	高　坏 土　師　器	B (10.90) E 7.30	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，底部との境に弱い稜を持つ。脚部は基部から大きく「ハ」の字状に開く。脚基部は閉じている。坏部・脚部内外面ヘラナデ。坏部外面，脚部内面に輪積み成形痕。	砂粒・長石・雲母 橙色 普通	P 75 50% 覆土下層
165	坏 土　師　器	A [17.40] B (5.70)	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，底部との境に段を有する。坏底部中央にほぞを有する。坏部内外面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P 82 20% 覆土下層
166	高　坏 土　師　器	B (6.10)	坏部は直線的に外上方に立ち上がり，坏底部の稜は鍔状に突出する。坏部と底部は鍔の部分で接合されている。坏部外面ヘラ磨き。内面ヘラナデ。	砂粒 明赤褐色 普通	P 81 30% 覆土上層
167	高　坏 土　師　器	B (8.20) E (7.70)	脚部は中位に膨らみを持ち裾部に至る。脚部内外面ヘラナデ。	砂粒・長石 明赤褐色 普通	P 85 40% 覆土
168	坩 土　師　器	A 10.30 B 11.10 C 4.00	平底で，胴部は大きく内彎して立ち上がり中位に最大径を持つ。口辺部は直線的に外上方に立ち上がり，口縁部付近で緩く内彎する。口辺部内外面ヘラナデの後横ナデ。胴部上半ヘラナデ。胴部下半及び底部はヘラ削り。	砂粒・雲母 明黄褐色 普通	P 90 100% 覆土中層
169	坩 土　師　器	A [8.60] B (4.30)	口辺部は直線的に立ち上がり，輪積み成形痕を残す。口辺部内外面ヘラナデの後横ナデ。胴部外面ヘラ磨き，内面ヘラナデ。	砂粒 赤褐色 普通	P 88 10% 覆土中層

170	坩 土師器	B (5.00) C 4.40	平底で，胴部は内彎しながら外上方に立ち上がる。胴部外面ヘラナデ。底部外面ヘラ削りの後ヘラナデ。内面剥離が著しい。	砂粒 明赤褐色 普通	P83 35% 貯蔵穴覆土，覆土下層
171	手捏土器	B (4.60) C 6.00	輪積み成形。底部に木葉痕が見られる。内面ヘラナデ。	砂粒 橙色 普通	P89 30% 覆土

遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
172	球状土錘	3.3	3.2	2.4	6.0	25.1	100	覆土	DP26
173	〃	2.3	2.3	1.8	6.0	9.7	100	〃	DP27 上下ヘラ調整
174	〃	2.2	2.1	1.9	6.0	9.2	100	〃	DP28 〃
175	〃	2.5	2.2	2.1	5.0	11.1	100	〃	DP29 〃
176	〃	2.4	2.4	2.0	6.0	11.5	100	〃	DP30 〃
177	〃	2.3	2.2	2.0	8.0	9.9	100	〃	DP31 一方向から穿孔
178	〃	(2.6)	(1.4)	2.3	6.0	(8.3)	50	〃	DP32 上下ヘラ調整
179	〃	(2.1)	(1.3)	(2.2)	4.0	(4.7)	40	〃	DP33
180	管状土錘	3.6	2.4		9.0	(20.2)	95	〃	DP22 上下ヘラ調整
181	〃	6.4	3.3		11.0	61.3	100	〃	DP21
182	〃	(3.6)	(2.4)		(1.3)	(20.4)	20	〃	DP23 上下ヘラ調整
183	〃	(6.9)	(2.2)		(5.0)	(31.8)	40	〃	DP24 〃
184	〃	(4.7)	(4.2)		(1.3)	(39.0)	25	〃	DP25 〃
185	砥石	(7.1)	3.8	1.9		(91.4)	95	〃	Q11 使用面4，流紋岩質凝灰岩



＜S118 竈土層解説＞
1 暗褐色 ローム粒子・焼土粒子中量，砂少量。
2 褐色 ローム粒子中量，炭化粒子少量。
3 褐色 ローム粒子中量，焼土粒子少量。
4 褐色 ローム粒子中量。

第38図 第18号住居跡竈実測図

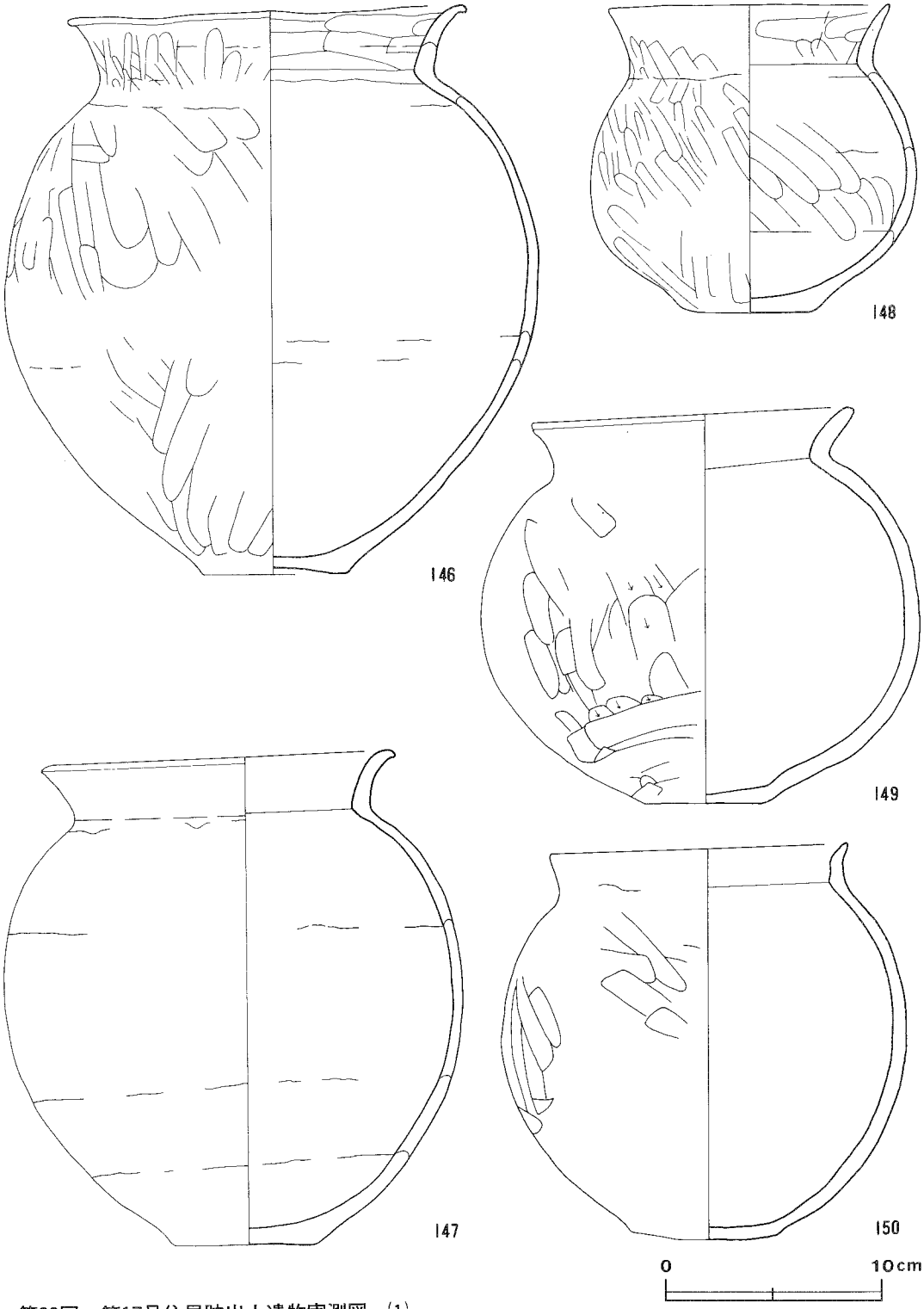
第18号住居跡（第38図）

位置 調査区の南西側 B1b₀ 区を中心に位置する。

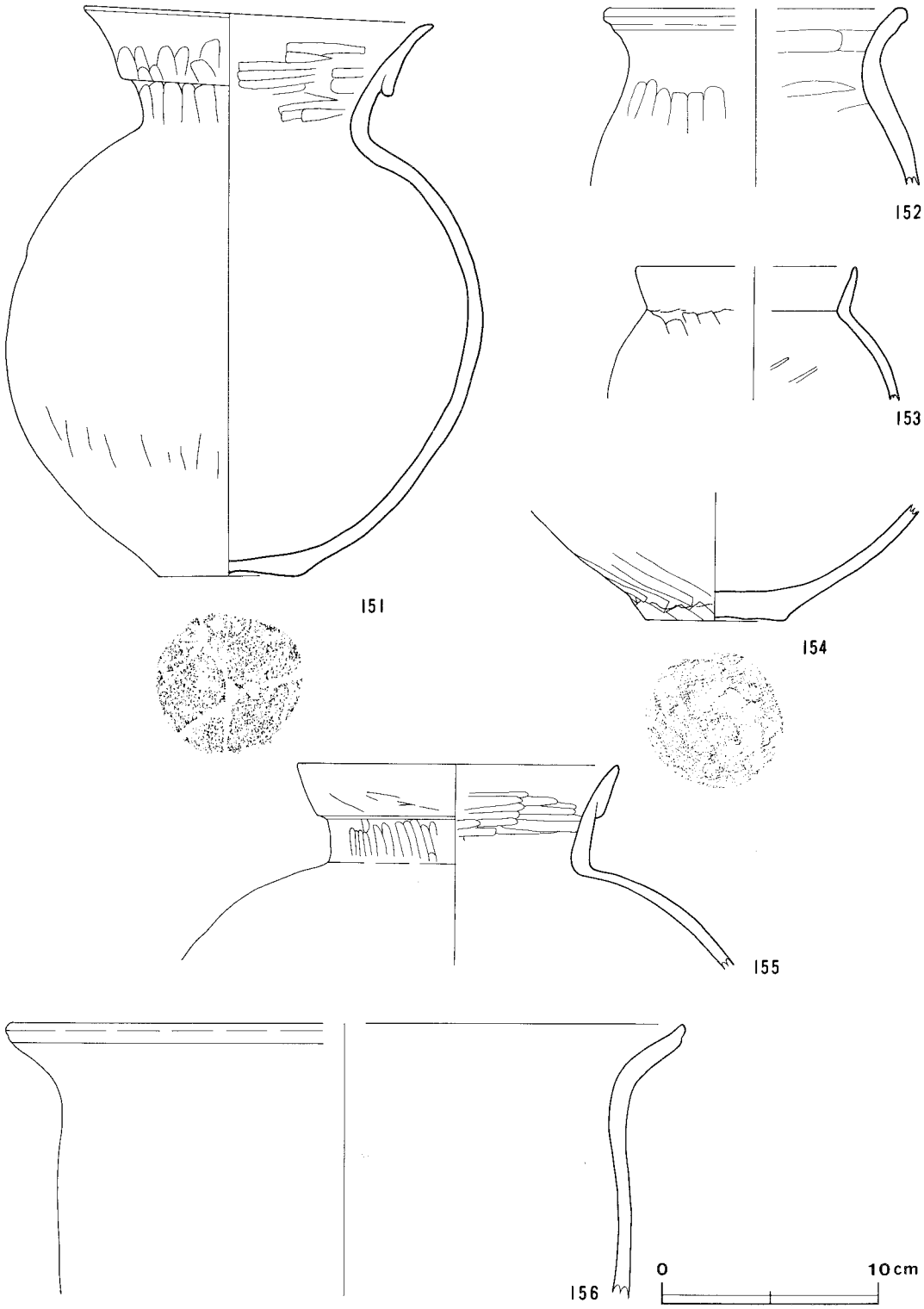
重複関係 本跡の竈付近の上面に，第1号塚が構築されている。

竈 天井部・袖部とも遺存せず，竈の火床部が僅かに遺存しているにすぎない。火床の残存部は，65×54cmの楕円形を呈し，ロームを10cm程皿状に掘り込んでいる。火床は，熱を受け赤変硬化している。

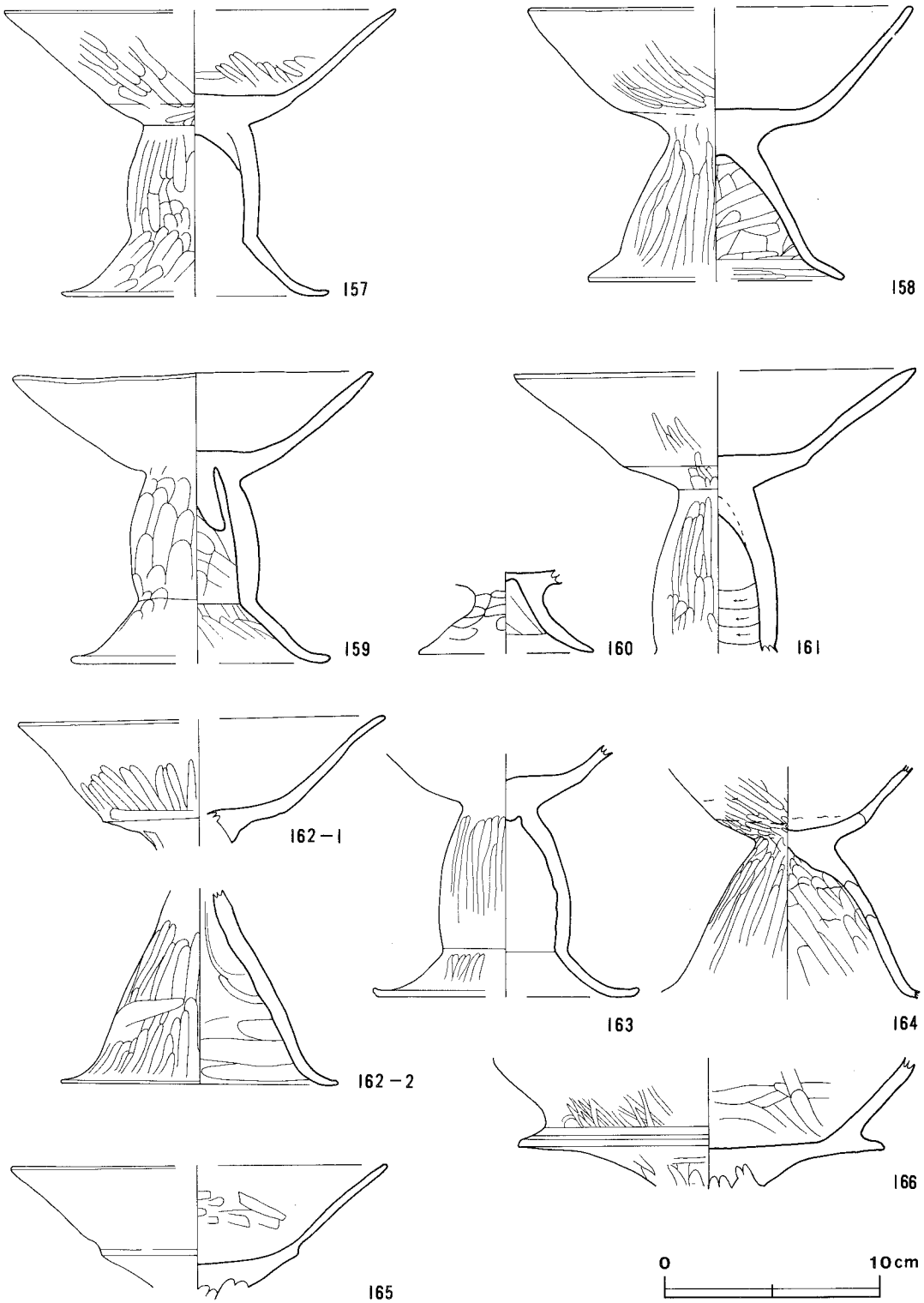
所見 本跡は第1号塚の盛土を除去し，第17号住居跡のプランを確認する過程で焼土・砂・粘土粒子を検出し，その状況から住居跡と認定したものである。出土遺物もなく，竈の火床部が僅かに残存するだけであり，詳細については不明である。



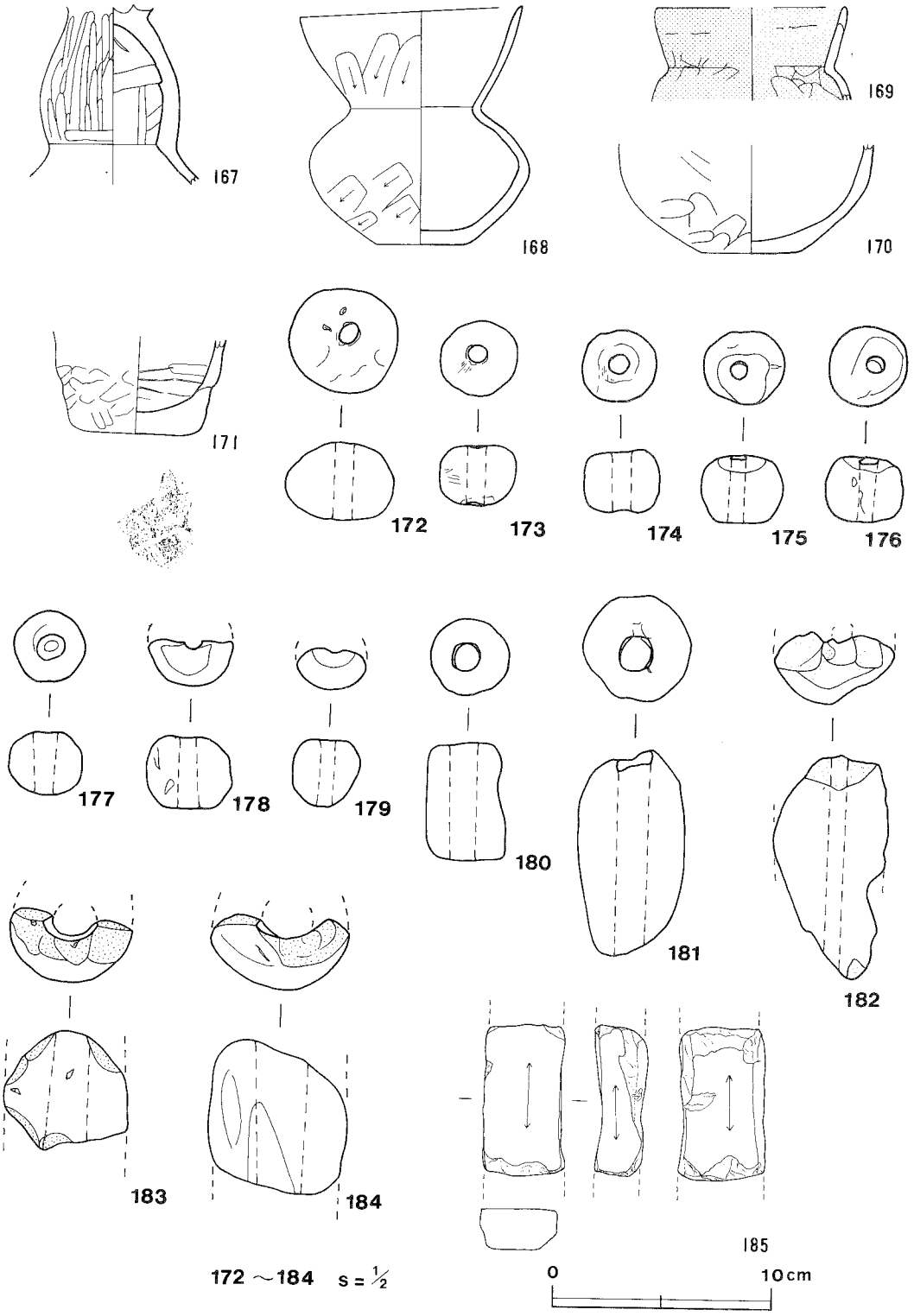
第39図　第17号住居跡出土遺物実測図　(1)



第40図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図　(2)



第41図　第17号住居跡出土遺物実測図（3）



第42図　第17号住居跡出土遺物実測・拓影図 (4)

2　土坑

当遺跡からは，不整楕円形，円形状，不整形を呈する３基の土坑が検出されている。しかし，３基の土坑はいずれも掘り込みが浅く，遺物についても，覆土から縄文式土器片や土師器片が極少量出土しているに過ぎないため，時期や性格を明らかにすることは困難であった。

第１号土坑（第43図）

位置　調査区の東側 A3g_3 区に位置する。

規模と形状　2.53×1.32ｍの不整楕円形を呈する。壁は緩い傾斜で立ち上がり，壁面は撹乱を受け凸凹状を呈している。底面は中央部がやや窪み，断面形は皿状を呈している。

方向　N-85.5°-W。

覆土　自然堆積。

遺物　覆土中より土師器片出土。

所見　時期不明。

第２号土坑（第43図）

位置　調査区の南端Ｂ2b_5区に位置する。

規模と形状　径２ｍ前後の円形状を呈し，壁は緩い傾斜で立ち上がる。底面は平坦で，断面形は浅い皿状を呈する。

方向　不明。

覆土　自然堆積（炭化粒子・焼土粒子を多量に含む）。

遺物　覆土中より縄文式土器片，土師器坏(内黒)が出土。

所見　時期不明。

第３号土坑（第43図）

位置　調査区の南西側 B2a_1区に位置する。

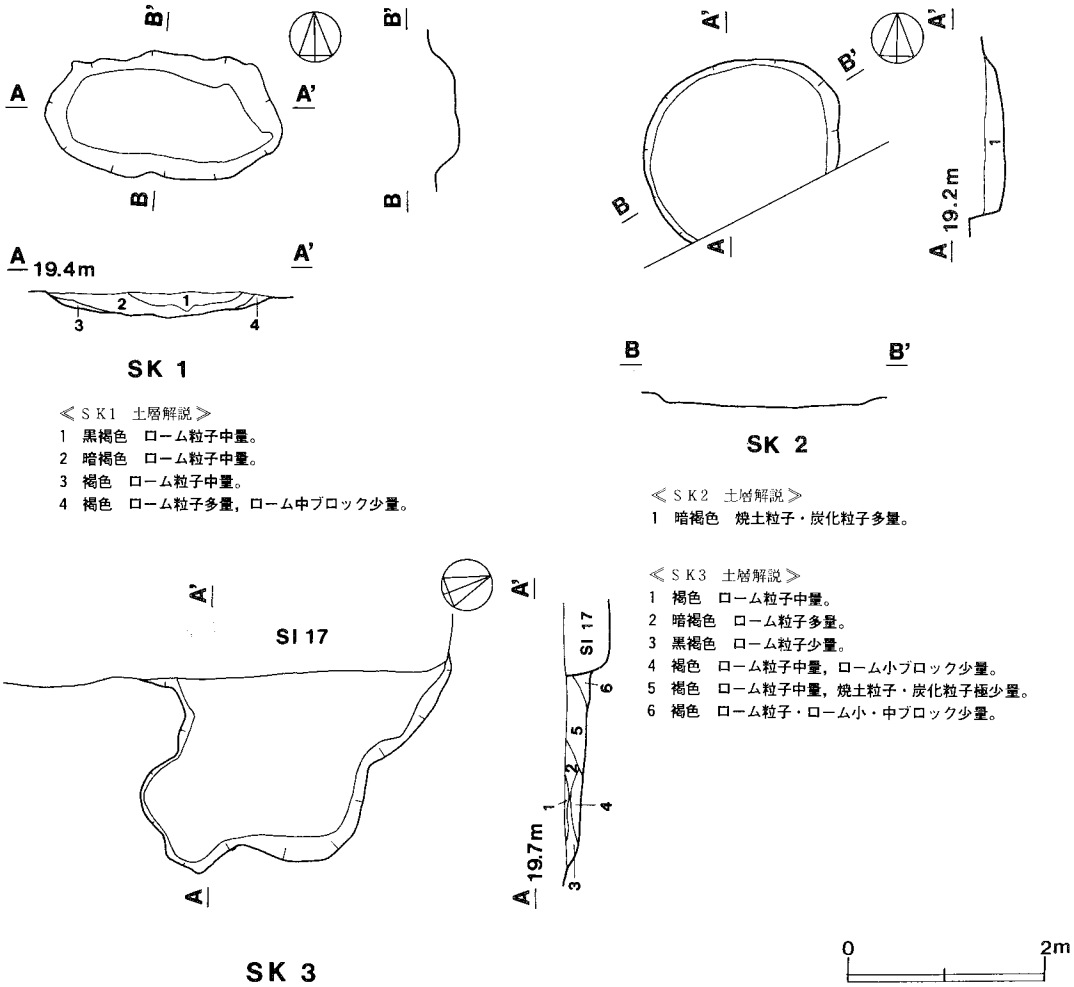
重複関係　西側を第17号住居跡によって掘り込まれ，上面には第１号塚が構築されている。

規模と形状　残存部は２×２ｍの不整形を呈するが，全体の規模・形状については不明である。壁は緩い傾斜で立ち上がり，底面はほぼ平坦で，北西中央部が不整形に窪んでいる。断面形は逆台形状を呈する。

方向　不明。

覆土　自然堆積。

所見　時期不明。



第43図 土坑実測図

3 溝

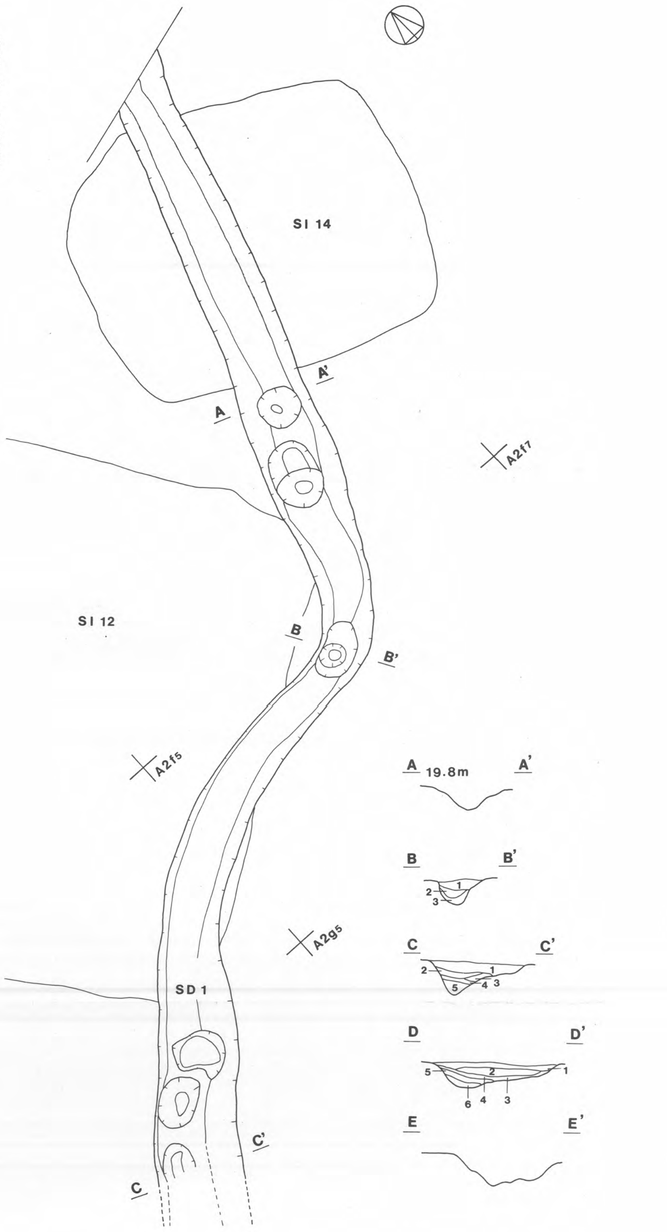
当遺跡からは5条の溝が検出されたが，第1号溝と第2号溝の規模や形状，方向性が類似するため，整理の過程でこれらの2条の溝を一つにまとめ，第1号溝として扱った。このため，当遺跡における最終的な溝の数は4条となった。

第1号溝（第44図）

位置 調査区中央部からやや北西側に片寄った，A2c_7区からA2i_2区にかけて位置する。A2c_7区の北東端は，さらに調査区外に延びている。

重複関係 A2d_6区で第9・14号住居跡，A2$f_{4\cdot5}$区で第12号住居跡を掘り込み，A2i_2区では第4号溝により壁及び覆土上層が掘り込まれている。

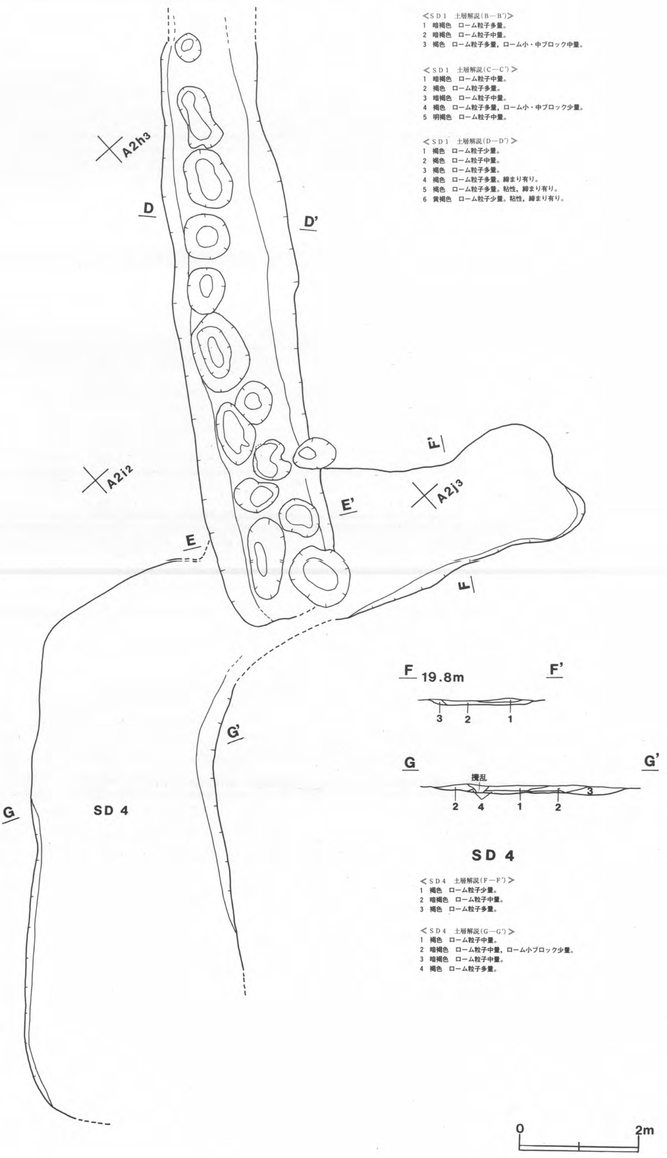
規模と形状 「ㄴ」状を呈し，全長約33m，上幅60～220cm，深さ7～32cmを測る。壁は緩い傾斜



＜SD1　土層解説(B－B')＞
1　暗褐色　ローム粒子多量。
2　暗褐色　ローム粒子中量。
3　褐色　ローム粒子多量。ローム小・中ブロック中量。

＜SD1　土層解説(C－C')＞
1　暗褐色　ローム粒子中量。
2　褐色　ローム粒子多量。
3　暗褐色　ローム粒子中量。
4　褐色　ローム粒子多量。ローム小・中ブロック少量。
5　明褐色　ローム粒子中量。

＜SD1　土層解説(D－D')＞
1　褐色　ローム粒子少量。
2　褐色　ローム粒子中量。
3　褐色　ローム粒子多量。
4　褐色　ローム粒子多量。締まり有り。
5　褐色　ローム粒子多量。粘性。締まり有り。
6　黄褐色　ローム粒子少量。粘性。締まり有り。



＜SD4　土層解説(F－F')＞
1　褐色　ローム粒子少量。
2　暗褐色　ローム粒子中量。
3　褐色　ローム粒子多量。

＜SD4　土層解説(G－G')＞
1　褐色　ローム粒子中量。
2　暗褐色　ローム粒子中量。ローム小ブロック少量。
3　暗褐色　ローム粒子中量。
4　褐色　ローム粒子多量。

で立ち上がり，断面形状は皿状またはV字状を呈し，底面中央には不整形のピット(確認面からの深さ9～39cmを測る)がほぼ等間隔に並ぶ。

方向　A2i_2区の溝南西端から北東方向に(N-35.5°-E)に18.5m程ほぼ直線的に延び,A2f_5区付近で東側(N-84°-E)に大きく屈曲して4m程直線的に延びている。さらにA2f_6区で再び北東方向(N-23.5°-E)に向きを変え，10.5m程直線的に延びて調査区の境界に達する。本跡はさらに，北東側の調査区外に延びているものと予想される。

覆土　自然堆積。

遺物　縄文式土器，弥生式土器，土師器が少量出土。

所見　当初，A2f_6区から北東方向に延びる溝を第1号，A2f_4区から南西方向に延びる溝を第2号溝と呼称したが，規模や形状，方向性が一致するため，これらを一つにまとめ第1号溝とした。時期や性格については不明である。

第3号溝（第45図）

位置　調査区の南西側A2j_2区を中心に位置する。

規模と形状　平面形は舟形を呈し，全長5.90m，上幅70～100cm，深さ12～15cmを測る。壁は緩い傾斜で立ち上がり，底面は平坦で，溝の北西端及び北東壁際に計3か所のピットが検出されている(径38～50cm，深さ11～35cm)。断面形は浅い皿状を呈する。

方向　N-53°-W。

覆土　自然堆積。

所見　時期，性格不明。

第4号溝（第44図）

位置　調査区の南西側A1j_0区からA2j_3区にかけて位置する。

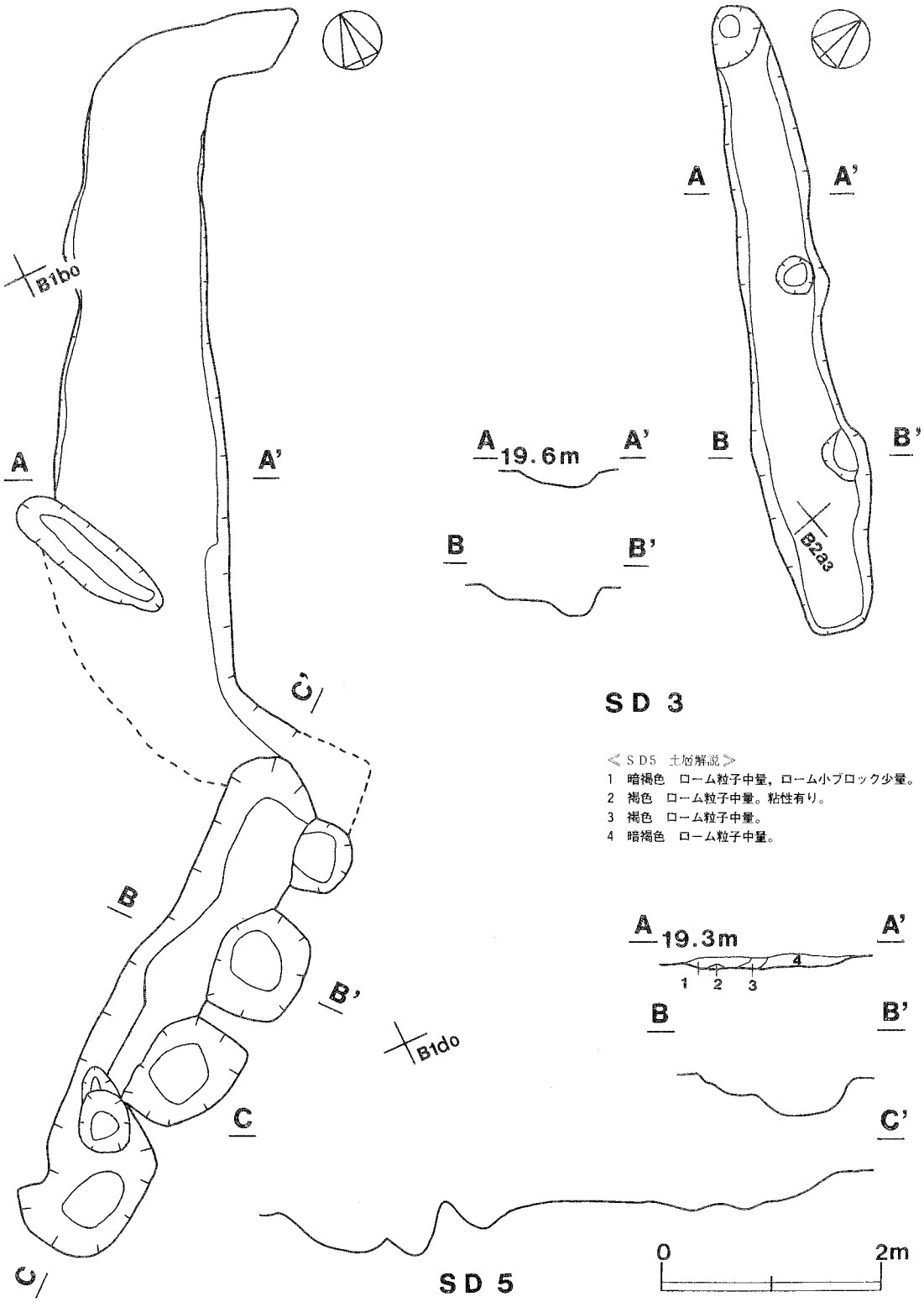
重複関係　A2i_2区で第1号溝と直交し，その上面を東西に掘り込んでいる。

規模と形状　「ㄱ」形状を呈し，全長約6.6m，上幅3.65～1.65m，深さ10cmを測る。全体に掘り込みが浅く，南西端及び第1号溝との重複部は不明瞭である。壁は緩い傾斜で立ち上がり，底面は平坦である。断面形は浅い皿状を呈する。

方向　A1j_0区からA2i_1区にかけて北東方向(N-40°-E)に7.5m程直線的に延び，A2i_1区でほぼ直角に南東方向(N-109°-E)に屈曲して8.3m程直線的に延びている。

覆土　自然堆積。

所見　時期，性格不明。



第45図 第3・5号溝実測図

第5号溝（第45図）

位置　調査区の北西側B1c9区からB1c0区にかけて位置する。

規模と形状　中央部付近の西壁及び北東端付近が不明瞭であるが，概ね「⌟⌜」状を呈する。B1c9区の溝南東壁外には，壁に沿って径25～50cm，深さ18～54cm前後のピットがほぼ等間隔に掘り込まれている。壁は緩い傾斜で立ち上がり，底面は凸凹状を呈し，南西方向に傾斜している。全長約8m，上幅130～150cm，深さ22～32cmを測る。断面形は皿状，逆台形状を呈する。

方向　南西端部から北東方向(N-54°-E)に5m程直線的に延びて北西方向に屈曲し，さらにB1b9区で再び北東方向(N-27°-E)に向きを変え，6.5m程直線的に延びている。溝の北東端は，南東方向に屈曲している。

覆土　自然堆積。

所見　時期，性格不明。

4　塚

当遺跡からは，大小合わせて3基の塚が検出されている。第1号塚は，3基の塚の中で最大規模を有するもので，調査以前は，形状や立地状況から「大日山古墳群」を構成する古墳のひとつと考えられていたものである。しかし，今回の調査によって，古墳ではなく明らかに江戸時代に構築された大日塚であることが判明した。また，第2・3号塚については，当初その存在そのものが知られていなかったが，調査の過程で新たに確認し，調査によって塚と判明したものである。

第1号塚（第46図）

現況と確認状況　古渡集落北西側の低地に突出した，舌状台地(小字名「大日山」)先端部に所在する周知の遺跡であり，国道125号沿いにそのマウンドを眺望することができる。マウンドは，樹木によって厚く覆われており，長い間放置されていたらしく，荒れた状態であった。第1号塚はこれまで，大日山古墳群を形成する古墳の一つと認識されていたものである。

位置　調査区の南西側B2区に位置する。

重複関係　塚は，弥生時代後期や古墳時代中期に位置付けられる第15・17・18号住居跡や，第3号土坑の上面に構築されている。

規模と形状　基底面は，14.5(北東－南西)×14.0（北西－南東)mのやや形の崩れた隅丸方形状を呈し，現地表面からの高さは2.85mを測る。塚は基底面から1.5m程の高さまで方錐状に立ち上がった後平坦面(一辺約8.5mの方形状)を形成し，さらにその平坦面の中央部に一辺6.5m，高さ1.2m前後の方錐状のマウンドが形成されている。塚頂部には，一辺1.5m前後の方形状を呈する平坦面が見られ，中央部に板碑が祀られている。塚頂部の標高は22.85mを測る。

構築状況　暗褐色の旧地表面を平らに成形し，その上に中段まで暗褐色土や褐色土を方錐状に丁寧に積み上げている。中段に平坦面を形成した後，さらにその上に方錐状に盛土しているが，中段より上の盛土は，中段以下の盛土に比較して大まかで雑である。盛土には，後世の人為的な撹乱や木の根の撹乱が数か所に認められる。

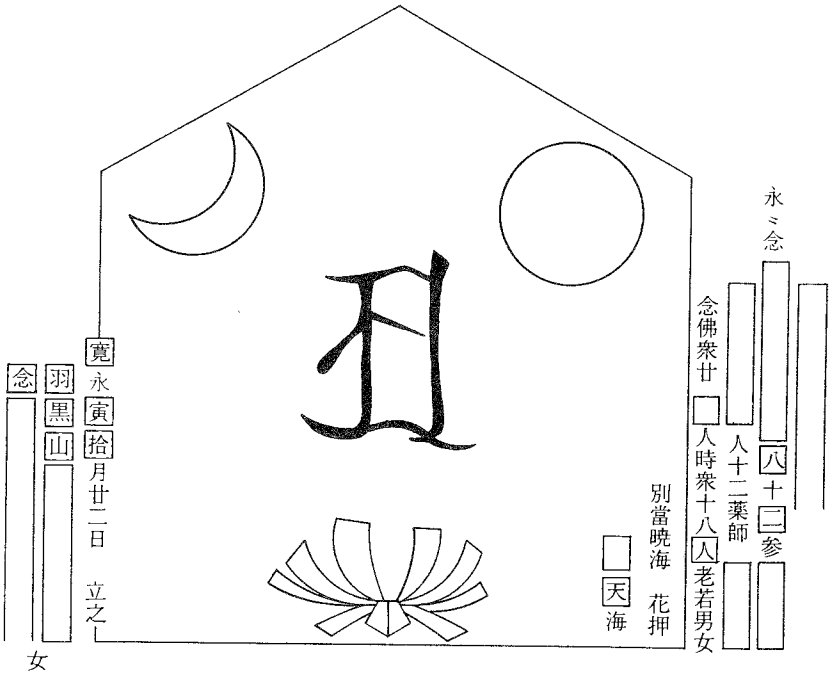
遺物　塚頂部に倒れかかった「胎蔵界大日如来」板碑が東面するように建立されており，その前面(東側)に無縫塔の基礎または中台，宝篋印塔の基礎と思われる石が放置されていた。塚の盛土中からは縄文式土器片が，塚表面近くの盛土中からは古銭(政和通寶，元豊通寶)が出土している。

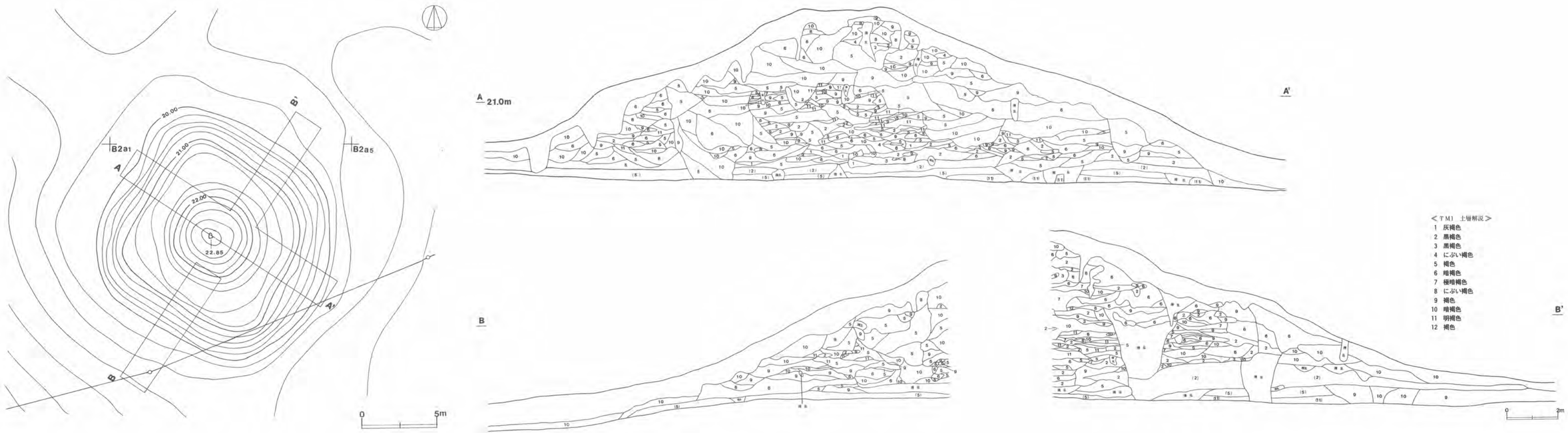
所見　盛土の流出により形状が崩れているが，構築当初は一辺14ｍ前後の方錐形(平坦面が中段，上段に見られる)を呈する，2段構造の塚であったと考えられる。塚頂部に建立されていた板碑の築造年代が，碑文から寛永3年(1626)と判断できることから，塚は寛永3年もしくはそれ以前に構築されたものと思われる。

出土遺物

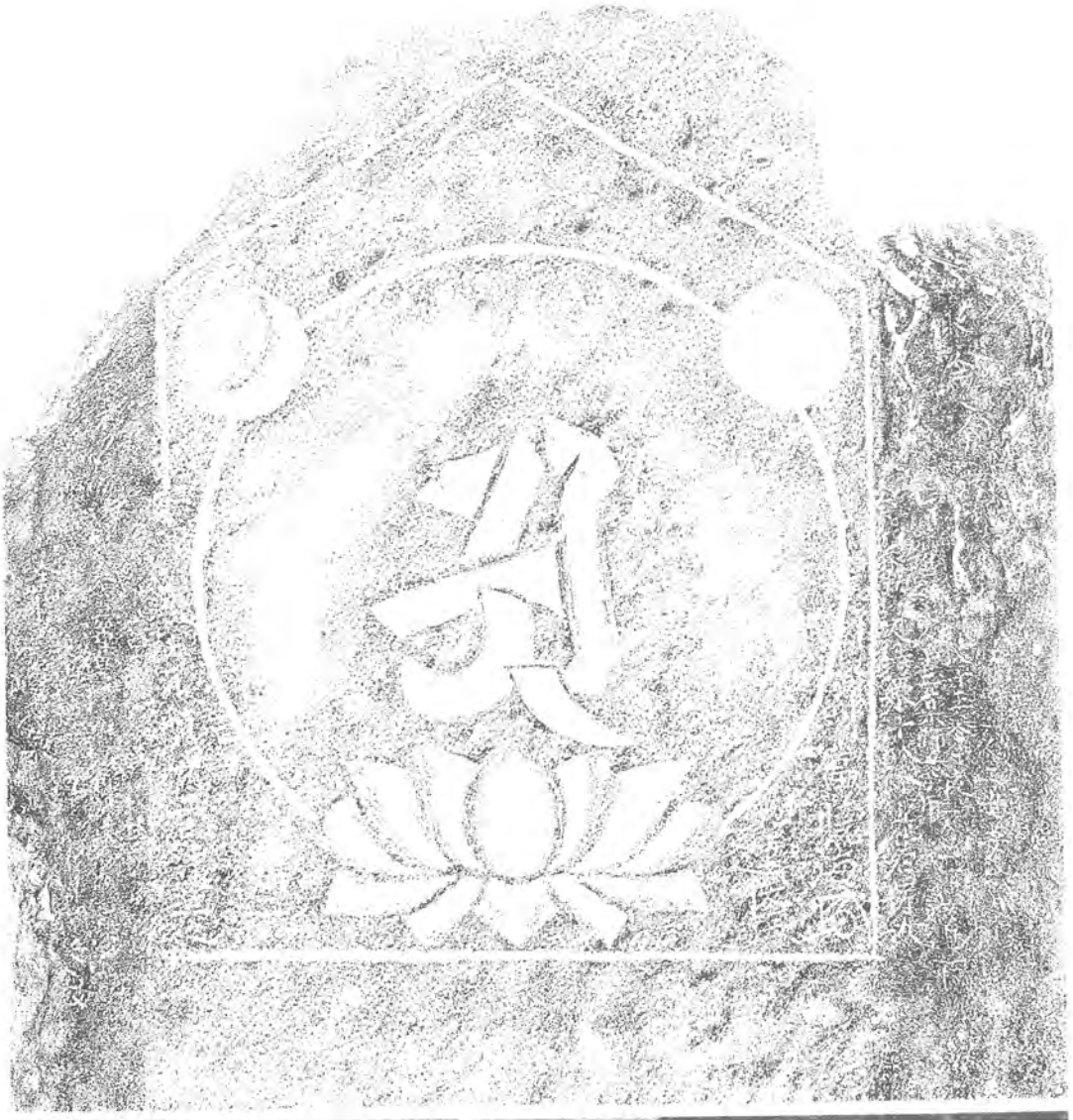
(1)　板碑(第47図)

板碑は自然の雲母片岩を使用したもので，塚頂部にやや西側に傾いた状態で東面するように立てられていた。しかし，板碑の右肩の一部が欠損しており，碑面の風化が著しいこともあり，碑文は判読困難な点が多い。板碑の造立年代については下図に示したように，「寛永寅拾月廿二日□立之」と判読可能なことから，板碑は寛永3年丙寅(1626)に造立されたものと考えられる。板碑の大きさは最大高91㎝，最大幅85㎝，最大厚11㎝を測る。



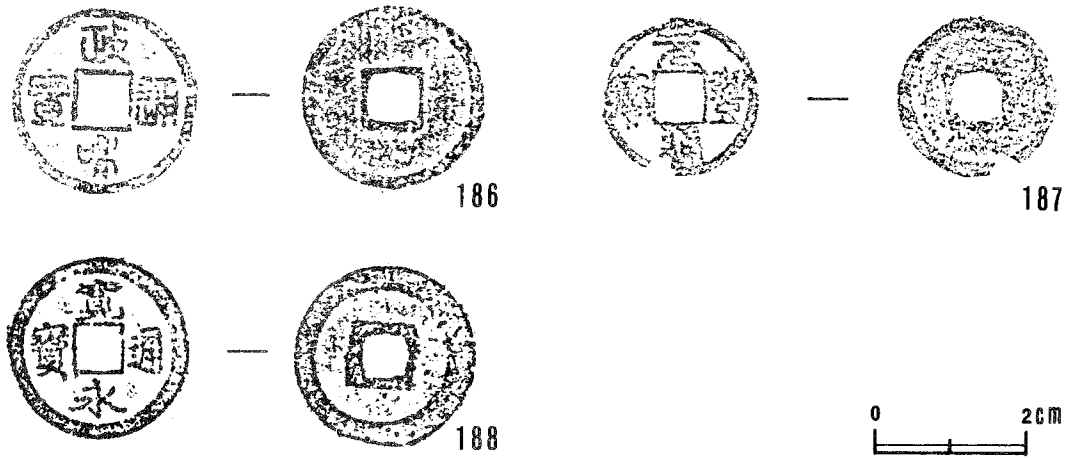


第46図 第１号塚実測図



第47図　第１号塚出土板碑拓影図

(2) 古銭



第48図　第1号塚出土古銭拓影図

遺物番号	銭　名	初鋳年(西暦)	鋳造地名	外縁径(mm)	内郭長(mm)	重量(g)	出土地点	備　考
186	政和通寶	政和元年(1111)	北宋	24.0	8.0	2.4	盛土中	篆書M2
187	元豊通寶	元豊元年(1078)	北宋	20.5	7.0	1.9	〃	篆書M3
188	寛永通寶	寛永3年(1626)	日本	24.0	6.5	3.8	〃	古寛永M4

第2号塚（第49図）

現況と確認状況　伐開後の調査によって存在が確認されたもので，周囲の地表面に比べ僅かに楕円形状を呈する緩やかな高まりが認められる程度である。

位置　調査区の北西側A2区に位置する。

重複関係　塚は，古墳時代中期の第12号住居跡上面に構築されている。

規模と形状　9.0×6.5m前後の楕円形状を呈し，高さ60cm前後を測る。

構築状況　周囲をローム層上面(黒褐色の旧地表下)まで削平し，塚の基底面となる旧地表を断面台形状に成形し，その上にローム土(褐色土)を盛土したものと思われる。盛土には，木の根による撹乱が見られる。

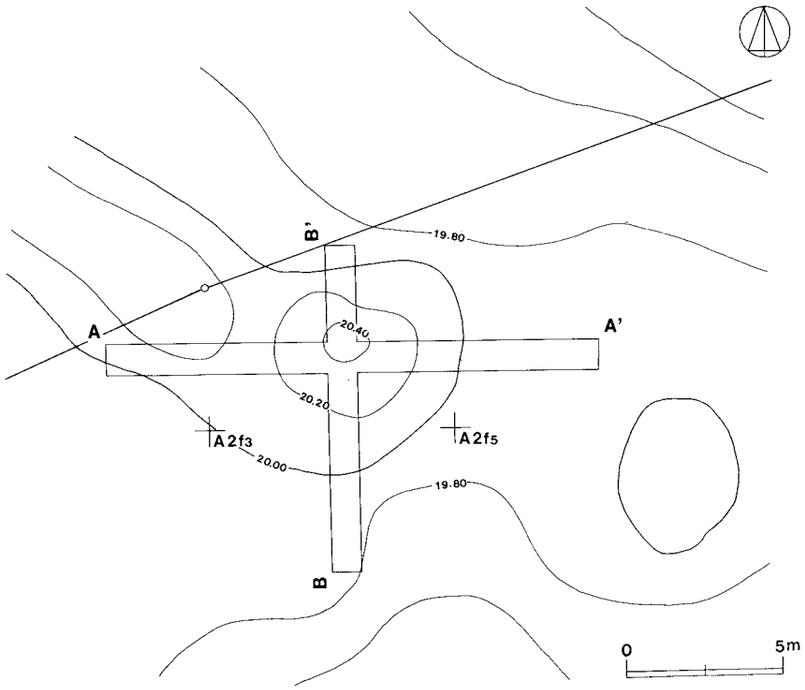
所見　遺物は出土していないが，盛土の状況やその締まり具合等から，近世の塚の可能性が高い。

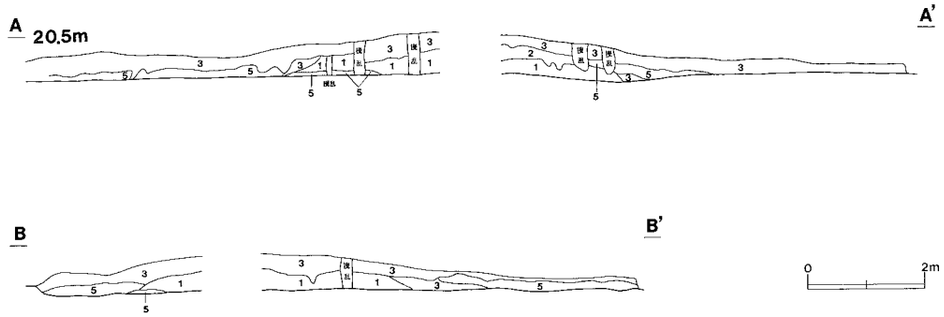
第3号塚（第49図）

現況と確認状況　伐開後の調査により，その存在が明瞭に確認されたもので，塚中央部には枯れた松の大木が立っていた。

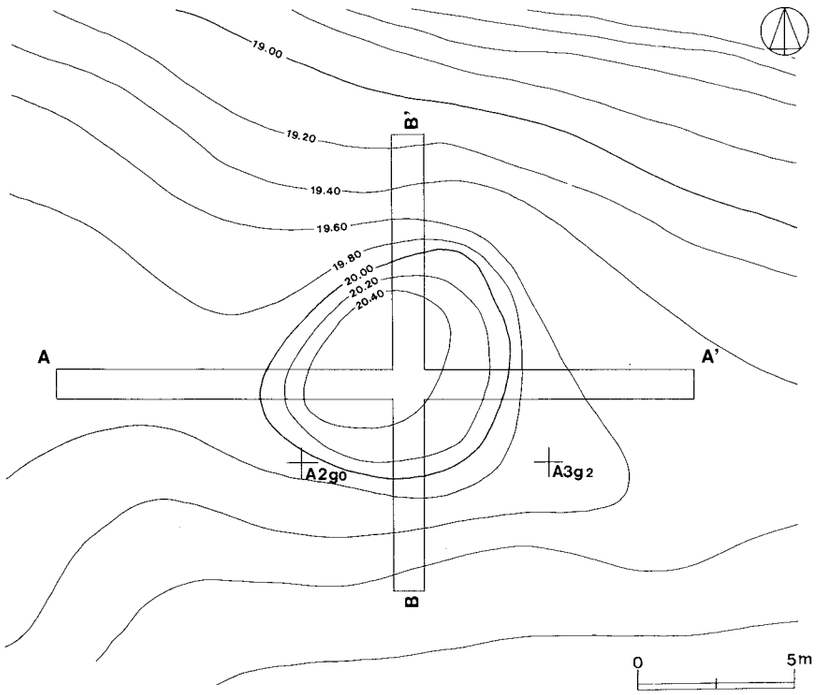
位置　調査区の北東側A2・3区に位置する。

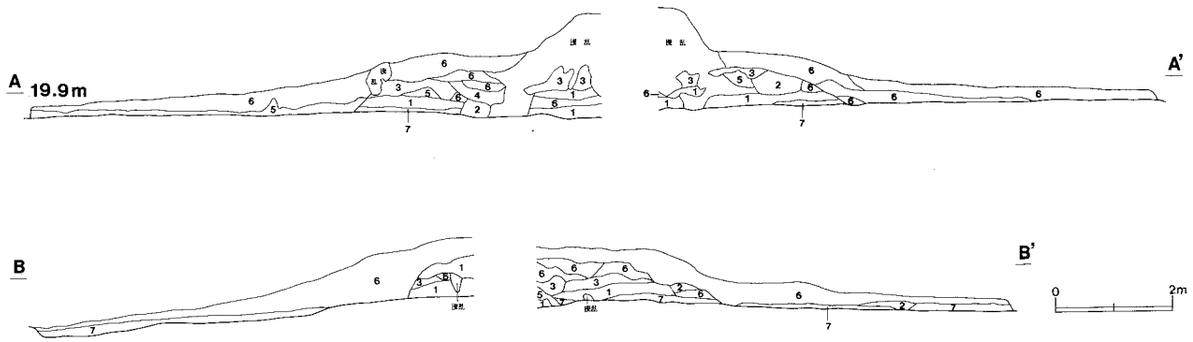
規模と形状　9.0(北東－南西)×7.7(北西－南東)mの楕円形状(卵形)を呈し，高さ約80cmを測





≪ＴＭ2　土層解説≫
1　黒褐色
2　暗褐色
3　褐色
4　褐色
5　褐色





≪ＴＭ3　土層解説≫
1　黒褐色
2　褐色
3　暗褐色
4　極暗褐色
5　褐色
6　暗褐色
7　褐色

第49図　第２・３号塚実測図

る。

構築状況　第2号塚と同様に，周囲の旧地表をローム層上面まで削平し，塚の基底面となる旧地表を断面台形状に成形し，その上にローム土(褐色土)や暗褐色土，黒褐色土を盛土している。塚中央部は，木の根が大きく入り込んでいるため，盛土の状況は不明瞭である。

遺物　剣形模造品(247)が盛土下層から出土しているが，周囲から混入したものである。

所見　第2号塚に比較し，盛土にやや締まりは見られるが，近世の塚の可能性が高い。

第3節　その他

1　遺構外出土遺物

当遺跡からは，表採・グリッド及び遺構の覆土等から直接遺構には伴わない土器片や土製品・石製品等が少量出土している。ここではこれらの出土遺物の内，特徴的なものについて取り上げ記載する。

(1)　土器

縄文式土器(第50・51図)

出土した土器群の中で主体をなすものは弥生式土器や土師器であるが，当遺跡からはこれらの土器の外に少量ではあるが縄文時代早期・前期・後期の土器片が出土している。縄文式土器を特徴や時期により第1～5群に分類し記載する。

第1群　沈線文系の土器群

1類　田戸下層式

189～209は早期中葉に位置付けられる田戸下層式の土器片である。189～191は無文で口唇部は内削ぎ状を呈し，胎土に繊維を含む。また，内外面にヘラ状工具によるナデ調整が施されている。193は口唇部が外削ぎ状を呈し，口縁部には平行沈線が，下位には沈線間に刺突が施されている。194は口唇部が角頭状を呈し，口縁部には細沈線と太沈線を組み合わせた平行沈線が施され，196は口縁端部に爪形状の刺突が施されている。192・195～208は胴部片であり，199・200は沈線間に太めの短沈線を配している。204～207は細めの平行沈線・斜行する平行沈線が施される胴部片である。208は細沈線と太めの有節平行沈線を組み合わせている。209は尖底土器の底部片であり，所謂「天狗の鼻」の形状を呈している。

2類　田戸上層式

210・211は早期中葉に位置付けられる田戸上層式の土器片である。210は口唇部の一部を欠損する口縁部片であり，平行沈線間に貝殻腹縁文が施されている。211は胴部片であり，平行

沈線文・刺突文・貝殻腹縁文が施されている。

第2群　羽状縄文系の土器群

212は前期前葉の黒浜式に比定される口縁部片で，胎土に繊維を含み，口縁部には半截竹管による弧線文が施されている。

第3群　竹管文系の土器群

213は前期後葉の浮島Ⅱ式に比定される胴部片であり，波状貝殻文が施されている。

第4群　前期最終末の土器群

前期最終末に位置付けられる粟島台式・大木6式に併行する土器群と考えられる。

1類　縄文を施す一群

214～221は口縁部片，222・223は口唇部を欠損する口縁部片である。214・221～223は複合口縁を呈し，222～230はS字状結節文が施されている。また，214の口唇部には縄文原体の押圧が施され，230には半截竹管具によるものと思われる刺突が施されている。地文は220・226が無節L，他は単節LRの縄文と思われる。

2類　沈線を施す一群

231は口唇部を欠損する複合口縁の破片，232はその胴部片であり，半截竹管またはヘラ状工具による横位・縦位の沈線が施されている。

第5群　後期の土器群

後期前葉の堀之内式に比定される土器群であり，234・235は口縁部片，236～238は胴部片である。234・236・237は弧状の沈線が，235は地文に太い無節Lの縄文が施され，口縁部に1条の沈線見られる。238は単節RLの縄文地文上に数条の沈線が垂下する。

土師器(第51図)

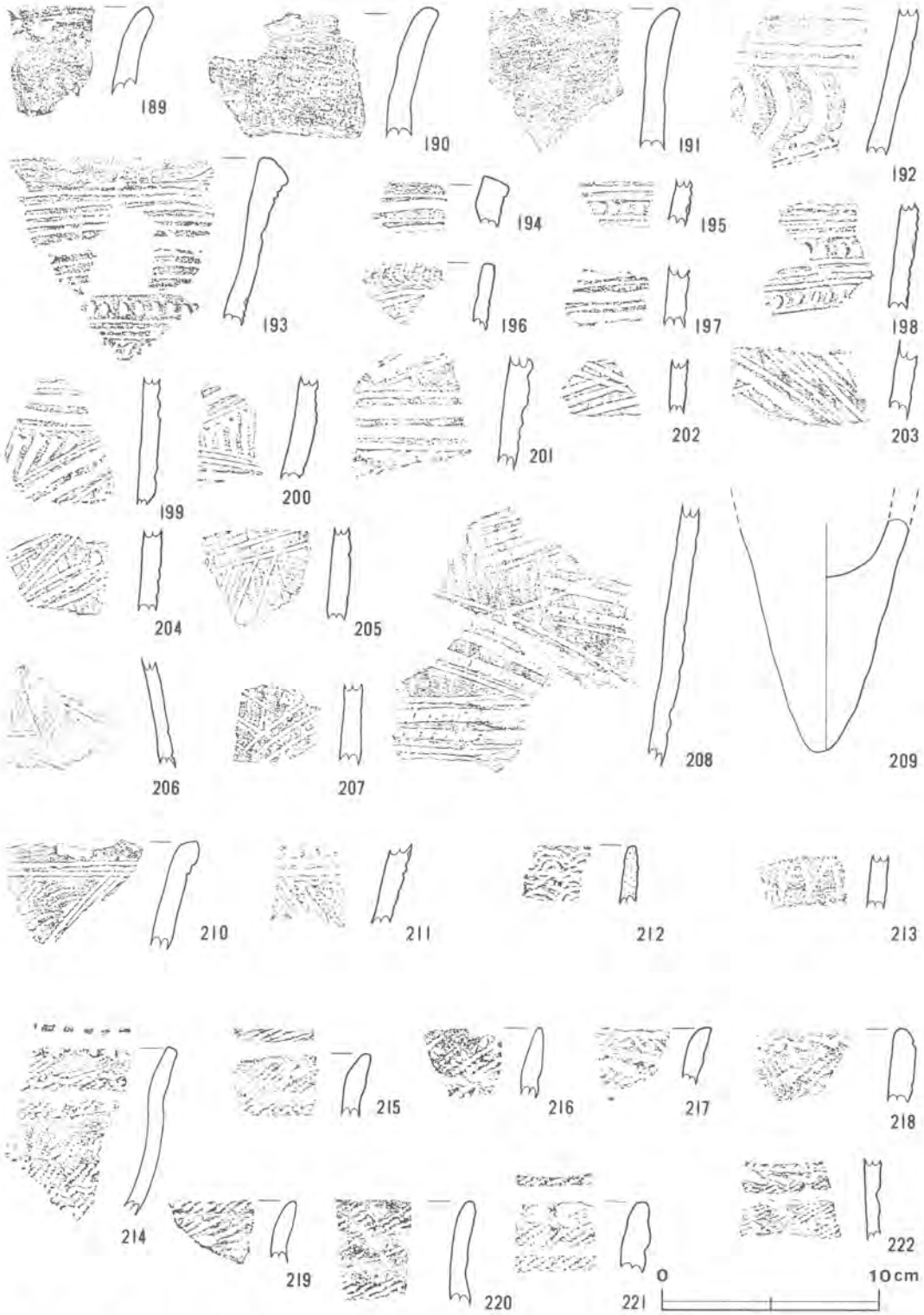
239は甑片であり，胴部は直線的に外上方に立ち上がり口縁部で大きく外反する。口縁部外面には横ナデ，胴部外面にはヘラナデ調整が施されている。砂粒・長石を含むにぶい橙色を呈し，現存率5%，推定口径24.4cm，残存高8.6cmを測る。240は内黒の坏であり平底を呈し，体部は内彎気味に外上方に立ち上がる。内面には丁寧なヘラ磨きが施され，口唇部及び口縁部内面にタール状の付着物が見られる。底部外面にヘラ削り，体部下端に手持ちヘラ削り調整が施されている。現存率45%，推定口径12cm，器高4.7cmを測る。241は土師器の模倣坏の破片であり，体部は内彎しながら外上方に立ち上がり，口縁部で直立する。口縁部下端に明瞭な稜を有し，口縁部には横ナデ，体部外面にはヘラナデ調整が施され，内面は黒色処理されている。現存率25%，推定口径13.0cm，器高4.9cmを測る。242は高坏の脚部片であり，上面に焼成後に刻まれた「×」状の記号が見られる。

(2) 土製品・石製品(第51・52図)

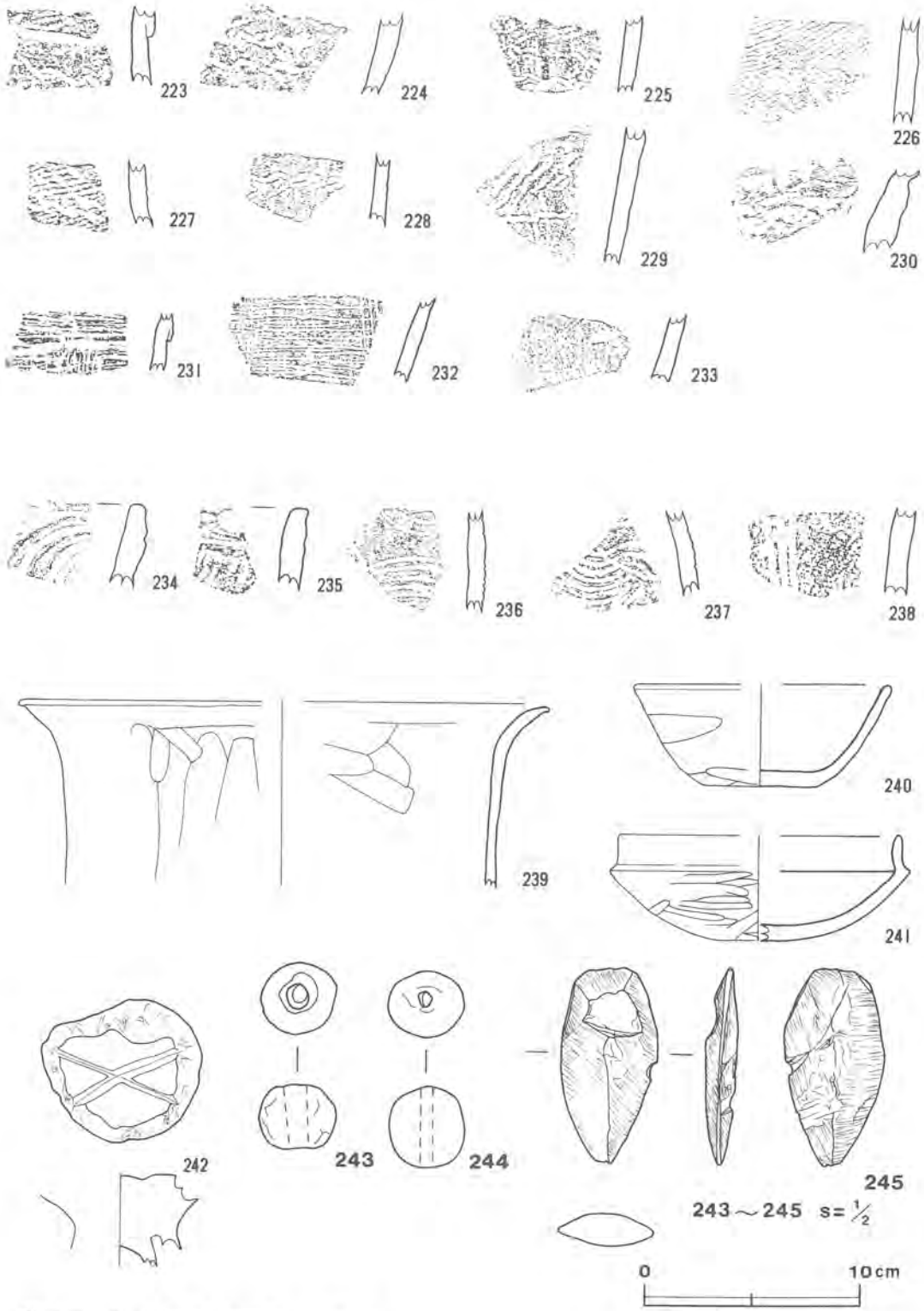
遺構外から出土した土製品(球状土錘2点)・石製品(有孔円板1点，剣形模造品3点，砥石4点，石臼1点)を一覧表に掲載した。

出土遺物観察表(第51・52図)

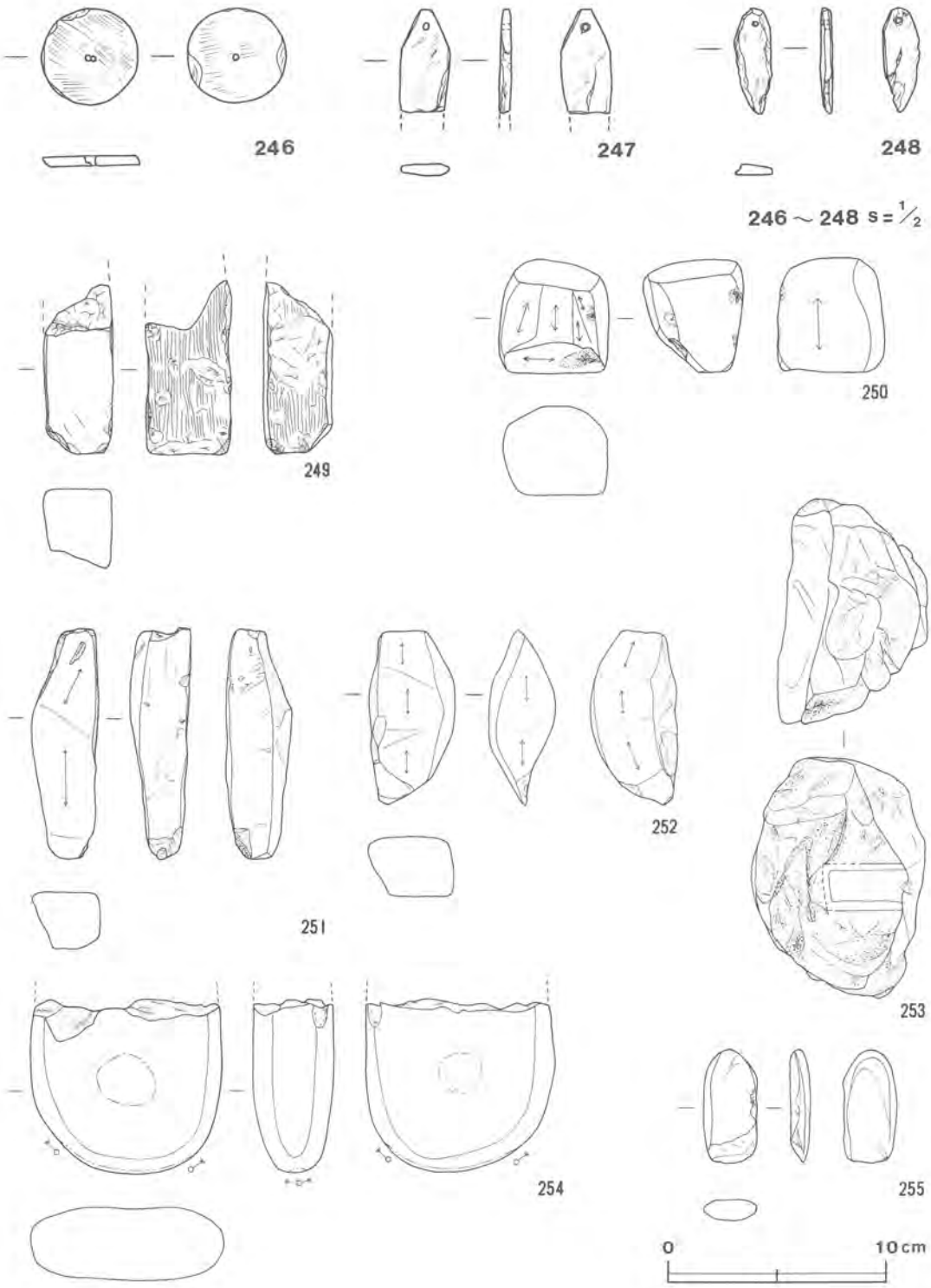
遺物番号	器種	法量(cm) 最大長	最大幅	最大厚	孔径(mm)	重量(g)	現存率(%)	出土地点	備考
243	球状土錘	2.4	2.3	2.0	7.0	9.4	100	SD2 覆土	DP34
244	〃	2.3	2.1	2.5	4.5	10.8	100	SD4 〃	DP35
245	剣形模造品	(6.1)	3.0	1.0		(18.5)	95	TM3 盛土	Q16 滑石
246	有孔円板	3.0	3.0	0.3	1.9	6.3	95	表採	Q21 近接した位置に2か所穿孔，1か所は貫通していない，滑石
247	剣形模造品	(3.2)	1.5	0.3	1.8	(3.0)	80	〃	Q22 滑石
248	〃	3.3	1.1	0.4	1.5	1.9	100	〃	Q23 〃
249	砥石	(7.8)	3.2	3.6		(144.7)	70	B2h_8区	Q12 使用面1，4面に加工痕，流紋岩質凝灰岩
250	〃	5.3	4.9	4.1		157.5	100	表採	Q20 砂岩
251	〃	(10.6)	3.1	2.6		(104.1)	95	〃	Q19 使用面3，使用面強いねじれ，流紋岩質凝灰岩
252	〃	8.0	4.0	2.8		90.2	100	B2h_8区	Q13 1面を除き使用，使用面に強いねじれ，流紋岩質凝灰岩
253	石臼	(11.2)	(8.0)	—		(668.8)	5	表採	Q18 上臼破片，砂岩
254	磨石	8.8	(8.1)	3.4		(432.8)	50	覆土	Q17 敲石としても使用，ホルンフェルス
255	磨製石斧	5.3	2.4	1.0		23.4	100	B2d_1区	Q15 滑石



第50図　遺構外出土遺物実測・拓影図（1）



第51図　遺構外出土遺物実測・拓影図 (2)



第52図　遺構外出土遺物実測図 (3)

第4節　小　結

大日山古墳群からは調査の結果，弥生時代及び古墳時代の中・後期に位置付けられる竪穴住居跡や，江戸時代(寛永年間)に祀られた「大日塚」をはじめ，時期不明の溝や土坑等が検出されている。また，これらの遺構に伴い縄文式土器，弥生式土器，土師器，須恵器等の各種土器や土製品，石器，石製品，板碑，銭等の各種遺物が出土している。ここでは検出されたこれらの遺構や遺物について概略を述べることにする。

1　遺構

(1)　竪穴住居跡

検出された18軒の竪穴住居跡は，出土遺物や竪穴住居跡の形態等から，以下のように大別することができる。

弥生時代中期　……　1軒(SI15)

弥生時代後期　……　7軒(SI2・3・5・6・7・13・14)

古墳時代中期　……　4軒(SI4・9・12・17)

古墳時代後期　……　2軒(SI1・8)

時 期 不 明　……　4軒(SI10・11・16・18)

遺存状態が悪く，遺物がほとんど出土していないことから時期不明とした第10・11・18号の3軒の竪穴住居跡については，規模や形状についても推定の域を出ない。このため不明瞭な点を多く残すが，これら3軒の竪穴住居跡がいずれも竈を付設することや，推定規模，調査区内から奈良・平安時代の遺構が検出されていないこと等から，これら3軒の竪穴住居跡についても当遺跡から検出された他の竪穴住居跡と同様に，古墳時代中期後半頃から後期頃に位置付けられるものと思われる。また，第16号竪穴住居跡については全体の二分の一の調査に止まり，全体像は明らかでないが，床面近くから田戸下層式に比定される土器片が数点出土していることから，縄文時代早期の竪穴住居跡の可能性も考えられる。

(2)　土坑・溝

検出された土坑は3基であり，平面形は第1号土坑が不整楕円形，第2号土坑が円形，第3号土坑が不整形を呈している。いずれも掘り込みは10～20cmと浅く，締りのある暗褐色土や黒褐色土が自然堆積している。3基の土坑の内，第2号土坑の覆土からは多量の焼土粒子や炭化物が検出されている。遺物は少量であるが，各土坑の覆土から縄文式土器や弥生式土器，土師器の小片が混在して出土している。時期や性格については不明であるが，第3号土坑については，第17号竪穴住居跡(古墳時代中期)との重複関係から，古墳時代中期もしくはそれ以前の時期に位置付けられ

る。

溝は4条検出されており，覆土からは縄文式土器や弥生式土器，土師器，須恵器等の各種土器片や球状土錘等が覆土中から混在して出土している。覆土はいずれも自然堆積の状況を示しており，第1号・第4号溝は締まりのある暗褐色土・褐色土，第3号・第5号溝は締まりの弱い暗褐色土・褐色土がそれぞれ堆積している。時期や性格については不明であるが，覆土の状況から同時期に存在していたものではなく，少なくとも2時期に別れるものと思われる。

(3) 塚

中世から近世にかけて日本各地に多種多様な性格をもつ塚が構築されている。しかし，それらの塚は，経塚や一里塚・藩境塚等一部の性格を持つ塚を除けば，その大半は民間信仰的な要因に基づいて構築されたものであり，様々な名称や伝承を伴うが，単に盛土のみで構成されている例が多く，構築年代や性格についても不明な例が多い。

当遺跡からは大小合わせて3基の塚が検出されているが，形状や現存する板碑等から性格(大日塚)やおおよその構築年代が明らかな第1号塚を除き，残る2基の塚については不明な点が多い。ここでは，第1号塚を中心に述べ，残る2基の塚についてはその関連の中で触れて行くことにする。

第1号塚は3基の中で最大規模を有し，一辺14ｍ前後の方錐形状のマウンド(基壇)の中央に一辺6.5ｍ前後の方錐形状のマウンドを重ねて構築した2段構造の塚であり，現地表面から塚頂部までの高さは2.85ｍを測る。この(2～3段)構造は，多くの大日塚に共通してみられるもので，古代インドの曼陀羅に起因する修法壇をあらわし，結衆念仏の道場として構築されたものと言われている。第1号塚頂部には，「胎蔵界大日如来」の板碑が東面するように建立されており，その前面には無縫塔または中台の基礎，宝篋印塔の基礎と思われる石碑の一部が祀られていた。板碑は自然の雲母片岩を使用したもので，91×85×11cmを測り，右上に「日天」，左上に「月天」，中央に「𑖀」の種子，そしてその下位には「蓮花座」が刻まれている。板碑の年月日や造立者，願文等についてはすでに碑面の摩滅が著しく現在では判読困難であるが，造立年代[(1)]については多くの大日如来の念仏供養塔が寛永元年(1624)から同8年(1631)にかけて爆発的に造立されていることや，板碑の拓本から「寛永寅拾月廿二日□立之」(寛永3年丙寅，1626)と判読可能なことから，他の供養塔と同様に寛永年間に古渡邑の念仏衆によって造立されたものと思われる。盛土上層や塚裾部から出土した元豊通寶・政和通寶・寛永通寶の三枚の銭は，塚に詣でた人々の賽銭と考えられる。また大日塚の立地について坂本氏は，「大日山と呼ぶ場所はたいてい村外れの西の方角に最高に標高ある場所が選ばれ，二，三方が水田，谷津などの低地にとり囲まれている，どこからも見晴らしのよい秀麗な峯型の頂上に，村人から大日山と呼ばれる土壇が築かれて，石仏が安置されている。」と述べられている。当遺跡の大日塚(第1号塚)も例外ではなく，やはり(江戸崎町)古渡集落西側の大日山と呼ばれる三方を谷津や低地に囲まれた見晴らしの良い台地上に立地している。このこ

とは，同氏が「大日塚の上から，太陽の沈む荘厳な光景に接して，人々は極楽浄土を思い浮かべたのであろう。」また，「寛永元年始めて胎蔵界大日如来の石仏を，大日塚に安置した出羽三山の修験者も，浄土信仰の対象に大日塚を求めた。」と述べられているように，塚の立地は浄土信仰と密接なかかわりがあるものと思われる。第2・3号塚については，おおくの小規模な塚がそうであるように，周囲の表土を削平して一部盛土しただけの簡単なものであり，塚の性格や構築年代等を判断しうる資料はない。しかし，これらの塚の立地や同一台地上に近接して所在する大日塚(第1号塚)との関連，盛土の状況等から，2基の塚は第1号塚と一体を成し，3基をもって出羽三山(月山・湯殿山・羽黒山)を具象的に象徴したものか，あるいは出羽三山登拝等を記念して構築された可能性が考えられる。いずれにしても，江戸時代に民間信仰的な要因に基づいて構築されたものであろう。

註

(1) 坂本源一氏の著書(「常陸南部の大日信仰」1988)中では，大日山の板碑の造立年代は寛永6年とされている。

2 遺物

縄文式土器はいずれも遺構外から出土したもので，早期の田戸下層式・田戸上層式，前期の黒浜式・浮島式及び前期の最終末に位置付けられる粟島台式・大木8式に併行する土器群や後期の堀之内式土器が出土している。弥生式土器の大半は後期前半に位置付けられるものであるが，中期後半に位置付けられるものも少量出土している。土師器は古墳時代中期(和泉)から後期(鬼高)にかけてのものが大半を占め，少量の須恵器片も出土している。また，当遺跡からはこれらの各種土器とともに土製品(球状土錘27点，管状土錘5点，紡錘車1点)や石器(磨製石斧1点)，石製品(有孔円板2点・勾玉2点・剣形模造品4点・敲石2点・磨石1点・砥石7点・石臼1点・不明石製品1点)，板碑(大日板碑)，石塔(宝篋印塔等)，銭(元豊通寶・政和通寶各1点)等の各種遺物が出土している。

写真図版

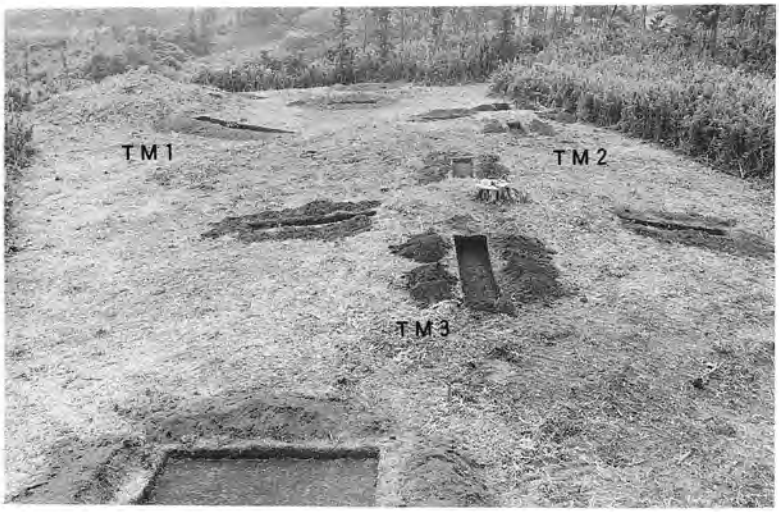
大日山古墳群

大日山古墳群全景（調査後）

第１号塚全景

試掘調査風景（1）

同（2）



試掘調査状況

遺構確認状況 (1)

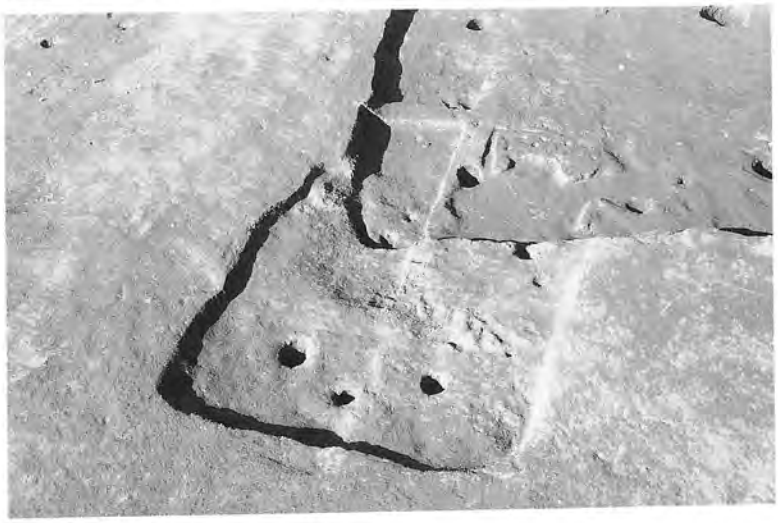
同 (2)

第1号塚板碑・石塔類 (1)

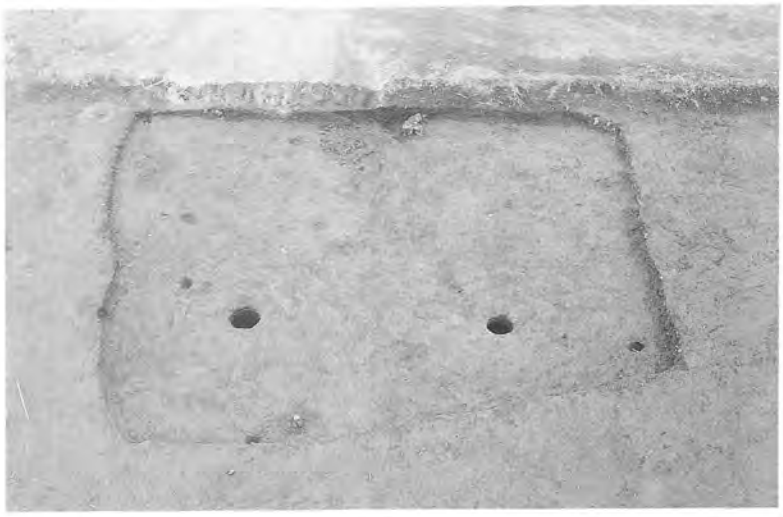
同 (2)

第１号住居跡遺物出土状況

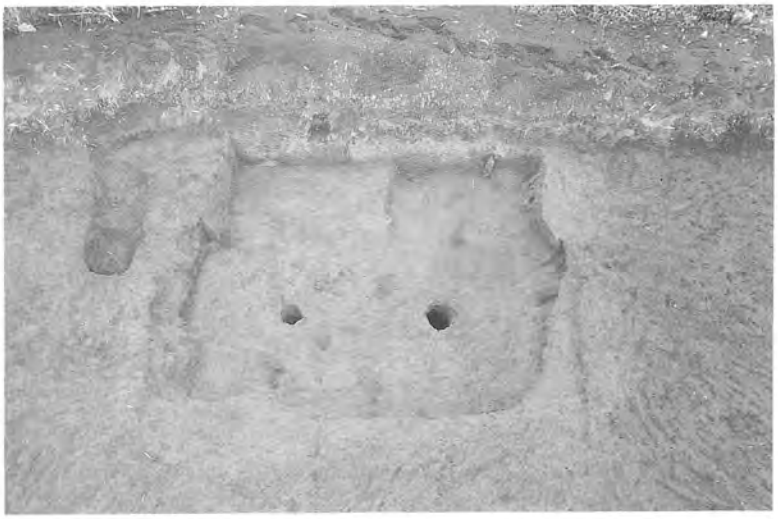
第１・２号住居跡



第２号住居跡



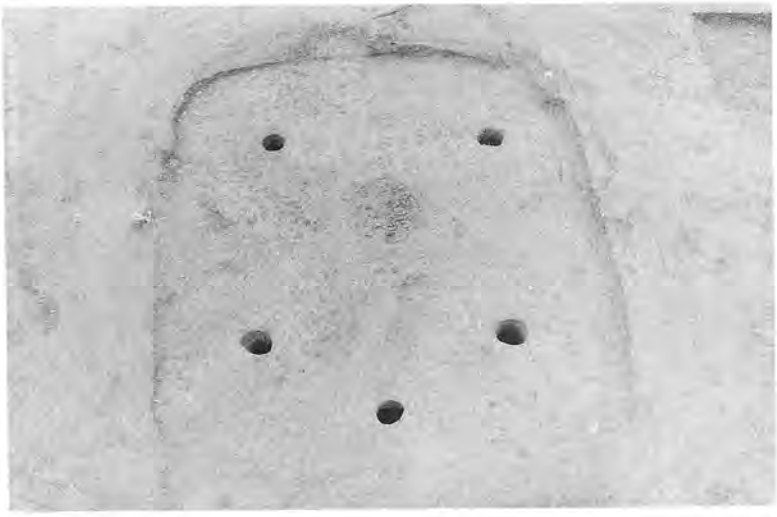
第３号住居跡



第５号住居跡

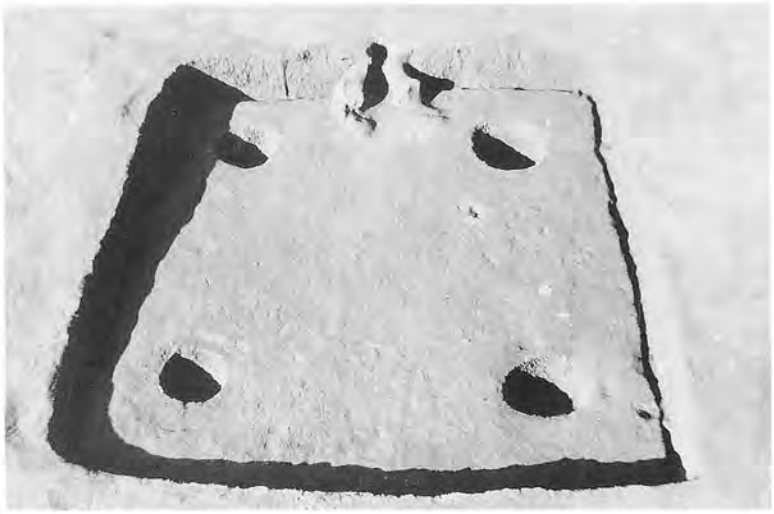
第６号住居跡遺物出土状況（1）

第 6 号住居跡遺物出土状況 (2)



第 6 号住居跡

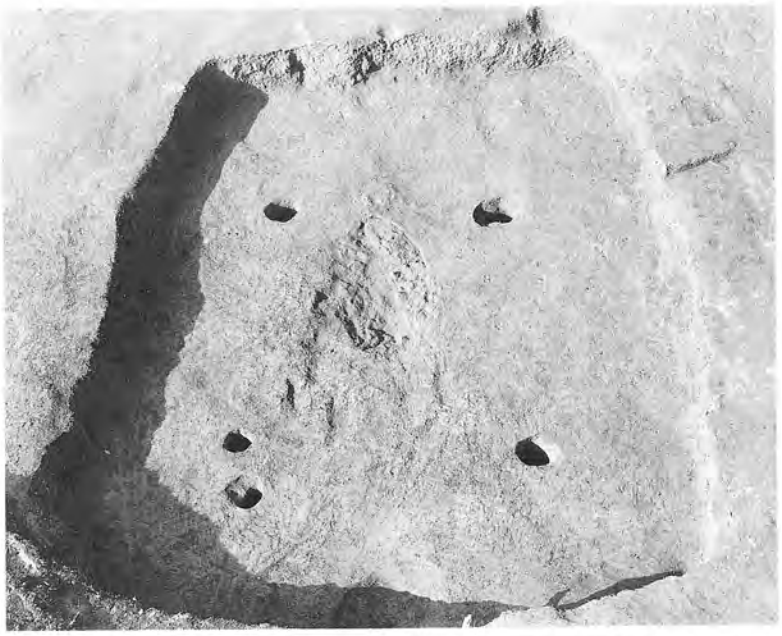
第 7 号住居跡



第８号住居跡

第12号住居跡遺物出土状況

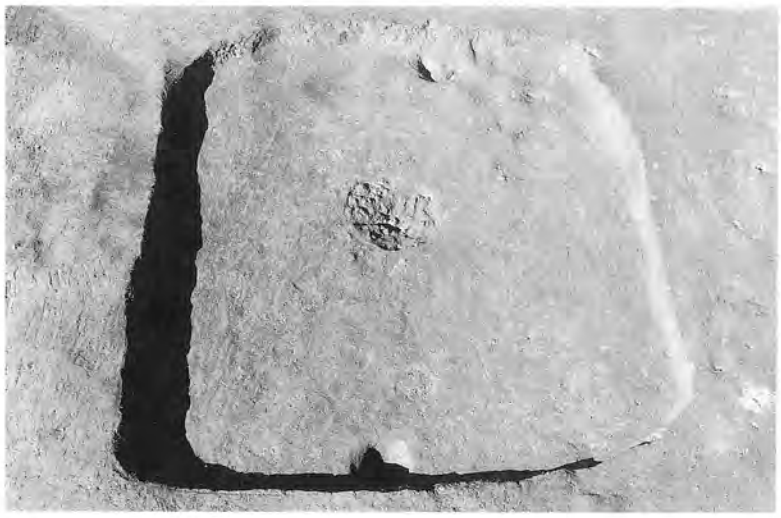
第12号住居跡



第13号住居跡

第13号住居跡遺物出土状況

第14号住居跡



第15号住居跡

第15号住居跡遺物出土状況（1）

同（2）

第17号住居跡

第17号住居跡遺物出土状況（1）

同（2）

第17号住居跡遺物出土状況 (3)

第1号溝，第12・14号住居跡

遺跡全景(調査後)

1

5

6

7

21

22

23

24

34

35

36

41

第1・2・4・5号住居跡出土遺物

40

48

49

50

51

72

81

82

83

87

90

第5・6・8・9・12号住居跡出土遺物

91

93

102

104

105

111-1

111-2

125

135

136

137

第12・13・14・15号住居跡出土遺物

146

147

148

149

150

151

第17号住居跡出土遺物

157

158

159

161

162

163

164

165

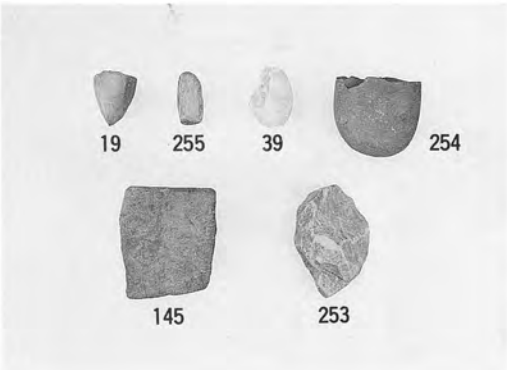
166

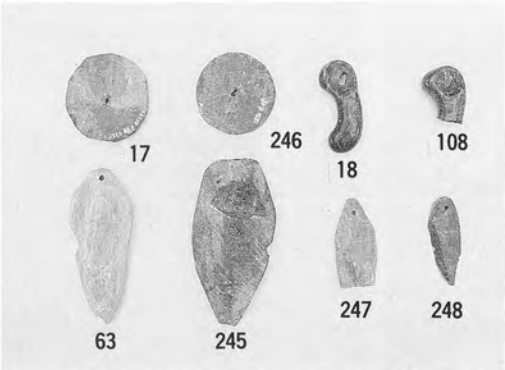
167

168

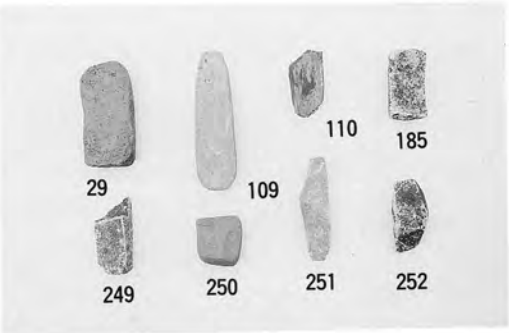
209

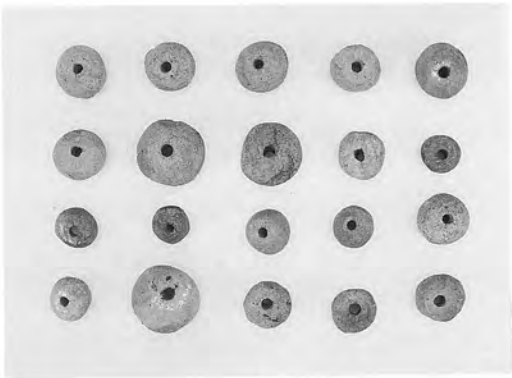
第17号住居跡，遺構外出土遺物

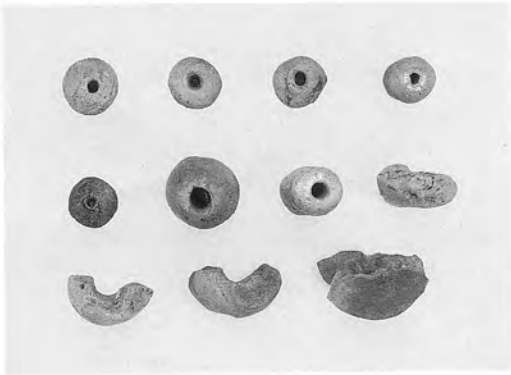


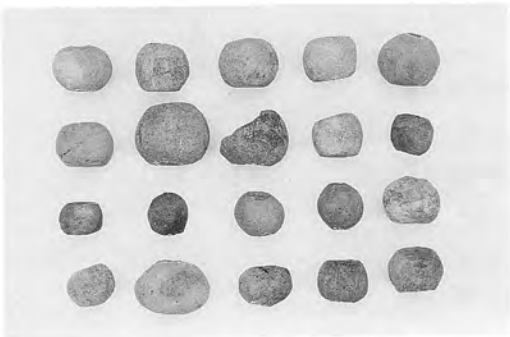


第1・4・6・8・12・15号住居跡，遺構外出土遺物









9	10	11	12	13
14	15	16	28	37
38	78	79	80	107
144	172	173	174	175

176	177	243	244
106	181	180	183
182	184	134	

第1・2・4・8・12・14・15・17号住居跡，第1号塚，遺構外出土遺物

茨城県教育財団文化財調査報告第65集

一般県道新川江戸崎線道路改良
工事地内埋蔵文化財調査報告書

二の宮貝塚
大日山古墳群（上）
思川遺跡

平成3年3月25日 印刷
平成3年3月31日 発行

発行　財団法人　茨城県教育財団
水戸市南町3丁目4番57号
印刷　石崎印刷株式会社
〒309-12　西茨城郡岩瀬町岩瀬174
☎ 0296－75－2117